

久留米大学大学院比較文化研究科
審査博士学位論文

中国における農村観光の展開

任 大欣

2016

中国における農村観光の展開

任 大欣

目 次

第1章 はじめに	1
1 研究背景	1
2 先行研究	3
2.1 中国における農村観光に関する研究	3
2.2 日本における農村観光に関する研究	5
2.3 農村観光の空間分布に関する研究	7
2.4 農村観光の発展要因に関する研究	9
3 研究目的	9
4 研究方法	10
5 研究対象地域の概要	13
6 論文の構成	16
注	17
第2章 中国における観光の展開と課題	18
1 観光の定義	18
2 観光とかかわる諸要素	20
2.1 観光地を中心とする観光資源	21
2.2 ホテルを中心とする宿泊施設	22
2.3 旅行会社を中心とする旅行業	22
2.4 交通	23
2.5 その他	24
3 観光の分類	26
4 中国における観光の展開	28
4.1 政治主導の観光（1978年の改革開放以前）	29
4.2 経済優先の観光（1978年の改革開放以降）	30
5 中国における観光の課題	32
5.1 政治主導の観光開発	32
5.2 持続可能な観光発展	33
5.3 人材育成	34
6 小括	35
注	36

第3章 中国における三農問題と農村観光	37
1 農村観光の定義	37
2 中国における三農問題と農村観光	40
2.1 中国における三農問題	40
2.1.1 農業問題	40
2.1.2 農村問題	41
2.1.3 農民問題	41
2.2 三農問題を解決する諸政策	41
2.3 農村観光の役割	43
3 中国における農村観光の分類	43
3.1 行政との関係による分類	44
3.2 観光資源による分類	45
3.3 地理的位置による分類	46
3.4 その他の分類	48
4 中国における農村観光の現状と課題	48
4.1 中国における農村観光の現状	48
4.2 中国における農村観光の課題	50
4.2.1 農村観光の基盤である農業の衰退	51
4.2.2 都市化の進展と農村観光の変容	51
4.2.3 少数民族地域における不適切な政策指導	51
5 小括	51
注	52

第4章 都市近郊型農村観光の展開

一山東省青島市嶗山区西麦窯社区を事例として一	54
1 はじめに	54
2 青島市における農村観光の展開	55
2.1 青島市の概要	55
2.2 青島市における農村観光資源	56
2.3 青島市における農村観光の展開	57
3 西麦窯社区における農村観光の展開	66
3.1 西麦窯社区の概要	66
3.2 西麦窯社区における農村観光の展開	66
4 農村観光の展開による地域への影響	70

4.1 農村観光経営者の個人属性	70
4.2 農村観光の展開による地域への影響	74
4.2.1 地域産業	74
4.2.2 意識	76
4.2.3 生活	77
4.2.4 居住環境	78
4.2.5 収入	80
4.2.6 その他	81
5 小括	82
注	83

第5章 既成観光地周辺型農村観光の展開

一山東省泰安市岱岳区里峪村を事例として一	85
1 はじめに	85
2 里峪村における農村観光の展開	87
2.1 里峪村の概要	87
2.2 里峪村における観光資源	88
2.2.1 豊かな自然	88
2.2.2 悠久な歴史	89
2.2.3 多種多様な果実	89
2.2.4 伝統的な田舎料理	89
2.2.5 サービス	90
2.2.6 その他	90
2.3 観光農園が中心となる農村観光の展開	91
2.3.1 里峪村における果樹栽培	91
2.3.2 果実販売から観光農園への変遷	92
2.4 観光農園から農村観光への展開	94
2.4.1 里峪村における農村観光の取り組み	94
2.4.2 ブランド化された里峪村の農家楽	96
2.5 広域連携とする農村観光：「里峪風景区」の設置	99
2.6 新しい農村観光の展開	100
2.6.1 「里峪旅游開発有限公司」の設立	100
2.6.2 賃貸の出現	101
3 里峪村における農村観光の展開を促進する諸手段	102

3.1	里峪村における「基地」の設置	102
3.2	誘客するための多彩なイベント	104
3.3	「微信」を利用する宣伝活動	106
4	農村観光の展開による地域への影響	107
4.1	農村観光経営者の個人属性	108
4.2	経済への影響	109
4.3	文化への影響	110
4.4	地域の変化	112
4.5	その他	114
5	小括	114
	注	115

第6章 辺遠地域型農村観光の展開

	—貴州省黔東南ミャオ族トン族自治州雷山県郎徳上寨を事例として—	117
1	はじめに	117
2	郎徳上寨における農村観光の展開	119
2.1	郎徳上寨の概要	119
2.2	郎徳上寨における観光振興の取り組み	120
2.3	農家楽	122
2.4	郎徳上寨における観光資源	124
2.4.1	伝統的なミャオ寨風景	124
2.4.2	独特なミャオ族飲食	125
2.4.3	民族文化を代表とする歌舞	126
2.4.4	手作り伝統工芸品	127
2.4.5	サービス	128
2.5	地域住民の農村観光への関わり	130
2.5.1	ミャオ族社会システムと村民委員会	130
2.5.2	工分制	132
2.5.3	高齢者と女性の活躍	134
3	農村観光の展開による地域への影響	136
3.1	農村観光経営者の個人属性	136
3.2	経済への影響	137
3.3	少数民族文化への影響	139
3.4	地域の変化	141

3.5 その他	143
4 小括	145
注	146
第7章 考察	148
1 農村観光の展開にかかわる諸要因	148
1.1 政策と公的な支援	149
1.2 観光資源	150
1.3 農村観光の担い手	152
1.4 農村観光の経営	153
1.5 観光客	154
2 各村における農村観光の展開	157
2.1 各村における農村観光の時間的展開	157
2.2 各村における農村観光の空間的展開	159
3 農村観光の展開による地域発展	162
4 農村観光の展開上の課題	163
5 3つの村における農村観光の展開の相違点と共通点	164
5.1 相違点	164
5.2 共通点	166
6 中国における農村観光の展開	167
6.1 3つの村における農村観光の展開からみた中国における農村観光の展開	167
6.2 中国における農村観光の展開とその地理的位置による特徴	169
6.3 研究の成果	170
7 小括	171
注	171
第8章 おわりに	172
参考文献	175
謝辞	185
付録1 アンケート（西麦窯社区用 中国語・日本語訳）	186
付録2 アンケート（里峪村・郎徳上寨用 中国語・日本語訳）	196
初出一覧	204

図・表・写真目次

図目次

図 1-1 中国における観光支出額の変化（1994～2013年）	1
図 1-2 中国における農村観光に関する論文の件数の変化	3
図 1-3 研究対象地域の位置	10
図 1-4 中国各省・市における農村観光モデル地の数	11
図 2-1 観光の定義	20
図 2-2 中国各省・市における世界遺産の数	21
図 2-3 中国における国際観光収入の構成比（2013年）	24
図 2-4 中国における八大菜系の分布	25
図 2-5 観光地による観光の分類	26
図 2-6 中国における観光収入の変化（1978～2014年）	32
図 2-7 中国各省・市における宿泊した外国人観光客の数（2014年）	33
図 3-1 中国各省・市における農村観光モデル地の数	49
図 3-2 中国における都市・農村住民1人当たりの観光支出額の推移（1994～2013年）	50
図 4-1 青島市の位置と行政区分	56
図 4-2 青島市各市区における農村観光モデル地の分布	63
図 4-3 青島市各市区における農村観光モデル地の数	65
図 4-4 西麦窯社区における農家レストランの分布（1999年）	67
図 4-5 西麦窯社区における農家レストラン、農家民宿の分布（2015年）	69
図 4-6 家族人数	71
図 4-7 家族構成	71
図 4-8 農村観光を始めたきっかけ	72
図 4-9 西麦窯社区における収入源の変化	74
図 4-10 思考が変化したと答えた人の割合	76
図 4-11 生活が変化したと答えた人の割合	78
図 4-12 居住環境の変化の結果	79
図 4-13 農村観光経営者による非農村観光経営者との収入の比較	80
図 4-14 農家1世帯における農村観光による収入とそれ以外の収入の比較	81
図 5-1 泰安市の位置と行政区分	86
図 5-2 里峪村の位置	86
図 5-3 農家Aにおける収入源の構成比と果樹栽培面積の変化（1970年～2015年7月）	92

図 5-4	里峪村における果実・山菜の販売ルート	93
図 5-5	観光客による泰安市観光資源の評価	95
図 5-6	里峪村における農家楽の分布(2015年)	98
図 5-7	広域連携図	99
図 5-8	里峪村における微信発信のプロセス	107
図 5-9	農村観光を始めたきっかけ	108
図 5-10	里峪村における観光収入の変化(1990~2015年)	109
図 5-11	里峪村における地域の変化	112
図 6-1	郎徳上寨の位置	118
図 6-2	郎徳上寨における農家楽の分布(2014年)	123
図 6-3	農村観光を始めたきっかけ	136
図 6-4	郎徳上寨における観光収入の変化(1986~2014年)	137
図 6-5	郎徳上寨における地域の変化	141
図 6-6	郎徳上寨を訪問する出身地別の観光客数(2013年2月~2014年2月)	144
図 6-7	郎徳上寨を訪問する観光客の職業の構成(2013年2月~2014年2月)	145
図 7-1	農村観光の展開にかかわる諸要因	148
図 7-2	西麦窯社区を訪問する出身地別の観光客数	155
図 7-3	里峪村を訪問する出身地別の観光客数	156
図 7-4	郎徳上寨を訪問する出身地別の観光客数	156
図 7-5	西麦窯社区の農村観光モデル図(1999年)	160
図 7-6	西麦窯社区の農村観光モデル図(2015年)	160
図 7-7	里峪村の農村観光モデル図(1990年代)	160
図 7-8	里峪村の農村観光モデル図(2015年)	160
図 7-9	郎徳上寨の農村観光モデル図(1985年)	161
図 7-10	郎徳上寨の農村観光モデル図(2014年)	161
図 7-11	中国における農村観光の展開	168

表目次

表 1-1	中国における都市・農村住民の収入の変化(1978~2013年)	2
表 1-2	中国国家旅遊局による農村観光に関するプロモーション	2
表 1-3	中国における農村観光に関する主な展望論文	4
表 1-4	地理的位置による農村観光の分類	8
表 1-5	都市近郊における農村観光地の分布に関する研究	8

表 2-1	中国における一つ星から五つ星ホテルの数	22
表 2-2	観光資源の分類	27
表 2-3	複合資源による観光の分類	28
表 2-4	近代の中国における観光発展を促進する重要事項	30
表 2-5	中国における各年の観光プロモーション	31
表 2-6	中国における持続可能な観光発展を促進する諸政策と手段	34
表 3-1	中国における農村観光に関する定義の整理	39
表 3-2	農村観光に関する資源	45
表 3-3	観光地の発展に影響を与える立地要因	46
表 3-4	立地要因と地理的位置により分類された農村観光の関係	47
表 3-5	農村観光に関する統計データの事例	50
表 4-1	青島市各市区における農村観光の資源	57
表 4-2	1990年以前に設立された青島市における農村観光モデル地	59
表 4-3	1991～1999年に設立された青島市における農村観光モデル地	60
表 4-4	2000～2005年に設立された青島市における農村観光モデル地	61
表 4-5	2006～2012年に設立された青島市における農村観光モデル地	62
表 4-6	青島市各市区における農村観光モデル地の数	64
表 4-7	農家民宿を開業するための準備	68
表 4-8	西麦窯社区における生業変化	75
表 5-1	里峪村における農村観光の展開を促進する諸政策	94
表 5-2	里峪村における農家楽経営者（2015年）	97
表 5-3	里峪村における農家楽経営者の研修	98
表 5-4	里峪旅游開発有限公司の事業内容	100
表 5-5	里峪村における基地の設置	103
表 5-6	里峪村におけるイベントの実施	104
表 5-7	里峪村における賞花游、采摘游の時期	105
表 5-8	微信発信の担当者	107
表 5-9	里峪村における農家楽経営者の生業変化	110
表 6-1	郎徳上寨の概要	119
表 6-2	郎徳上寨における農村観光に関する出来事	122
表 6-3	郎徳上寨における観光開発への投資	122
表 6-4	郎徳上寨における農家楽経営者の基本情報（2014年）	124
表 6-5	郎徳上寨における農村観光の収入ルート	133
表 6-6	歌舞ショー参加者の工分とそれに対する賃金	134

表 6-7 郎徳上寨における女性の生活スタイルの変化	135
表 6-8 郎徳上寨における農家楽経営者の生業変化	139
表 7-1 各村における投資および補助金の状況	150
表 7-2 各村における観光資源	150
表 7-3 各村、各時期における農村観光対象	151
表 7-4 各村における人口と農家楽の軒数	152
表 7-5 各村における農村観光の内容	154
表 7-6 西麦窯社区における農村観光の時間的展開	157
表 7-7 里峪村における農村観光の時間的展開	158
表 7-8 郎徳上寨における農村観光の時間的展開	159
表 7-9 地理的位置により分類された各村における農村観光の展開の比較	165
表 7-10 各村における農村観光の展開にかかわる諸要因の比較	164

写真目次

写真 1-1 西麦窯社区の衛星写真	14
写真 1-2 里峪村の衛星写真	15
写真 1-3 郎徳上寨の衛星写真	16
写真 4-1 西麦窯社区の入り口	66
写真 4-2 西麦窯社区の景観	66
写真 4-3 西麦窯社区「山海人家」の外観	71
写真 4-4 西麦窯社区の民家の外観	71
写真 4-5 整備された西麦窯社区の入り口	73
写真 4-6 西麦窯社区に設置した遊具	80
写真 5-1 里峪村の全貌	88
写真 5-2 里峪村の環山路	90
写真 5-3 里峪村の香椿	90
写真 5-4 里峪村の栗	91
写真 5-5 香椿を使用した料理	91
写真 5-6 里峪村の古民家	91
写真 5-7 文化大革命時代の石刻	91
写真 5-8 個人が借りた空き家	101
写真 5-9 民宿に改造された空き家の外部様子	102
写真 5-10 民宿に改造された空き家の内部様子	102

写真 5-11 写生の様子	103
写真 5-12 写生基地にある山東農業大学水利土木工程学院の看板	103
写真 6-1 郎徳上寨の景観	120
写真 6-2 郎徳上寨の吊脚楼	129
写真 6-3 郎徳上寨の農家料理	129
写真 6-4 郎徳上寨の農家楽	129
写真 6-5 郎徳上寨の伝統的な男女服装	129
写真 6-6 郎徳上寨の刺繍作品	130
写真 6-7 郎徳上寨の観光案内標示	130
写真 6-8 鼓蔵頭選挙用の黒板	131
写真 6-9 郎徳上寨村民委員会の職務一覧表	134
写真 6-10 郎徳上寨における観光に関する収支明細（2013年度）	138

第1章 はじめに

1. 研究背景

「観光」は中国語で「旅游」である。日本では観光、ツーリズムなどの用語があり、広義では余暇時間を利用して、日常生活圏を離れて再びそこへ戻る予定で他地域の自然、文化などを鑑賞する活動を伴う諸社会現象の総体と解釈されている。観光の語源は古代中国の周の時代に著された『易経』の中の「国の光を観る」という表現であるとされており、他国の実状を視察すること、及び見聞を広めることを意味していた（前田ほか2015）。しかし、現在ではそれだけでなく、それから始まる「参加、食事、宿泊」などの行為を行うことも観光の内容である。観光は古くから貴族の娯楽の一環として行われていたが、現代社会における観光は民間で普及し、それに関するサービス業も盛んになっている。こうした一般人が参加する観光は、それが行われる国や地域にいくつかの効果をもたらす。例えば、小沢（1994）は、経済的効果、文化的効果、環境への影響・効果があると論述した。また、観光は所得創出効果と雇用創出効果などのいわゆる経済効果があり、公害が少なく、少ない投資額でも行える理想的な経済開発手段の一つだと言われてきた。実際、世界的に見ても、途上国は外貨獲得や経済的収入を観光産業に依存していることが少なくない。また、国の発展状況を問わず、観光立国として外部に宣伝しているケースも多い。

中国では、1978年の改革開放以来、経済が大きな発展を遂げた。経済発展に伴い、都市住民の収入が増加しているため、消費行動が大きく変化している。「食品」を中心とする支出から「娯楽」に転換しており、観光に対する支出が増加する傾向が見られる（図 1-1）。それにとまって、経済発展による旅行業、宿泊業、観光交通業などといった観光にかかわる諸サービス業も盛んとなり、注目を集めている。

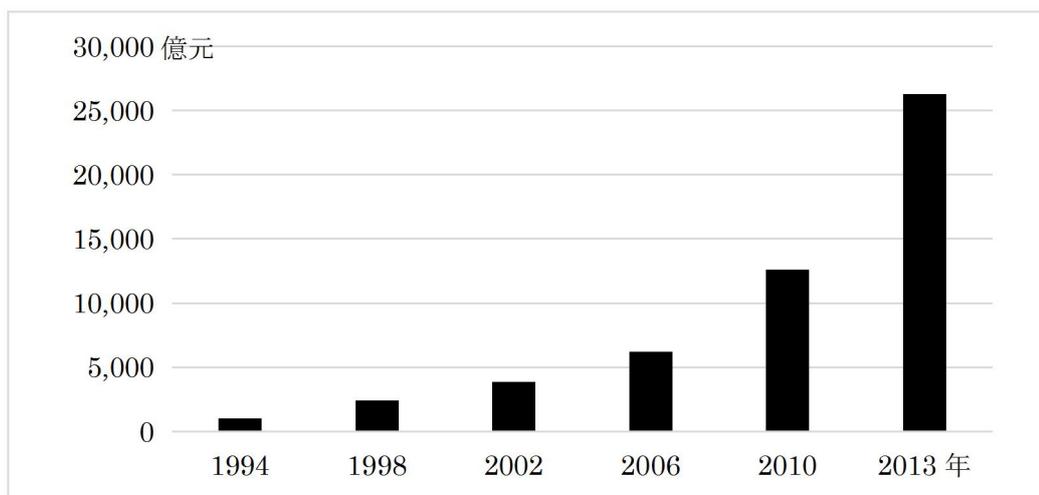


図1-1 中国における観光支出額の変化（1994～2013年）

2014年中国統計年鑑により、筆者作成

一方、食の安全安心や農村生活に対する関心の高まりなどによって、「観光」と「農村」を融合する新たなサービス業「農村観光」の需要が生み出された。また、経済発展による都市住民への自家用車の普及、インフラ整備は観光の発達に不可欠な要因になると指摘されている。しかし、今までの発展は沿岸部の大都市を中心とする発展であったため、東部と西部、都市と農村の経済格差が拡大し大きな社会問題になった（表 1-1）。特に、中国の農村地域では農業の低生産性、農村の放棄、農民の貧困に関する問題、いわゆる「三農問題」が深刻になりつつあり、解決する有効手段としての農村観光が注目されている。

表 1-1 中国における都市・農村住民の収入の変化(1978～2013年) 単位：元

項目	1978年	1987年	1996年	2005年	2013年
都市住民1人あたりの可処分所得	343.3	1,002.1	4,838.9	10,493	26,955.1
農村住民1人あたりの純収入	133.6	462.6	1,926.1	3,524.9	8,895.9

2014年中国統計年鑑により、筆者作成

1987年、花卉栽培農家の徐紀元氏¹が自宅や庭などを活用し買付客に宿泊や食事といったサービスを提供したことが農村観光の起源とされている。この約30年間、自発的な動きとしての農村観光はこうした「三農問題」を解決する可能性があるだけでなく、農村観光を通じて、地域の自然環境や文化の保全、農民の生きがいの創出、誇りの醸成などの効果があると考えられる。それに対して、中国政府²は農村問題を解決するために、農村観光の効果に注目し、1990年代末から農村観光の振興に積極的に取り組み始めた(表 1-2)。現在、農民は行政の指導を受けながら、農家民宿、農家レストラン、農業体験といった多彩な形で農村観光を展開している。さらに、2010年の中央政府における最重要課題を示した「1号文件³」には、農村観光を積極的に発展させることと農村観光の重要性が明記されている。

表 1-2 中国国家旅游局による農村観光に関するプロモーション⁴

年	テーマ	宣伝スローガン
1998年	中国華夏城郷遊	現代城郷、多彩生活
1999年	中国生態環境遊	返璞歸真、怡然自得
2006年	中国郷村遊	新農村、新旅游、新体験、新風尚
2007年	中国和諧城郷遊	魅力郷村、活力城市、和諧中国
2009年	中国生態旅游年	走進綠色旅游、感受生態文明

国家旅游局ホームページにより、筆者作成

また、中国では、国民の消費意識の変化や与えられる余暇時間の増加も農村観光の展開を促進している。例えば、2013年の中国統計年鑑によると、2012年、都市住民の1人あたりの年収は26,958.99元、支出は22,341.42元であった。そのうち、交通・通信支出は2,455.47元（前年比14.2%増加）、娯楽・文化・教育には2,033.5元（前年比9.8%増加）、全国平均の国内観光支出は767.9元（前

年比5%増加)であった。1994年5月1日から「1日8時間、週5日労働」が決定され、国民はより多くの自由時間を得ることができた。さらに、近年実施されている「端午節」、「中秋節」といった祝日が国民のレジャーを促進している。このように、消費意識の変化と余暇時間の増加により、中国人は「食」を中心とする生活から脱却し、娯楽を楽しめるようになった。

そして、中国の農村では、貴重な民俗、農村文化が多く残され、地元の特徴を持つ地域が数多くある。王(1999)は、中国の70%以上の観光資源は農村にあるにもかかわらず、観光資源として、十分開発されていないと述べている。近年、都市化が進むとともに、農村にある伝統文化や貴重な民俗などが失われる恐れがある。農村観光の展開によって、農村文化や農村の観光資源などを保護できる可能性があると思われる。一方、伝統文化は更に農村観光を促進する。このように、農村観光はこうした「三農問題」を解決する可能性があるだけでなく、農村観光を通じて、地域の自然環境や文化の保全、農民の生きがいの創出、誇りの醸成などの効果があると考えられる。

2. 先行研究

2.1 中国における農村観光に関する研究

「農村観光」は中国語で「郷村旅游」であり、「農家楽」、「農業観光」、「三農観光」ともいう。中国では農村観光は農村経済の発展につながっているため、それに関する研究が盛んである。図1-2は中国の学術研究検索サイト「知網」において農村観光と関連する論文のタイトルを検索した結果である⁵。

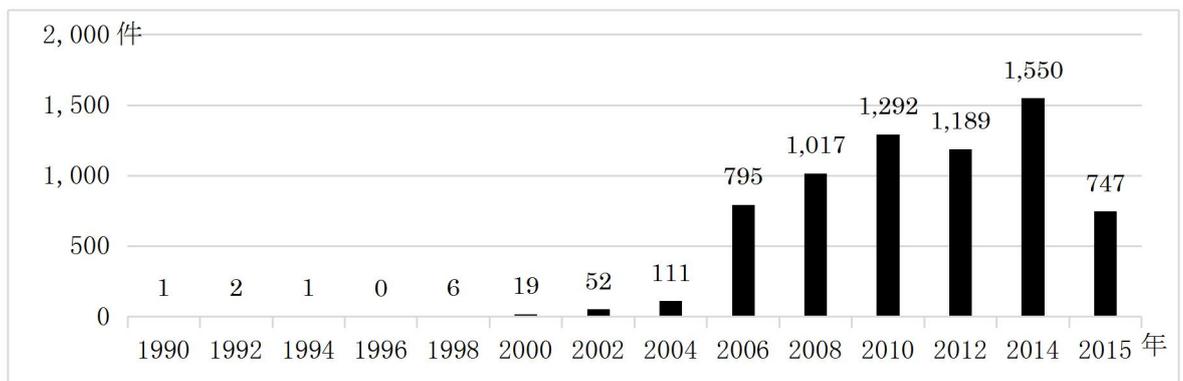


図1-2 中国における農村観光に関する論文の件数の変化

知網により、筆者作成

1990～1999年までは「浅談（浅く論じる）郷村観光」や「郷村観光とは何か」など、基礎的研究や海外事例の紹介といった萌芽的なものが多い（張 2013）。例えば、姚（1997）は、農村観光の定義を検討したうえで、農村の経済発展を促進する効果があると論じた。王（1999）は中国と外国の農村観光の現状を比較し、中国における農村観光の発展について議論した。しかし、当時、農村観光があまり発展していなかったため、実際の調査に基づく研究が少なかった。1998年の「中国華夏

城郷遊」、1999年の「中国生態環境遊」の観光発展の政策（表 1-2）を導入することは農村観光の発展を促進し、新たな農村観光地の設立に寄与していた。その結果として、2000年から農村観光に関する研究は多くなり始めた。2000～2004年までは農村観光地の開発に関する研究が多かった。徐（2003）は青島市を事例として、農村観光資源を活用し都市住民向けの観光商品を開発すべきだと提言した。何（2004）は農村観光に関する研究を農村観光の概念、農村観光の開発意義・条件・パターン、農村観光企画・設計、農村観光の発展に関する問題と発展戦略、外国における農村観光の経験に分け、中国における農村観光に関する研究をまとめたうえで、農村観光の発展を展望した。しかしながら、当時においては、農村観光地の開発を中心とし、それに対する開発方法と政策をまとめた研究が最も多かったため、現地調査とデータ分析による研究はあまりなされていなかった。2006年に国家旅游局が「中国郷村遊」というスローガンを打ち出し、2010年の「1号文件」において、農村観光を最重要課題としたことが、農村観光の急速な発展を促進した。それとともに農村観光に関する研究が大幅に増加し、研究内容も多様になった。一方、中国の研究者は外国の農村観光に関する研究、特に英語で出版された研究成果に注目し、国内外の研究成果を総合的に論述する研究が見られるようになった（表 1-3）。

表1-3 中国における農村観光に関する主な展望論文

論題	発表年	参考文献	まとめた研究成果
国外郷村旅游 研究述評	2003年	2002年までの英語文献	農村観光の概念、農村経済の発展と農村観光の関係、海外の研究手法
郷村旅游 研究総述	2006年	2006年までに発表された論文、本、会議の資料	農村観光の概念・発展要因・開発・企画、個別事例、研究方法
国外郷村旅游 研究総述	2007年	1980～2006年の英語文献	農村観光の発展要因・関連企業の特徴・利用者の特徴、観光地住民、農村観光の影響など
近5年中国国内 郷村旅游研究熱 点問題総述	2012年	2007～2011年において中国の学術雑誌に掲載された論文	農村観光の経営、農村観光の需要・供給に関する農村観光の発展要因、農村観光の発展による地域への影響、農村観光と新農村建設・持続可能な発展、農村観光の課題と対策
最近10年国内地 理類・観光類学 術期刊所載郷村 旅游文献総述	2013年	2003～2012年において中国の地理学関係、観光学関係の学術雑誌に掲載された論文	農村観光の概念・類型に関する基礎研究、農村観光の発展要因、農村観光の経営、農村観光地の空間分布、農村観光の発展による地域への影響、農村観光の発展に関する課題と対策
国内外郷村 旅游研究熱点	2014年	1995～2014年の文献（中国語と英語）	農村観光の発展要因、農村観光の利益関係者の分析、農村観光地の空間分布

参考文献：中国と外国の研究成果を総合的に論述するため、それぞれの研究者が参考した文献を指す。基本的には、観光学、地理学などの学術雑誌に掲載された農村観光に関する論文である。

何（2003）、王ほか（2006）、王ほか（2007）、鄭ほか（2012）、張ほか（2013）、盧ほか（2014）により、
筆者作成

上記にまとめられた研究は中国語と英語で書かれたものであり、研究上の課題についても言及された。まず、1994年以来研究が続いている農村観光の概念、発展要因、地理空間分布、農村観光に関する企業の経営についてはいまだ完全に解決されていない。次に、中国の農村観光に関する研究は数学モデルを中心としており、「事例分析、聞き取り調査と統計方法」があまり使用されていないため、研究成果の客観性をさらに高めるべきである。最後に、これからの研究は多分野の手法で農村観光を分析し、考察する必要があると指摘した。

2.2 日本における農村観光に関する研究

日本では、農村での観光・余暇活動や経営形態には、ルーラルツーリズム(rural tourism)やファームツーリズム(farm tourism)、グリーンツーリズム(green tourism)などの多様な用語が用いられ、これらはそれぞれの国や研究者によって使用する言葉やその含意が異なる(林 2010)。本論文では中国の農村観光に相当する用語である「グリーンツーリズム」を使用し、先行研究を整理した。日本の農林水産省は「グリーンツーリズムを推進し、ゆとりある国民生活の実現を図るとともに、農山漁村地域の活性化を図るため」と述べ、1992年に「農山漁村滞在型余暇活動のための基盤整備の促進に関する法律」(略称「農山漁村余暇法」)を制定した。従来のヨーロッパ型のグリーンツーリズムでは家族(個人)により農家民宿が経営されており、個人経営中心である。日本で広く展開している農村観光は「都市農村交流」、「農山漁村地域の活性化」のため、農協・森林組合・漁協の団体営、自治体・団体・個人などの出資による第三セクター経営、集落営や農家グループ営など、住民組織などによる地域経営が中心であり、「日本型グリーンツーリズム」と言われており、農家民宿、農家レストラン、修学旅行などの形で実施されている。

宮下(2006)は日本のグリーンツーリズムの先行研究の成果を農業経済学・農業経営学の分野、環境社会学の分野に分け整理し、農業経済学・農業経営学の分野では「地域経営型のグリーンツーリズム」、「内発論」について論じ、環境社会学の分野ではグリーンツーリズムの成立条件や主体形成に関わるものであると述べた。しかし、彼は、「グリーンツーリズムが展開されるにあたっての地域外在的、内在的論理や要因、コンフリクトまでを射程に入れながらその展開過程を動的に描き出すことなしには、政策として推進されてきたグリーンツーリズムがなぜ地域経営体の主体性や都市農村の対等な交流が必要となるのかという政策的社会的文脈におけるジレンマについて答えることができないのである」と指摘した。

観光学の分野においては日本あるいは他国の事例を取り上げ、分析研究が行われてきた。曾(2010)は大分県安心院町を事例とし、聞き取り調査による安心院町のグリーンツーリズムの展開を論じたうえでその地域の意義について述べた。安心院町では地元の資源を利用し安心院グリーンツーリズム研究会の指導による日本型のグリーンツーリズムの展開を明らかにした。農家レストランと修学旅行の研究においては、大友(2013)は宮城県の事例を研究対象とし、農漁家レストランの事業目的と経営手段を明らかにした。また、聞き取り調査により、農漁家レストラン経営者は事業目的が異なったものの持続可能に経営していくためには地域資源の活用、地域活性化、女性起業の視点以外に「生産、加工、食」のつながりを感じることができるコンセプトが重要であると論じた。そし

て、若林（2013）はグリーンツーリズムの修学旅行による農家民宿・農家民泊の受け入れと農業・農村の展開可能性を論題にし、第三セクターの指導、高齢者、女性、退職者の活躍と子ども交流プロジェクト体験や宿泊の受入によって教育的・社会的・経済的効果を産出し、地域特性を生かした農業・農村の展開可能性をもたらしていると論じた。

地理学の分野では、田辺（1988）が兵庫県の観光農園の分布、開園年度、利用作物を概観した後、春日町の事例を取り上げ、発展過程、現状、問題点などを明らかにした。続いて、河原（1996）、小池（2002）はそれぞれ観光農園の地域特性、抱える問題と京都府八幡市、茨城県千代田町における観光農園の成立過程と地域特性を明らかにした。溝尾（1994）は観光農園が設立できる条件として①大都市圏あるいは中核都市からの日帰り圏、②宿泊観光地の近接地、③観光ルート上などをあげた。農村地理学におけるグリーンツーリズム研究は、農村の存在形態と関連して、グリーンツーリズムの実態に関する静態分析から、グリーンツーリズムがもたらした地域変化の動態分析へ、そして近年ではグリーンツーリズムによる農村環境の保全とその持続的な利用システムの分析に変化した（菊地 2008）。また、彼は、農村の自然環境や社会・経済環境や歴史・文化環境などを、あるいはさまざまな地域資源を統合し、地域の持続システムやツーリズムの持続的発展を図ることが今後の課題であると指摘した。栗林ほか（2011）は、農村地域にある資源を活用したグリーンツーリズムの展開を論じ、地域住民や農村観光に関する団体は観光農園主体でこれを行うと共に、行政との連携が重要であると述べた。また、菊地ほか（2011）は、農村の景観や農牧業、及び生活文化が農家民宿の発展と相互に関連しながら維持され、それらのアトラクションの商品化を促進させることで農村観光の発展が図られてきたと述べ、農村空間の商品化は農村の景観や農牧業、および生活文化を維持することに貢献し、そのことが農家民宿や農村観光のさらなる発展につながったと論じた。

田林（2013）は、農村空間の商品化に関する定義を従来の研究から詳細に整理・分析したうえで、農村空間の商品化の形態を4つに整理・分類した。この4つの形態は農水産物の供給、レクリエーション・観光、農村居住、農村の景観・環境の維持と社会・文化の評価を通じた生活の質の向上となっている。農村観光はさまざまな内容があり、観光農園のような農水産物の供給、農村集落を観光するレクリエーション・観光、農村の空き家を賃貸・居住する農村居住、少数民族歌舞を楽しむことによって、観光客の生活の質の向上につながっていることがよく見られる。また、田林（2013）が指摘したように、このような商品化は、必ずしも貨幣によって取引されるものに限定するわけではない。地域住民は地域に誇りをもち、アイデンティティの再発見のような精神的に満足感を得ることも商品化に含めることとしている。張（2014）は中国の農村空間の役割が物（食糧、肉、乳製品など）の生産から非物質的価値の創造（農村空間の商品化）へと変化してきたと述べている。農村観光は農村の資源を活用し、都市住民に食事、宿泊およびほかの非物質的なサービスを提供することによって、農村空間を商品化しつつある。また、農村の過疎化や耕地の放棄などは農村空間の持続的発展を阻害している（張 2014）。一方、農村観光から得られた収入によって、農民は出稼ぎをせず、地域の伝統文化を継承し、地域の発展に貢献しており、農村空間の商品化を促していると言える。つまり、農村観光は農村空間の商品化を促進していると考えられる。

林ほか（2010）と林（2013）は、農村観光の発展を考察し、その変化と変容を明らかにした。前

者はアグリツーリズムという用語を使用し、長野盆地における農村観光の変容を考察した。それによると、観光農園は地域の変化によって単に観光需要に応じるだけの経営では収益の維持が困難になったため、農園の経営理念、栽培へのこだわり、個人客の獲得を重視した経営に方針転換が図られたと指摘した。また、後者は山梨県アルプス市西野地区を事例とし、該当地域におけるグリーンツーリズムの変化と観光農園経営者の適応戦略について議論した。このように変容しているグリーンツーリズムは農産物の流通およびマーケティングの観点やグローバルな農産物市場における食料供給のあり方などに対しても有益な示唆を与える可能性を内包していることを述べた。

農村観光の発展により、農村女性、高齢者への影響が見られる。朴ほか（2009）は、農家民宿の「経済効果」である観光客の受け入れと農産物の直接販売は農家の収入につながっていると説き、農家民宿は「女性」によって成り立つ事業であると説明した。農村の少子高齢化が進んでおり、体力的な面では高齢者の就農が不可能になり、観光客にサービスを提供するグリーンツーリズムの展開による新たな収入となるケースが多く見られる。また、王（2010）は、グリーンツーリズムは高齢者福祉の充実、生きがいなどにもつながっていると指摘した。

日中国交正常化以降、とりわけ1980年代から、両国の学術研究が進展する中、中国の文献・資料が入手可能になり学術研究が活発化したことと中国人が日本で研究を行ってきたため、農村観光に関する研究が散見される。しかし、日本では中国の農村観光に関する研究はそれほど多くない（高田2014）。観光農園は第一次産業の農業に第三次産業的な要素を付加した点で注目すべき展開であるが、その地理学的な研究はほかの農業地理学的研究と比較して極めて少ない（藤目ほか2004）。さらに、彼らは北京市の観光農園の展開と空間的分布を明らかにし、成立条件を論述した。しかし、その展開について、数の変化と地域別にある観光農園を地図化したのが、展開過程と近年中国における都市化の進展による原因などは考慮に入れなかった。遼寧省の観光開発を研究した劉（2013）は、アンケート調査により、農村資源を活用した観光開発による地域活性化を検討した。張（2013）は中国大連市甘井子区紅旗鎮岔鞍村で聞き取り調査を行い、農村観光の多面的効果を活用した持続的な農村振興の可能性を明らかにし、中国の農村観光は経済的側面に焦点を当てた研究が全体の約6割を占めており、その他の側面に着目する研究が少ないと指摘した。また、中国では多民族が居住しており、少数民族地域で展開している農村観光についての研究も多数ある。高田ほか（2011）が地域ぐるみで農村観光を展開している郎徳上寨を事例として、少数民族地域でこれを展開している組織の構造と運営について論述した。その後、彼らは現地調査と分析によって、郎徳上寨の地域経営型農村観光の組織構造と運営を明らかにし、地域への影響について言及した。上記の少数民族に関する組織に注目する以外に、中国の農村土地制度と村民自治制度に注目する南（2015）は政策的な側面からグリーンツーリズムの展開とそれを展開する村落の役割を明らかにした。

2.3 農村観光の空間分布に関する研究

農村観光の空間分布は先行研究により、表1-4のように分けられる。経済発展、都市化の進展による都市住民のニーズが変化しつつあるため、豊かになった都市住民はまず都市近郊にある農村観光地を訪れている。そして、観光地周辺では観光客の食事、宿泊などの要求を満たすため発展してき

た農村観光、政策支援を受けながら辺遠地区型の一例として、少数民族文化が体験できる少数民族地域での農村観光もある。

表1-4 地理的位置による農村観光の分類

日本	中国
大都市圏、あるいは地方中核都市からの日帰り圏 (溝尾 1994) 大都市近郊 (林 2013)	都市近郊型 (王 1999、郭ほか 2010、 盧ほか 2014)
観光ルート上あるいは宿泊観光地に近接している地 域 (溝尾 1994) 既成観光地周辺 (林 2013)	既成観光地周辺型 (王 1999、郭ほか、 2010、盧ほか 2014)
---	辺遠地域型 (王 1999、郭ほか 2010、 盧ほか 2014)

辺遠地域型：中国では、中部、西部の農村は経済発展が遅れている。また、少数民族は主に辺縁地域に分布している。これらの地域で展開している農村観光は辺遠地域型と言われている。

溝尾 (1994)、林 (2013)、郭ほか (2010)、王 (1999)、盧ほか (2014) により、筆者作成

農村観光の空間分布については、都市近郊における農村観光に関する研究が盛んである。都市中心部からの距離と農村観光地の分布について、数学モデルに基づいて議論された結果によると、都市中心から20~100km以内の農村観光が最も盛んであることがわかる (表 1-5)。しかし、上述の研究は数学モデルによる分析であるため、実際の事例分析と展開条件を考察する研究はあまりなされていない。特に、中国は、地域により、自然条件や社会・経済・歴史的条件も異なるため、農村空間商品化の時期は時空間的なズレが見られる (張 2014)。主な傾向としては、沿海地域から内陸部へと徐々に移動している。さらに都市からの影響も大きいいため、農村空間の商品化は大都市周辺から始まり、徐々に中小都市郊外でも見られるようになった。

表 1-5 都市近郊における農村観光地の分布に関する研究

研究者	研究対象地	結論
Sue	オーストラリア	都市から観光目的地までの最適距離：50~100km。250km 以内の場合：75%の観光客が観光地の魅力を感じる。
Gartner	アメリカ カリフォルニア州	観光客は同じ州内の都市住民が最も多い。農村観光地は都市から 50~100km に位置すれば、吸引力が最も大きい。
Holecek et al.	アメリカ ミシガン州	来訪客は 100km 以内の都市住民である。
呉ほか	中国 69 箇所農村観光地	農村観光地の 84%は都市から 100km 範囲以内に位置する。ただし、20km と 70km 以内の農村観光地が多い。
潘	中国 6 箇所農村観光地	都市住民は 50~300km 以内の農村観光地を訪問するケースが最も多い。
周ほか	中国 重慶市	50km~100km の農村観光地は最優先に訪問される。

盧ほか (2014) により、筆者作成

2.4 農村観光の発展要因に関する研究

さまざまな研究の中で、農村観光の発展要因が注目されている(盧ほか 2014)。Kontogeorgopoulos (2005) は、タイの事例を取り上げ、「外来農家」は該当地域の農村観光の展開に重要な役割を果たしていることを明らかにした。農山村地域の資源に注目したZhou et al. (2013)は、中国の山間部の農村観光の発展は地域資源を活用することが重要であると論じた。周ほか(2012)は、観光施設、環境は観光客の来訪に影響を与えると論述し、観光客への聞き取り調査による結論をまとめた。農村観光の展開は行政による指導が重要であると論じたLi (2006) は、政府の支援、各利益関係者の協力を分析した。しかし、Leeuwis (2000) は、行政の指導は農村観光の展開には不利であると論じた。林(2007)は、遠隔地農村において農業と地域の振興を図るために進められた観光農業の発展要因である農村リーダーの重要性に着目し、多くの住民の協力体制の確立が、遠隔地における観光農業の発展にとって不可欠であることを明らかにした。同じように、朱(2012)は、中国河南省で展開している観光を事例とし、地域リーダーの重要性を示した。

このように、ある農村観光の要因に注目する研究以外に、総合的に農村観光の展開要因を分析する研究も見られる。Choi et al. (2006) は、経済利益、社会文化利益、持続可能性、政治などの要因が農村観光の展開に影響していると述べた。Park et al. (2012) は、韓国における38村の農家380軒を対象にアンケート調査を行なった結果、政府は農村観光を政策的に促進するとともに農村観光を発展させる積極性に欠ける農家には奨励する必要があると論じた。唐ほか(2007)は、中国の農村観光の発展現状、農民の認識、観光資源などを総合的に分析したうえで、中国の農村観光の制約要因について言及した。また、中国のある地域を事例とし、該当地域における農村観光の展開に関する問題について論じた研究も見られる(胡 2008; 鄭ほか 2008)。

3. 研究目的

中国政府は三農問題の解決方法として、農村観光を導入したが、中国の農村観光に関する研究には経済的側面に焦点を当てたものが全体の約6割を占めており、その他の側面に着目するものは少ない(張 2013)。表1-3でまとめた農村観光に関する研究は今後の課題についても言及している。まず、1994年以来研究が続いている農村観光の概念、農村観光の発展要因・地理空間分布、農村観光に関する企業の経営については、いまだ完全に解決されていない。次に、中国の農村観光に関する研究は数学モデルを中心としており、「事例分析、聞き取り調査と統計方法」があまり使用されていないため、研究成果の客観性をさらに高めるべきである。最後に、これからの研究は多分野で農村観光を分析し、考察する必要があると指摘した。

また、日本における中国の農村観光に関する研究は、増加の傾向が見られ、実態調査に基づいた事例分析が多い。しかし、高田(2014)は、社会学的な視点から少数民族地域の農村観光を取り上げたものが多く、沿岸部や都市近郊など少数民族地域以外における農村観光の事例が少ないと指摘した。そして、それぞれ単発的な研究が多く、複数の調査地域をもとに実証的研究を行ったものはほとんど見られない。そのため、中国における農村観光の展開を論じるため、複数の地域の事例に

基づいた分析が必要である。

すでに指摘されたように、政策、観光客の行動、農民の自発的な動きなどの諸要因の変化により、観光農園のみならず、農村観光の展開、経営が多様化してきたため、農村観光の展開にかかわる諸要因をまとめて分析する必要がある。また、農村観光がどのようなプロセスを経て変化するのかについて検討するためには、事例研究の蓄積が必要である。特に、中国では、農村観光の展開には、国家の政策が重要な役割を果たしており、その分析が必須である。しかし、現地調査に基づいた取り組み、地域資源、農民の動きといった諸要因を活用した農村観光の展開についての研究は、あまり見られない。

そこで、本研究は、地理的位置により分類された都市近郊、既成観光地周辺、辺遠地域の3つの地域における農村観光の展開とその地域への影響を実証的に考察し、中国における農村観光の展開とその地理的位置による特徴を明らかにすることを目的とする。

4. 研究方法

本研究を進めるため、まず、農村観光の背景、先行研究を整理し、研究目的を明確にした。次に、観光の定義、中国における観光の展開、農村観光の定義、中国における三農問題と農村観光について論述する。第三に、地理的位置により分類された都市近郊、既成観光地周辺、辺遠地域における農村観光の展開を実証的に分析する。最後に、分析結果から、農村観光の展開と地理的位置による特徴を明らかにする。調査対象地として、都市近郊に位置する「山東省青島市嶗山区西麦窯社区」、既成観光地周辺に位置する「山東省泰安市岱岳区里峪村」、また、辺遠地域に位置する「貴州省黔东南ミャオ族トン族自治州雷山県郎徳上寨」を取り上げる。

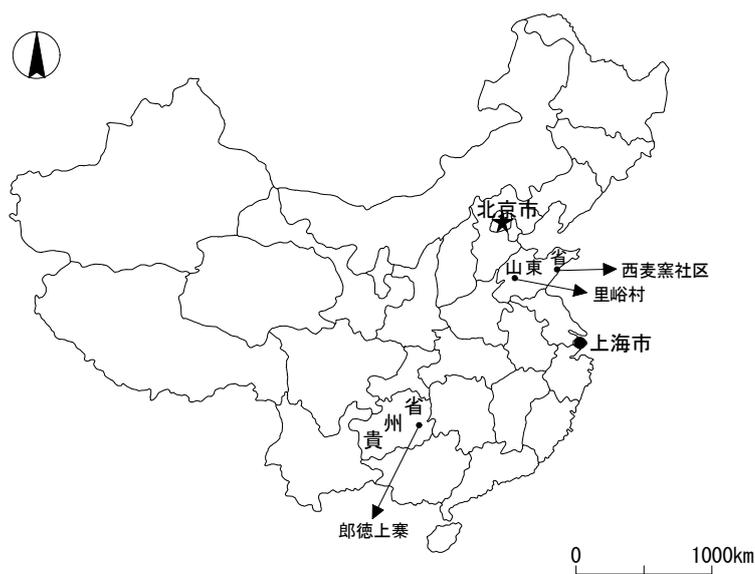


図 1-3 研究対象地域の位置

筆者作成

沿岸部や都市近郊など少数民族地域以外における農村観光の事例が少ないという観点から、都市近郊型、既成観光地周辺型の研究対象地を中国の東部地域に限定した。また、2004年および2005年に国家旅游局は全国で359の農村観光モデル地を選定した。そして、2010年に中国農業部と国家旅游局は合同で農村観光モデル地を選定すると発表した。2015年現在、中国では農村観光モデル地の数は742箇所あり、地理的分布をみると、経済がいち早く発展した地域、沿岸部の農村観光地が最も多い。この中では山東省における農村観光が盛んであるため、山東省を本研究の研究対象地域の一つにした(図1-4)。

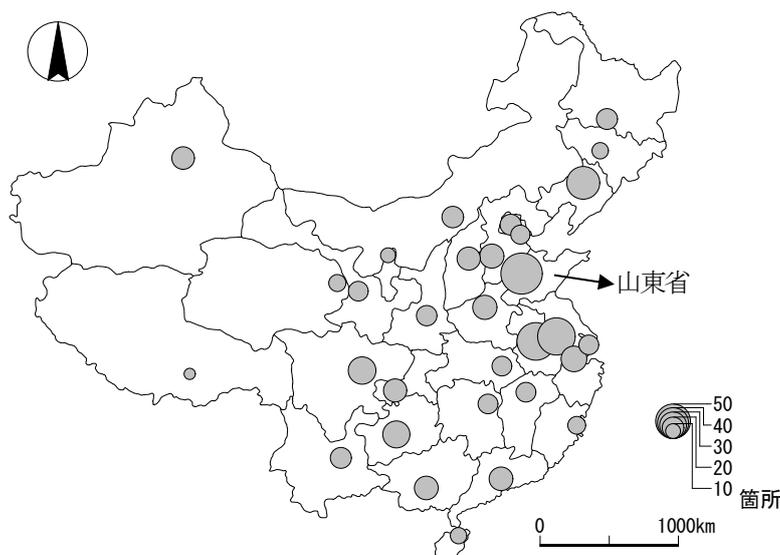


図1-4 中国各省・市における農村観光モデル地の数

国家旅游局のホームページにより、筆者作成

まず、青島市は山東省に位置し、沿海地域の重要な経済の中心で、港湾都市である。また、都市化の進展による大橋、海底トンネルの建設などにともない、農村観光の展開が見られ、都市近郊に展開している農村観光を考察するのに適切な場所であると考えられる。さらに、より具体的に事例分析を行うため、青島市近郊に位置し、「国家農村観光モデル」に選ばれた「青島市嶗山区西麦窯社区」における農村観光の展開を考察する。青島市における農村観光の展開については、段階に分けて地図で展開過程を示し、それを政策、立地条件、取り組みなどの要因とあわせて分析する。

西麦窯社区における農村観光の展開を明らかにするため、2011年8~9月、2013年7月、2015年7月に聞き取りを中心とする調査を実施した。まず、筆者はこの村を管理する沙子口街道を訪ね、聞き取りと資料収集を行い、西麦窯社区に関する農村観光政策、農村観光の全体的な状況を調査した。次に、西麦窯社区の観光資源、観光施設、村民委員会の役割および村の農村観光の全体的な状況を把握するため、村民委員会への聞き取り調査を実施した。最後に、農村観光の経営者に対して、農村観光のきっかけ、現状、発展過程、収入、経営内容および観光客などについて調査した。また、現地観察や農村観光に関する案内物の収集、農家民宿の体験なども行った。農村観光の展開による地域への影響に関しては、アンケート調査と聞き取り調査を実施した。アンケート調査の対象は西

麦窯社区で農家民宿、農家レストランを経営している農家である。2011年8月20～23日と9月10～13日の2回、計8日間で西麦窯社区に100部のアンケートを配布し、2011年11月までに86部を回収した。回収率は86%であった。また、同時に、筆者は西麦窯社区で農村観光（農家レストラン、農家民宿）を経営している農家、農村観光とまったく関係がない農家、西麦窯社区を訪問した観光客、西麦窯社区の村民委員会を対象に聞き取り調査を実施した。

聞き取り調査やアンケート調査などにより得られたデータに基づき、西麦窯社区における農村観光の展開とその影響を分析する。まず、村民委員会や村民への聞き取り調査を実施し、農村観光を展開するための村民の自発的な動きや地域資源の利用などを明らかにし、村民と農村観光の展開とのかかわりを分析する。次に、農家レストラン、農家民宿の地図化、観察、案内物の収集などを行い、農村観光の展開を促進する諸要因を考察する。最後に、農村観光の展開によって、地域への影響については、アンケート調査と聞き取り調査による結果に基づき分析する。

次に、既存観光地周辺型の事例として、「山東省泰安市岱岳区里峪村」を選定した。この村は複合遺産に登録された世界遺産「泰山」の近くに位置しており、「国家農村観光モデル」とされている地域であることが選定の理由である。また、この村は大都市もしくは中核都市の周辺には位置していない。しかも、辺遠地域に位置していないことも選定の理由になる。そして、果実が多く、風光明媚な地域であり、多くの手段を用いて農村観光を展開している典型的な事例である⁶。

筆者は2015年7月に里峪村を訪問し、聞き取りを中心とする調査を実施した。また、2015年10月、12月に電話による聞き取り調査を行った。まず、農村観光に関する政策、支援制度、全体的な農村観光の発展状況を把握している泰安市岱岳区旅游局と道朗鎮観光課を訪問した。次に、里峪村村民委員会に対して、村の全体的な状況、観光資源、観光施設、村民委員会の役割について聞き取り調査を実施した。最後に、農村観光を経営する農家を訪れ、農村観光を始めるきっかけ、現状、発展過程、経営内容および観光客について聞き取り調査をした。また、現地観察や農村観光に関する案内物の収集を行った。さらに、調査期間中、筆者は実際に農村観光を営む農家に宿泊し、田舎料理、里峪村で行われている農業体験などを自ら体験した。最後に、農村観光の展開による地域への影響を調査するため、当該地域における泰安市旅游局に認定された12軒⁷の「農家楽」経営者へのアンケート形式の聞き取り調査を行った。

聞き取り調査やアンケート調査などにより得られたデータに基づき、里峪村における農村観光の展開とその影響を分析する。まず、里峪村における農村観光に関する政策を整理したうえで、村の観光資源を考察する。次に、里峪村村民委員会への聞き取り調査を行い、農村観光の展開において、村民委員会はどのような役割を果たしているかをまとめる。そして、村民への聞き取り調査を実施し、農村観光を展開するための村民の自発的な動きや地域資源の利用などを明らかにし、村民と農村観光の展開とのかかわりを分析する。最後に、観察、案内物の収集、農家楽の地図化などを行い、農村観光の展開を促進する諸要因を考察する。農村観光の展開によって、地域への影響については、アンケート調査と聞き取り調査によって得られた結果に基づき分析する。

最後に、辺遠地域型の事例について述べる。中国では、辺遠地域型に相当する用語がいくつかある。例えば、「少数民族地域型」、「落後地域（発展が遅れている地域）型」「老（1927～1937年の中

国国内戦争の時、共産党の基地とした地域) 少 (少数民族地域) 辺 (他国と隣接する地域) 窮 (貧困地域) 型」などがある。つまり、それらは全て経済発展が遅れている地域に展開している農村観光である。本論文では、発展が遅れており、かつ少数民族地域で、しかも辺遠地域に位置する「貴州省黔东南ミャオ族トン族自治州雷山県郎徳上寨」を研究対象地域として選定した。第6章において、郎徳上寨の事例を「辺遠地域における農村観光の展開」として考察する。郎徳上寨は、1985年から観光政策を導入し、2004年に「国家農村観光モデル」として選ばれた。周囲には大都市や中核都市がなく、ほかの観光地が点在しているが、近隣都市や観光地による影響があまり見られない。また、この村は、山地が多くアクセスが不便で、発展が遅れているため、貧困問題が深刻な地域である (呉 2013)。

郎徳上寨における農村観光の展開を明らかにするため、2014年2月に現地調査、2014年8月、11月に電話調査を実施した。まず、郎徳上寨を管理する黔东南ミャオ族トン族自治州と雷山県の旅游局を訪ね、聞き取り調査と資料収集を行い、郎徳上寨に関する観光政策を調査した。次に、郎徳上寨の観光資源、観光施設およびミャオ族社会システムを把握するため、現地調査・観察、農村観光に関する案内物の収集及び村民委員会、村民への聞き取り調査を実施した。最後に、農村観光の展開による地域への影響を調査するため、当該地域における雷山県旅游局に認定された12軒⁹の「農家楽」経営者へのアンケート調査を行った。農家楽経営者は高齢者と女性が多く、漢字が読めないため、調査期間中、筆者は12軒の農家を訪問し、対面式のアンケート調査による聞き取りを行った。

聞き取り調査やアンケート調査などによって得られたデータに基づき、郎徳上寨における農村観光の展開とその影響を分析する。まず、郎徳上寨における農村観光に関する政策を整理するうえで、村の観光資源を考察する。次に、郎徳上寨村民委員会への聞き取り調査を行い、農村観光の展開において、村民委員会はどのような役割を果たしているかをまとめる。そして、村民への聞き取り調査を実施し、農村観光を展開するための村民の自発的な動きや地域資源の利用などを明らかにし、ミャオ族社会システム、村民と農村観光の展開とのかかわりを分析する。最後に、観察、案内物の収集、農家楽の地図化などを行い、農村観光の展開を促進する諸要因を考察する。また、農村観光の展開によって地域への影響については、アンケート調査と聞き取り調査に基づき分析する。

以上の3つの地域における農村観光の展開要因、展開過程などを第7章で比較し、考察を行う。また、その共通点を洗い出し、中国における農村観光の展開を論述する。

5. 研究対象地域の概要

研究対象地域での現地観察、村民委員会への聞き取り調査などにより、各地域の概要は、以下のようによりにまとめられる。

まず、青島市は山東省に属し、中国の山東半島にある。中国沿海地域の重要な経済の中心で、港湾都市、かつ有名な観光地で、「東のスイス」とも呼ばれている。面積は11,282km²であり、常住人口は904.62万人である(2014年現在)。温帯季節風気候であるため、年間平均気温は12.7℃で、

国内では年間を通じて比較的過ごしやすい地域である⁹⁾。青島市は農村観光資源が豊富であり、市政府も農村観光の発展に力を入れている。その中では、青島市の近郊に位置する西麦窯社区は「国家農村観光モデル」として選ばれ、注目されている。この村は嶗山区沙子口街道に属し、青島市中心部からバスで30分程度の距離にある近郊農村である。村民委員会への聞き取り調査によると、村の面積は2.28km²であり、その中の約8割が山地である。村は208世帯、546人である（2013年現在）。この村はもともと漁村であり、昔から漁業と農業で生活を営んでいたが、その後、村の背後にある山で、採石、石の加工などを行ってきた。1980年代から嶗山風景区を保存するため、山の破壊が禁止され、農村観光や市内で仕事に従事する村民が増加してきた。西麦窯社区は山（嶗山）、海（黄海）に囲まれており、石や紅煉瓦の壁と、瓦屋根で造られた風情ある民家、また海沿いの美しい景観があり、農村観光を発展させて以来、誘客のために「山海人家」と名付けられている（写真 1-1）。



写真 1-1 西麦窯社区の衛星写真

<https://www.google.co.jp/maps/@36.1250627,120.600818,687m/data=!3m1!1e3> により、筆者加筆

次に、泰安市中心部から15km離れている里峪村は、山東省泰安市岱岳区道朗鎮に属し、世界遺産である泰山風景区の周辺に位置している。村民委員会によると、2015年現在、村には230世帯、646人が定住している。この村は山に囲まれており、村内には山、泉、老木、奇石などが多い（写真 1-2）。周囲の山々は、森林に覆われ、緑化率は95%であり、年平均降水量は800mmである。森林に蓄積された水が豊富で、空気も清浄で、長寿者が多いため、「長寿の村」とも呼ばれている。里峪村は歴史が古く、村周囲には遺跡が多く保存されている。村の面積は3.66km²であり、未開発林地や果樹園用地が多く、わずかな農地が山の斜面に位置しているため、小麦や米といった作物は栽培しにくく、古くから果物、山菜の産地になっている。住居地の近くや面積の小さい農地では野菜、豆類などが栽培されている。現在、栗、リンゴ、香椿¹⁰⁾などが栽培されており、これらの果実や山

菜の販売が村民の主な収入である。



写真 1-2 里峪村の衛星写真

<http://map.baidu.com/?newmap=1&ie=utf-8&s=s%26wd%3D%E6%B3%B0%E5%AE%89%E9%87%8C%E5%B3%AA>

により、筆者加筆

最後に、郎徳上寨は貴州省の南東部に位置し、黔东南ミャオ族トン族自治州雷山県郎徳鎮に属している。自治州の州都である凱里市中心部から約 27km、雷山県中心部から約 17km に位置し、村前には「風雨橋¹¹」がかかっている「望豊河」が流れている。村の面積は 10.9km² であり、林地が多い（写真 1-3）。村は 140 世帯、560 人である（2014 年現在、村民委員会への聞き取り調査による）。郎徳上寨の村民はすべてミャオ族であり、「呉」、「陳」という苗字が主となる。郎徳上寨のミャオ族女性は長いスカートを身に着け、頭に専用のハンカチやスカーフを巻くことから「長裙苗」とも呼ばれている。山間部にある郎徳上寨は、交通が不便であり、耕地が少ないため、昔から林業やナシ、薬草の栽培、家畜の飼育により収入を得ていたが、現在ミャオ族文化や美しい景色により農村観光が展開されるとともに、生業が変化する傾向が見られる。また、行政上では「包寨」という村は郎徳上寨に所属しているが、包寨は郎徳上寨と離れており、農村観光を実施していない（邱 2010）。そのため、本論文では包寨を研究対象としない。本論文でいう郎徳上寨も包寨を包括しない。

上述の通り、研究対象地域を選定した上で、それぞれの地域における聞き取りを中心とする調査を実施した。第 4～6 章では、それぞれの地域において実施した調査について詳細に論じる。

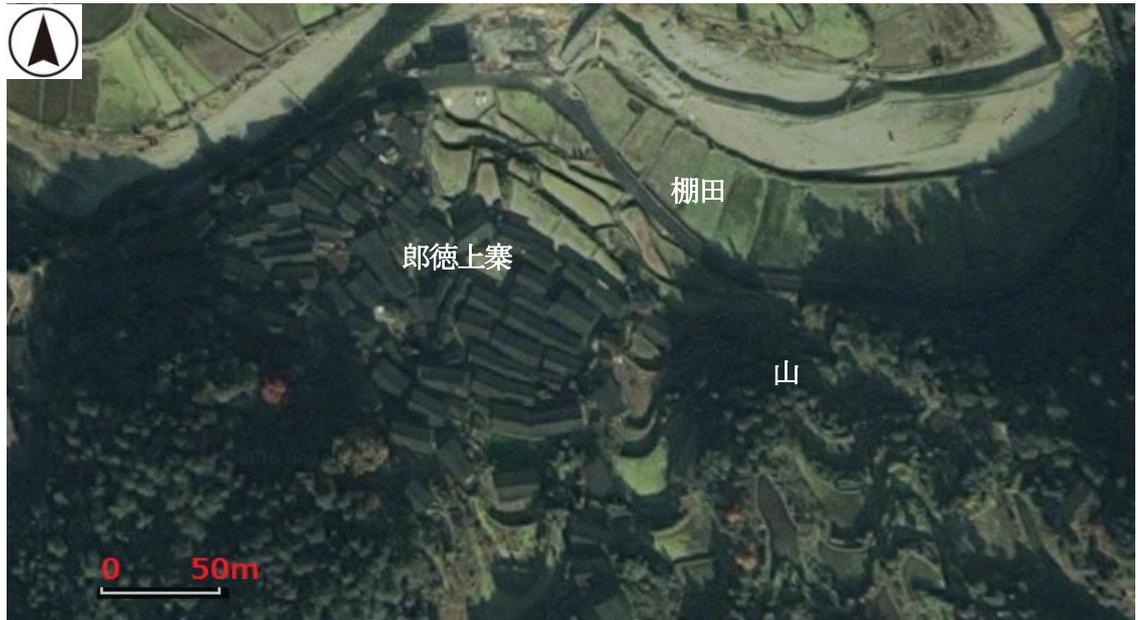


写真 1-3 郎徳上寨の衛星写真

<https://www.google.co.jp/maps/@26.4746767,108.0568358,548m/data=!3m1!1e3> により、筆者加筆

6. 論文の構成

本論文は8章から構成され、各章の内容は以下の通りになっている。

第1章は、序論として本研究の背景、中国、日本における農村観光に関する研究、研究目的、研究方法、論文の構成について記述する。

第2章は、中国における観光を全体的に論述する。観光の定義、観光の分類、観光とかわる諸要因を絡ませながら、中国の観光を論じている。また、中国における観光の課題について言及している。

第3章は、中国における農村観光を全体的に論述する。農村観光の定義、農村観光の分類、中国における三農問題の現状と課題、農村観光と三農問題、農村開発の諸政策、農村開発手段としての農村観光などについて論じる。

第4章は、都市近郊に位置する「西麦窯社区」を事例として、好立地を生かした個人の農家による農家レストラン、農家民宿の展開を論述し、西麦窯社区における農村観光の展開を考察したうえで、農村観光の展開による地域への影響を分析する。

第5章は、既成観光地泰山周辺地域に位置する「里峪村」を事例として、農村観光とかわる諸要因、例えば、既成観光地からの影響、政策、村民の動きなどを分析し、里峪村における農村観光の展開を考察し、農村観光の展開による地域への影響を述べる。

第6章は、辺遠地域における取り組み、地域資源、ミャオ族社会システムといった諸要因を活用した農村観光の展開についての研究である。「郎徳上寨」を事例とし、ミャオ族地域における農村観光とかわる政策、ミャオ族社会システム、工分制制度などの諸要因を分析し、農村観光の展開

とその影響を究明する。

第7章は、農村観光に関する政策、観光資源、農村観光の担い手などの側面から、第4章、第5章、第6章で議論した個別事例を比較し、中国における農村観光の展開を考察する。

第8章は、結論として各章で議論したものを取りまとめ、本論文の研究成果と今後の課題について言及する。

注：

¹ 四川省成都市郊外の農民である。

² 主な担い手は中国国家旅游局である。

³ 中国政府が毎年発布する最も重要な通達であり、毎年の発展方針や重要課題が記載されている。

⁴ 中国の農村を観光対象にし、作成したプロモーションを指す。

宣伝スローガンは次のように翻訳する。

1998年：現代の都市と農村、多彩な生活

1999年：本来の望ましい姿に戻り、楽しく過ごそう

2006年：新しい農村、新しい観光、新しい体験、新しい流行

2007年：魅力ある農村、活力ある都市、調和がとれている中国

2009年：エコツーリズムと生態文明(環境や資源の保護を意識すること)を体験しよう

生態旅游は日本語訳でエコツーリズムである。中国で行われている農村観光とエコツーリズムは、明確に区別されないと指摘されている(緒方 2009)。

⁵ 2015年のデータは7月末までの件数である。

⁶ 2013年6月20日の「泰安新聞」の記事による。

⁷ 現地調査をした時点には12軒の泰安市旅游局に認定された農家楽があった。

⁸ 現地調査をした時点には13軒の雷山県旅游局に認定された農家楽があった。

⁹ 青島政務網：青島概況

<http://www.qingdao.gov.cn/n172/n25664338/n26675614/131021110012675027.html> 2015年6月閲覧

¹⁰ 中国原産の落葉広葉樹である香椿(日本語：チャンチン)の新芽・若葉である。

¹¹ 貴州省、広西省のミャオ族、トン族が定住する地域に多く見られ、釘を使わない木造橋である。

第2章 中国における観光の展開と課題

1. 観光の定義

「観光」とかかわる人々にとって、「観光」は定義しにくいとされている。日本では長期間、「漫遊」という言葉が使用されていた。「観光」という用語が使用されたのは、1855年にオランダより徳川幕府に寄贈された木造蒸気船を、幕府が軍艦として「観光丸」と名づけたのが最初である。その意図は、国の威光を海外に示す意味が込められていたといわれる。「観光」の語源は中国古代の『易経』の「観の卦」に由来している。「観国之光、利用賓于王（国の光を観るは、以って王に賓たるに よるし）」から生まれた語で、その本来の語義は「他国の制度や文物を視察し、自国の発展に資することは為政者のためになる」から転じて「他所の歴史、文化、風景などを見学し、見聞を広める」の意味となる。また、同時に「観」には「示す」意味もあり、外国の要人に国の光を誇らかに示す意味も含まれているという説もある（井上 1967）。これは、為政者は他国を視察して参考とすべき良い点、すなわち光を学ぶ、自国の発展につなげることが大切であるとの意味であり、そこには移動の概念が含まれている（山村 2010）。

日本の代表的な国語辞典は「観光」を次のように定義している。観光とは「他国・他郷を訪れ、景色・風物・史跡などを見て歩くこと」である（『大辞林』第三版 2006年）。また、『世界大百科事典』（第2版 2006年）によると、観光とは「観光行動を指す場合と、関連する事象を含めて社会現象としての観光現象を指す場合とがある」。観光行動と解する場合、狭い意味では、他国、他地域の風景、風俗、文物等を見たり、体験したりすること、広い意味では、観光旅行とほぼ同義で、楽しみを目的とする旅行一般を指す。「観光」に対応する英語は「tourism」であるが、厳密に言えば、ツーリズムの概念は観光より広く、「目的地での永住や営利を目的とせず、日常生活圏を一時的に離れる旅行のすべてと、それに関連する事象を指す」と説明できる。

一方、研究者は「観光」についてそれぞれ定義しており、塩田（1994）はヨーロッパの文献によって、観光の定義を下記のようにまとめた。

1930年代のなかごろにドイツの学者グリュクスマン（R. Glücksmann）は「観光」を「われわれは、観光を滞在地に一時的に滞在している人と、その土地の人々との間の諸関係の総体として定義することができる」と定義した。

1940年代前半に、スイスのフンツィカー（W. Hunziker）はクラップ（K. Krapf）とともに「観光とは、それゆえ、もっとも広義でかつ本来の意味では、外客がその滞在中になんらの継続的ないしは一時的にもせよ主要な営利活動を実行する目的で定住しないかぎりにおいて、その外客の滞在から生じる諸関係および諸現象の総体概念である」と定義している。

1960年代に、フランスのメドゥサン（J. Médecin）は「観光とは人が気晴らしをし、休息をし、また人間活動の新しい諸局面や未知の自然の風光に接することによってその経験と教養を深めるために、旅行をしたり、定住地を離れて滞在したりすることからなる余暇活動の1つである」

と定義した。

1970年代になって、フンツィカーは自己の1940年代の定義を「観光とは外来者の旅行と、主要な定住をしないようなまたそれによって原則として営利活動と結びつかないような滞在とから生じる諸関係および諸現象の総体概念である」と修正した。

1980年代、スイスのカスパー（C. Kaspar）は、「観光は、その滞在地が主たる居住地ないしは労働の場所とならないような人の旅行および滞在から生じる諸関係および諸現象の総体を意味する」と定義した。

また、日本では、次のような定義がある。

塩田（1994）は、「観光とは、狭義においては、人が日常生活から離れて、再び戻ってくる予定で移動し、営利を目的としないで、風物等に親しむことであり、広義においては、そのような行為によって生じる社会現象の総体である」とした。岡本（2001）は、観光を「楽しみのための旅行」と簡潔に定義し、さらに、「一時的滞在地において他所で所得した収入を消費すること」と述べた。北川（2008）は、「観光とは余暇社会における自由時間を利用して、一時的に日常生活圏を離れ、各地を周遊して、再び出発地へ戻ってくる旅行行為という」と定義した。また、この行為を推進させて国や地域社会間の交流や関連産業を発展させ、国や地域社会に貢献する事業の総称としても用いられるとした。また、山村（2010）は、観光の本質について、「観光客が出発地から観光地を巡り、再び戻ってくる」と論じた。

以上の、個人の定義に対して、1975年に設立された世界観光機関（World Tourism Organization：現在の正式略称 UNWTO）は、1994年にツーリズム（観光）を下記のように定義した。

「ツーリズム（観光）とは、レジャー、ビジネス、その他類似の目的をもって、自宅など定住的場所を離れて旅行し、訪問先の滞在期間を含め旅行期間が一年未満のものをいう。ただし、訪問先で報酬の稼得を目的とするものは除く」としている（UNWTO 1994 筆者訳）。この定義の最大の特徴は、観光をレジャー目的に限定せず、ビジネスまたはその他の目的を含む広義の定義としていることである。

日本の観光政策審議会は1970年、1995年に観光の定義を行った。1995年の定義は、「余暇時間の中で、日常生活圏を離れて行う様々な活動であって、触れ合い、学び、遊ぶということを目的とするもの」となっている。この定義は「余暇時間、非日常生活圏、触れ合い・学びなどの自主的に行う」ことに注目している（図 2-1）。

一方、中国では、「観光」は中国語の「旅游」にあたり、その定義についての研究は多数存在する。

申（1999）は、「旅游とは、人が日常の生活圏を離れて再びそこへ戻る予定である諸関係および諸現象の総体概念である。この人々は長期に観光地に滞在せず、報酬の稼得を目的としない」と定義した。謝（1999）は、「旅游とは、観光客個人が楽しむ目的で観光地での短期間に滞在することによって生じる社会現象の総体である」と解釈した。王（2004）は、「旅游とは、人が日常の生活圏を離れて再びそこへ戻る予定であり、触れ合い、学び、遊ぶということを目的とする。それに伴う諸関係および諸現象の総体である」と述べている。

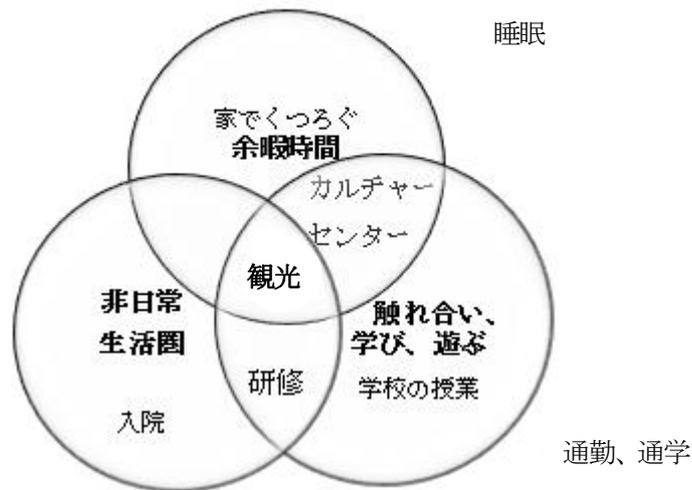


図 2-1 観光の定義

出典：日本観光政策審議会資料：「今後の観光政策の基本的な方向について」（1995 年）

上述の諸国における観光（旅游、ツーリズム）の定義からは、「観光」の定義は明確になっていないが、その共通点として、次の二点が指摘できる。

第一は、人間（観光客）の移動が必要であり、再び出発地に戻る予定があり、訪問地での永住ではない。すなわち、日常生活からの離脱である。

第二は、少なくとも、観光は動機を 1 つ有する。触れ合い、学び、遊びなどの目的で観光地を訪れる。

上記の 2 点は、大橋（2014）による「人が動く」「観光に行きたいという動機」に共通している。それ以外に、観光という活動には報酬の稼得ではないことと、観光活動にともなう諸現象を観光の一部ととらえる場合もある。

しかし、研究者は観光の定義について、多様に議論されているにもかかわらず、十分な定義ができていない。それは、観光学は発展途上の学問であり、時代背景が変わるにつれて、ともに変わっていくからである。今の段階では、観光の一般的な定義を示すことは難しい。それは観光学にとって、いわば永遠の課題であると指摘されている。

以上の議論によって、筆者は、本論文では、「観光」を「余暇時間のなかで、日常生活圏を離れて行う様々な活動であって、再び住居地に戻る予定であり、かつ、訪問先で報酬の稼得を目的とするものは除く」と定義する。

2. 観光とかかわる諸要素

観光とかかわる諸要素として、観光地、ホテル、旅行会社、交通、飲食業、土産品などがあげられる。つまり、日常生活圏を離れ、観光目的に移動し再び戻るために利用する諸サービスの総称で

ある。中国では、1978年の改革開放以降、観光産業は大きな発展を遂げたため、それが波及する経済、社会、文化への効果が注目されている。

2.1 観光地を中心とする観光資源

観光地は観光客の受け皿として、観光産業の発展には重要な役割を果たしており、多くの観光地は「食事、宿泊、土産品」などの機能を兼備している。中国は歴史が長く、面積が広いため、各観光地は独特の観光資源を持ち、それが観光客を引き付ける要因となっている。「七大古都」と称されている北京、西安、南京、洛陽、開封、杭州、安陽には、数多くの歴史観光名所が残されている。上海、広州、深圳などは経済発展が著しく、世界の金融中心とも言われており、現代の都市建設のモデルになっている。また、中国には漢民族以外、55の少数民族が定住しており、それぞれの民族は独特な民俗風情を持ち、伝統的な民族行事が行われている。国家旅游局が定めた基準で選ばれた中国の有名な観光地には126の国立歴史文化名城(2015年6月現在)、186のAAAAA風景区¹(2014年12月現在)などがある。その中で代表的なのは、世界遺産に選ばれた観光地である(図2-2)。中国政府は広い国土に分散する豊富な観光資源を国際的規模で開発・保護するため、1987年から積極的にユネスコ認定を申請している。さらに、認知度が高い世界遺産を海外の観光客に発信し、外貨の獲得手段としている。

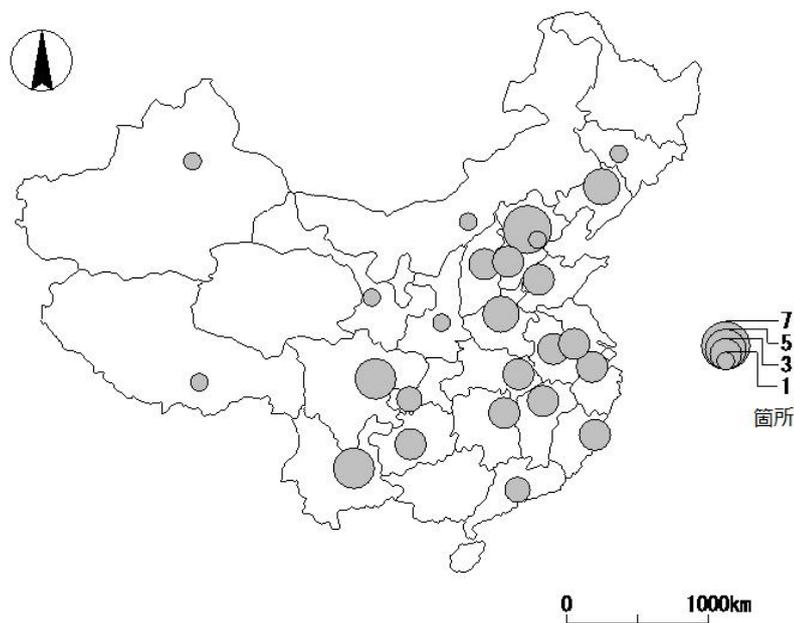


図2-2 中国各省・市における世界遺産の数

国家旅游局ホームページにより、筆者作成

一方、中国国家旅游局が中心となる観光産業を管理する政府機関は観光地の管理について政策上多くの規定を作成した。たとえば、2006年に「国家生態旅游区(国家エコツーリズム観光区)」、2007年に「中国優秀旅游城市検査標準(優秀観光都市の検査基準)」を制定し、エコツーリズムと都市観光の発展には法的な基準を定めた。また、全国の観光地の発展状況を把握したうえで先進的なモデ

ル観光地を選定し、その宣伝活動を行っている。たとえば、2004年、2005年、2010～2013年には、国家旅游局と国家農業部が連携し、それぞれの年における農村観光モデル地の選定を行った。これらの農村観光モデル地は国家旅游局のホームページに掲載され、知名度が向上したため、より多くの観光客を引き付けている。また、ほかの観光地からの研修、学習を受け入れることによって、中国における農村観光の発展に寄与することが期待されている。

2.2 ホテルを中心とする宿泊施設

中国古代の「驛站」は、軍隊の施設でありながら宿泊施設として用いられた。その後、宿泊専用の施設が造られ、「旅館」「客棧」といった宿泊と食事サービスを提供する、簡易な施設が現れた。中国におけるホテル業の開始は1978年の「十一届三中全会²」からである（中国旅游報 2013年11月23日）。1979年に中国初の合資ホテルである「建国飯店」の建設はそのシンボルである。当時、外国人観光客が増加しつつある一方、接待施設、特に宿泊施設が非常に不足していたため、鄧小平は外資を利用したホテル建設を指示した。その後、徐々に外資が導入され、高級ホテルが建てられた。しかし、1987年以降、主な観光都市における高級ホテルは飽和状態になり、外資ホテルは低級化する傾向が見られる（王 2001）。一方、経済力をつけた中国人はビジネスホテルに投資し、ブームになった国内旅行の需要を満たしている。現在、ヒルトン、ウエスティン、ハイアット、シャングリラなどのホテルブランドは中国に進出し、中国の資本によって建設されたホテルも多い（表2-1）。中国のホテル産業は最も成長が見込まれる分野の一つである（国松ほか 2006）。2002～2014年における中国統計年鑑のデータをみると、宿泊による収入は観光収入の約一割を占めているため、中国国家旅游局をはじめ、各行政機関はホテルを中心とする宿泊施設の発展には力を入れている。

表2-1 中国における一つ星から五つ星ホテルの数

資本所有者	五つ星	四つ星	三つ星	二つ星	一つ星	合計	比率 (%)
国有	140	574	1,318	623	23	2,678	23.68
集体	7	47	207	127	3	391	3.5
香港、マカオ、台湾	68	82	62	5	0	217	1.94
外資	81	70	64	9	1	225	2.01
その他	449	1,600	3,755	1,793	72	7,669	68.6

星：ホテルのランクを表す。集体：グループ、団体、集団の意味である。その他：参考した資料は「その他」の内訳を明記していない。個人や合資などの資本所有者であると考えられる。

2014年度全国星級飯店統計公報により、筆者作成

2.3 旅行会社を中心とする旅行業

旅行業とは、客から報酬を得て、旅行に関する事業やサポートを行う産業のことであり、旅行会社によって担われることが多い。観光産業を円滑に発展させるため、旅行会社は観光産業を幅広く包括する宿泊や交通、食事、観光施設等の各素材を旅行商品として、消費者に販売する（商品によ

っては添乗業務も伴う) ののである。観光客には「旅行代金が安い、安心感がある、時間・手間が省ける、情報入手が速いなど」のメリットがある。特に、余暇時間や可処分所得の増加が、旅行会社の発展を促進させていると考えられる。

1923年8月、中国人自身による初めての旅行企業「上海商業儲蓄銀行旅行部」が設立されて以来、旅行会社を中心とする旅行業は中国では約90年の歴史があり、経済発展にともなって、大きく発展を遂げた。1978年の改革開放以前、中国は「政治接待」のため、1945年に外国人を受け入れる「中国国際旅行社」、1949年に華僑、台湾・香港・マカオ住民を受け入れる「中国旅行社」を国有企業として設立し、全国の主な都市に支店を設けた。その後、1979年には、海外の青年を受け入れる「中国青年旅行社」が国有企業として設立された。1980年代までは、この三社は国際観光客の80%を受け入れており、中国の旅行業を支えていた(王 2001)。1990年代に入ると、豊かになった中国人大衆の旅行ニーズを満たすため、1985年に「旅行社管理暫行条例(旅行会社管理条例)」が制定され、「旅行業は事業部門(公務員待遇の会社組織の部門)から企業法人に転換する」と定め、個人、企業による旅行会社の設立を認めたため、旅行会社が迅速に発展できた。たとえば、2014年全国旅行社統計公報によると、旅行会社の数は26,054社であり、前年度より4.45%増加した。

中国の旅行会社は「国内旅行会社」と「国際旅行会社」に分類され、前者は中国人の国内旅行手配業務のみが可能であるのに対して、後者は中国人の国際・国内旅行と外国人の受け入れなどができる。中国国際旅行社、中国旅行社、中国青年旅行社といった大手旅行会社は中国全土に支店があるだけでなく、外国にも数多くの支店や事務所を設立している。一方、2001年に中国はWTO(世界貿易機関)に加盟し、もっとも開放の遅れた業界と言われた旅行会社は徐々に外資を導入している。現在、日本のJTB、アメリカのエクスプレス、ドイツのTUIなどは中国に合資や投資で旅行業務を展開している。

旅行会社は様々な業務があり、最も観光客と接するのはガイドである。特に中国では、団体旅行が一番多く、ガイドによる案内が一般的である。中国のガイドは国内ガイドと国際ガイド³に分けられ、行う業務が異なっている。さらに国内ガイドは「全陪ガイド」、「地接ガイド」、「景点ガイド」⁴に分類されている。特に地接ガイドは他地域の観光客に地元観光地の案内、観光客の食事、バス、買い物を手配する重要な役割分担をしているため、「民間観光大使」とも呼ばれている。しかし、現在、中国のガイドは「四無：基本給なし、保険なし、身分なし(旅行会社の正式な社員ではない)、尊敬されない」、また、給料が少ない、教育レベルが低いなどの問題があるため、ガイドにより生計が立てられず、将来性のないことが中国の旅行会社における深刻な課題である。

2.4 交通

観光には「人間の移動」が必要であり、それに不可欠なのは交通である。中国における国際観光収入の中で、交通による収入が最も大きいシェアを占めている(図 2-3)。

交通の発展の大きな転機は1999年3~9月に雲南省昆明市において開催された「国際園芸博覧会(花博)」である(国松ほか 2006)。それ以降、中国における高速道路、鉄道、空路、水路は大幅に発展してきた。2014年中国統計年鑑によると、2013年の交通運輸距離は、鉄道運輸距離10.31万km(前年

比5.64%増加)、高速道路運輸距離10.44万km(前年比8.52%増加)、空路運輸距離410.6万km(前年比25.18%増加)、河川運輸距離12.59万km(前年比0.072%増加)となっている。特に大幅に増加した空路は、2003年3月に「外国企業の民間航空業への投資に関する規定」を制定して以来、外国企業の管理方法と資本投入の刺激により、管理と運営方法についての改革を行い続けてきた。航空業に関するインフラ整備が進んでおり、「十三五計画⁵(2016~2020年)」には、2020年までには、260以上の空港を建設すると定められた。そのため、中国における観光の発展を促進することになった。

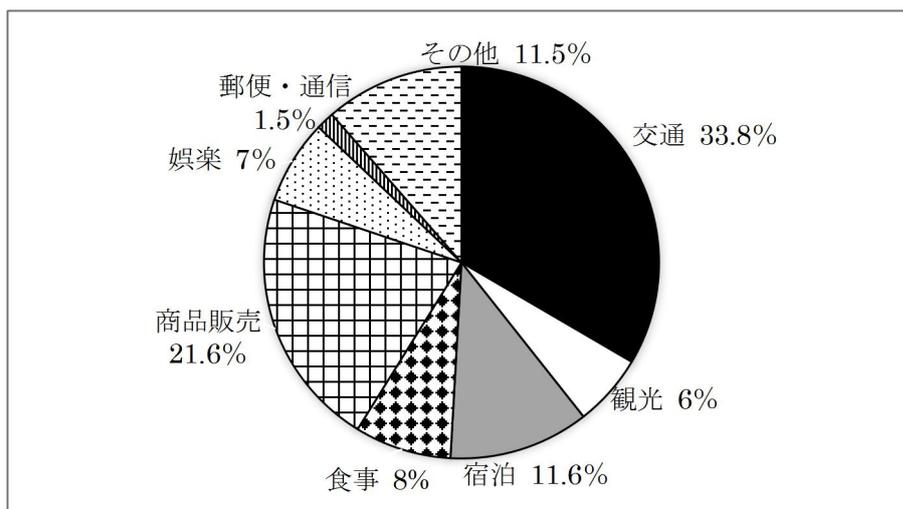


図2-3 中国における国際観光収入の構成比 (2013年)

2014年中国統計年鑑により、筆者作成

このように、交通インフラ整備が行われる一方、自家用車が普及し、生活必需品になってきた。2014年中国統計年鑑によると、2013年に中国の民間車は12,670.14万台(前年比15.89%増加)である。特に、中国東部では自動車の普及率が高いため、自家用車による観光に出かけるケースも多いと考えられる。しかし、急速に発展している中国の交通運輸産業は交通安全、時間厳守などの課題に直面しており、解決を迫られている。

2.5 その他

また、以下のような観光とかがわる諸要素があげられる。

まず、飲食業についてである。健康志向の影響により、フードツーリズムは最近数年ブームになりつつある。安田(2013)は「フードツーリズムとは地域の特徴ある食や食文化を楽しむことを主な旅行動機、主な旅行目的、目的地での主な活動とする旅行、その考え方」と定義した。つまり、地域の特徴ある食と食文化は観光資源の一種であると理解できるだろう。中国は国土が広大で、気候、風土、産物、風俗、歴史、習慣などの生活環境・生活習慣も地域によって異なるため、各地域特有の料理が数多く存在している。調理法、使われる食材や調味料などによって多くの体系に分けられ、そのうちの主なる八大菜系⁶(八種類の料理)は最も知られている(図2-4)。

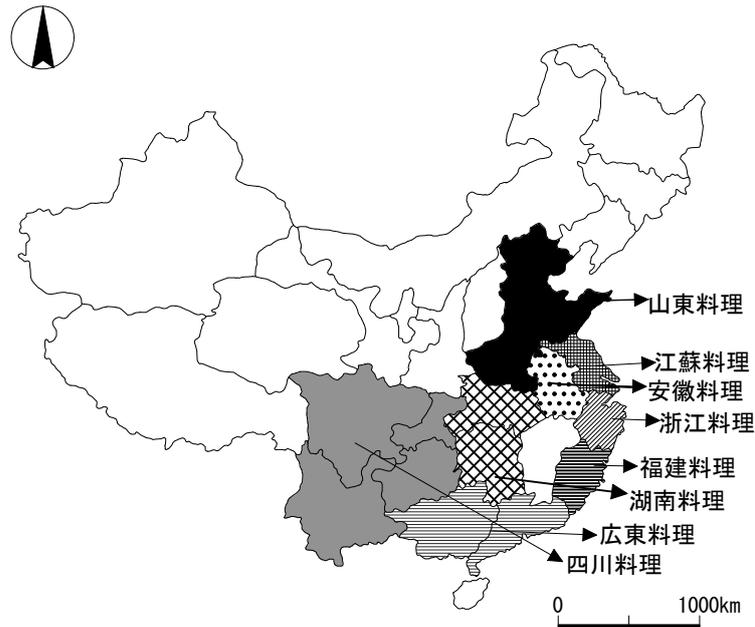


図 2-4 中国における八大菜系の分布

陳 (1994)、呂ほか (2009) により、筆者作成

それ以外には、東北料理、西北料理などに加え、各少数民族には独特なエスニック料理がある。また、味付けは「南は甘く、北は塩辛い。東は辛く、西は酸っぱい」という特徴があるため、外国の観光客はもちろんであるが、中国人が国内旅行をするときも訪問先の料理と食文化を楽しむことができる。このように、多様な食材、食文化を有する中国の飲食業は近年急速に発展している。2014年中国統計年鑑によると、飲食業の総収入は4,533.3億元（前年比2.57%増加）であり、純利益は1,940億元に達した。しかしながら、食材の安心・安全、衛生問題などの課題にも直面している。

次に、土産品の購買についてである。土産品は観光産業の重要な一環であり、観光地の収入に直接つながっている。地域特産品は中国各地で異なっている。また、外国の観光客に対して、特色がある中国茶、刺繍、シルク製品、中国美術品などが多く購買されている。これからの車社会における土産品は、「車で運びやすいサイズであり、四季に対応する」商品の開発が求められている。

第三に、インターネットの普及についてである。インターネットの普及により旅行会社を取り巻く環境も変化しており、インターネットによる観光情報の提供は今の時代には非常に重要である。中国国家旅游局をはじめ、各地にある地方旅游局、観光地、観光施設はホームページに観光情報を掲載しており、多国の言葉で観光客に提供している。また、地理情報システムが観光地に導入され、該当地域の写真、文字、音声などが総合的に利用できるようになり、観光客に良い評判を得ている。

インターネットの普及で「旅行会社を通さない旅行」が増えたため、観光客と企業を直接結び、旅行会社による斡旋料金を節約するケースが増えつつある。電子マネーで売買するため、観光客は手軽に利用できる。中国のビジネスホテルはホームページを作成し、個人の宿泊客が会員登録をすることをすすめ、その後割引料金で宿泊サービスを提供している。また、インターネットによるチケット・バス・宿泊施設の予約と販売などを行う会社は近年の業績が迅速に伸びている。これを受けて、より多くの観光客を集めるため、旅行会社もインターネットを活用している。

スマートフォンに専用のアプリをダウンロードすると、「DIDI 打車(タクシーの予約)」、「團購(共同購入)」などができ、若い世代には人気がある。それに対して、旅行会社をはじめとする斡旋業者はSNS アプリである「WECHAT」、「WEIBO」などを活用し、情報発信を行っている。

最後に、トイレ革命について述べる。中国の観光地やターミナルにおけるトイレの整備は十分なされていない状況である。2015年2月、中国国家旅游局は「全国観光トイレ革命の実施に関する意見」という通知文書に関係部門に送達し、改善を求めた。同局の局長は全国観光工作会議で「今後3年(2015~2017年)観光地のトイレ革命を推進し、3年間で33,000カ所増設する計画であり、既存の24,000カ所についても改修工事を実施する」と述べた。国家旅游局のホームページにも、「トイレ革命」というスローガンをあげ、トイレ整備の決意を表明している。

また、ガイドブックの作成、発行や誘客するためのコンテンツの作成などは近年注目されており、観光産業の発展につながっていると考えられる。

3. 観光の分類

観光産業は、旅行業と宿泊業を中心として、運輸業、飲食業、製造業等にまたがる幅広い産業分野である。観光はその一部であり、旅行業を中心とする。観光を分類するには、それに関するさまざまな要素を総合的に考察する必要がある。

観光地は観光の重要な要素であり、これを大きく分けると、国際観光地と国内観光地に分類できる。また、Clawson(1960)は、観光地を「大都市周辺にある利用者指向型観光地」、「大都市から遠隔地にあり、観光資源が優れている資源立脚型観光地」、「両者の中間型観光地」に類型した。したがって、大都市とその周辺を中心とする都市観光、遠隔地にある観光名所を対象にした観光、それ以外の観光の三つに分類できるであろう(図2-5)。さらに観光資源、立地、規模、複合の要因を考察すると、観光地を細分化できる。たとえば、観光名所には、温泉観光地、社寺観光地、自然、歴史文化観光地などがある。

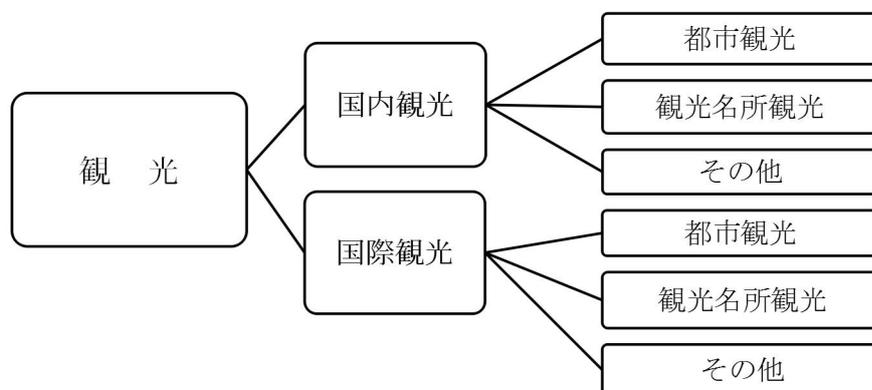


図2-5 観光地による観光の分類

筆者作成

観光資源とは、自然の風景や社寺仏閣などを見学したり、異文化に触れたり、体験や学習を行い、あるいはレクリエーションを楽しむなど、日常生活を逃れ、人々の基本的欲求を満たすことのできる観光対象をいう（北川 2008）。中国科学院地理研究所は1990年に「中国観光資源調査分類表」を制定し、中国の観光資源を①地表類、②水体類、③生物類、④気候と気象類、⑤遺跡類、⑥建築・施設類、⑦土産品類、⑧人類の活動の8類に分けている。また、1992年に観光資源普查分類体系から大まかに6大類74小類に分けた。さらに、「中華人民共和国国家質量監督檢驗檢疫総局」は2003年に、中国の観光資源を細分化し、観光資源の開発、利用のニーズを考慮し、多様で複雑な各種の観光資源を体系化することで、今後の観光発展の基盤を提供した⁷。観光資源は自然観光資源、人文観光資源、複合資源に分類されるが、観光行動の多様化に伴い、その対象になる観光資源の領域も複雑化の傾向にある。また、観光者の観光ニーズや観光行動の変化に伴い、観光の対象となる観光資源の種類や範囲も変化していくと考えられる。国によって、自然条件や社会・経済・歴史的条件が異なるため、観光資源にも違いがあると考えられる。それにもかかわらず、おおまかに表2-2のように分類できる。

表 2-2 観光資源の分類

種類		例	
観光資源	自然資源	有形自然資源	山岳、高原、原野、湿原、湖沼、峡谷、河川、滝、海岸、岬、島、岩石、洞窟、自然現象、温泉、動物、植物、気象（雪）
		無形自然資源	気象（暖かさ、涼しさ）
	人文資源	有形人文資源	史跡、社寺、城跡・城郭、庭園、公園、年中行事、碑・像、博物館、展示会
		無形人文資源	生活、民俗、雰囲気、技術、宗教
複合資源	複合資源	大都市、農山漁村、郷土景観、歴史景観、自然景観、戦争の跡地、災害の跡地、産業の跡地、工業文明（先進企業）	

奈良（1994）により、筆者作成（下線した文字は筆者の加筆である）

表 2-2 のそれぞれの観光資源を求めるために行われている観光は、自然観光、人文観光、複合観光に分類できる。さらに、経済発展による観光客の多様なニーズを満たすため、複合資源のそれぞれにより、観光は細分化されてきた（表 2-3）。

研究者により、観光についての分類は統一されていない。たとえば、交通手段により、鉄道の移動による観光、バスの移動による観光、自家用車の移動による観光、水路の移動による観光などの分類もある。また、佐々木（1998）によると、観光客の数、交通手段、時間（日帰り、週末、バカンス、数か月、夏季・冬季旅行）、目的による分類がある。近年、経済発展とともに、従来のマスマーケットから多様な観光形態に細分化しつつあることが観光の分類の傾向である。その中での農村観光は農村にある資源を利用し、都市の観光客に農村ならではの観光商品を提供し、持続可能な農村の発展を目指す観光であり、中国の農村問題の解決方法とも言われているため、農村観光に関する研究が進んでいる。

表 2-3 複合資源による観光の分類

分類	観光資源	事例
都市観光	大都市とその周辺にある人文、自然観光資源	北京市周遊観光
農村観光	農山漁村にある郷土景観、民俗、郷土料理など	成都市近郊の農家楽
赤色観光	戦争の跡地、雰囲気、博物館、歴史景観	延安市革命聖地
黒色観光	戦争の跡地、災害の跡地、雰囲気	四川省地震の跡地
生態観光	山岳、海、河川、草原、森林、氷雪など	麗江市玉龍雪山
工業観光	産業の跡地、工業文明（先進企業）など	青島市ハイアール工場見学
健康観光	森林、海洋、温泉などの療養機能がある観光資源	巴馬ヤオ族自治県
緑色観光	山岳、海、河川などとその中に生存している動物、植物	四川省九寨溝

赤色観光：中国語で紅色観光と言う。生態観光：エコツーリズム

黒色観光：Dark tourism とも言う。人類の死や悲しみを対象にした観光のことである。

筆者作成

4. 中国における観光の展開

古代中国の商人は物々交換のため、他地域を訪問しながら遊覧活動を行った。これが中国の観光の起源と言われている。春秋戦国時代には皇族による視察、狩猟などが盛んだったため、それに伴った観光活動が繁栄していた。その後、「遊学」がブームになり、「孔子」、「墨子」、「孟子」などの学者は諸国を周遊し、学問の広がりにも寄与した。秦朝から唐朝にかけて、社会全体が豊かになったため民間のビジネス活動が多くなり、それにとまう「遊覧」が増えた。当時、仏教はインドから中国に入り、宗教を広げるための活動は著しく増えており、「宣教者」による「漫遊」がよくみられた。また、唐朝には、日本からの使者が16回も中国を訪問し、またアラビア諸国との国際交流活動も始まり、これらが国際観光の始まりといわれている（張 2010）。そして、宋朝から清朝までは、造船技術の発達と経済発展のため、外国との交流が多くなり、観光活動がさらに盛んであった。しかし、観光客は貴族あるいは有権者が中心であり、民間にはあまり及んでいなかった。

1840年から1949年に至る約100年間、中国は半封建半植民地の状態に置かれていたため、観光に関わる諸産業はほとんど発展しなかった。近代中国の観光は、1920年代にさかのぼることができる。それ以前にはイギリス、アメリカの資本により、中国で設立された「通済隆」や「運通」といった旅行社が、中国旅行を目的とする外国人のために観光業務を行っていた（王 2001）。1923年8月、中国人自身による初めての観光企業である「上海商業儲蓄銀行旅行部」が設立され、その後、15の都市で支店が設けられた。しかし、戦争や貧困などの多難多災のため、観光業はあまり発展できなかった。

1949年10月1日に中華人民共和国が誕生したことにより、すべての産業は従来とまったく違った形で再出発することになり、観光業も戦争の荒廃から少しずつ復興していた。しかし、国内観光は大変少なく、社会主義国からの来訪者や華僑を中心とする観光客による国際観光が中心であった（張 2010）。1958年より、中国の観光業は経済効果を重視するようになり、海外の観光客を積極的

に受け入れ始め、それに関する政策も作成されていた（謝 1999）。その結果、1965年、国際観光客は12,877人に達し、社会主義国だけでなく、多くの国々からの来訪者であった（王 2001）。その後、1966年からの10年にわたって、「文化大革命」が発生し、観光は社会的にも政治的にもタブーとみなされて、発展ができなかった。1978年に中国は改革開放され、政治、経済、文化などは新たな転換期を迎えた。当時、「経済を優先的に発展する」という主義の下で、観光は外貨の獲得として重視されていた。それ以降、観光に関する政策や投資が多くなり、観光の発展を促進している。特に近年、中国は経済発展にともない、観光が盛んになり、地域によっては、経済的収入を観光産業に依存することが少なくないと考えられる。1949年から現在にいたる中国の観光の歩みを発展の段階によっていくつかの時期に分ける研究が散見される。たとえば、松村ほか（1999）は、政治と経済の関係に着目し、中国の国際観光をめぐる政策を「政治主導期（1949～1978年）」、「政治・経済並行期（1978～1985年）」、「経済優先期（1986～1991年）」、「経済主導期（1992～1999）」という4つの時期に分けた。筆者はこのような先行研究を踏まえ、中国における観光の歩みを政治主導の観光（1978年の改革開放以前）と経済優先の観光（1978年の改革開放以降）に分けることにした。以下のように、それぞれの時期における観光の展開を論じる。

4.1 政治主導の観光（1978年の改革開放以前）

中国において、1923～1949年には貧困や戦争のため、観光の発展は遂げられなかった。1949年の新中国成立当初は、国民経済が急速に回復し始め、外交の新局面を切り開き、政治主導の観光を展開した。外国人に対しては、政治目的の外交事業の一部として、中央政府の厳格な管理下で観光が推進されてきており、設立された観光に関する企業はすべて国有であった。たとえば、1949年に設立された「福建廈門華僑服務所」、1954年に設立された「中国国際旅行社総社」は国有企業である（表 2-4）。

中華人民共和国の建国初期、欧米諸国は中国に対して「政治孤立、経済封鎖」の政策を実施したため、観光は旧ソ連からの政治上の接待という形で行われた。中国共産党が受け入れた外国人は、社会主義諸国の同胞や華僑を除けば、対外的宣伝やイメージ形成で良好な成果が得られると判断された「政治的巡礼者」であった（松村 2009）。そして、華僑の帰国や親族訪問、外国人訪問者の食事、宿泊、交通などのサービス提供も行われた（張 2010）。1960年代に入ると、中国は多くの国との外交が正常化されたため、社会主義国だけでなく、多くの国々からの来訪者があった（王 2001）。しかし、1966年からの文化大革命の影響で、一部の観光名勝や観光施設は閉鎖されたため、観光事業は後退させられた。また、当時、貧困問題が深刻な中国では、一般の人々は旅行にかかる金銭の確保ができなかった。さらに、農村から都市への人口移動は厳格に管理されており、「単位」という職場が発行する招待状が必要な公務出張以外、列車や飛行機の切符を購入したり、宿泊先を確保したりすることは困難であった（松村 2009）。そのため、1978年までは、政治主導の観光が行われており、経済発展が遅れていたこともあり、民間では観光の発展が遅れていた。このような状況の中、観光の発展を促す政治の重要事項があったため、政治主導の観光が展開されていた（表 2-4）。

表 2-4 近代の中国における観光発展を促進する重要事項

年代	重要事項
1923年8月	上海商業儲蓄銀行が旅行部（中国人初の観光企業）を設立した。
1927年	上記は中国旅行社に改名され、15の都市で支社を設けた。
1949年10月	福建廈門華僑服務所が設立された。
1954年4月	中国国際旅行社総社が設立された。
1958年1月	「海外自費観光客接待の発展と国際旅行社業務の強化に関する通知」が通達された。
1964年7月	「中国旅行遊覧事業管理局」の設立が承認された。
1970年	外交部は「観光活動の体制改革に関する意見」を通達した。
1971年	当時の総理周恩来の「観光による文化交流」の談話が発表された。

謝（1999）、馬（2008）、林（2009）により、筆者作成

4.2 経済優先の観光（1978年の改革開放以降）

1978年に、中国は改革開放され、同年に開かれた全国観光活動会議では、観光業は「積極的に発展させる」という方針が定められた。観光は対外開放を唱え、国際交流の媒介だけでなく外貨獲得の重要な手段として重視された。1981年から中国は第6次五カ年計画に入った。この5年間、中国の観光業は体制改革と発展に重点を置いていた(王 2001)。それと同時に改革開放政策によって、沿海部の大都市が急速に経済発展したため、豊かになった都市住民は観光のニーズを生み出し、国内観光が徐々に発展してきた。また、経済発展による都市部の労働力不足が発生し、農村から都市への人口移動が比較的容易にできるようになった。このことで、国民の移動がある程度自由化され、都市住民と農民の交流や情報交換などが頻繁に行われるようになった。そして、経済発展により、インフラ整備が行われ、観光の推進が後押しされた。

1982年8月23日、全国人民代表大会常務委員会の承認を経て、「中国旅行遊覧事業管理局」は「中国旅行遊覧管理総局（国家旅游局の前身）」に改名され、中国観光を管理する最高機関と位置づけられた。それ以降、国家旅游局が中国の観光の担い手として動き出した。1985年、国家旅游局の「当面旅游体制改革のいくつかの問題に関する報告」では、「4個転換：行政と企業的分離、統一指導、分散経営、統一対外」を実現すると定め、特に「分散経営：観光経営者は政府から民間への転換、国際観光を中心とした観光管理体制から、国際観光と国内観光を並行して行うこと」は国内観光の発展を促進している。これをきっかけに中国の観光経営・管理は、政府主導から民間に転換し、観光の発展による経済効果が期待されるようになった。さらに、1986年、「外国人入国・滞在・ビザに関する規定」、「国際観光客用ホテルに関する制度」が整えられ、国際観光の発展を促進した。1987年、政府は「政府が市場を調節し、市場が企業を導く」ことを強調し、市場への本格的導入が始まった(韓 2008)。それを背景に、1986～1988年の間、中国の観光外貨収入は続けて21%の高い成長率を維持していた。しかし、1989年の「天安門事件」の影響で、観光には大きな打撃が与えられた。その後、1990年代に鄧小平が提唱した「先富論」を実現するため、第三次産業である観光業を重点的に発展させると定められた。これを受けて、中国国家旅游局が中心となり、政策上観光を展開さ

せており、特に注目されているのは毎年定められた観光プロモーションである（表 2-5）。

表2-5 中国における各年の観光プロモーション

年	テーマ	宣伝スローガン
1992年	中国友好観光年	旅行を通じた親睦の強化
1993年	中国山水風光遊	有名な観光地をめぐる麗しい国土の快適な旅の促進
1994年	中国文物古跡遊	文物、古跡の保護と観光発展の促進
1995年	中国民族風情遊	56民族の文化の理解と探訪
1996年	中国度假休閒遊	新しい休暇の過ごし方の提唱
1997年	中国旅游年	全国的な観光の推進
1998年	中国華夏城郷遊	現代の都市と農村、多彩な生活
1999年	中国生態環境遊	本来の望ましい姿に戻り、楽しく過ごそう
2000年	中国神州世紀遊	新世紀を契機とする旅行の促進
2001年	中国体育健身遊	新世紀に中国を旅しよう
2002年	中国民間芸術遊	中国の民間芸術を探訪
2003年	中国烹飪王国遊	中国の食文化と景勝地を楽しむ
2004年	中国百姓生活遊	都市農村交流の促進
2005年	中国紅色旅游年	「革命聖地」の再発見
2006年	中国郷村遊	新しい農村、新しい観光、新しい体験、新しい流行
2007年	中国和諧城郷遊	魅力ある農村、活力ある都市、調和がとれている中国
2008年	中国奧運旅游年	オリンピックをきっかけに中国を宣伝する
2009年	中国生態旅游年	エコツーリズムを体験しよう
2010年	中国世博旅游年	万国博覧会を媒介として、中国を宣伝する
2011年	中華文化遊	観光を通じて、中国の文化を体験
2012年	中国歡樂健康遊	観光を通じて、健康的な生活を提唱
2013年	中国海洋旅游年	海洋観光を体験
2014年	美麗中国之旅— 2014 智慧旅游年	美しく、賢く旅行する
2015年	美麗中国—2015 絲綢之路旅游年	新しく、麗しいシルクロードの再発見、再体験

国家旅游局ホームページにより、筆者作成

これにより、改革開放以降、中国における約40年間の観光の歴史を振り返ると、政治とかかわって、発展してきたことがわかる。現在に至るまで、中国の観光は大きな発展を果たしてきた(図 2-6)。しかし、観光の発展による乱開発、環境、文化の破壊などの新たな問題が生じ、解決を迫られている。そのため、近年では、持続可能な発展及び自然保護を強調するエコツーリズムや農村観光の発展が推奨されている。

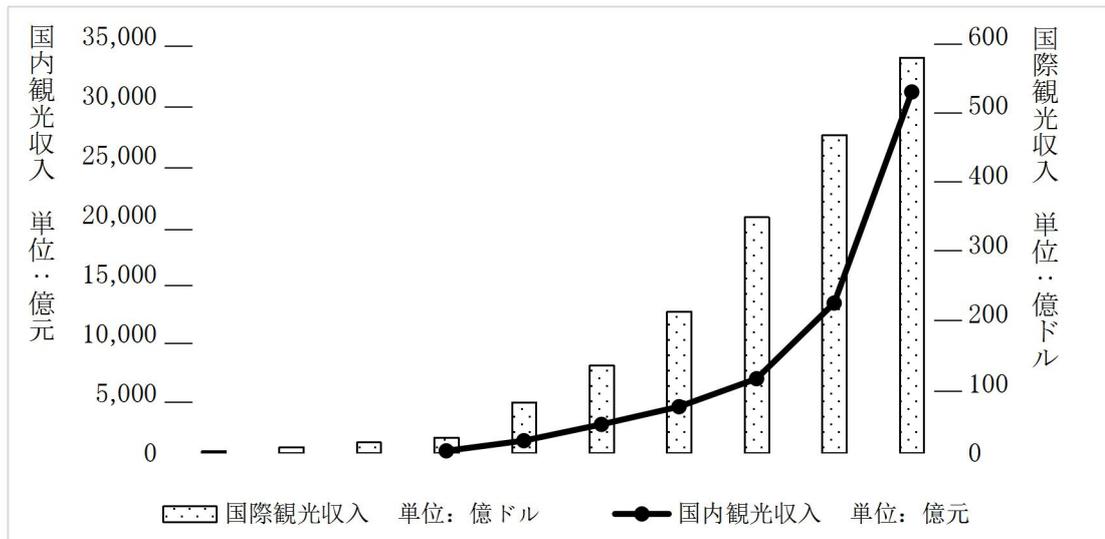


図2-6 中国における観光収入の変化（1978～2014年）

2008年および2015年中国統計年鑑により、筆者作成

1978～1986年における国内観光収入のデータは記載していない。

5. 中国における観光の課題

5.1 政治主導の観光開発

1978年の改革開放以来、中国における観光産業は巨大な発展を遂げた。しかし、2014年中国統計年鑑のデータをみると、国内外の観光客の約3分の2は東部にある観光地に集中している。豊富な観光資源があるにもかかわらず、中部と西部を訪れる観光客は少なかった。これは、中国政府が最初に提出した「先富論」とかかっているだろう。観光による地域への多面的な効果が期待されており、その中で最も注目されているのは経済効果である。観光地での消費は地域住民の所得を上昇させ、観光関係の雇用機会を増やすため、1984年に鄧小平の意見により、「中国第一批対外開放都市（最初の開放都市）」が設定された。これらの都市は外国人観光客を受け入れ、いち早く発展したものの、「北海市（広西省）」以外はすべて東部に位置している。その後、中部と西部の都市を徐々に開放したが、成都市、西安市、昆明市などの都市以外は、インフラ整備の遅れおよび知名度の低さのため、誘客ができず発展が遅れている（図 2-7）。そのため、これらの地域は波及効果が高い観光産業に特化し、観光開発と観光誘致を行ったが、現状の考察不足などによる重複的な観光施設の集中建設や過剰な観光開発が行われた結果、集客ができず、それに見合った経済効果が見られていない。また、1985年まで、計画経済の下で発展した旅行会社は国有企業であった。しかし、これは市場経済に相応しくないと指摘され、その後、徐々に民営化された。2001年に中国はWTO（世界貿易機関）に加盟したが、外国資本による旅行会社の設立基準は依然として厳しい。また、観光資源の所有権、経営権、管理権および開発権は国家、政府および国有企業に属し、これらによる観光資源の独占が、中国政府主導型の管理体制の特徴の一つである（韓 2008）。このような政治主導の体制の下で、「地方保護主義」、観光開発の封鎖性、地域間協力の限定性などの問題が指摘されている。

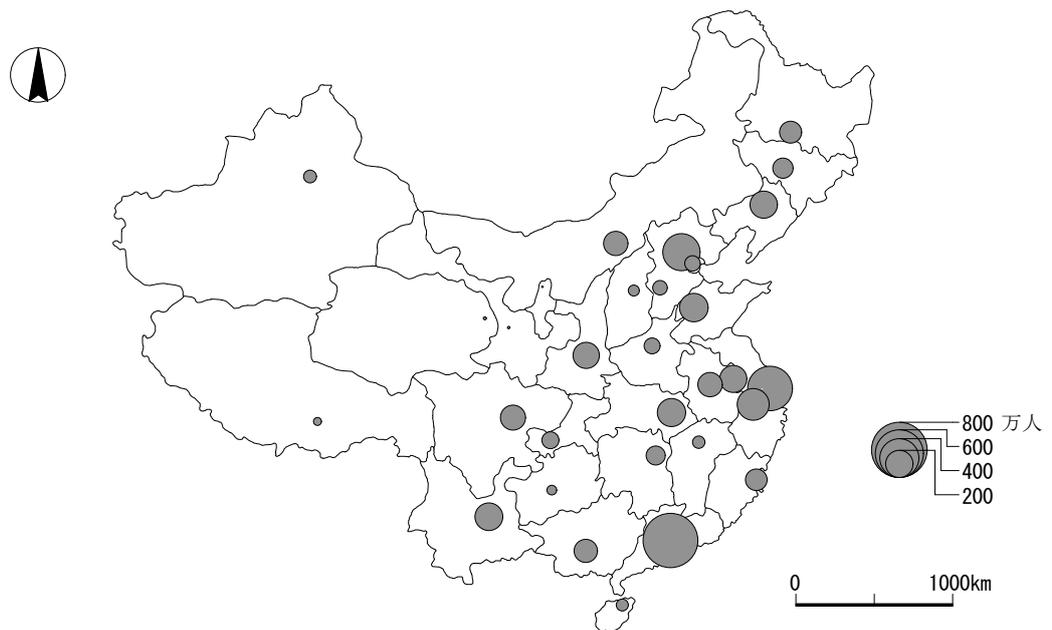


図 2-7 中国各省・市における宿泊した外国人観光客の数 (2014 年)

2015 年中国統計年鑑により、筆者作成

また、中国には漢民族以外に 55 の少数民族が定住している。少数民族は南西部、北西部に集中しているが、その地域は山地が多く、アクセスが不便で、土地も痩せており、発展が遅れている。大西ほか(2012)は、中国の少数民族における民族問題・政治問題・宗教問題などの諸問題は経済問題につながっていると指摘している。そのため、中国政府は政策的に少数民族地域の発展を促進しており、観光政策の導入はその一つである。しかし、55 の少数民族の民族習慣、地域特性などの個性を考慮せず、経済発展と政治業績をあげるため、「一刀切(同様な開発方法)」、「一言堂(行政トップの話に従うこと)」のような政策を少数民族地域に導入した。この結果、松村(2010)が指摘したように、少数民族文化は政治や観光のイベントに利用され、高いコストがかかるにもかかわらず、それに見合った経済効果が得られていない。また、このような政府主催のイベントは少数民族の文化に合わず、少数民族地域の民衆は参加しなくなりつつあるとの批判がある。

5.2 持続可能な観光発展

中国各地では観光開発が進んでおり、大規模な観光施設が建設され、交通などのインフラ整備が行われてきた。そのため、森林、河川、緑地、動物の生息地などが破壊され、硫黄酸化物 (SO_2) や二酸化炭素 (CO_2) の過度排出による大気汚染が社会問題になっている。また、多くの観光客は観光地に経済効果をもたらす反面、様々な問題を引き起した。環境の面では、王(2001)は観光と植物、観光と大気質、観光と水質などについて論述した。それ以外に、交通、生活環境、地域の社会活動(金銭志向の高まりによる地域住民の従来の社会システムの破壊)などの面では観光地住民に影響を及ぼしていると考えられる。

1987 年、「環境と発展(開発)に関する世界委員会」は持続可能な発展を提唱した。「生態的持続性、

社会的・文化的持続性、経済的持続性」はその3原則である。中国は開発当初、利益を追求することが唯一の目標であったため、環境を犠牲にし、経済を発展させた結果、環境問題が深刻になった。中国では、1990年代から持続可能な発展を提唱するようになってきており、環境の保全と地域コミュニケーションの維持、長期の経済利益のため、観光産業にも取り組んできた（表 2-6）。

表 2-6 中国における持続可能な観光発展を促進する諸政策と手段

法律・政策	法律・政策		制定機関	実施年
	中華人民共和国文物保護法		全国人民代表大会常務委員会	1982年
	中華人民共和国環境保護法		全国人民代表大会常務委員会	1989年
	中華人民共和国海洋環境保護法		全国人民代表大会常務委員会	2000年
	旅游規劃通則		国家旅游局	2003年
	国家生態旅游区規劃		国家旅游局	2006年
	風景名勝区条例		国務院	2006年
	旅游資源保護暫行辦法		国家旅游局	2007年
	歴史文化名城名鎮名村保護条例		国務院	2008年
観光資源の保護	観光資源	管理機関	現在の数	開始年
	国家歴史文化名城	国務院	126 の都市	1982 年
	中国優秀旅游城市	国家旅游局	339 の都市	1998 年
	国家級自然保護区	国家環保部	428 か所	1980 年
	AAAAA 国家級旅游景区	国家旅游局	186 か所	2007 年
	国家級風景名勝区	国務院	225 か所	2006 年
	世界遺産	ユネスコ協会	48 か所	1977 年
環境を配慮する 新たな観光の推進	農村観光、エコツーリズム（生態観光） ヘルスツーリズム（健康観光）などの推進			

中華人民共和国中央人民政府、国家旅游局、国務院のホームページにより、筆者作成

このように、中国は持続可能な観光に関わる最も重要な観光資源を持続的に維持・保全・利用し、持続可能な観光を発展させている。しかし、観光と環境の問題を解決するまでには、時間を要し、中国の観光発展における重大な課題であると考えられる。

5.3 人材育成

観光産業発展の結果、それに関する研究、人材育成の教育機関が大幅に増加した。「2014年全国旅游教育培訓統計」によると、「観光管理」の学科・学部を有する大学は492校にのぼり、専門学校、職業高校、研究所なども加算すれば、おおよそ2500校ある。これらの教育機関は「酒店（ホテル、レストラン関係）管理」、「旅行（旅行会社、風景区関係）管理」、「会展（イベント関係）管理」などの学科を開設しており、観光産業関係の人材を育成している。このように人材育成が急速

に発展しているなか、いくつかの課題が指摘されている。まず、学問として、観光の知識体系と理論的枠組みを構築することである。これは中国に限らず、他国でも未解決の問題である（林 2009）。次に、学校教育と関連産業の連携にかかわる問題である。観光に関する多くの仕事の外観は華やかであるが、実際に仕事を始めると理想と現実とは遥かに異なっており、離職率が高い。そのため、多くの大学は「企業実習」を導入した。王（2001）は「観光の高等教育機関に求められるのは、職務遂行能力と思考能力の開発である」と指摘した。最後に、中国の大学における観光関係の教員は専攻が異なっており、管理学、経営学、経済学、地理学、歴史学などの授業が開設されている。学生は多くの学問に触れることができるが、一つの専門領域について深く学ぶことが難しいため、就職にも不利である。

中国の伝統文化では、「ホテルやレストランでのサービス業」に対する認知度が低く、軽視されている業種である。しかし、宿泊・飲食業は人が人にサービスを提供するため、多量の従業員を確保する必要がある。2014年中国統計年鑑によると、中国には24,944の旅行会社があり、宿泊と飲食業に従事している人は456.2万人である。しかし、その平均年収は34,044元で、全国の平均年収51,483を大幅に下回っている。また、宿泊と飲食業はサービス業の中でも労働時間が長く、一人当たりの仕事量が多いため離職率が高く、長期間のキャリア形成には不利である。例えば、2003年の「中国旅游報」によると、2000年に杭州某大学観光管理を卒業した人は2002年までの2年間で、88.9%の人が離職した。一方、旅行業の急速な発展に伴い、ガイドの役割がますます重要になっている。しかし、旅行シーズンにより、必要なガイドの数は異なっているため、多くの旅行会社は兼業ガイドあるいは派遣ガイドを起用している。その結果、旅行会社はガイドの養成や訓練に留意しておらず、ガイドの質は向上できない。このような非正規雇用のガイドには基本給が与えられず、雇用保険、旅行保険などにも加入できないため、離職が多い。そこで、旅行業従事者の権利を保護するため、管理機関はいくつかの法律を制定した。例えば、1999年10月1日から施行された「導遊人員管理条例（ガイド管理条例）」はガイドの合法的な権利を保護するようになったが、実際には適用には困難があり、ガイドの就業状態は現在でも厳しく楽観視できない。そのため、旅行業あるいは観光業界にとって、人材育成は社会、政府、旅行会社、研究機関、ガイドの共同努力が必要であり、ガイドという職業に魅力を感じさせ、長く継続していけるような方策が求められる。

6. 小括

本章では、まず、観光の定義を議論した。「観光」の定義は明確にされていないが、その本質は「人が動くこと」、「観光したい動機を有すること」であり、「余暇時間のなかで、日常生活圏を離れて行う様々な活動であって、再び住居地に戻る予定であり、かつ、訪問先で報酬の稼得を目的とするものは除く」として捉えられる。

次に、中国での古代から現在にわたる観光の展開過程を論じた。古代の中国では、遊学、ビジネス、宗教による観光を行ったが、貴族あるいは有権者が中心であり、民間にはあまり及んでいなかった。1923年8月、中国人自身による初めての観光企業である「上海商業儲蓄銀行旅行部」が設立

され、その後、15の都市で旅行支店が設けられた。しかし、中国では戦争や貧困などの多難多災のため、あまり発展できなかった。1949年、新中国成立以降、経済が急速に回復し、外交の新局面を切り開き、政治主導の観光を展開した。外国人に対しては、政治目的の外交事業の一部として、中央政府の厳格な管理下で観光が推進されてきた。1978年に中国は改革開放し、同年に開かれた全国観光活動会議では、観光業は「積極的に発展させる」という方針が定められた。観光は対外開放を唱え、国際交流の媒介だけでなく外貨獲得の重要な手段として重視された。1992年から、国家旅游局は観光テーマを作成し、政策的に観光を展開させている。また、観光の分類（観光地、観光資源、その他による分類）および観光にかかわる諸要素（観光資源、宿泊施設、旅行業、交通、その他）について述べた。農村観光は観光の一種として、農村にある資源を利用し、都市の観光客に農村ならではの観光商品を提供し、持続可能な農村の発展を目指す観光であり、中国の農村問題の解決方法とも言われているため、その研究も進んでいる。

最後に、政治主導による観光、持続可能な観光発展、人材育成の面から中国における観光の課題について言及した。中国政府は政策的に少数民族の発展を促進するために、観光政策を導入した。しかし、少数民族の民族習慣、地域特性などの個性を考慮せず、「一刀切(同様な開発方法)」、「一言堂(行政トップの話に従うこと)」のような観光政策を少数民族地域に導入した。その結果、少数民族文化は政治・観光イベント化し、高いコストがかかるにもかかわらず、それに見合った経済効果が得られず、政府主導の観光事業は少数民族文化の継承にそぐわないと思われる。また、持続可能な観光発展を目指し、過剰な干渉をせず、観光資源を保護しながら観光関係の人材育成を重視すべきであると考えられる。

注：

- ¹ 中国の観光地の品質格付けを示す。5A級は中国の最高級の観光地である。
- ² 正式名称は中国共産党第十一届中央委員会第三次全体会議である。
- ³ 国内ガイドは中国人観光客しか案内できない。国際ガイドは外国人観光客を案内できる。
- ⁴ 行う業務によって、分類されている。
- ⁵ 正式名称は第十三次5ヵ年計画である。
- ⁶ 八大菜系の分布について、中国国内では多くの議論が見られる。例えば、多くの研究者は、北京市、天津市、河北省、河南省の料理は山東料理の一部として発展してきたと認識している。筆者は、陳(1994)、呂ほか(2009)を参考し、図2-4を作成した。
- ⁷ 「中華人民共和国国家質量監督檢驗檢疫総局」が2013に通達した「中華人民共和国国家標準 GB/T 18972—2003 旅游資源分類、調査与評価 Classification, investigation and evaluation of tourism resources」による。

第3章 中国における三農問題と農村観光

1. 農村観光の定義

農村観光については、これまで研究者が様々な定義と解釈を行っていた（張 2010）。中国の国家旅游局は郷村観光¹という用語を使用し、同局の郷村観光に関する報告書『概念、類型、誤区、問題と対策—五問中国郷村旅游（概念、類型、誤解、問題と対策—中国の郷村旅游に関する5つの質問）2006』の中で、下記のように定義した。同報告書では、「郷村観光²とは、現在、都市と既成観光地以外の地域で起こっている観光の特徴を備える産業のことである。すなわち、直接的に観光客にサービスを提供する産業のことである。通常は農村集団経営あるいは個人経営で以下の業界に幅広く関与もしくは関与可能な産業を含んでいる。たとえば、旅行業とその関連業、宿泊業、飲食サービス業、娯楽業、小売業、水上旅客運送業、道路旅客運送業、レンタル業、文化サービス業（筆者訳）」と定義している。上記の定義は、経営主体を重視しており、農村部の集団、個人については明確に定義されているが、それ以外については、サービスの対象などは明確にしていないう状態であり、曖昧である。また、この定義は、郷村観光と郷村観光産業を区別せず、郷村観光の定義として適切でないと考えられる。

研究者の中では郷村観光という用語を使用していることも多く見られる。王（1999）は、農村部の特別な文化、環境、行事、農作業、伝統的な民俗を資源として、主に都市部の観光客に対して提供した、観賞、体験、参加、学習などを観光活動と定義すべきと主張している。この定義の中では、幅広い定義を行っており、農村部の観光資源と都市部の観光客を明確に説明している。続いて、肖（2001）は「農村部と都市部の相違を利用する」という点を強調した。そして、一時体験、食事のみではなく、長期的な滞在を過ごすことを明確化している。この点においてはももとのルーラルツーリズム、いわゆる、ヨーロッパ型の農村観光に最も近いと考えられる。文ほか（2007）は、郷村風景や、郷村で行っている活動などは郷村観光の主な内容であり、郷村観光と農業は関係が深いと解釈していた。また、黄（2007）は、郷村観光は農村部のある資源を利用して、科学的に企画、デザインなどの手段を加えて、農村の自然風景と新型農村を観光商品として、都市部の観光客に提供する目的であると主張した。さらに、郭（2009）は、「観光村」に注目し、農村観光を「村内の地理空間で、独特な資源を利用し、観光客を誘致することである」と解釈した。また、観光村は「従来の農村の機能である農産物の提供に加え、観光活動も行っている村である」と強調し、観光村と一般的な村の意味は異なることを示している。以上のように、中国では、「郷村旅游」という用語が使用されている。しかし、「郷村」は郷、鎮政府が管理している地域であり、農村より広い（王 2001）。また、中国においては「郷村」や「農村」、「村」などの用語がもともと曖昧であり、行政的のどのように区別するかの課題が残されている。

農村観光の英訳はルーラルツーリズム（Rural tourism）であり、ヨーロッパでは国によって、これの呼び方が異なっている。たとえば、英国ではルーラルツーリズム、フランスではツーリズムベール、イタリアではアグリツーリズムと呼ばれている。ルーラルツーリズムは1970年代に英・仏・

独で始まり、80年代から90年代にかけてイタリア、ギリシャ、スペインなどヨーロッパ全域に広まった（盧ほか 1995）。欧州各国は、古い農家や空き家などを都市住民が活用する事例や、田園や山岳などの地域固有の資源を観光活動に活用している例が見られ、農村地域の経済活性化、地域住民の暮らしぶりやライフスタイルの改善、女性の社会参加や経済的自立の促進などを通じて、持続可能な地域の実現をめざしている（張 2010）。また、OECD（1994）は農村観光を「農村で行われる観光」と定義した。また、各国の条件が異なっているため、すべての国に適応する農村観光を定義することは難しいと述べたうえ、農村固有の「農村性」を追求することは農村観光の神髄であると論述した。以上のように、各国における農村観光（ルーラルツーリズム）が盛んに展開しているが、これに関する定義は明確化されていない。

一方、日本では、農村観光に相当する用語がグリーンツーリズムであり、1992年の農林水産省の「新しい食料・農業・農村政策の方向」で初めて政府の公式文書に用いられた³。同省によって、「農山漁村地域において自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動である」と定義された。しかし、この定義は具体性に乏しいきらいがある（原 2005）。日本ではいち早くグリーンツーリズムに注目した研究者である山崎ほか（1993）、宮崎（1997）、青木（2004）がそれぞれグリーンツーリズムの特徴は「地域活性化」、「新しい観光形態」、「持続可能」であると主張した。また、山崎（2005）は環境保全、観光振興などのキーワードを提起したが、明確なグリーンツーリズムの定義はないと指摘した。

また、日本で展開しているグリーンツーリズムは、ヨーロッパで展開しているルーラルツーリズム（Rural tourism）との違いがある。この違いに関して、以下の研究がある。ヨーロッパは長期休暇を利用した滞在型余暇活動を中心とするのに対して、日本は農作業体験などを織り込んだ農家民宿を中心に発展し、西欧の休暇制度や余暇の過ごし方、農村の景観・構造整備と異なっている（四方 2002）。また、宮崎（2002）はヨーロッパと日本の家屋、農業形態の相違点を論述した。グリーンツーリズムの経営主体については多く議論されており、ヨーロッパの個人経営に対して、日本では第3セクター、農家グループによる経営が多く見られる。実際は、農林水産物の販売活動（道の駅・直売所など）、イベント（ふるさとまつり・収穫祭など）、農業・農村体験（観光農園、果実狩り、田植え・稲狩りなど）、学校教育における農村や農業とのふれあい（学生の農村での研修旅行）、自然の営みとのふれあいなどの幅広く都市と農山漁村の交流を指す活動が多数である。このように行われている活動は短期滞在であり、日帰りが多いため、従来のヨーロッパのグリーンツーリズムと異なっている。そのため、日本で展開しているグリーンツーリズムは「日本型グリーンツーリズム」と言われている。

世界諸国で展開している農村観光は諸国の現状により内容と特徴が異なり、使用する用語は一致していない。中国では、農村観光の類義語が多数ある。2000年以前には、「観光農業」、「休閒農業」、「都市農業」、「体験農業」、「旅行農業」、「観賞農業」、「生態農業」、「田園農業」、「農村旅行」などの用語があった（張 2010）。現在、主に使用している用語としては「郷村観光」、「農家楽」、「観光農業」、「農業観光」、「生態観光」、「三農観光」、「農村観光」である。それぞれの定義は、表 3-1 のように整理される。

表 3-1 中国における農村観光に関する定義の整理

用語	主な内容	経営者	特徴	活動範囲
郷村 観光	農業に関する体験、「郷村」 での宿泊、食事など	農民、農村集 団、その他	幅広く、農村以外の地域でも行われて いる。	都市以外 の地域
農家 楽	農家での体験、食事、宿泊 など	農民	農業、漁業、牧業との結びつきが強く、 農家の収入増加を目的としている。	農村
観光 農業	農業科学の普及、農業体 験、学生教育など	農民 農村集団	農業を観光資源として重点をおいた観 光形態である。	農村
農業 観光	農業生産過程や農村景観 を観光する	農民 農村集団	単に農産物の提供だけでなく、その生 産過程、生産技術も観光商品になる。	農村
生態 観光	大自然を楽しむ、 自然保護意識の養成など	会社、政府	自然保護、地域文化を重視している。	自然が豊 かな地域
三農 観光	農村での体験、宿泊、食事 など	農民 農村集団	三農問題を解決するのが目的である。	農村
農村 観光	農村風景を楽しむ、農家で の食事、宿泊、体験など	農民、農村集 団、その他	農村で行っている観光活動を含んでい る。	農村

経営者：農村観光を経営する者を指し、ここでの集団は生産・経済組織、グループを指す。

農家：農業、牧業、林業、漁業のいずれかを営む者をいう。

牧業：遊牧業と牧畜業を経営する者である。以下同様。

生態観光：日本語のエコツーリズムである。

張 (2010)、肖 (2001)、王 (1999)、張ほか (2011)、鄒 (2005) により、筆者作成

表 3-1 を見ると、農村観光は基本的に農村で行われている活動であり、内容も農村が持つ固有の資源を活用した観光活動を指している。特に、郷村観光と農村観光は多少差があると指摘できるが、両者はほとんど違いがない (緒方 2009)。しかし、中国語の「郷村」は、都市以外の地域を指し、「郷」、「鎮」政府が所轄しており、「農村」という戸籍を持たない住民も多い。そのため、本研究では「郷村観光」を使用せず、「農村戸籍」をもつ農民が行っている農村観光、つまり農村で行っている農村観光を考察する。

以上の定義を参考にした上で、本研究では、「農村観光」を使用し、次のように定義する。

「農村観光」とは、農村の本来の地理空間で地域住民が主体となって、農村地域の風土、自然環境、農業、景観、文化、民俗などの地域資源を活用し、主に都市部の観光客にサービスを提供し、地域経済の活性化と産業構造の転換を目指す観光形態である。

筆者は、本論文ではより広義に農村観光を定義し、農村地域での観光を含む場合がある。第 5 章で論述する里峪村で展開する農村観光はこの一例である。また、この定義は、農村の本来の地理空間にある農村景観、農業、農村的な知識・仕事・社会関係とこれらの要素の組み合わせによって表象されている「農村性」、地域住民が主体となる「農民の積極的な参加」、地域経済の活性化と産業構造の転換を目指す「農村経済の発展、農村産業構造の転換」の 3 つを重視している。

2. 中国における三農問題と農村観光

2.1 中国における三農問題

中国は古くから「民以食為天（民は食を以て天と為す）」ということわざがあり、食料問題が、庶民にとっては最重要であることを表している。この「食」を生産するのは農業であり、人間の生活に欠かせない産業である。それ以外に、農業や農村の多面的機能について、日本の農林水産省は以下のようにまとめている⁴。

農業・農村の多面的機能とは、「国土の保全、水源の涵養、自然環境の保全、良好な景観の形成、文化の伝承等、農村で農業生産活動が行われることにより生ずる、食料その他の農産物の供給の機能以外の多面にわたる機能」のことをいう。

2014年中国統計年鑑によると、中国の農村人口は6億2,961万人であり、中国総人口の約46%を占めている。したがって、農村の発展は中国にとっては、重要な課題である。しかし、1990年代に入ると、農村経済の構造問題が発生した。特に、内陸農村においては数多くの「三農問題」が発生した。三農問題は、農業の低生産性、農村の荒廃、農民の貧困の問題の総称であり、都市部と農村部の所得格差が拡大し、中国の持続的発展の不安定な要因となっている。これは温鉄軍氏が、1996年に初めて提唱したとされる。また、湖南省棋盤郷前党書記が2000年、当時の朱鎔基首相に「農村真苦、農民真窮、農業真危（農村は本当に苦しい、農民は本当に貧しい、農業は本当に危機的である）」との書簡を送付したことを契機に、社会的な認知を得たという⁵。

2.1.1 農業問題

中国が広大なのは事実としても、農業に適した土地は限定される。経済発展や人口増加などにより、農産物の需要が拡大し続けるが、工業用地、建設用地の増加にともない、農業生産に適用する農地が減少し、水資源の減少・汚染や農業基礎施設の遅れなどにより農業生産性は低い。また、零細な営農規模、過剰な就農人口などによる農業の低生産性もあげられる。また、中国における農業生産は、膨大な人口に対する食糧供給を中心とし、一種の行政指導による生産調整を実施してきた。ところが、その結果、食糧作物を中心として、「需給逼迫→増産対策強化→豊作貧乏→生産激減→需給逼迫」の循環による生産過剰問題（豊作貧乏）にたびたび見舞われることになり、その都度、内陸部では非農業部門への流出（出稼ぎ）、沿海部では離農または兼業の拡大が進んだ（通商白書2006）。さらに、2001年にWTO（世界貿易機関）に加盟したことによって、一部の農産物の輸出が増大した。しかし、全般的に見て中国の農産物は必ずしも国際競争力を持つとは言えず、輸入量の増大によって打撃を受けた地域も少なくない。とりわけ、内陸部の小規模農業は極めて厳しい状況に追い込まれており、農業生産の構造的な調整が迫られている（柯 2008）。

2.1.2 農村問題

農村には、所得、インフラ整備、教育の水準がいずれも著しく低いという問題がある。1949年に中国が建国され、都市の工業建設を急いだ。その過程で、資本の原始的蓄積として農村からの収奪が強化された。加えて、分税制導入以後の中央政府と地方政府との間における事務権限配分と財源配分とのアンバランスの問題がある（通商白書 2006）。また沼尾（2009）が議論したように、「医療や教育などのサービスについては県の責任が重要とされてきたが、教員の給与をはじめ、サービス提供にかかる支出を賄う十分な税財源が県などのレベルに適切に配分されてこなかった。さらに、各級政府は事務権限を行使するために必要とする財源を下級政府からの上納等で調達しようとすることから、下級政府にそのしわ寄せがいく」のような財源配分の問題がある。また、農民は、収入の多寡に関わらず農業税をはじめ、公益費、道路建設費、教育費、行政管理費などの諸経費が徴収されるほか、末端行政の財政事情に応じて財政負担が強いられる（柯 2008）。この中には、農村を発展させていく上で必要なものもあるが、農民の収入に比して著しく過重であると指摘されている。また、一部の地域では、幹部の私利追求により恣意的に徴収される場合も多く見られる。

2.1.3 農民問題

農民問題は、以上の要因に由来する農民の貧困状況、所得と社会的地位の両面において現れる都市住民との格差という点であり、三農問題の核心である（柯 2008）。その中では、特に農村住民と都市住民の所得格差が注目されている（表 1-1）。2014年中国統計年鑑によると、2013年における都市住民1人当たりの可処分所得は26,955.1元に対して、農村住民1人あたりの純収入は8,895.9元であり、都市住民の3分の1程度であった。

また、中国には「都市戸籍」と「農村戸籍」という2種類の戸籍が存在する。これは単なる地理的区分ではなく、実質的には一種の「身分」として機能している。農村戸籍者は基本的に都市戸籍への転籍が不可能であり、物理的に移住できても、都市住民が享受する社会サービスからは排除される。つまり、農村から都市への移動の自由、職業選択の自由に対する実質的な制限である。現在、戸籍制度が緩和され、農村住民は農村を捨て、あるいは家族を故郷に残し、「農民工（出稼ぎ労働者）」として都市への流入が多く見られる（西島 2005）。ただし、都市における農民工は、市民的権利の無保障、低賃金、3K（危険、きつい、汚い）労働、蔑視、子供の教育など、あらゆる面で低位に置かれ、それに由来する諸問題が発生している。農民工の出稼ぎが存在しつづければ、農地の放棄、農村文化の維持、農村の発展などの三農問題が深刻になり農村の発展には不利である。

2.2 三農問題を解決する諸政策

このように経済発展にともなって生じた都市・農村間の格差是正や農民の地位向上への対応は政府の最重要課題の一つとして取り上げられており、三農問題に対する政策が次々と打ち出された。例えば、耕地を保護する政策の実施、農村地域に社会保障制度の導入などがあげられる。また、三農問題に対する財政支出には、8つの項目がある。まず「農業」の低生産性への対応として、生産性向上に向けた基盤整備、構造改善事業の実施がある。次に「農村」の荒廃への対応として、生活基盤

整備、社会保障制度、教育制度整備の推進である。さらに「農民」の貧困への対応として、農産物の価格保証、多様な就労機会の創出、そして各種負担の軽減となっている（沼尾 2009）。また、共産党・国家国務院が三農問題をめぐって、2003～2008年にかけて「中央農村工作会議」を6回も開催し、三農問題の解決支援に関する「1号文件」を公布した。劉（2013）は2004～2012年の「1号文件」に関する政策をまとめ、これらの政策は農村発展に重要であると述べた。具体的には、三農問題をめぐる政策は下記にまとめられる。

農村税費改革：2000年に安徽省は国務院による全国農村税費改革モデル省に指定され、2001年には江蘇省が自ら自主的に農村税費改革の試みを実施した。その他の省でも一部の県（市）を選択し、部分的な試みを実施した。2002年にはモデルケースの範囲が拡大され、河北、内モンゴ、吉林、黒龍江、江西、山東、河南、湖北、湖南、重慶、四川、貴州、陝西、甘肅、青海、寧夏の16の省、市、自治区にまで拡大し、同時に国務院の批准を経て、浙江、上海という先進地域では自らの財政力で費用負担改革を行っている。2005年にはさらに農業税免除の範囲を拡大するために、農業税の削減に力が注がれた。国家貧困扶助開発重点県とされている592の県では、農業税免除とされた。重点県における農業税免除の試みとともに、その他の地域では農業税の税率引下げがさらに進められた。牧業地域では、牧業税廃止の試みが開始された。同時に「国家農業開墾企業」については、事業地と居住地とで同等の農業税減免政策が行われた。

農村住民最低生活保障：2001年に浙江省で、農民の社会保障制度として保護の範囲を法規化したのが全国初である。2004年の時点で全国8省、1206県（市）で農村最低生活保障制度が導入されており、488万人の農民、235.9万世帯で農村最低生活保障を受け取っている。そのうち北京、上海、天津、広東、浙江、江蘇の6省市では、すでに農村住民の最低生活保障制度が全地域で実施されている。

新型合作医療：2003年より各省、自治区、直轄市が選定した2～3の県、市でまず試みが開始された。2004年には各地域で新型農村合作医療の試みが安定的に進められた。2005年には中西部地区で1市あるいは1県を原則とする対象地域の拡大が進められ、東部の経済条件が比較的良好な地域では、さらにその導入が迅速に進められている。

新農村建設：2005年に中国共産党第16期五中全会が「中共中央関興制定国民経済和社会發展第十一个五年規劃的建議（中共中央国民経済と社会發展第11次5か年計画制定に関する建議）」を採択し、社会主義新農村の建設目標を打ち出した。その内容は、農業を發展させること、農村を再建すること、農業と農村に対し政府は資本を投入すること、郷村の道路建設を含んだインフラ整備を改善すること、工業により農業を促進させ、都市に農村を吸収させること、農村合作医療制度の基盤を築き上げること、9年制の義務教育を強固なものにすること、農村の学生の雑費を無償にすることなどである。

国務院関興解決農民工問題的若干意見：2008年、正式に發布された通達であり、この通達では農民工の低賃金と賃金未払い問題のより早い解決、法規による農民工の労働管理の規範化、農民工の就業訓練の強化、農村労働力の就業転移の促進、農民工に対する指導の強化・改進を要求した。また、農民工の重点課題である社会保障の要望に基づき、全国各地で法律によって農民工は労災保険に加入すること、農民工の大病医療保障問題を解決すること、段階的に農民工の養老保険問題を解決することが規定され

ている。

上記以外には、農産物に最低限の価格の設定、戸籍制度の緩和、農業に関する補助金制度なども挙げられる。

2.3 農村観光の役割

そもそも観光の発展は観光地に様々な影響を及ぼしている。例えば、経済の影響は住民の収入増加、生活水準の向上、経済構造の改善、就職機会の増加などがある。社会文化と環境の面では、地域文化の維持、地域間の交流、地方イメージの向上、国際親善などが挙げられる。一方、観光地住民の生活環境の悪化を招く影響もある。例えば、観光地の自然破壊、観光客による多額の金銭支出などの好ましくない行動によって観光地住民との間にあつれきを生じさせることなどがある。

中国政府は政策課題として三農問題を取り上げ、その解決に向け様々な政策を打ち出している。中央政府による政策のような「上から」の動きに対して、「下から」の動きである農村観光を通じた農山村地域の活性化もその解決策の一環として注目されている。農村観光は農民が主体となり、農村にある資源を活用した観光形態であるため、下記のような多面的な役割が挙げられる。

農業衰退の防止：離農、農地放棄を食い止め、農業の重要性を再発見できる。

農民の収入増加：農村観光は農民の収入に寄与し、農業生産の発展と農村住民生活の向上にもつながっている。

農村の産業構造の転換：従来の農業にサービス業を加えた、「融合した産業⁶」に就職する農民が増える。

都市農村交流：新たなライフスタイルを広め、都市と農村それぞれに住む人々が互いの地域の魅力を分かち合い、「人、もの、情報」の流れを生み、行き来を活発にし、都市住民は食、農業の重要性を、農村住民はアイデンティティを再発見できる。

持続可能な発展の促進：農村地域の環境保護意識を強め、農村の伝統文化が維持できる。

学生の教育：農村での修学旅行などにより、学生が農業とふれあい、農業に興味を持ち、農業、食などの大切さを認識・理解する。

以上のことから、農村観光は農村の活性化につながる事が期待されており、三農問題の解決に重要な役割を果たしていると考えられる。

3. 中国における農村観光の分類

中国では乾燥した北の内モンゴル草原、ゴビ砂漠から、多湿な南の亜熱帯の森林まで面積が広大かつ多様であり、各地にある観光資源が異なっているため、展開している観光は多様であると考えられる。各農村にある資源を活用した農村観光はさらに分類できる。各種類の農村観光は抱えている課題が異なっており、それらの種類ごとに解決する必要がある。したがって、農村観光を分類す

ることが重要であると考えられる。しかし、中国、日本の学術研究を検索した結果、ある地域を限定した農村観光を分類した研究があるが、それについての総合的な研究があまり行われていない。以下は農村観光の分類について論述する。

3.1 行政との関係による分類

日本におけるグリーンツーリズムは第3セクター型で補助金により推進されるグリーンツーリズム、あるいは農林水産省を中心にグリーンツーリズム関連の施策・事業をベースにしたグリーンツーリズムと、農民自身によるグリーンツーリズム、つまり「ボトムアップ型グリーンツーリズム」がある（宮崎 2002；多方 2000）。中国では、政策と農村観光発展の関係による分類は、行政主導型と自発発展型に分けられる。

中国の国家旅游局は毎年観光に関するプロモーションを作成している（表 2-6）。1992 年から 2015 年のうち、農村観光と関連があるプロモーションは表 1-2 のようになっており、2006 年に「中国郷村遊」というプロモーションが定められた。同年における初の全国観光工作会議において、呉儀氏⁷は次のように述べていた。「観光業は中央の提出した社会主義新農村戦略⁸を徹底的に実行するべきである。観光を通じて、三農の発展を促進し、社会主義新農村建設のために貢献すべきである」。

それ以外は、中国政府が毎年発布する最も重要な文件である「1 号文件」には、農業、農村のさらなる発展を実現すると明記し、農村観光を積極的に発展させることが重要であると述べた。さらに、2014 年 10 月 21 日に、「中国発展と改革委員会（中国発展と改革委員会）」をはじめ、国家旅游局などの 7 つの国家機関は「関興実施郷村旅游富民工程推進旅游扶贫工作的通知（農村貧困問題を解決するための農村観光の実施に関する通知）」を制定した。これは、「2015 年までには、2,000 の貧困村、2020 年までには、6,000 の貧困村に農村観光を導入し、実施させる」と明記したうえで、各行政部門はそれに対する行政支援、インフラ整備の投資、人材育成などをすべきだと定めた。それを受けて、各行政部門は動き出し、農村観光に力を入れている。このような支援を受けて、農村観光を始めるケースが多く見られる。代表事例としては、貴州省、雲南省の少数民族への「扶贫政策⁹」がある。

一方、農民は自発的に農村にある資源を活用し、観光客、特に都市部の観光客にサービスを提供している。1987 年、四川省成都市郊外で花卉栽培を営んでいる農民である徐紀元氏が自宅や庭などを活用し買付客に宿泊や食事といったサービスを提供したことが農村観光の起源とされている。また、1990 年代から、観光客のニーズに合わせて中国各地の農民は地元の素材を活用し、料理、観光農園、農村体験などのサービスを観光客に提供している。また、農家楽というような経営者は自宅を改装したり、観光客用の客室を新築したりして、観光客に宿泊事業を行っている。豊かになった都市住民の需要のため、大都市あるいは中核都市の周辺に農村観光はいち早く発展してきた（任 2014）。そして、既成観光地の周辺に位置し、来訪者に宿泊、食事などのサービスを提供する農村観光がある。このように、農民たちは農村観光のあり方を模索しながら、観光客が集中しやすい場所で展開している。代表事例としては、北京市近郊の民俗村、青島市近郊の観光農園である。

しかし、この分類は絶対ではない。自発的に発展してきた農村観光は地域の行政に注目されている。その後、さまざまな支援政策による支援を受けてさらに発展を遂げたケースが多く見られる。

3.2 観光資源による分類

本論文ではより広義に農村観光を考察し、農村観光は、「農村地域にある諸資源を活用する」と定義している。各農村観光地には所有する観光資源が多種多様であるため、それをベースに展開している農村観光が異なっている（表 3-2）。

表 3-2 農村観光に関する資源

分類	内容	行われる農村観光
自然	山、川、湖、草原、森林などとその中に生存する動物、植物	農村風景観光
農業生産	農業とそれに関連する施設、景観など 人間が改造したものが主となる	農業観光
農村集落	農村集落構造、農村にある歴史遺跡、建築など	農村集落観光
農村文化	民俗、伝統工芸、祭祀、宗教活動など	農村文化観光
その他	気候、飲食、特産品、農村の雰囲気	

農業：中国の農業は、農業、林業、漁業、牧業を含む。牧業は牧畜業と放牧業を含む。

空欄：言及していない。

馬（2007）、王ほか（2015）により、筆者作成

表 3-2 で分類した農村観光資源の「その他」のみを観光対象にした農村観光は稀である。それ以外の観光資源を利用した農村観光は、中国で活発に展開している。農村風景観光は農村地域にある山、川、湖などとその中に生存する動物、植物を対象とする農村観光の一種であり、「生態観光（エコツーリズム）」との区別はあまり明確にされていない。都市住民は都市生活を離れて、長期間農村に滞在し大自然でリラックスできると考えられる。青島市近郊に「西麦窯社区」という伝統的な村がある。この村は都市近郊に位置しているにもかかわらず、村民は昔ながらの生活様式を送っている。石造の家、赤い瓦、至るところに干されている漁網、村のすぐそばに砂浜と海などがあって、漁村の雰囲気が漂っている。1990年代にこの村には、農村観光が導入され、2004年に「全国農村観光モデル地」にも選ばれた。筆者の聞き取り調査によると、村の観光資源の一部である砂浜とビーチはこの村に来る観光客の間で評価が高い。しかし、中国ではこのような観光形態においては、観光客が農家のサービスを利用しない傾向があるため、重視されておらず発展が遅れている。また、観光客による環境破壊などの課題を抱えている。農業観光は農・林・漁・牧業とそれに関連する施設を観光対象にし、観光農園、農家レストラン、農家民宿、体験などの豊富な形で展開している。これは農家（林、漁、牧業を含む）と直接結びついており、農村地域への経済効果が多く見られるため、中国の行政による支援政策が多く、現在中国の農村観光の主要な形でもある（張ほか 2013）。北京近郊に展開している農家レストランは北京市民を対象に、自家栽培の無農薬野菜を加工して素朴な田舎料理を提供している。観光客の要望に応じ、近くにある自家農地での収穫体験も行われる（張ほか 2011）。そこで、観光客から得られた収入はうまく利用し、生活の改善と事業の拡大にもつながっている。また、ほぼ中国各地には国営の農業施設があり、農業科学を普及したり、農民の

教育をしたりして重要な役割を担っている。

農村集落観光は農村の独特な構造、歴史建築とその文化、農村ならではの郷土料理などを観光対象とし、都市住民は農村で伝統的な農村集落とそこに蓄積した文化を楽しむ目的で農村を訪れる。貴州省にあるミャオ族村「郎徳上寨」は職人の独特な技と知恵を生かした木造の「吊脚楼」を中心とする伝統民家群と棚田などにより形成された美しい景観が観光客を引きつけている。郎徳上寨の最も古い建物は500年以上の歴史をもち、現在でも明、清時代の建物が多数保存されている。そして、村は山に囲まれ、北側には風雨橋という橋がかかっており、綺麗な川が流れる。村の小径には、玉石や青石が敷かれており、素朴な石畳を踏みしめながら、村を散策するとエスニックな雰囲気が満喫できる。また、野菜、豆腐、肉類などを入れて煮込んだ「酸湯料理」を賞味できる（任 2015）。

農村文化観光は民俗、伝統工芸、祭祀、農耕文化、農村の雰囲気などを観光対象にし、観光を行っている。中国は数千年の歴史があり、農村には多くの「農耕文化」が蓄積されている。少数民族が多数定住している雲南省は山地が多く、農作には不利である。しかし、雲南省は農耕文化の歴史が長く、それを代表するのはハニ族の人々が1,300年かけて築き上げた世界一の「紅河ハニ棚田」である。総面積約200km²で、最大標高約1,800m、最大勾配約75度の斜面にまで築かれている「紅河ハニ棚田」は雲南省哀牢山南部にあり、紅河州元陽県を中心に紅河県、緑春県、金平県の4県に及ぶ（史 2004）。これは、世界最大の棚田群であり、世界遺産に認定されたため、元陽県とその周囲の県を訪れる国内外の観光客は多数である。

この分類は観光資源により行ったが、同じ観光地に複数の観光資源があることを論述していない。観光客は複数の観光動機で観光することがあり得る。例えば、同じ村に民俗、農家レストラン、伝統的な建築などの複数の観光資源があるため、観光客がこれを求め訪れてくる。したがって、具体的に分類を行うことにあたって、数学モデルと影響因子などの分析方法を取り入れる必要がある。

また、観光資源により、「田園風景型、民俗風情型、特殊建築型、現代農業景観型、資源複合型」や「田園型、体験型、民俗型、古村落型、観光農場型」などの分類がある。

3.3 地理的位置による分類

盧ほか（2014）によると、農村観光地の地理空間構造が注目されており、研究者は農村観光の地理的位置による分類を行っている（表 1-4）。また、観光地の発展に影響を与える立地要因について、佐々木（1998）は表 3-3 にまとめた。

表 3-3 観光地の発展に影響を与える立地要因

類型	説明
資源立地型観光	天然資源に立地する美しい風景地は観光地になりやすい。 ただし、観光地へのアクセスも重要である。
文化立地型観光	神社、仏閣、古城巡り型観光で地理的位置が重要な因子となる。
市場立地型観光	大きな人口集団に近ければ成功が保証される。

佐々木（1998）により、筆者作成

資源（文化）、交通、市場などの立地要因と地理的位置による分類された農村観光の関係は表 3-4 で示す。

表 3-4 立地要因と地理的位置により分類された農村観光の関係

地理的位置	主な観光客	立地要因	さらに求める条件
都市近郊	近隣都市の住民	市場立地型観光	インフラの整備
観光地周辺	周辺観光地を訪れる観光客	資源立地型観光	インフラの整備 誘客戦略
辺遠地区	不特定	文化立地型観光	観光政策、インフラ設備

筆者作成

中国、日本において地理的位置により分類された農村観光は、市場（都市からの距離）と観光資源にかかわっていることが一致している。また、これ以外に中国では辺遠地区に「扶貧政策」により展開している農村観光がある。いうまでもなく、辺遠地区でも大都市や中核都市、観光地があるため、複数の要因による農村観光地が形成されたと考えられる。都市近郊に展開する農村観光の基礎は農業である。農業地域の現れ方の諸型式の一つである都市を中心として発達した農業地域（近郊農業の系列）を分析した青鹿（1935）は、都市を中心としてその周囲に発達する農業組織は、都市の経済的社会的事情と関連を有し、その都市への距離に制約されて、種々の型を示すものと論じた。また、橋本（1995）は、都市農業の分布地域は、通常その都市の二倍あるいは三倍の円弧内の地域内に該当すると述べた。従って、都市近郊における農村観光はこの範囲内で行うと推定できる。大都市との関わりにおいて展開する都市近郊地域については、山村（1995）が、都市が発展するにつれて観光農園が展開してきたと指摘した。表 1-5 は都市からの距離と農村観光の関係を示しており、都市から 100km 範囲内の農村観光地が多いと読み取れる。また、都市化が進んでいるため、都市から一定の距離を離れないと農村観光の魅力が感じられないとの指摘がある。従って、都市から 100km 以内の農村観光は都市近郊型農村観光としておこう。

既成観光地の周辺に位置し、観光客に宿泊、食事などのサービスを提供する観光形態がある。その中には、農村地域で発達してきた既成観光地延長線上に位置する農村観光がある。中国では、世界遺産 48 か所、AAAAA 風景区 186 か所をはじめ、多数の観光地がある。その周辺に展開している農村観光は既成観光地周辺型農村観光と定めている。

また、「扶貧政策」により、貧困地域の経済を発展させるため農村観光が導入された。このような調査対象となる農村観光は、明らかに都市や観光地による影響がない、あるいは少ない地域と限定したい。そこで、発展が遅れており、かつ少数民族地域でありながら辺遠地区に位置する貴州省郎徳上寨を「辺遠地域の事例」とした。実際は、都市近郊地域、辺遠地区にも観光地があり、それとの相乗効果により展開する農村観光が存在している。また、地域の資源を活用し、独自の経営方法や有力なリーダーにより展開する事例がある。本研究で研究対象にしたいのは、都市近郊、観光地周辺、辺遠地区における農村観光である。その他の地域における農村観光の展開は、今後の研究課題

とする。

3.4 その他の分類

上記の分類以外に、農村観光地に滞在する時間により、日帰り型と滞在型に分けられる。実際に行う農村観光活動の内容により、観光目的である観光型、農村観光地に滞在し、余暇時間を過ごす滞在型、多目的である総合型に分類される。

中国の農村観光発展の基本的な類型はさまざまな農村資源の総合的な利用に基づき、以下の五つの基本形態がある（劉 2013）。

農家楽：農家楽は最も広範囲なモードである。農家で食事をし、農家に泊まる、農家の人々と農作業をすることが農家楽のイメージである。最も有名なのは、2006年4月に成都市で初めて「中国農村旅游節」が開幕された。その開幕式の中で、国家旅游局は「中国農家楽旅游発源地」という名称を成都市に授与した。

高技術農業観光園：高度な技術、農業、観光を融合した新たな観光形態である。農産物の新鮮度が持続可能な発展を継続させていく。

農業新村：経済発展によって、現代化した農村は新村という。新村にある建築や現代文明などは農村観光の観光資源となる。

古村落：突出した文化価値、特に希少な非物質文化遺産を有する農村である。

農業の絶景と勝景：人類が自然を改善した成果である。例えば、桂林の龍勝梯田等があげられる。

以上は農村観光について、分類を行ったが、実際、農村観光は多原因で展開しているため、どの分類も厳密ではない。たとえば、地理的にみると、自発発展型は主に都市近郊、観光地周辺に集中している。それに対して、政府主導型は主に辺遠地区に集中している。それは、経済の発展、都市化の進展、少数民族の経済を促進させる政策などの原因が考えられる。また、都市近郊にある農村観光は日帰りが多く、利用される観光資源は観光農園、農家レストランが多い。それに対して、辺遠地区は村全体の雰囲気、建築、民俗などが観光客を引き付け、滞在するケースが多い。

4. 中国における農村観光の現状と課題

4.1 中国における農村観光の現状

中国における農村観光の発展は、政策上重視されている。その代表とする政策は、毎年作成される「1号文件」である。この文件では1982～1986年、2004～2015年の間に中国中央政府が国家の最重要課題と位置づけた「農業・農村・農民」問題に対して解決方針を定めている。2010年の文件には、農村観光の重要性を提起し、中国の農村問題の解決方法として積極的に発展させることと、農村観光の重要性が明記されている。また、より農村観光を促進させ、農村観光モデル地の設立に力を入れている。2004年、2005年に国家旅游局は農村観光の発展の経験を活用するため、全国で359の農村観光モデルを選定した。2010年に中国農業部と国家旅游局は「農業部国家旅游局関興開展全国休閒農業興鄉村旅游示範県和全国休閒農業示範点創建活動的意見（農業部と国家旅游局によ

る農村観光モデル県とモデル観光地の創建に関する意見)」を合同で作成し、2010年から3年かけて、100の農村観光モデル県と300のモデル農村観光地を創建すると発表した。

2015年現在、中国では農村観光モデル地の数は742箇所あり、図3-1はその分布を示している。地理的分布を見てみると、経済がいち早く発展した地域、東部の農村観光地が最も多い。例えば、山東省、江蘇省である。これらの地域における農村観光の発達には地域経済の発展と関係があると思われる。これを受けて、中国各地に農村観光が盛んに展開している。国家旅游局の推計によれば、農村観光が受け入れる観光客は年間観光客総人数の3分の1を占める3億人に達している。また、農村観光の収入は3,200億円を超えている（表3-5）。毎年、3回ある大型連休に旅行に出かける都市住民は、その約7割が農村観光に行っている。王（2008）は、大型連休ごとに約6,000万人もの都市住民が農村観光地に出かけている。国家観光局の局長は「大まかな統計によると、中国では、貧困地区の人口の10分の1が観光業の発展を通じて貧困を脱した」と語った¹⁰。そのため、2015年の中央政府における最重要課題を示した「1号文件」には、農村観光を積極的に発展させることと農村観光の重要性が明記されている。

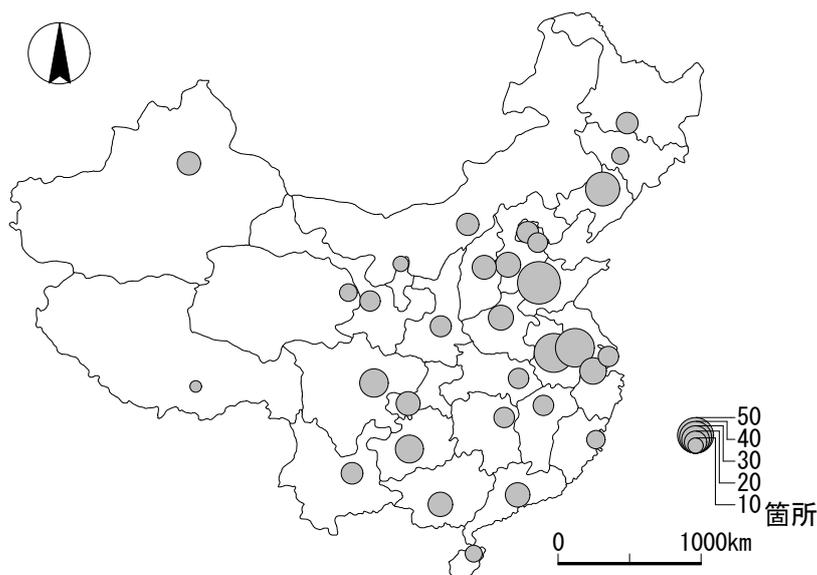


図3-1 中国各省・市における農村観光モデル地の数

国家旅游局のホームページにより、筆者作成

一方、中国の農村には、中国の約70%の観光資源が集まっている（王 2008）。美しい田園風景、豊かな郷土文化と独特な風情、多彩な民族的特色は、農村観光ならではの魅力である。中国各地では近年、独特で多様な観光資源を基に多彩な農村観光活動が展開されている。これらの観光活動は、農村観光市場を活性化し、観光商品を豊かにし、観光客の様々な需要を満たすことができる。農村の一部は観光事業を通じて後進性を脱却することができ、農民の生活も改善してきたと考えられる。このように、農村観光の展開は農村にいくつかの影響を与えている。例えば、農村部の産業構造の変化、農業生産の発展、農村住民生活の向上、持続可能な発展の促進などがあげられる。

表 3-5 農村観光に関する統計データの事例

資料	内容
関興加大改革創新力度加快農業現代化建設的若干意見	2014年、農村観光の観光客は延べ12億に達し、年間観光客総人数の3分の1である。観光収入は3,200億元になり、3,300万世帯の農家が豊かになった。全国には200万農家楽経営者がおり、10万以上の特色村がある。
江蘇省農村観光發展情況調查報告	この報告は江蘇省における初めての農村観光に関する調査報告である。2014年まで、江蘇省における農村観光の収入は500億元であり、農村観光と関わる農家の収入はそれと関わらない農家に比し、25%以上多い。
2013年成都市農村観光發展報告	2013年、成都市における農村観光に関する従業員は35万人であり、1人当たりの年収は4万元である。
湖南省旅游局統計	2013年までに、湖南省における農村観光の収入は190億元で、1.2億の観光客は農村観光地を訪問した。

「関興加大改革創新力度加快農業現代化建設的若干意見」、「江蘇省農村観光發展情況調查報告」、「2013年成都市農村観光發展報告」、「湖南省旅游局統計」により、筆者作成

農村は、農村観光の受け皿として主に都市からの観光客にサービスを提供する一方、豊かになった農民は観光に対する意識が徐々に変わり、観光への支出が増えつつある（図 3-2）。しかし、都市住民より、観光の支出はいまだ少ない。また、歴年のデータをみると、観光を行う農村住民は都市住民に比し、はるかに少ない。これは農村住民の旅行意識、経済力、消費意識とかがかわっていると考えられる。

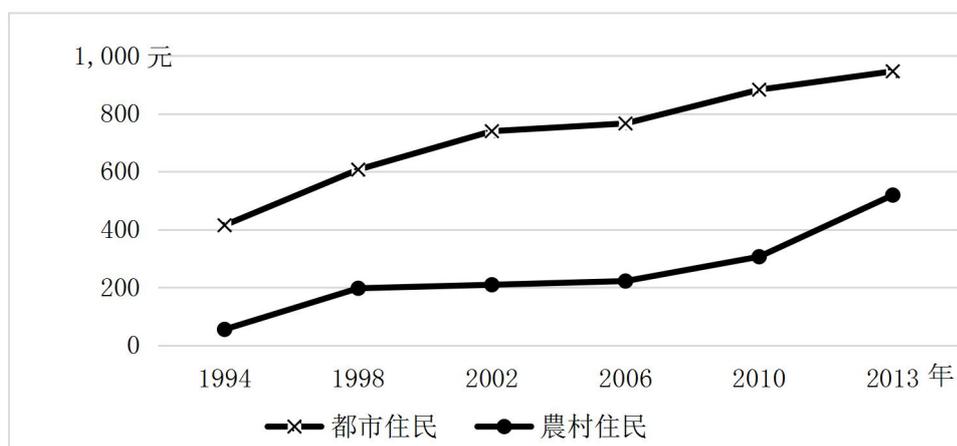


図3-2 中国における都市・農村住民1人当たりの観光支出額の推移 (1994～2013年)

2014年中国統計年鑑により、筆者作成

4.2 中国における農村観光の課題

このように、広範囲で展開している農村観光には直面する課題がある。王 (2008) は、「総合的な企画と調査が乏しい：十分な調査研究をせず、盲目的な開発、施設の重複建設、環境破壊などが行

われており、従来の観光との間で有機的な連携が乏しい、「インフラと環境の整備が立ち遅れている」、「観光商品の開発と販売促進が不十分である」、「行政管理の一元化がいまだに確立されていない」とまとめた。また、松村（2010）は、観光開発には地域住民の参入と行政の働きを分析し、イ族が行う政府主催の火把節と伝統的な火把節が並存することが重要であると論じた。これ以外にも、筆者の現地調査により、下記の課題があると考えられる。

4.2.1 農村観光の基盤である農業の衰退

農民は自家製の農産物を加工し、観光客に食事サービスを提供し、自宅を改造したり、新築したりして農家民宿を経営している。こうした伝統的な農業はサービス業を加え、「融合産業」とも言われ、農民の収入に寄与している。いち早く農村観光が発展できた地域では、農村観光からの収入は農業収入を大幅に超えている。また、観光客により良いサービスを提供するため、観光客収穫体験専用の農地を充実させ、それ以外の農地は放棄したり、他人に貸したりしており、専業農家から脱出した。特に、若い世代は都市に移住し、農村観光を経営するため農村に通っている。このような結果、農業が衰退するだけでなく、観光客は本来の農耕文化を体験できなくなり、当該地域の農村観光の衰退につながっていくだろう。

4.2.2 都市化の進展と農村観光の変容

経済の発展と都市化の進展は農村観光の発展を促進する一方、都市の拡大は大量の土地を利用し、新たな住宅団地、ショッピングセンターなどの建設は郊外化しつつある。都市近郊で展開している農村観光は観光用地が買収される可能性がある。また、都市の拡大により、村の一部ないし全部が都市の市街地に囲まれ「城中村」が形成され、農村観光が成り立つ条件が失われる懸念がある。さらに、中国では、長年の経験と村民の心血が凝縮されている農村観光地が、多数都市近郊に位置している。そのため、政府による総合的な都市企画が重要である。

4.2.3 少数民族地域における不適切な政策指導

貧困地域の経済を発展させるために、農村観光が導入された。それを受けて、多くの農村観光地が設置されており、一時的に観光客が頻繁に訪れるようになった。その後、経営・管理方法、情報発信がうまく行われず、一部の農村観光地は閉鎖あるいは経営困難状態となった。したがって、農村観光の発展状況を分析し、それに対する政策、指導を行うことが期待されている。特に、少数民族地域では、独特な地域文化と観光資源を利用し、適切な政治的指導が期待される。

5. 小括

本章は、農村観光の定義、分類、中国における農村観光の現状と課題、三農問題と農村観光について論述した。研究者によって、使用する用語（農村観光に関連する用語）や農村観光の定義が異なっている。本研究は、「農村観光」を使用し、「農村部の本来の地理空間で地域住民が主体となっ

て、農村地域の風土、自然環境、農業、景観、文化、民俗などの地域資源を活用し、主に都市部の観光客にサービスを提供し、地域経済の活性化と産業構造の転換を目指す観光形態である」と定義した。この定義は、農村本来の「農村性」、「村民が積極的に参加する」、「農村の経済を発展させ、農村の産業構造の転換」の3つを重視している。そして、行政との関係、観光資源、地理的位置、その他に分け、農村観光の分類を考察した。地理的位置による分類された「都市近郊型、既成観光地周辺型、辺遠地区型」農村観光は本論文の考察対象となる。表1-5は都市からの距離と農村観光の関係を示しており、都市から100km圏内の農村観光地が多いと読み取れる。また、都市化が進んでいるため、都市から一定の距離を離れないと農村観光の魅力が感じられないとの指摘がある。したがって、都市特に大都市から100km以内の農村観光は都市近郊型農村観光としておこう。

観光地の周辺農村に位置し、観光客に宿泊、食事などのサービスを提供し、農村地域で発達してきた農村観光がある。中国では、世界遺産48か所、AAAAA風景区186か所をはじめ、多数の観光地がある。その周辺に展開している農村観光は既成観光地周辺型農村観光と定めている。

また、「扶貧政策」により、貧困地域の経済を発展させるため農村観光が導入された。このような調査対象となる農村観光は明らかに都市、観光地による影響がない、あるいは少ない地域と限定したい。そこで、発展が遅れており、かつ少数民族地域でありながら辺遠地区に位置する貴州省郎徳上寨を「辺遠地域の事例」とした。しかし、農村観光は多要因により展開しているため、どの分類も厳密ではないと考えられる。都市近郊地域、辺遠地区にも観光地があり、それとの相乗効果により展開する農村観光が存在している。また、地域の資源を活用し、独自の経営方法と有力なリーダーにより展開する事例がある。本研究で研究対象にしたいのは、都市近郊、観光地周辺、辺遠地区における農村観光であり、その他の地域における農村観光の展開は、課題とする。

近年、中国各地で農村観光が盛んに展開しており、農村の一部は観光事業を通じて後進性を脱却し、農民の生活も改善できる一方、農村観光の展開は農村にいくつかの影響を与えた。例えば、農村部の産業構造の変化、農業生産の発展、農村住民生活の向上、持続可能な発展の促進などがあげられる。しかし、中国における農村観光の課題が多く存在している。従来の研究に指摘された環境破壊、総合的な企画と調査が乏しいことなど以外に、本章では農村観光の基盤である農業の衰退、都市化の進展と農村観光の変容、少数民族地域における不適切な政策指導の面から、農村観光の課題を論じた。

注：

¹ 中国語のもとの用語は「郷村旅游」であったが、本研究では、日本語として使用されている用語「観光」とし、「郷村観光」を用いた。

² 中国国家旅遊局：概念、類型、誤区、問題と対策

<http://www.cnta.gov.cn/html/2008-6/2008-6-2-21-16-49-29.html> 2015年6月閲覧

³ 農林水産省：「グリーン・ツーリズム」とは

http://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/kyose_tairyu/k_gt/ 2015年9月閲覧

-
- ⁴ 農林水産省：農業・農村の多面的機能
http://www.maff.go.jp/j/nousin/noukan/nougyo_kinou/ 2016年2月閲覧
- ⁵ 中国青年報：農業部長評説農村真苦、農民真窮、農業真危
<http://news.sina.com.cn/c/2003-03-11/0607941447.shtml> 2015年2月閲覧
- ⁶ 第一次産業、第二次産業、第三次産業を融合した産業である。2016年1月4日に発表された「国務院辦公庁関与推進農村一二三産業融合發展的指導意見」は、農村地域では第一次産業、第二次産業、第三次産業を融合した産業を推進し、農村観光は「融合した産業」として推進させていくべきであると明記している。
中華人民共和国中央人民政府：国務院辦公庁関与推進農村一二三産業融合發展的指導意見
http://www.gov.cn/zhengce/content/2016-01/04/content_10549.htm 2016年2月閲覧
- ⁷ 当時の国務院副総理である。
- ⁸ 社会主義新農村の建設という意味である。2005年10月の中国共産党第16期中央委員会第5回全体会議で打ち出された政治目標である。都市と農村の格差是正に向けて、インフラ整備の重点を農村に移し、都市の公共サービスを農村まで拡大する。また、農民の負担軽減や義務教育の普及、環境整備などにも資金を積極的に投入する。
- ⁹ 貧しい国民を助ける政策である。中国においては、特に少数民族が集中している地域、西部にある省では貧乏な農村部を發展させる政策である。
- ¹⁰ 人民網：観光業、貧困地区1割の貧困脱却に寄与
<http://j.people.com.cn/94476/6726071.html> 2015年3月閲覧

第4章 都市近郊型農村観光の展開

—山東省青島市嶗山区西麦窯社区を事例として—

1. はじめに

1980年代から、中国では経済が発展し始め都市化が進み、膨大な都市住民の消費行動が注目されている。特に近年、余暇時間の増加と生活水準の向上にともない、観光は急速に発展している。とりわけ、都市住民が休日に、家族または友人と田舎に出かけ、農村の景色、農家料理、農業体験などを楽しむ休日の過ごし方が次第に人気となっている。そして、近年、食の安全、有機食材、「減炭生活¹」の提唱をきっかけに、農村観光の発展は著しくなってきた。つまり、経済発展、都市化の進展、消費行動の変化などは農村観光の発展に有利な社会条件を提供し、観光地、交通手段、宿泊施設などの観光にかかわる諸要因を変化させている。これは日本で、1960年代前後から高度経済成長にともない、観光農園が変化したことと同様である。そのため、都市近郊の農村では都市住民のニーズに答えるためのいち早い農村観光の発展が見られ、従来の農産物の生産を担う農村は新たにさまざまな役割を担うようになった。たとえば、山村ほか（1982）は都市近郊に位置する観光農園は都市の発展により、発展してきたと述べた。

中国では、農村はもともとインフラ整備が不十分であり、特に都市から離れている農村は道路や上下水道などが十分に整備されていない。また、自家用車で行ける場所、時間、費用の関係で、都市住民は週末に都市周辺に位置している農村観光地で娯楽を行うケースが最も多い（張 2010）。したがって、都市と農村が隣接している地域、また、大都市周辺の農村における農村観光が最も盛んである（2009年緑維創景企画設計院²報告書）。

藤目ほか（2004）は、観光農園は第一次産業となる農業に第三次産業的な要素を付加した点で注目すべき展開であるが、その地理学的な研究はほかの農業地理学的研究に比較して極めて少ないと述べている。日本においては、田辺（1988）が兵庫県の観光農園の分布、開園年度、また利用作物を概観した後、発展過程、現状、問題点などを春日町の事例を取り上げ明らかにした。続いて、河原（1996）、小池（2002）はそれぞれ観光農園の地域特性、抱える問題、観光農園の成立過程と地域特性を明らかにした。また、都市近郊という立地条件の視点から観光果樹園の経営について分析した研究が多い（全 2013）。そして、溝尾（1994）は観光農園が設立できる条件として①大都市圏あるいは中核都市からの日帰り圏、②宿泊観光地の近接地、③観光ルート上であることなどをあげ、観光農園の立地条件を提示した。

中国においては、盧ほか（1995）と郭ほか（2006;2010）の研究があげられる。盧は国内外の農村観光に関する研究を整理し、農村観光の成立条件を論じた。郭ほかは北京市の事例を取り上げ、農村観光に対する補助政策と農村観光の関係、農村観光の発展について論述した。また、藤目ほか（2004）は、北京市の観光農園の展開と空間的分布を明らかにし、成立条件を論述した。しかし、彼らは展開について、数の変化と、地域別にある観光農園を地図化した。展開過程と近年中国における都市化の進展による原因などは考慮に入れなかった。そして、北京市における農村観光を研

究した常 (2011) は、中国の大都市である北京市郊外の「民俗村」の立地条件、分布を明らかにし、特徴を分析した。しかし、盧ほか(2014)は、外国と中国の20年間の農村観光についての研究をまとめ、中国の研究は「実際の調査、データ分析に基づいた分析」が少ないと指摘した。また、都市近郊に展開してきた農村観光に注目する研究は多いが、その展開過程と特徴についての研究はあまり行われていない。また、農村観光と都市部のかかわり、つまり、都市部の拡大と農村観光の関係、展開過程にはあまり触れられていない。そして、中国の農村観光に関する研究は、社会学的な視点から少数民族地域の農村観光を取り上げたものが多く、沿岸部や都市近郊など少数民族地域以外における農村観光の事例が少ない (高田 2014)。

そこで本章においては、現地調査により、中国の都市近郊における農村観光の展開とその影響を明らかにすることを目的とする。研究対象地とする「青島市嶗山区西麦窯社区」は、2004年に「中国農村観光モデル地」に指定され、青島市中心部からバスで30分程度の距離にある近郊農村である。

そのため、2011年8~9月、2013年7月、2015年7月に聞き取りを中心とする調査を実施した。まず、筆者はこの村を管理する沙子口街道を訪ね、聞き取りと資料収集を行い、西麦窯社区に関する農村観光政策、農村観光の全体的な状況を調査した。次に、西麦窯社区の観光資源、観光施設、村民委員会の役割および村の農村観光の全体的な状況を把握するため、村民委員会への聞き取り調査を実施した。最後に、農村観光の経営者に対して、農村観光のきっかけ、現状、発展過程、収入、経営内容および観光客などについて調査した。また、現地観察や農村観光に関する案内物の収集、農家民宿の体験なども行った。農村観光の展開による地域への影響に関しては、アンケート調査と聞き取り調査を実施したが、その結果は第4節で論述する。

2. 青島市における農村観光の展開

2.1 青島市の概要

青島市政府ホームページにより、青島市の概要は下記のようにまとめられる。青島市は山東省に属し、中国の山東半島の南部にある。中国沿海地域の重要な経済中心であり、港湾都市として発展している。国内では有名な観光地であり、ヨーロッパ風の町並みから「東のスイス」とも呼ばれている。面積は11,282km²であり、常住人口は904.62万人である(2014年現在)。温帯季節風気候であるため、年間平均気温は12.7℃で、国内では年間を通じて比較的過ごしやすい地域である。図4-1のように、青島市は5つの市と7つの区を直轄している⁴。

青島市はその地域の大部分が山地であり、東は海に面している。風景が美しく、1998年に中国初の「優秀観光都市」に選ばれた。湾と岬、島が互いに映える海辺の景色、道教の聖地である嶗山、赤い屋根瓦と緑の木、紺碧の海に臨む都市の風景、典型的なヨーロッパ風情をもつ多国の建築、近現代史を濃縮したような文化名士たちの旧居、レジャー施設、会議所、展示施設などの観光資源があり、中国有数の観光地として知られている。そのため国内外からの観光客が多く、ビジネスに関連した会議や展示も数多く行われている。

2.2 青島市における農村観光資源

青島市の農村観光資源は豊富である（表 4-1）。各市、区では茶、花、果実、野菜などの資源により、農業体験、農家レストラン、農家民宿などの農村観光を発展させてきた⁵⁾。その中には、「嶗山茶苑」の「茶」、「枯桃花卉」、「城陽ボタン園」の「花」、「大澤山ブドウ祭り」、「北宅サクランボ祭り」の「果物」、「会場漁村」、「紅島」の「漁業体験」、「青島野菜科学技術園」の「野菜」、「西麦窯社区」の「農家民宿」などがある。これらの農村観光資源により、形成される農村観光商品は多数あり、都市住民を対象とした農村観光を展開している。

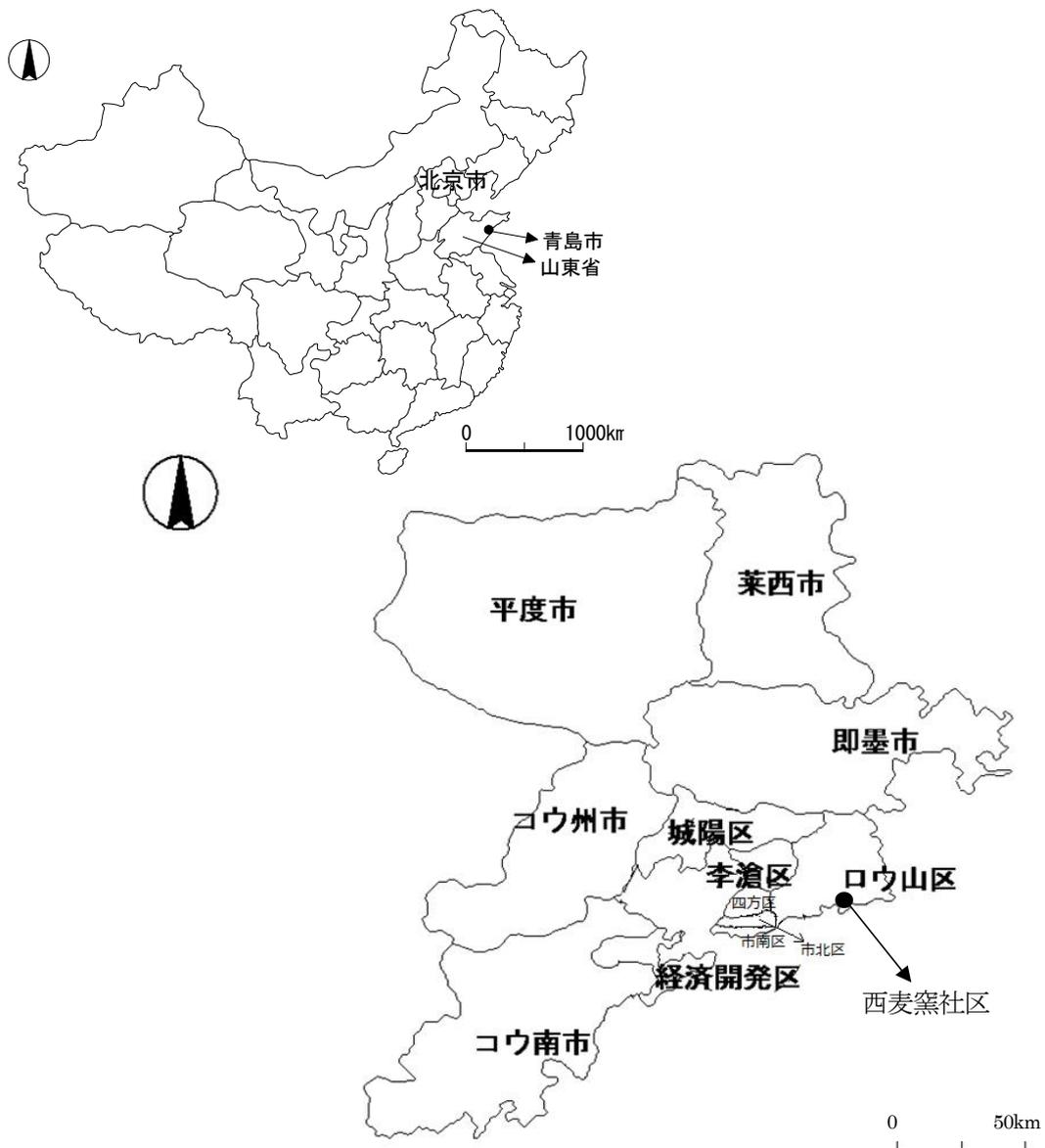


図 4-1 青島市の位置と行政区分

筆者作成

コウ州市、コウ南市、ロウ山区は「MANDARA」での漢字表示ができないため、膠州市、膠南市、嶗山区とそれぞれ表記している。なお、調査時点の行政区名である。

また、「石老人観光園」、「野菜科学技術モデル園」、「百果山レジャー保養区」などの農村観光施設が次々と建設された。農村観光モデル地は33箇所へのぼり、そのなかでも国家クラスのものがある。農村観光は、観光業の中で最も力を入れられた特色のある産業になった。農村観光産業地帯は「仰口、北宅、沙子口」⁶と周囲の県の四つの観光地を中心として形成されており、嶗山区の農村観光の発展と投資の新たな基盤となってきた。また、青島料理は、伝統的な山東省の料理であるが、沿岸部でとれた豊富な魚介類を取り入れ、独自に発展したとされている。アサリ、シャコ、ワタリガニ、ナマコなどが代表的な海鮮食材で、海魚を多く用いる青島料理には山東省料理の特徴である唐辛子、香辛料を使ったものや、酒蒸しや塩だけで味付けしたスープなど、素材の旨味を活かした調理法がある。現在、「北宅の農家宴」、「沙子口の漁家宴」、「王哥庄の海鮮」などの嶗山特有の料理が次第に地域特有のものとして認知されてきた。「山海人家⁷」のような農家民宿が増加しつつあり、多くのユースホステルやホテルも建設が始まった。その結果、観光客の収容力⁸が全面的に高まってきた。

表 4-1 青島市各市、区における農村観光資源

各市、区	農村観光資源
平度市	山、観光農園
萊西市	野菜、茶、花、果実
即墨市	温泉、漁業、島
膠州市	森林、山菜、自然
膠南市	茶、花、山
嶗山区	花、茶、山菜、果実
城陽区	農園、漁業、農業、果実
経済技術開発区	漁業、自然

青島市政府報告（2000～2012年）により、筆者作成

2.3 青島市における農村観光の展開

青島市における農村観光モデル地について、筆者はその設立時期によって、1990年以前に設立したもの、1991～1999年に設立したもの、2000～2005年に設立したもの、2006～2012年に設立したものの4つに分けた。区分した基準は中国国家旅游局による観光プロモーションである（表2-6）。それぞれの時期には中国の農村観光の政策が、農村観光の発展に大きな影響を与えると予想したことによる。1992年から、国家旅游局は毎年観光プロモーションを作成し、その年の観光政策と観光発展の重点を規定する。それに対し、各地域も国家旅游局の政策に基づき、観光政策の作成や実施、公的な支援を積極的に行っている。そのため、その年度における細分化された観光の発展は促進され、大きな成果を上げることができると考えられる。1992～2012年には、農村観光に関するプロモーションも見られ、それぞれは、1999年「中国生態環境遊」、2004年「中国百姓生活遊」、2005年「中国紅色旅游年」、2006年「中国郷村遊」、2007年「中国和諧城郷遊」である。これらの年には、

国家旅游局の政策に基づき、各省および市からも農村観光に関する政策や支援が多く見られ、農村観光の発展に有利な条件を提供していたと考えられる。本章では、これらの政策の働きかけに着目し、まず、青島市における農村観光の展開は1999年以前、2000～2005年、2006～2012年に分けた。また、「青島市嶗山区旅游発展十一五計画」によると、1991～1999年には青島市における農村観光に関する政策はないが、農村での観光を発展させる政策はいくつか通達され、農村観光の展開を促進する効果があったと考えられる。一方、それ以前の1990年までは、農村観光に関する政策がなく、各地域における農村観光が自発的に発展してきた。そのため、1999年以前は1990年以前、1991～1999年に分けた。

それらの結果を整理し、青島市における農村観光の展開を考察する。展開については、段階にわけて、地図で展開過程を示し、それを政策、立地条件、取り組みなどの要因とあわせて、分析する。

表4-2～4-5はそれぞれの時期において、新規に設立された農村観光モデル地⁹を整理した表である。

1990年以前は、「無農薬」、「緑色¹⁰」の食事を提供する農家レストラン、農業（漁業）体験、農村民俗体験などの農村観光が見られた（表 4-2）。また、聞き取り調査によると、表 4-2 の三つの施設は当時、「農村観光」という用語を使用しないまま、観光客に新鮮な野菜、果実、郷土料理を提供し、利益を求めるといった目的で始められたという。一方、観光客は市街地¹¹から、新鮮な手作りの田舎料理を求めるといった目的で訪れてきており、農村観光の自発的発展期であった。

表 4-2 1990 年以前に設立された青島市における農村観光モデル地

モデル地	地域レベル	位置	経営者	内容	分類
萊西湖生態休憩区	市級	萊西市	市営	漁業体験、森林浴、 農家レストラン	総合
平度大澤山葡萄 示範園	市級	平度市	個人→ 市管理	葡萄狩り、農村民俗体験、 農家レストラン、その他	総合
五龍埠葡萄觀光園	不明	平度市	個人→ 市管理	葡萄狩り	体験

モデル地：青島市に登録された農村観光モデル地である。

地域レベル：前述したように、中国国家旅游局は農村観光地を選別し、359箇所農村観光地を国家モデル農村観光地に定めた。青島市にある国家モデル農村観光地は、「国家級」と記入した。その後、山東省と青島市も農村観光地を選別し、選別基準に従って、登録された農村観光地を「省級」、「市級」に分けた。ただし、「不明」または「未定」と記入した農村観光地もあった。

位置：農村観光モデル地の場所である。

経営者：農村観光の経営者を指す。ただし、設立当時と調査の時点で異なった場合、矢印で変更を表す。市営は青島市が経営することを指す。市管理は青島市が管理権を有するが、経営しない場合もある。個人は個別の農家やその他の個人が経営することを指す。

内容：該当の農村観光地で行われる農村観光の内容を指す。

分類：該当の農村観光地で行われる農村観光の内容で分類した。「総合」は、施設内で様々な農村観光を行う農村観光地を指す。「体験」は、体験のみを実施する農村観光地を指す。例えば、果実狩りのような農業体験、ほかの体験もある。「総合」と「体験」以外に行われる農村観光の内容のみを記入している。

「青島市嶗山区旅游發展十一五計画」、「青島市政府報告 2000～2012 年」、「青島市嶗山区政府白皮書 2000～2012 年」により、筆者作成

1991～1999年に設立された農村観光地は表4-3のようになっている。「青島市嶗山区旅游發展十一五計画」、「青島市政府報告2000～2012年」、「青島市嶗山区政府白皮書2000～2012年」によると、この時期は国、省、市の観光に関する政策が多く制定され、公的な観光施設を建設すると明記していた。これをきっかけに、農村地域でも公的な観光施設が多く見られた。また、村ぐるみで経営する農村観光が出現した。例えば、表4-3にある「石老人観光園」は「石老人村」の村民により合同経営されている。そして、膠南市と嶗山区における農村観光が発展した時期であり、両地域で行われている農村観光の内容も多彩になってきた。

表4-3 1991～1999年に設立された青島市における農村観光モデル地

モデル地	地域レベル	位置	経営者	内容	分類
海青緑洲茶葉精品園	国家級	膠南市	個人	茶摘み体験、 茶菓子づくり体験	体験
石老人観光園	国家級	嶗山区	集団	農業体験、宿泊、 農家レストラン	総合
即墨野菜科技示範園	国家級	即墨市	市営	オーナー制、農業体験、 直販所、農家レストラン	総合
膠南大珠山風景区	国家級	膠南市	国営	ツツジ祭り、栗狩り、 農家レストラン、農業体験	体験、農家レストラン
李滄区十梅庵	市級	李滄区	市営	梅まつり、農業体験	体験
城陽区惜福鎮街道 棉花景区	市級	城陽区	個人→ 市管理	農業体験、 農家レストラン	体験、農家レストラン
枯桃花卉中心	市級	嶗山区	集団	農業体験、 農家レストラン	体験、農家レストラン
北頭神清農興園	市級	嶗山区	集団	サクランボ狩り、宿泊、 農家レストラン	総合
小珠山旅游度假區	市級	膠南市	国営	農家レストラン、 宿泊、農業体験	総合
嶗山百雀林観光園	市級	嶗山区	個人	茶摘み体験、果実狩り、 オーナー制	総合

集団は中国語で「集体」と言い、生産・経済組織、グループを指す。集団による投資・経営する施設などは公的な施設として扱われている。

国営：中国政府が主体となって経営する。

宿泊：ある農村観光の施設に宿泊する意味である。例えば、表4-3にある「石老人観光園」にある宿泊施設に泊まる。

民宿：村民の家に泊まる意味である。

注、資料：表4-2に同じ

2000～2005年には、農村観光地の数は前より増加し、規模も大きくなってきた（青島市政府報告2000～2012年）。また、図4-2を見ると、この時期にできた農村観光地は青島市の中心部（市役所）から75km範囲内のものが多く、都市近郊に集中していると言える。

表4-4 2000～2005年に設立された青島市における農村観光モデル地

モデル地	地域レベル	位置	経営者	内容	分類
嶗山茶苑生態旅游区	国家級	嶗山区	個人→集団	茶摘み体験、宿泊、農家レストラン、	総合
紅島西大洋休暇漁村	国家級	城陽区	集団	漁業体験、宿泊、農家レストラン	総合
北宅街道生態旅游区	国家級	嶗山区	個人→集団	サクランボ狩り、祭り、農家レストラン、宿泊	総合
隆海集団農業生態観光園	国家級	膠南市	個人	農業体験、農家レストラン	体験、農家レストラン
膠河風景名勝区	市級	膠州市	国営	農業体験	体験
百果山田園風景区	市級	李滄区	個人→集団	果実狩り、動物と触れ合い・世話体験	体験
韓家民俗村	市級	城陽区	集団	民宿、体験	民宿、体験
城陽植物園	市級	城陽区	国営	農業体験	体験
山色峪景区	市級	城陽区	個人	農業体験、サクランボ狩り、民宿、農家レストラン	総合
臥龍山村生態旅游園	市級	膠南市	個人	民俗体験、漁業体験、果実狩り・野菜収穫体験	総合
膠南九上溝生態区	市級	膠南市	集団	民俗体験、農家レストラン、森林浴、民宿	総合
萊西堤湾水庫農業生態観光園	市級	萊西市	個人→集団	銀杏木の鑑賞、散策、農業体験	総合
金魚湾農業観光園	市級	嶗山区	個人	農業体験、農家レストラン	体験、農家レストラン
山海人家	国家級	嶗山区	個人	民宿、農家レストラン	民宿、農家レストラン
即墨鶴山	不明	即墨市	個人→集団	農業体験、農家レストラン	体験、農家レストラン

注、資料：表4-2、4-3に同じ

2006～2012年には、経済開発区から市南区を連結する海底トンネルの掘削が始まり、経済技術開発区における農村観光を発展させることができた（図 4-2）。例えば、表 4-5 にある「甘水湾休閒漁業民俗村」は経済開発区に位置し、海底トンネルの入り口の近くにある。そのため、多くの青島市中心部からの観光客が、この村を訪問に来るとのことである。また、北宅街道での聞き取り調査によると、都市近郊に位置する嶗山区は、サクランボの産地でもある。農村観光を発展させる政策の下で、多くのサクランボ園は2006年から果実狩りを始め、一部の農家の収入源は従来の果実出荷から観光農園の経営に変遷している。数多くの都市住民の来訪につれ、サクランボ園が増加し、都市化の進展による影響が著しく見られる時期である。

表 4-5 2006～2012年に設立された青島市における農村観光モデル地

モデル地	地域レベル	位置	経営者	内容	分類
甘水湾休閒漁業民俗村	省級	黄島区	集団	漁家体験、民俗体験、 漁家レストラン	総合
馬家溝芹菜示範園	市級	平度市	集団	農業体験、果実狩り、 オーナー制	総合
嶗山サクランボ園	未定	嶗山区	個人	農業体験、果実狩り、 オーナー制	総合
百年サクランボ園	未定	嶗山区	個人	農業体験、果実狩り、 オーナー制	総合
大嶗サクランボ園	未定	嶗山区	個人	農業体験、果実狩り、 オーナー制	総合

注、資料：表 4-2、4-3 に同じ

か 2004)。その理由としては、以下のようなことが考えられる。当時、中国の改革開放は始まったばかりで、一般の世帯の食生活には果実がまだ普及していない状態であった。観光農園では、料金を払うと、園内では食べ放題であり、ある程度の果実は持ち帰りもできるため、観光農園のブームとなった。一方、観光農園経営者は果実の出荷により、生計を立てていたが、保有する果樹園を整備し、観光客の受け入れを容易に始めた。経営がうまくいかない場合は、果実の生産のみに戻ることができ、コストはあまりかからないため、いち早く全国に広がっていった。

その後、農村観光の形は多様になり、全市に展開していった。農村観光の形をみると、観光農園をはじめ、農家レストラン、農家民宿、オーナー制などの多くの形がある。青島市各市区においては、具体的な農村観光地の数は表 4-6 のようになっている。前述したように、青島市だけではなく、ほかの多数の都市も観光農園から始まり、その後、多様な農村観光の展開が行われている。

表 4-6 青島市各市、区における農村観光モデル地の数

市、区名	数	分布率 単位：%
嶗山区	12	30.00
膠南市	7	17.50
城陽区	5	12.50
平度市	5	12.50
萊西市	4	10.00
即墨市	4	10.00
李滄区	2	5.00
膠州市	1	2.50
青島市	40	100.00

表 4-2～4-5 により、筆者作成

青島市における農村観光モデル地は地域ごとにある程度集中しており、均等分布ではない。青島市の各市区にある農村観光地は表 4-6 のようになっている。表 4-6 からわかるように、青島市の農村観光地は嶗山区と膠南市のような都市近郊に集中しており、2 箇所で約 50%の農村観光地を占めている。

また、図 4-3 は農村観光モデル地の分布を示したものである。図 4-3 からみると、青島市の農村観光地はある程度集中していることがわかる。その原因としては、都市化の進展により、都市近郊の農村におけるインフラが整備されることや都市からの交通の利便性などが考えられる。例えば、表 4-5 にある「甘水湾休閒漁業民俗村」は経済開発区に位置し、海底トンネルの入り口の近くにある。そのため、青島市中心部からの多くの観光客は、この村を訪問に来るとのことである。また、農村観光を発展させる政策の下で、嶗山区のサクランボ園は 2006 年から果実狩りを始め、数多くの都市住民の来訪につれ、サクランボ園が増加し、都市化の進展による影響が著しく見られた。

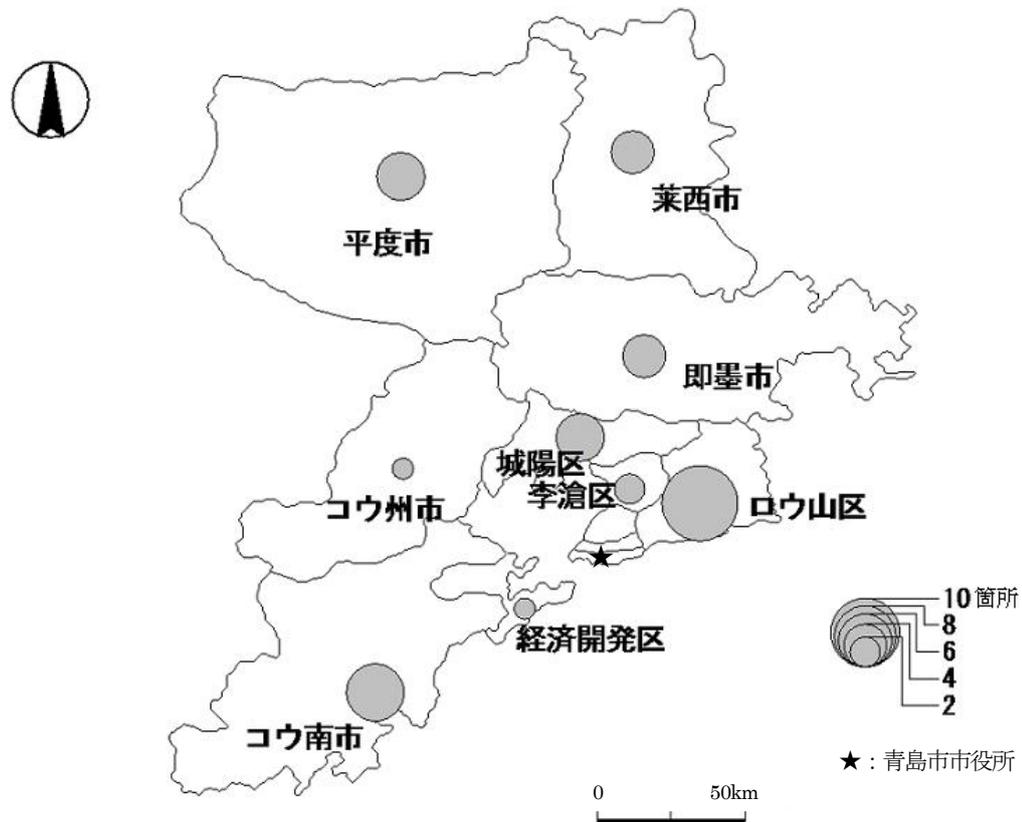


図 4-3 青島市各市区における農村観光モデル地の数

表 4-2~4-5 により、筆者作成

農村観光地の分布と市の中心部からの距離には比例関係が存在していないことが明らかになった。まず、地域別の農村観光地をみると、市街地には農村観光地がなく、李滄区のわずかな農村観光地以外は、ほぼ市街地以外の場所に位置している。図 4-3 で示したように、青島市の市役所を中心とした都心からの距離と農村観光モデル地との間には反比例的な関係は見られない。交通利便性の視点から予測される農村観光地の数と距離との反比例関係は見られないので、距離だけではなく、それ以外の要因が影響していると考えられる。また、橋やトンネルの建設により、都市住民は経済開発区を訪れるようになり、この地域に新たに農村観光地が生まれた。

また、地域別に農村観光地の数を考察すると、表 4-6 と図 4-3 からわかるように、青島市の農村観光地は嶗山区と膠南市に集中している。交通と都市化の進展の原因以外には、地域の農村観光資源、観光地との連携・相乗効果などが考えられる。

さらに、市の中心部から遠ければ遠いほど、観光地の規模が大きくなる傾向がある。農村観光地の面積が広いため、市の中心から離れている地域は農村観光地の規模や観光客の収容力が増大する傾向がある。萊西市は農村観光地の密度こそ低いが、極めて大規模な観光農園が政府の補助によって設立されていた。それに対して、地価が高い嶗山区は、農村観光地の規模はそれほど大きくない。

3. 西麦寨社区における農村観光の展開

3.1 西麦寨社区の概要

西麦寨社区は「青島市嶗山区沙子口街道」に属し、嶗山遊覧の南コース¹²の入口にあたる。青島市中心部からバスで30分程度の距離にある近郊農村で、村の面積は2.28km²であり、その中の約8割が山地である。村民委員会への聞き取り調査によると、全村は208世帯、546人である（2015年現在）。この村はもともと漁村であり、昔から漁業、農業で生活を営んでいたが、その後、村の背後にある山で、採石、石の加工などを行ってきた。1980年以降、嶗山風景区を保存するため、山の破壊が禁止され、市内で仕事に従事する村民が多くなってきた。西麦寨社区は山（嶗山）、海（黄海）に囲まれており、石や紅レンガの壁と、瓦屋根で造られた風情ある民家、また海沿いの美しい景観があり、農村観光を發展させて以来、誘客のために「山海人家」と名付けて、「山と海に囲まれて、自然が豊かなこと」を示し、宣伝してきた（写真4-1、4-2）。その後、西麦寨社区は中国の農村観光のモデル村となり、「山海人家」は農村観光のブランドとなった。これは単なる一つの農家民宿の名称ではなく、全村の農家民宿には「山海人家」という名前が付けられている。それぞれの民宿を区別するため、村民委員会が決定した番号がそれぞれの農家の看板に記してある。



写真 4-1 西麦寨社区の入り口

筆者撮影



写真 4-2 西麦寨社区の景観

西麦寨社区村民委員会による

3.2 西麦寨社区における農村観光の展開

中国では、1980年から経済成長が始まり、1990年代に入り経済発展とともに、人々の余暇生活は豊かになった（朱2008）。また、都市の人々が休日に家族または友達同士で田舎に出かけ、農村の景色、農家の料理、農業体験などを楽しむ農村観光が休日の過ごし方として次第に人気となってきた。そして、嶗山は中国の有名な山として、多くの観光客が訪れている。都市の観光客に郷土料理を提供するために、1990年から、西麦寨社区では村民が農家レストランを開業するようになった。しかし、当時の農家レストランは青島市内の人々にサービスを提供するだけでなく、嶗山を訪れた観光客をターゲットにし、農家レストランを開いていた。当時の農家レストランは、特別なメニュー

一を作らず、農家の自家生産の野菜、豚肉、鶏肉、とれたての魚、貝、「緑色鶏蛋¹³」を原材料とした安価な食事を観光客に提供していた¹⁴。そして、観光客は村周囲の山、海などの景色を満喫していた。図4-4は1999年に西麦窯社区における農家レストランの分布である。

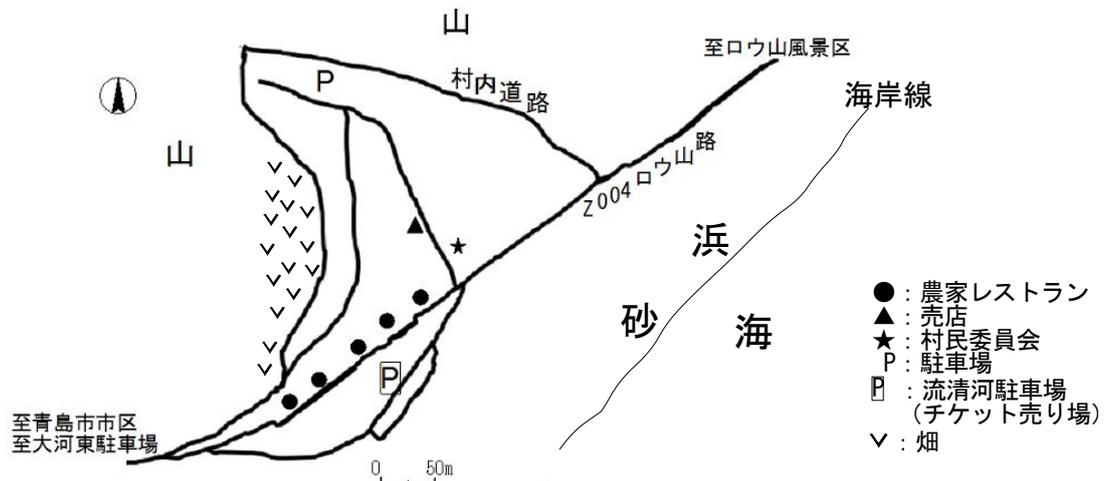


図4-4 西麦窯社区における農家レストランの分布（1999年）

現地調査により、筆者作成

聞き取り調査によると、西麦窯社区では、農家レストランから農家民宿に展開する以下のような事例があった。当時、農家レストランを運営していたA氏によると、農家レストランの経営は、収益にはあまりならなかったが、普通の農家より忙しくなり、いろいろな人々と知り合いになって楽しかったという。当時、A氏が運営していた農家レストランは営業証明書もなく、消毒の器具や、客専用の厨房もなかった。それに対して、B氏が運営していたレストランはA氏と違うパターンであった。B氏はもともとレストランを運営しており、周囲の村民にサービスを提供していた。観光客が多くなると、ビジネスセンスを持つB氏は旧レストランを改造し、新しい農家レストランを開業した。営業証明書や消毒機械などもあった¹⁵。しかし、当時、農家民宿は行われていなかった。

その後、中国の国内観光はブームになり、多様な観光が盛んになった。都市部の人々が農家で余暇を過ごすという目的で展開している農村観光はその一つである。一方、農家は収入を増加させるため、農家レストランのみならず、農家民宿を開業し始めた。当時、A氏のレストランで飲食した観光客から宿泊の願望があったため、A氏は同村のC氏に依頼し、C氏宅に観光客を宿泊させてもらった。これをきっかけに2000年、C氏は農家民宿を開業した。このように、村民の自発的な動き及び経済発展により、西麦窯社区における農村観光は徐々に展開してきた。

上記の村民の自発的な動きに対し、西麦窯社区村民委員会は農村経済を発展させるため、2000年から農家民宿の計画に踏み出した。委員会は様々な準備をし、2003年に西麦窯社区における農家民宿を正式に開始させた（表4-7）。その後、農家民宿は提供できるサービスの質に応じていくつかのランクに分けられ、高いランクの農家に奨励金が与えられるようになった。

表 4-7 農家民宿を開業するための準備

項目	内容
サービス	先進地域への視察、サービス向上の研修会、勉強会の開催
営業証明書の申請	工商局・税務局・環境保護局・衛生局・公安局・消防局への申請
資本金	補助金の申請、農家民宿事業参加者への奨励金

村民委員会への聞き取り調査により、筆者作成

さらに、嶗山南コースの駐車場の移転は村の農村観光の展開を促進している。2002年までに、嶗山南コースの駐車場は「大河東」に位置し、観光客は駐車場で遊覧車に乗り換え、遊覧区に入っていた。2002年年末に大河東駐車場の使用が廃止され、「流清河駐車場とチケット売り場（嶗山を遊覧するためのチケット）」が使用され始めた。西麦窯社区は流清河駐車場とチケット売り場の横に位置し、観光客は嶗山を遊覧してから、市内に戻る前に西麦窯社区を經由するようになり、西麦窯社区で食事や宿泊を行うようになった。その結果、2004年、村の農家民宿は18軒に増加した¹⁶。その分布から見れば、当時の農家レストランおよび農家民宿はほぼ交通の便が良い道沿いに分布し、集中している状態であった。

2004年に、村民委員会をはじめ、嶗山区風景管理委員会、沙子口街道、村民が共同出資で「青島山海人家旅游株式会社」を設立し、統一して村の農家民宿と農家レストランを管理するようになった。この会社は西麦窯社区の村民委員会に所属しており、沙子口街道、村民委員会、村民のそれぞれの代表がこの会社を管理している。その後、農家民宿の統一のブランドマーク、看板をデザインした。また、各農家は「青島山海人家旅游株式会社」の「加盟者」として会社に管理されているが、会社の設立者として、この会社を管理する役割も果たしており、会議などにできる限り出席している。一方、村民委員会は村内の唯一の観光客を受付する機関として、観光客を均等に加盟した農家に振り分ける。収益を求めて、加盟農家は年々増加しており、収入も順調に増加している。たとえば、青島市の「農家楽旅游経営単位等級評定和服務規範（農家楽等級の評定とサービス基準）」によると、青島市の農家民宿モデルになった西麦窯社区の農家は33戸であり、民宿からの年収は平均2万元である¹⁷。

2005年7月に、沙子口街道は「沙子口街道家庭旅館業発展管理方法（沙子口街道における家庭旅館の管理方法）」及び「沙子口街道家庭旅館項目建設規制（沙子口街道における家庭旅館の建設に関する規制）」を制定し、農家民宿に関する法律的な保護と規制を初めて設定した。また、農家民宿を経営している農家は必ずこの方法と規制が書かれた掲示を観光客が見やすいところに置くように指示していた。これらは、食品衛生、サービス方法、客室の面積などの農家民宿の細かい規定まで定められている。

このような政策や会社組織などは、西麦窯社区における農村観光の展開を促進している。2015年、西麦窯社区における農家民宿は102軒あり、この村の約半数の農家が農家民宿を経営している（図4-5）。

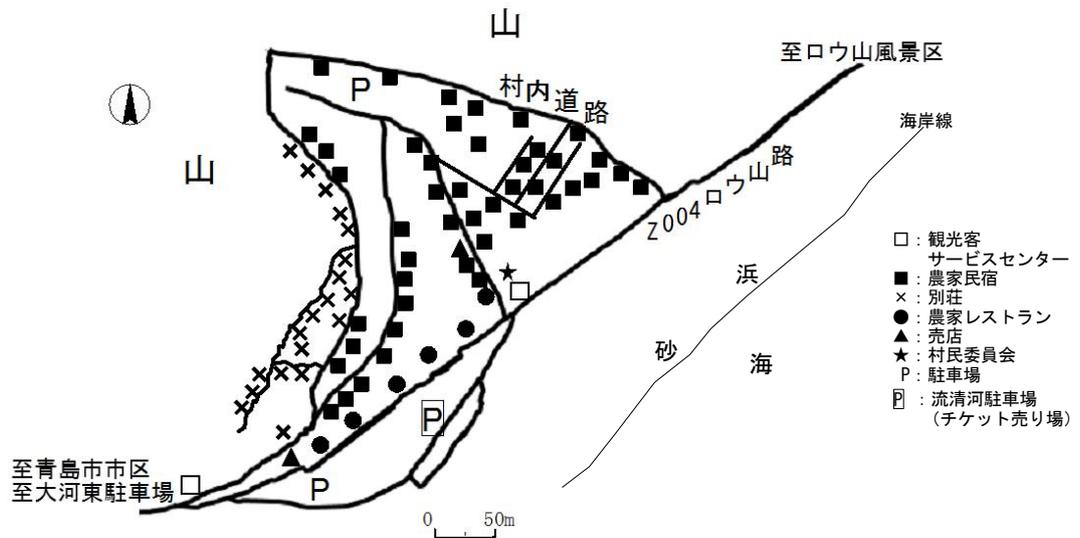


図 4-5 西麦窯社区における農家レストラン、農家民宿の分布 (2015 年、一部農家民宿のみ)
現地調査により、筆者作成

以上のように、西麦窯社区において、農村観光の展開が見られたが、その展開については、次のように考察できる。

まず、西麦窯社区では、都市化の進展が農村観光に大きな影響を与えている。都市の近くに位置し、農村観光が盛んな西麦窯社区はもともと貧困な農村であり、農業と漁業が主な産業であった。その後、青島市の経済発展と都市化の進展とともに、都市部から農村部への交通が便利になり、都市住民の農村部へ出かける回数が倍増している。都市で暮らしている住民は無農薬食材や豊かな自然を追求するために、都市近郊にある農村を訪ねるようになった。一方、観光資源とその開発、誘客の取り組みなども重要である。そして、交通は農村観光の展開へ大きい影響を与えている。最初にできた農家レストランや農家民宿は道沿いにあり、その後、全地域に広がっていった。図 4-4、4-5 からみると、過半数以上の農家民宿は道沿いに位置している。聞き取り調査によると、道沿いに位置する農家民宿はそれ以外の農家民宿より経営状態が良いことがわかった。

また、1999 年以前、西麦窯社区の西部には多くの畑があり、村民自家用の野菜の栽培が行われていた (図 4-4)。その後、村の農村観光が始まり、これらの畑で生産した野菜で作られた郷土料理を観光客に提供するようになった。また、観光客の要望に応じて、家の近所にある野菜畑で自ら食材を収穫する体験ができる農家がほとんどであった。しかし、2000 年、青島市のある建設会社は、これらの畑を含む西麦窯社区の土地を購入し、別荘地として開発し始め、青島市民向けの別荘販売を行っていた。別荘の購入者への聞き取り調査によると、青島市近郊の農村は、都市化の進展により、従来の農村風景や農村生活様式が変化したりした地域が多い。一方、西麦窯社区は、都市近郊に位置しているにもかかわらず、農村風景などが保存されており、田舎暮らしを体験できる地域である。そのため、西麦窯社区の西部は都市住民向けの別荘地として利用されてきた (図 4-5)。別荘の購入者は、週末や祝日に村を訪問し、部屋の周辺を美化しており、親友、同僚などを村へ招待し、村民

との交流も図っている。これは、村の農村観光を宣伝でき、その展開につながっていると考えられる。

そして、他の観光地との連携の効果が著しく見られる。つまり、観光地間の相乗効果が顕著である。西麦窯社区は嶗山風景区と隣接しているため、嶗山風景区からの影響が大きい。西麦窯社区においては、嶗山への観光客の駐車場の移動により、来訪客は激変した。西麦窯社区の宿泊者の多くが外来者、つまり青島市市内からの観光客ではなく、市外から訪れる観光客である。したがって、駐車場の移転は、西麦窯社区に大きな影響を与えている。村民への聞き取り調査によると、駐車場の移転にともない、西麦窯社区を訪問する観光客が増加する傾向が見られている。

最後に、西麦窯社区では、地域にある独特な資源を開発し、地域の特性を生かして農村観光を発展させている。現在、西麦窯社区は独特の漁村の雰囲気を活用し、農家民宿の経営を中心とし、農家レストランを補助として農村観光を展開している。来訪者は青島市民をはじめ、山東省内陸部、河北省、河南省、天津市、北京市からの観光客が多い。また、村民間のつながりや政府からの補助金で農村観光を始めた農家がある。そのため、補助金や具体的な支援政策、村民間のつながりを活用することが重要であるといえる。さらに、西麦窯社区では、「企業+農家+政府」の経営方法が農村観光の展開を促進していると思われる。2015年7月の聞き取り調査によると、一部の村民の収入源は3分の2が農村観光、10分の1が漁業である。農村観光から収入を得られ、地域の潤いにつながっていると考えられる。

4. 農村観光の展開による地域への影響

この章においては、主に農村観光の展開により、地域にどのような影響を及ぼしてきたかについて考察したい。調査方法としては、アンケート調査¹⁸と聞き取り調査を行った。アンケート調査の対象は西麦窯社区で農家民宿、農家レストランを経営している農家である。2011年8月20～23日と9月10～13日の2回、計8日間で西麦窯社区に100部のアンケートを配布し、2011年11月までに86部を回収した。回収率は86%であった。しかし、その中の14部は、明らかに集計対象から外れており、回答として集計していない。また、同時に、筆者は西麦窯社区で農村観光（農家レストラン、農家民宿）を経営している農家、農村観光とまったく関係がない農家、西麦窯社区を訪問した観光客、西麦窯社区の村民委員会を対象に聞き取り調査を実施した。以下は、これらの調査に基づき、分析した結果である。

4.1 農村観光経営者の個人属性

家族形態については、以下の結果が得られた。家族構成はほぼ核家族であり、家族人数は、夫婦2人のみ、夫婦と子供の3人の場合が最も多い（図4-6、4-7）。これは中国の「一人っ子政策」と関係があると考えられる。中国では、1979年に、急激な人口増加を緩和するため、一組の夫婦につき子供を一人に制限した政策（一人っ子政策）が導入された。この政策は、都市や都市近郊の農村では、厳しく実施されていたため、多くの都市近郊の農村では、核家族が多いと見られる。聞き取

り調査によると、西麦窯社区では1980年から一人っ子政策が実施されたため、夫婦と子供のみ
の核家族が多い。また、西麦窯社区では、若い世帯の都市への就職や進学が多いため、夫婦2人のみ、
夫婦と子供の3人の家族構成が最も多い。このような核家族は、農村観光の経営に有利な条件を持
っていると考えられる。それは、核家族では人間関係¹⁹の問題があまりないからである。

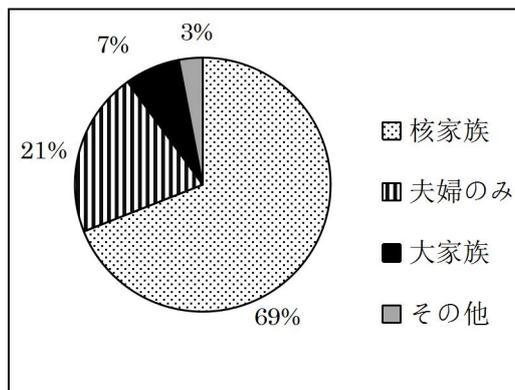


図 4-6 家族人数
アンケート調査により、筆者作成

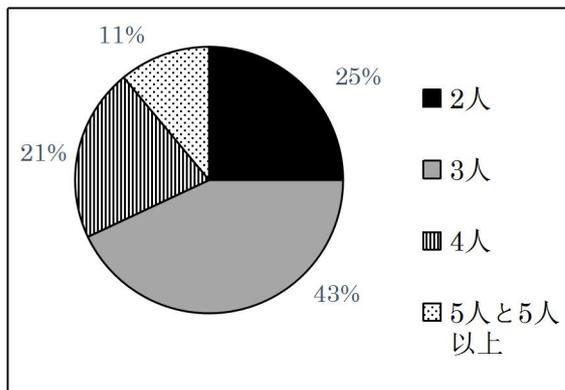


図 4-7 家族構成
アンケート調査により、筆者作成

中国の農村では、一般的な農家は一戸建てであり、部屋数も多い。特に、西麦窯社区は石造りの
家が多く、一世帯（平均3人）は庭付きの一軒家に居住しており、部屋数が多ければ、20前後にの
ぼる。しかも、西麦窯社区の家は、壁が厚く、敷地も床面積も広く、部屋も基本的に個室であるた
め、宿泊者と経営者のプライベート空間を守っていると言える（写真 4-3、4-4）。また、農家は積
極的に空き部屋を改造したり、装飾したりして、農家民宿の経営を行っている。筆者の現地観察に
よると、この村の農家民宿は外観だけを装飾した様子がなく、きめ細かく管理され、素朴ながらも、
快適な施設として維持されている。



写真 4-3 西麦窯社区「山海人家」の外観
筆者撮影



写真 4-4 西麦窯社区の民家の外観
筆者撮影

農村観光を経営し始めたきっかけを次の図4-8に示す。この質問は「複数回答可」としていたため、「公的な支援」と「周りからの影響（知人などに誘われた、周りがやっている）」が多く選択され、その影響を受けて、農村観光を経営し始めたと考えられる。近年、中国においては、農村経済の発展は「最重要課題」という方針があり、農村観光は一つの農村経済を発展させる方法として導入され、それに対する公的な支援も多く実施されていると考えられる。また、周辺住民とのつながりにより、一部の農家は農村観光を始めたことがアンケート調査の結果からわかった。例えば、農家レストランを運営していたA氏は同村のC氏に依頼し、C氏宅に観光客を宿泊させてもらった。これをきっかけに、2000年、C氏は農家民宿を開業した。しかし、この村での聞き取り調査によると、西麦窯社区における農村観光経営者は村民委員会などの地域の行政機関や関係団体との結びつきが弱く、各経営者間の連携があまり見られず、それぞれの農家が個別に農村観光を展開していることである。

また、前述のように、西麦窯社区の民家は部屋の数が多く、観光客を多数受け入れることによって、村民の収入増加につながっている。そのため、多くの村民は「部屋が空いている」を選択し、空き部屋を活用し、農村観光を展開している。

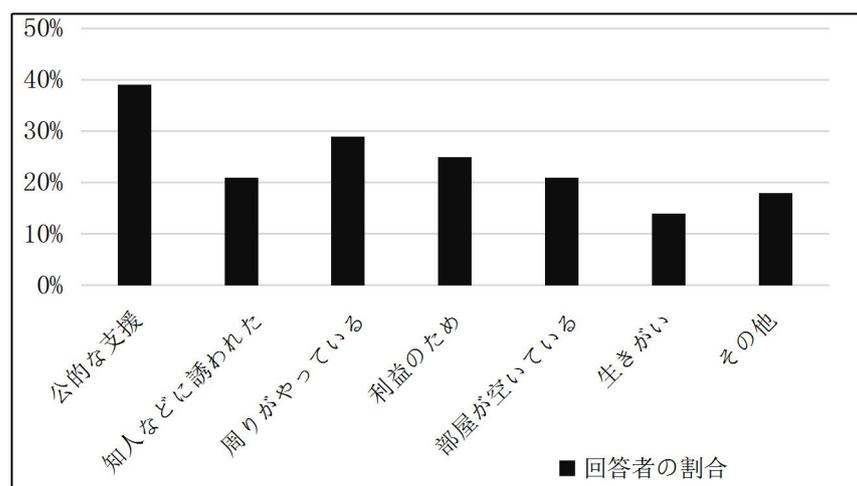


図4-8 農村観光を始めたきっかけ（複数回答）

アンケート調査により、筆者作成

しかし、もともと農村は貧困であり、農家は利益のために農村観光を発展させたと予想したが、「利益のため」を選択した人は少なく、聞き取り調査²⁰と異なった結果が出た。

西麦窯社区は、青島市中心部から短距離であり、海に面し、風光明媚な地域であるため、多くの都市住民が訪れてくる。そのため、都市住民に宿泊、食事を提供する農家が増え続けている。一方、観光客は、村内風景と村周辺の海、山などを楽しんだり、新鮮な手作りの田舎料理を味わったりしている。しかし、西麦窯社区は山地が多く、耕地に適した土地が少ない。また、都市化の進展により、村の一部の耕地は都市建設に使用されていたため、観光農園や農業体験などが積極的に実施されていない。そして、多くの観光客の来訪につれ、農家は客室の清掃、準備などに時間を要するよ

うになった。以上の要因により、西麦窯社区で行っている農村観光は、農家民宿、農家レストランの利用、農村風景めぐりととどまっている。

中国では農村観光の展開には、公的な支援が不可欠である（朱 2008）。中国の中央政府から村民委員会まで、農村観光を重視している。西麦窯社区では、多くの公的な支援が実施されている。まず挙げられるのは農村観光の宣伝についてである。西麦窯社区は「中国農村観光モデル地」であるため、地方のマスメディアに大きく取り上げられ、宣伝されている。また、沙子口街道は毎年、青島市の出資による農村観光に関するイベントを実施している。各農村観光の経営者は無料でイベントに参加でき、自分の店（農家民宿）を宣伝し、アピールなどができる。次に、村民委員会は農村観光に関する多様な勉強会、研修会の開催、先進地域への視察などに力を入れている。聞き取り調査によると、勉強会、研修会の内容は接客、料理作り、標準語・外国語の習得、緊急事態への対応、室内の装飾などがある。また、毎年、村民委員会の村長、副村長は農家民宿の経営者を引率し、農村観光の先進地域を視察に行っている。最後に、村民委員会は農家民宿経営者が提供可能なサービスによって、農家民宿をいくつかのランクに分け、毎年、優秀な農家民宿に奨励金を支給している。その金額は三等級に分かれ、それぞれ2万元、1万元、8千元である。

一方、村民は農村の伝統的な生活スタイルを展示しながら観光客向けのサービスを提供している。例えば、家の装飾、料理の研鑽などを行い、観光客がより快適に過ごせるように、Wi-Fi や有線テレビなどを設置している。

農村観光を開始して以来、各農家は、観光客と接する機会が多いため、農村観光が進むなかで、以下のようなさまざまな点を改善した。筆者のアンケート調査によると、改善の内容では、生活住居の面、例えば、ごみの処理、食事の清潔さが多く選択された。西麦窯社区では、生ごみを堆肥に利用し、その他のごみは分別されているため、従来農村観光の展開の課題になっていた衛生問題が一部解決できたと言える。また、研修会などによって、村民は清潔な食事の大切さを認識できるようになった。一方、西麦窯社区は、より観光客が気持ちよく、訪問できるように、村内、周りの道路、駐車場、看板、観光客サービスセンター（図 4-5）、入り口（写真 4-5）などの整備を推進してきた。また、旅行シーズンには、村内に待ち合わせ場所と一時案内所が設置され、一年中、観光客の受付をしている事務所もある。



写真 4-5 整備された西麦窯社区の入り口

筆者撮影

4.2 農村観光の展開による地域への影響

4.2.1 地域産業

農村観光の展開によって、西麦窯社区における地域産業には変化が見られた。従来の西麦窯社区は、農業生産の場、あるいは農産物を提供してくれる地域として理解されてきており、農業が主な産業の一つであった。また、西麦窯社区は海に面しており、漁業も盛んに行っていた。その後、村の背後にある山で、採石、石の加工などを行ってきた。1980年以降、嶗山風景区を保護するため、山での石の採掘が禁止され、市内で仕事に従事する村民が多くなってきた。1990年代から、青島市の発展にともない、村の一部の土地は都市開発に転用されたこと、都市住民の農村観光への志向の高まりなどによって、村民の多くは農家レストラン、農家民宿を経営し始め、農村観光に携わるようになってきた。そのため、西麦窯社区は安心・安全な農産物を提供するだけでなく、癒し・余暇、交流・体験などの機能も重視されるようになり、地域産業の変化が見られた。西麦窯社区での聞き取り調査によると、多数の農村観光経営者は地域産業が変わったことを認めている。

図4-9はアンケート調査により、西麦窯社区における具体的な収入源の（生業）変化をまとめたものである。農村観光を開始する前に、一部の農家は、春に建網漁法により沿岸を回遊する白魚を網にからませてとったり、エビ養殖を行ったりしていたが、漁業と農業のみによる生計が立てられず、出稼ぎする村民も見られた。そして、この村では山地が多く、一人当たりの耕地面積が小さい。より高収益の農産物が求められているため、果物や山菜が栽培されており、これらの果物、山菜の販売は一部の村民の主な収入源であった。

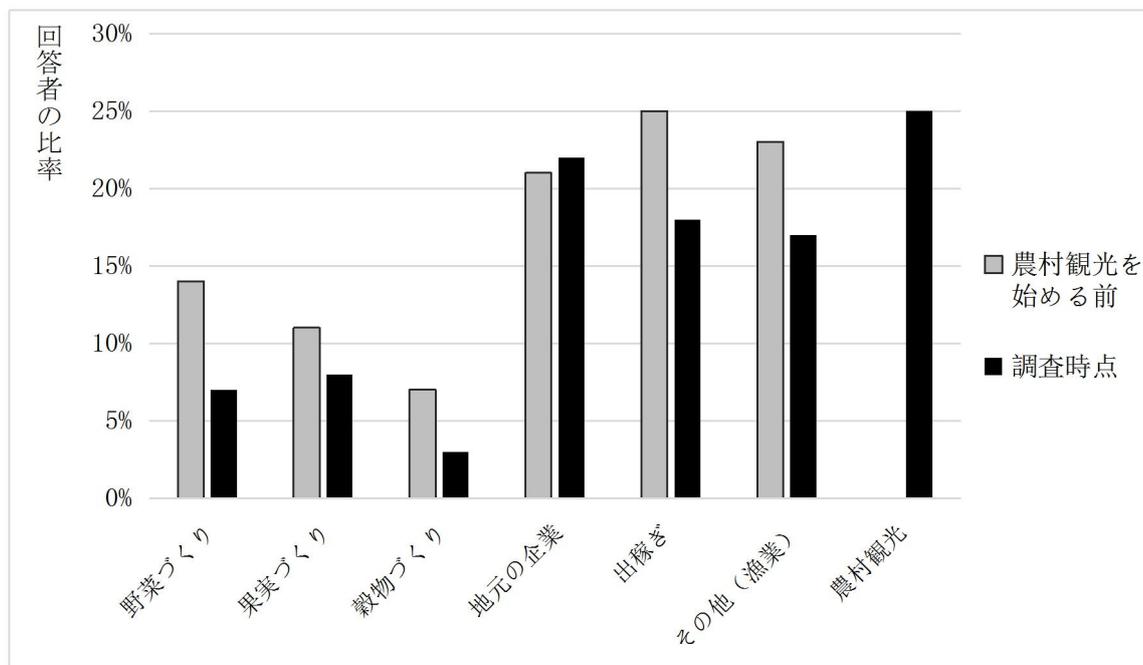


図4-9 西麦窯社区における収入源の（生業）変化

アンケート調査により、筆者作成

また、西麦窯社区の周辺には、包装、食品製造などを営む中小企業がいくつかあり、その従業員の多くは西麦窯社区の村民である。1990年代から、西麦窯社区における農村観光の展開が見られたが、一部の農家の主な収入源は、依然として地元の企業に勤めたことによるものである。

そして、図4-9を見ると、約4分の1の農家は、農村観光から収入を得て、生計を立てていることが分かる。これらの農家は、積極的に農家レストランや農家民宿を展開しており、西麦窯社区における農村観光の展開に寄与している。このような変化から、農村観光の発展が、地域産業の変化につながっているのではないかと考えられる。

聞き取り調査により、西麦窯社区は以前、農業、漁業の従事者が多かったが、調査時点の2012年にはほぼ半数が農業、漁業をやめ、農家民宿、農家レストラン、運輸などのサービス業に従事している。さらに、電話調査で回答を得ることができた10軒の農家を対象として、「生業の変化について」の調査を行った(表4-8)。ここでの農家はすべて西麦窯社区に定住し、戸籍は「農村²⁾」であるが、その中には、生業は農業ではない農家、いわゆる、兼業農家が多く見られる。この10軒の農家に対して、1995年から2012年までの生業変化を調査し、農家の生業変化を明らかにした。1995年に農業、漁業、出稼ぎにより生計を立てた農家が多かったが、2000年に地元の企業に従事する農家が多くなった。その後、西麦窯社区における農村観光の展開につれ、2005年に一軒の農家は農村観光を生業とするようになった。さらに、2012年2月現在、10軒の農家のうち、5分の1の農家は農村観光を生業としている。

しかし、この調査は農村観光を営んでいる農家の一部を対象とし、得た結果であった。すべての農家を調査対象とした場合、異なる結果が出る可能性があると考えられるが、地域産業は、農村観光の展開による変化を受けてきたということが言えるだろう。

表4-8 西麦窯社区における生業変化

対象地	番号	生業変化の有無	生業の変化過程				
			1995年	2000年	2005年	2010年	2012年2月
西 麦 窯 社 区	1	有	◎	◎	☆	☆	☆
	2	有	◎	◎	△	□	□
	3	無	□	□	□	□	□
	4	有	◇	□	●	◎	◎
	5	有	●	●	●	☆	●
	6	有	□	□	△	△	□
	7	有	●	●	▽	▽	●
	8	有	▽	●	●	◎	☆
	9	有	◇	◇	◎	●	●
	10	有	◇	□	□	□	□

◎：漁業＋農業 ●：農業 □：地元の企業 ◇：出稼ぎ △：運輸業 ▽：その他 ☆：農村観光

農村観光経営者への聞き取り調査により、筆者作成

4.2.2 意識

地域住民の意識の変化に関しては、具体的な項目を、経営意識、教育に対する態度、視野（理念）、プライドとアイデンティティー・自分自身の認識度の4問に分け質問した。そのアンケート調査の内容（一例）は下記のようなになる。

農村観光の展開によって、あなたの経営意識は以前と比較し変化しましたか。

①大きく変化した ②少し変化した ③あまり変化していない

④まったく変化していない ⑤わからない ⑥その他

①と答えた方はよろしければ、具体的に变化した点をお書きください。

それぞれの質問に対して、「①大きく変化した ②少し変化した」という「変化した」と回答した人の割合は図4-10のようになっている。

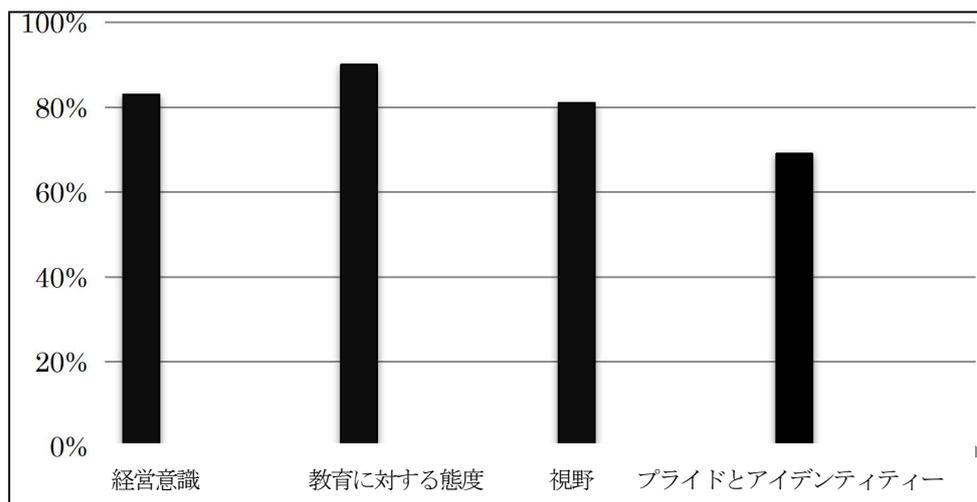


図4-10 意識が変化したと答えた人の割合

アンケート調査により、筆者作成

図4-10 から見ると、過半数以上の農村観光の経営者は、農村観光の展開によって、村民の意識が変化したと認識している。1990年代、西麦窯社区で開業した農家レストランは、営業許可証明書がなく、特別なメニューも作らず、農家の自家生産の野菜、豚肉、鶏肉、とれたての魚、貝、「緑色鶏蛋」を原材料とした安価な食事を観光客に提供していた。その後、来訪者の増加によって、一部の農家は自宅を改造したり、新築したりして、農家レストランと農家民宿を経営し始めた。農村観光経営用の営業証明書や消毒機械なども備えられているため、観光客は農家の食事・宿泊といったサービスを安心して利用できるようになった。また、農家民宿経営者の多くは情報発信、旅行会社との連携などによって、積極的に営業活動を行い、集客している。このように、西麦窯社区の村民は農村観光に対する経営意識が変化していると言える。

「教育に対する態度」については、以下のように説明する。村民の多くは農村観光から得られた収入を子供の教育に補填したりしている。また、全国各地からの観光客を受け入れるため、サービスの向上、多様な文化への尊重・理解などに熱心に取り組む農家が多く見られる。なかでも、青島市のある大学が開催した「酒店管理服務（ホテル経営サービス）」の講座を受ける農家も見られた。そのため、農村観光に関するサービスが大きく改善されてきた。この村のリピーター客に対する聞き取り調査によると、「トイレは革命的にきれいになり、諸サービスも3段跳びぐらいの勢いで向上している」とのことである。

そして、沙子口街道は「持続発展（持続可能な発展）」というスローガンをあげ、地域の持続可能な発展を提唱している。この村はこのスローガンに従い、環境保全を意識した農村観光を積極的に実施している。また、西麦窯社区の村民は農村観光を発展させるだけでなく、農村観光のブランド意識を強く持ち、積極的に農家民宿をブランド化している。村民は、農家民宿を「山海人家」というブランド名を付けており、観光客に「山と海に囲まれて、自然が豊かなこと」という宣伝を実施している。現在、「山海人家」は青島市の有名な農村観光のブランドとなり、観光客を誘致している。さらに、この村は海魚料理を中心とする「山海人家漁家宴（海の幸を味わえるプラン）」をブランド化しており、社会的認知度を高めている。

農村観光の展開によって、村民のアイデンティティー・自分自身の認識度が高くなっている。都市住民は心の豊かさを求め、週末や祝日に都会を離れ、農村を訪問している。とりわけ、時間と金銭の制限で、西麦窯社区のような都市近郊の農村は最も訪問されている。一方、村民にとって村内風景、農村文化は日常生活の一部であるが、観光開発によって、観光客を誘致できるようになり、村民は村の風景、文化とその潜在価値を再発見できたと言える。

4.2.3 生活

この項目については、生活習慣、家族構造、物価の3問に分け質問した。そのアンケート調査の内容（一例）は下記のようになる。

農村観光の展開によって、村の生活習慣は以前と比較し変化しましたか。

①大きく変化した ②少し変化した ③あまり変化していない

④まったく変化していない ⑤わからない ⑥その他

①と答えた方はよろしければ、具体的に変化した点をお書きください。

それぞれの質問に対して、「①大きく変化した ②少し変化した」という「変化した」と回答した人の割合は図4-11のようになっており、その考察は以下のようになっている。

まず、農村観光の展開によって、生活習慣が変化すると答えた人は回答者全体の半分以下になっている。西麦窯社区は都市近郊に位置し、都市からの影響を大きく受けている。多数の農家は農村観光を始める前に、厨房や、トイレに加え、浴室の整備を行い、普段でも入浴や身だしなみに注意を払っていると言える。農村観光の展開により、村民は観光客と接する機会が増えているため、さ

らにこれらを促していると考えられる。また、観光客の来訪につれ、村民の食生活に多少の変化は見られたが、大きな変化は見られていない。一方、村民は観光客に夜遅くまで食事などのサービスを提供したりして、従来の早寝早起きの生活習慣がなくなる恐れがあると考えられる。

次に、家族構成は多少変化している。従来の西麦窯社区の村民は男性が仕事、女性が家事・育児を中心とした生活を送っていた。農村観光の展開によって、家族全員が農村観光にかかわるようになってきたが、担い手の不足が見られ、ごく一部の経営者は親の手伝いにより、大家族での同居が始まった。

最後に、物価の変化も見られるが、言うまでもなく、中国経済の発展、近年のインフレーションなどの原因もある。林（2009）によると、ある地域は観光地になると、物価が高くなる可能性が高い。したがって、農村観光地でも、観光化されて以来、物価が変化していると考えられる。西麦窯社区では一部の商品の物価が著しく上がった。例えば、農村観光を始める前、漁業従事者は安値でサバ、タコ、エビなどを村民に販売していたが、来訪者が多くなるにつれ、「漁家宴」の需要が増加し、その上魚介類の漁獲量の減少などによって、魚介類の値段が倍以上に上昇した。特に、青島市民が好んでいる「サバ餃子」の原材料であるサバの値段は数倍あがったとのことである。

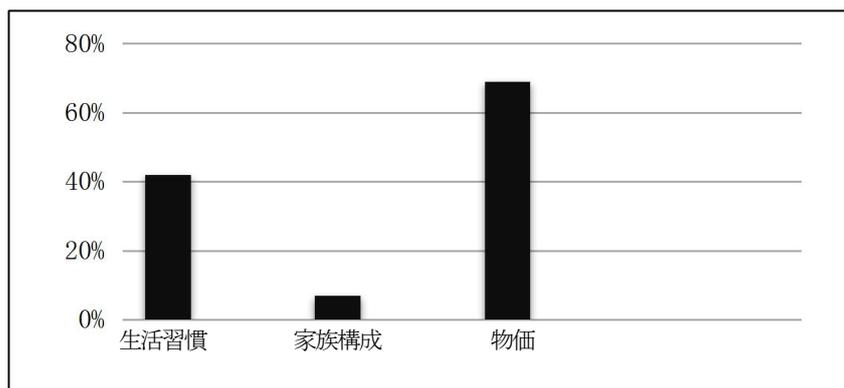


図 4-11 生活が変化したと答えた人の割合

アンケート調査により、筆者作成

4.2.4 居住環境

この項目については、環境、近隣関係、社会治安、交通の4問に分け質問した。そのアンケート調査の内容（一例）は下記ようになる。

農村観光の展開によって、村の環境は変化しましたか。

- ①以前より改善された ②以前より悪化した ③あまり変わらない
④まったく変化していない ⑤わからない ⑥その他_____

①と答えた方はよろしければ、具体的に改善された点をお書きください。

②と答えた方はよろしければ、具体的に悪化した点をお書きください。

それぞれの質問において、「①以前より改善された」の回答の割合と「②以前より悪化した」の回答の割合は図4-12のようになっている。

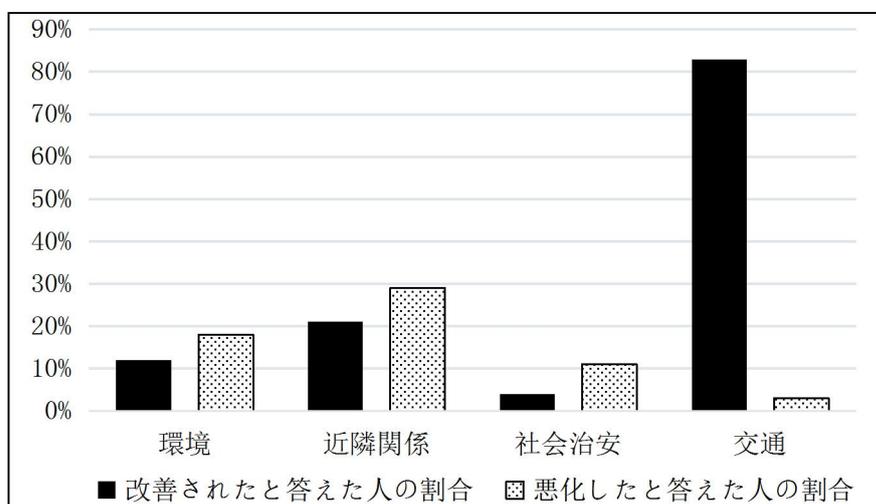


図4-12 居住環境の変化の結果

アンケート調査により、筆者作成

図4-12を見ると、農村観光の展開にともなうマイナス面としては、環境、近隣関係、社会治安が「悪化した」という回答が「改善された」という回答よりやや上回る傾向があることだと思われる。この村を訪れる観光客は村の観光資源の一部である砂浜とビーチに対する評価が最も高いが、観光客による環境破壊などの課題を抱えている。観光客は草地、森林、山、川などの大自然を破壊したり、ビーチにごみを捨てたりしているため、地域住民は環境が悪くなったと考えている。一方、農村観光による収入の一部で植樹、緑化が実施され、環境の保全、改善につながっていると言える。

また、西麦窯社区では、農村観光を始める前に、村民間の相互扶助、地域行事の協力などが多く見られ、「仲良く、親戚のようだ」という近隣関係であった。農村観光の展開により、観光客の受け入れをめぐる問題が発生している。例えば、村の入り口や道沿いに位置する農家民宿は多くの観光客を受け入れており、収入が多いのに対して、そうでない農家民宿に宿泊する観光客は少ない。そのため、より多くの観光客を受け入れるため、一部の農家は村の入り口や、観光客サービスセンターで観光客を呼び込んでいた。これは、ほかの村民に不満を生じさせ、村民間の関係が悪くなった。このように、金銭志向の高まりによる地域住民の連携が希薄化し、地域固有の「きずな」がなくなる恐れがあると考えられる。

そして、一部の農家は社会治安が悪化したと回答した。農村観光の展開により、人口流動が頻繁になり、社会治安の悪化につながっていると考えられる。西麦釜社区のW氏への聞き取り調査によると、村民委員会は、夜間に警備を強化するなどの対策を立てているとのことである。

最後に、農村観光の展開による収入の増加で、インフラの改善などは進んでいることが観察できた(写真4-6)。西麦窯社区は都市近郊に位置しているため、農村観光を始める前に上下水道、道路

の整備などはいち早く始められたが、農村観光の展開により、老朽化したこれらのインフラがさらに整備できた。また、村内外に観光客用の駐車場の整備、観光客サービスセンターの設置が実施され、観光客へのサービスの充実が図られている。なかでも、交通が改善されたことが注目されている。例えば、農村観光による収入で村内外の道路の整備、市内と村を結ぶバスの増便などがあげられる。



写真 4-6 西麦窯社区に設置した遊具

筆者撮影

4.2.5 収入

農村観光の展開は、農家の収入増加に寄与している。嶗山区の一人当たりの年収は約1万円であるのに対して、沙子口街道西麦窯社区の農家民宿においては、農家民宿のみによる年収が1万円を大幅に超えている経営者は少なくない。また、村民への聞き取り調査によると、多くの農家民宿経営者は常連客への情報発信、旅行会社との連携などによって、積極的に営業活動を行い、集客している。その結果、農家民宿を利用する観光客が増加しつつあり、特に週末や祝日に訪れる観光客が多い。そのため、短期間の従業員として、西麦窯社区とその周辺の村の村民を雇用している。

また、農村観光経営者に、彼らと農村観光を経営していない農家との収入の比較を行った結果、過半数以上の農村観光の経営者は自分の年収が農村観光を営んでいない農家より多いと回答した(図 4-13)。

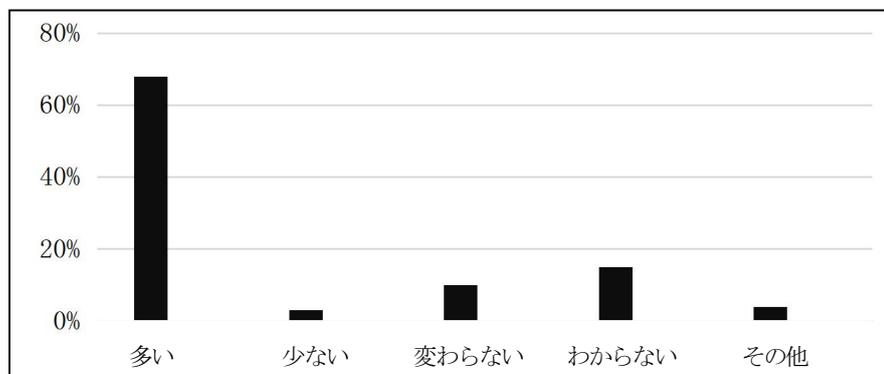


図 4-13 農村観光経営者による非農村観光経営者との収入の比較

アンケート調査により、筆者作成

図4-14は、農家一世帯における農村観光による収入とそれ以外の収入の比較を表している。これを見ると、農村観光は多少農家の収入となっている程度の農家も見られるが、主要な収入手段となっている農家もいることがわかる。しかし、調査時点では主要な収入手段となっている農家の数がわずかであった。

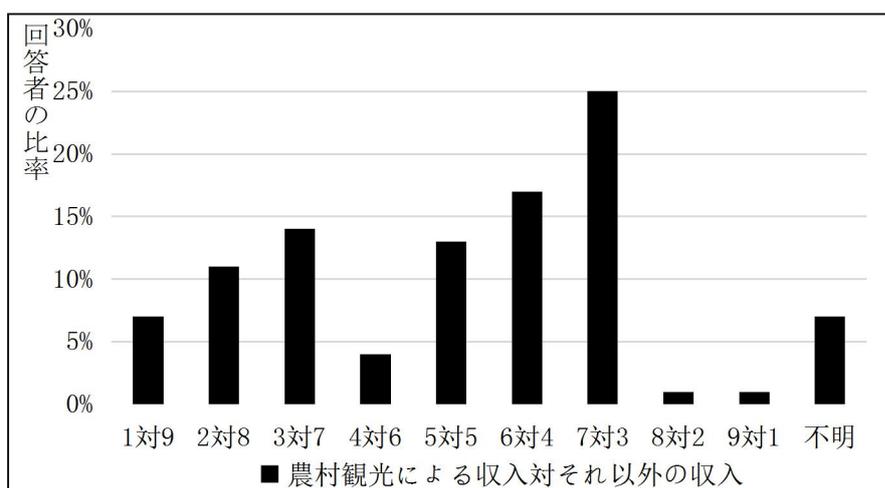


図4-14 農家1世帯における農村観光による収入とそれ以外の収入の比較
アンケート調査により、筆者作成

また、「農村観光は地域の経済発展に役に立つか」と「農村観光は地元の人々を多く雇用しているか」という質問項目に対して、ともに過半数以上が「はい」と回答した。また、主婦でも、働けるようになったという話も聞かれた。

4.2.6 その他

以上の西麦窯社区に対するアンケート調査と聞き取り調査の結果からみると、農村観光が西麦窯社区に地域産業、意識、生活、居住環境、収入の面で影響をもたらしてきたことが明らかになった。次に、それ以外の、主に聞き取り調査により、農村観光がもたらしてきた影響について述べる。

観光客を受け入れるとともに、農村住民と都市住民は自発的な交流も行っている。農村住民は都市住民により良いサービスを提供するために、接客サービスなどの勉強会を行い、来訪者からの要望に応えようと様々な工夫をしている。その一つの結果としては、観光客の好みに合わせて「つくられた農村観光」が流行になり、風俗習慣が悪くなるケースも少なくない。また、都市住民との交流が深まるとともに、農村住民の意識が変化しつつあると考えられる。

また、西麦窯社区の耕地の利用については、農村観光を始める前に、若い世代の都市への移住や農家の高齢化と農業の低生産性によって、農業に対する意欲が低下しているため、放棄された耕地があった。農村観光を経営しはじめ、観光客を誘致する際に、村民委員会は放棄地を再利用し、農村観光用地へ転用するよう働きかけている。しかし、この村における農業はあまり発展していない。都市化の進展による耕地利用の変化とともに、この村の多くの耕地は売買され、1人当たりの耕地

は極わずかであるため、観光客用の農業体験や野菜栽培以外、農業生産はあまり進んでいない。このような結果、農業が衰退するだけでなく、観光客は本来の農耕文化を体験できなくなり、当該地域の農村観光の衰退につながっていくだろう。

また、西麦窯社区を訪問する観光客については、村民委員会も農家も統計を取っていないが、隣接の都市からの観光客が最も多いことが聞き取り調査でわかった。また、村民委員会によると、山東省からの観光客の指数を100とした場合、この村を訪問する観光客は河南省（指数：10）、江蘇省（指数：5）、上海市（指数：5）、安徽省（指数：5）、浙江省（指数：5）、北京市（指数：5）、河北省（指数：5）となっている。そのほかの省、市からの観光客もいるが、現時点ではまだ少ない。

5. 小括

本章では、まず、経済が急速に発展しており、農村観光も盛んな青島市を事例として取り上げ、その展開と空間的な分布を明らかにするとともに、青島市の都市近郊における農村観光の展開の特徴を考察した。また、聞き取り調査により西麦窯社区における農村観光の展開を明らかにした。さらに、西麦窯社区に対するアンケート調査と聞き取り調査を行い、農村観光が地域へどのような影響を及ぼしてきたかについて考察した。その結果として以下のような諸点が明らかになった。

中国の農村観光は自発的に発展していたが、三農問題の解決方法として、中国の政府にも重視されるようになった。農村観光に対する政策、支援、補助なども行われている。しかし、農村観光が最も盛んである地域は都市と離れている農村部ではなく、都市近郊の農村である。これは経済の発展、都市化の進展、交通などの原因があると考えられる。

青島市における農村観光は萊西市と平度市で誕生し、当初観光農園だったが、その後、都市近郊に広がり、農家レストラン、農家民宿、農産物直売所などに至る多彩な農村観光の形をとるようになった。

農村観光地の分布と距離、つまり市の中心部からの距離には比例関係が存在していないことが明らかになった。青島市の農村観光地はただ都心からの距離と有意な相関がなく、距離以外の要因を考える必要がある。また、橋やトンネルの建設により、都市住民は経済開発区を訪れるようになり、この地域に新たに農村観光地が生まれた。

都市近郊における農村観光の展開は都市化の進展による影響が最も著しい。西麦窯社区では、都市化の進展による農村観光に与える影響がよく見られる。西麦窯社区はもともと貧困な農村であり、農業と漁業が主な産業であった。その後、青島市の経済発展と都市化の進展とともに、都市から農村への交通が便利になったことがきっかけで、都市住民が農村部へ出かける回数は倍増している。一方、都市住民は無農薬食材、豊かな自然を追求するために、都市近郊にある西麦窯社区を訪れるようになった。また、交通による農村観光の展開への影響も著しく見られる。西麦窯社区における農村観光の展開を考察してみると、最初にできた農家レストランは道沿いにあり、その後、全地域に広がっていった。現在、過半数以上の農家レストラン、農家民宿は道沿いに位置している。聞き取り調査によると、道沿いにある農家民宿の規模、経営状態などはほかの農家レストラン、農家民

宿より良い。一方、この村は地域にある独特な資源を開発し、地域の特性を生かして、農村観光を
発展させている。その結果、青島市だけでなく、中国各地からの観光客が西麦窯社区を訪れている。

農村観光の展開は村民の収入増加に寄与するだけでなく、地域産業の転換にもつながっており、
多くの村民の生業は従来の農業から農村観光とかかわる産業に転換している。農村観光から得られ
た収入は、個人農家の生活改善から地域のインフラ整備に使用することができ、地域の潤いにつな
がっている。しかし、農村観光の展開にともない、自然環境の悪化や、農業の衰退などの新たな課
題が見られた。したがって、農村の環境を保護し、持続可能な農村観光を展開することが、西麦窯
社区における農村観光の展開上の課題であると考えられる。

注：

- ¹ CO₂、エネルギーの消費量を減らす生活スタイルを指す。
- ² 中国の観光を研究する機関であり、主に、観光地の企画、観光地の発展、変遷などを研究している。
- ³ 青島政務網：青島概況
<http://www.qingdao.gov.cn/n172/n25664338/n26675614/131021110012675027.html> 2015年6月閲覧
- ⁴ 2016年現在、青島市は市南区、市北区、李滄区、嶗山区、黄島区、城陽区の6区、膠州市、即墨市、
平度市、萊西市の4市を直轄している。
- ⁵ 青島市国際投資合作促進局：住みやすい都市
http://jp.qingdao-invest.gov.cn/product/q_ml/z_y_ds/index.html 2015年6月閲覧
- ⁶ 嶗山区の地名である。
- ⁷ 西麦窯社区で展開している農家民宿のブランド名である。
- ⁸ 「半島都市新聞」による。ここでの「収容力」は客の収容数の増加、インフラ整備の進み、サービスの
全体の向上などを指している。
- ⁹ 青島市に登録された農村観光モデル地のみを研究対象にした。
- ¹⁰ 「緑色」は環境保全型農業によって栽培された農産物および食品のことを指す。
- ¹¹ 市内四区（市南、市北、四方、李滄）が市街地とされている。
- ¹² 嶗山遊覧はいくつかのコースがあり、その中では、南コースが最も有名で、毎年の客数が最も多い。
西麦窯社区はもともと西麦窯村と呼ばれ、中国の最も基本的な行政単位である。
- ¹³ 「緑色」は環境保全型農業によって栽培された農産物および食品のことを指す。西麦窯社区では山菜や
雑穀を餌とし、飼育されている鶏が産んだ卵は「緑色鶏蛋」という。
- ¹⁴ 西麦窯社区の農家への聞き取り調査による。
- ¹⁵ 西麦窯社区の農家B氏への聞き取り調査による。
- ¹⁶ 村民委員会のW氏が記載したデータによる。
- ¹⁷ 村民委員会のW氏が記載したデータによる。
- ¹⁸ アンケート調査は農村観光の経営者に対し行った。調査内容は、個人属性（年齢、性別、家族構成、

農村観光を始めたきっかけ、現在実施している農村観光の内容、農村観光の展開による個人の変化、住居の周りの変化など)と地域の変化(農村観光実施後の地域の変化である。具体的には、地域産業の変化、意識の変化、生活の変化、居住環境の変化、収入の変化、その他について、質問を設けた)があった。

¹⁹ 家族内や家族と観光客との間の人間関係を指す。例えば、家族の構成員が少ないため、内部での調整、また観光客との接触場面での調整が容易であると考えられる。

²⁰ 聞き取り調査により、利益という目的で農村観光を始めたケースが多かった。

²¹ 中国人の戸籍は「農村戸口(農村戸籍)」と「城市戸口(都市戸籍)」に分けられる。

第5章 既成観光地周辺型農村観光の展開

—山東省泰安市岱岳区里峪村を事例として—

1. はじめに

本章では、既成観光地周辺地域における農村観光の展開を考察する。龍ほか(2008)は、既成観光地とその周辺にある観光地の発展には「Core-periphery理論、システム論、持続可能な発展」のような理論と関係があると論じた。李ほか(2011)、劉(2011)は、既成観光地周辺に位置する農村観光の開発に注目し、その開発の重点は、既成観光地にないサービス機能を充実することであるとした。楊ほか(2009)は、既成観光地周辺に位置する村は核心観光地(既成観光地)からの牽引力を利用しながら発展していくことが重要であると述べた。楊ほか(2011)は、黄山とその周辺に位置する農村観光地である「山岔村」を事例として、数学モデルを利用し、経済、文化、環境の面から山岔村の発展は黄山と深くかかわっていることを明らかにした。

しかし、農村観光は農村発展の手段として注目されているため、経済的側面に焦点を当てた研究が全体の約6割を占めており、その他の側面に着目する研究が少ない(張2013)。また、既成観光地周辺地域に展開されてきた農村観光に注目する研究が多く、その展開過程についての研究はあまり行われていない。そして、盧ほか(2014)は、外国と中国の20年間の農村観光についての研究をまとめ、中国の研究は「実際の調査、データ分析に基づいた分析」が少ないと指摘した。

日本では、既成観光地周辺に位置する観光地の成り立ちには観光地間の相乗効果に注目する研究が多い。特に、農村観光の一種である観光農園は、都市や観光地からの近接性、それに関連する交通環境の変化などの立地条件に基づいて開設され、集積してきたと指摘されている。例えば、全(2013)は飯田市龍江地区の観光農園を事例とし、リンゴ栽培の歴史から考察した上で、天竜峡とその周辺にある観光農園を訪問する観光客の数の変動や、中央自動車道の開通前後における観光農園の展開を述べている。

しかし、以上の研究は、観光地間の相乗効果や交通などの側面に注目したものであり、それ以外の農村観光の展開に関する要因については、詳細な分析がなされていない。また、政策、観光客の行動、農民の動きなどの諸要因の変化により、観光農園のみならず、農村観光の展開、経営が多様化してきたため、農村観光の展開にかかわる諸要因をまとめて分析する必要がある。特に、中国では、農村観光の展開が、政策上重要な役割を果たしており、その分析が重要である。

以上のように、農村観光に関する経済以外の側面に着目する研究は少なく、現地調査に基づき、中国既成観光地周辺地域における既成観光地からの影響、農村観光に関する政策、展開手段といった諸要因を活用した農村観光の展開についての研究は、あまり行われていない。そこで本章は、現地調査により、中国既成観光地周辺地域における農村観光とかわる諸要因を分析し、農村観光の展開とその影響を明らかにすることを目的とする。

研究対象地とする泰安市岱岳区道朗鎮里峪村(図5-1、5-2)は、2014年に「中国農村観光モデ

ル地」に指定され、世界遺産である泰山風景区の周辺に位置しているため、既成観光地周辺地域の事例として研究をしたい。

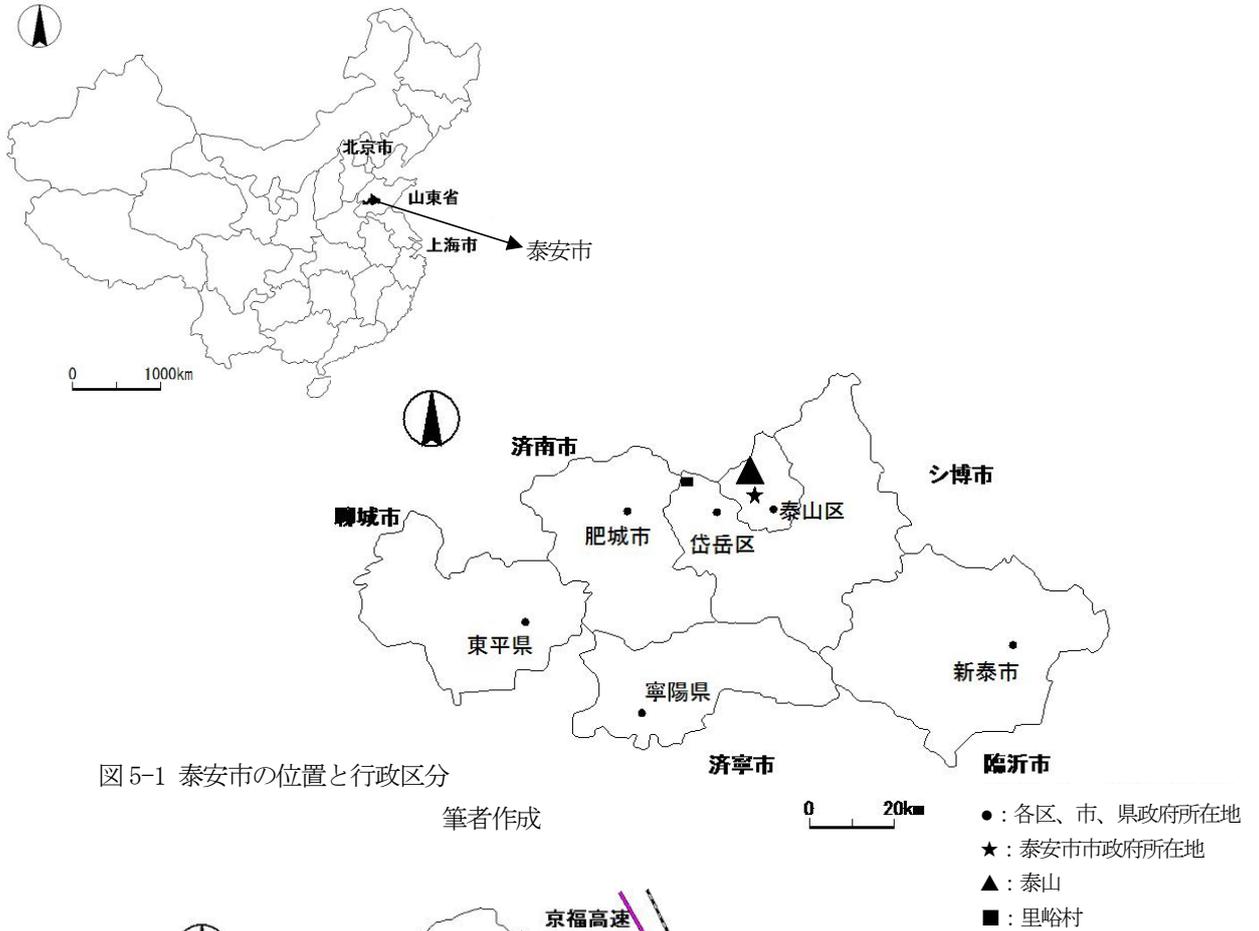


図5-1 泰安市の位置と行政区分

筆者作成

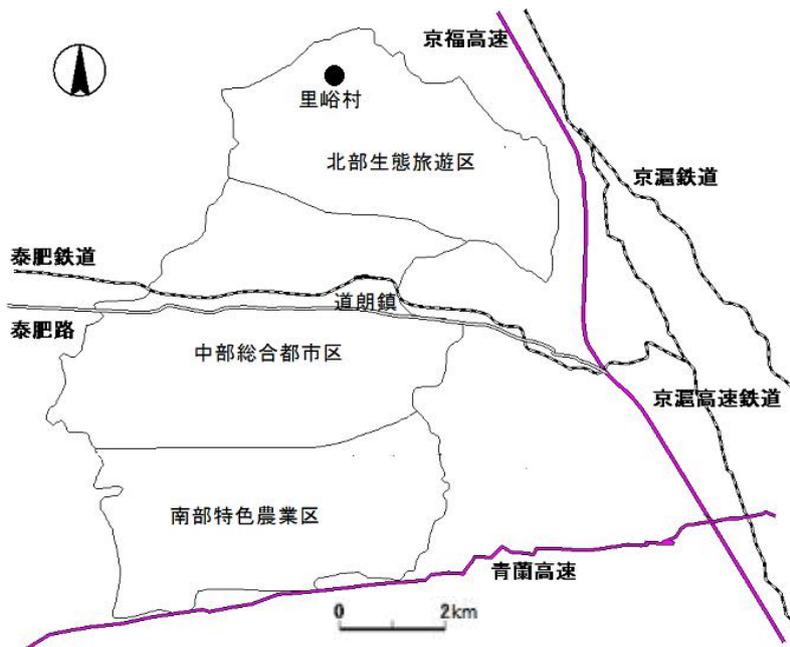


図5-2 里峪村の位置

筆者作成

そのため、2015年7月には、里峪村を訪れ、聞き取りを中心とする調査を実施した。まず、農村観光に関する政策、支援制度、全体的な農村観光の発展状況を把握している泰安市岱岳区旅游局、道朗鎮政府旅游辦公室（道朗鎮観光を担当する政府の部門）を訪問した。次に、里峪村村民委員会には村の全体的な状況、観光資源、観光施設、村民委員会の役割について聞き取り調査を実施した。最後に、農村観光を経営する農家を訪れ、農村観光のきっかけ、現状、発展過程、経営内容および観光客について聞き取り調査をした。また、現地観察や農村観光に関するパンフレットの収集を行った。調査期間中、筆者は実際に農村観光を営む農家に宿泊し、田舎料理、里峪村で行われている農業体験などを自ら体験した。

1987年に複合遺産に登録された世界遺産である泰山は、山東省泰安市に位置しており、最高峰は玉皇頂と呼ばれる高さ1,545mの山である¹。泰山は道教の聖地であり、封禪²の儀式が行われる山として名高く、「天下第一山」と称えられている。秦朝から明清時代まで約2000年にわたり、泰山は道教の中心地であり、神聖な山として歴代の皇帝により崇められてきた。そのため、山全体に数多くの、祭祀や封禪用の祠や廟、宮殿建築がみられる。また、泰山には多くの名士により、石刻などの豊富な文物、旧跡が残されているため、「青空歴史博物館」とも称されている。山の中には、孔子登高処、岱廊、谷山玉皇寺、碧霞祠寺、玉皇頂、日觀峰、月觀峰、關母宮などの観光名所のほか、老木、泉、池も多い。そして、「泰山国家地質公園」としてジオパークにも指定されており、ユネスコの世界ジオパークネットワークにより認定され、山頂からの日の出や日の入りは非常に風光明媚である。そのため、毎年多くの観光客が訪れる。

泰山が位置する泰安市は山東省の西部にあり、面積は7,762 km²である³。泰安は悠久な歴史文化を有し、「国家歴史文化都市」に指定されている。その名称は「泰山が太平であれば、国家が太平になる」ということわざから生まれており、「国家が太平であれば、国民の暮らしが平安になる」という意味が含まれる。泰安市の人口は556.8万人（2014年）であり、2区2市2県で構成されている（図5-1）。人口の98.7%を漢民族が占め、他に回族などが居住する。山東省の重要な炭鉄地区・鉄鋼業地域であり、機械製造、鋁業、冶金、化学工業、建材製造などが主な産業である。また、農業も盛んであり、桃、栗、リンゴなどの果物以外には、紫草、黄精などの多くの薬草が栽培されている。泰山は山東省のなかでも重要な観光地であり、一山（泰山）一水（済南市の趵突泉）一聖人（済寧市にある孔子に関する遺跡）を組み合わせたコースは山東省の「ゴールデンライン」と言われている。泰安市は大都市でも中核都市でもなく、少数民族があまり定住していない地域である。

2. 里峪村における農村観光の展開

2.1 里峪村の概要

泰安市中心部から15km離れている里峪村は、山東省泰安市岱岳区道朗鎮に属し、泰山の西部に位置している（図5-1、5-2）。村民委員会への聞き取り調査によると、230世帯の646人（2015年7月現在）が定住している。この村は山に囲まれており、村内には山、泉、老木、奇石などが多い。周囲の山々は、森林に覆われ、緑化率は95%であるため、「緑化千佳村」に選定されている（写真

5-1)。森林に蓄積された水が豊富で、空気が清浄で、長寿者が多いため、「長寿の村」とも呼ばれている。里峪村は歴史が古く、村周囲には「斉長城⁵」、唐朝の「農民起義⁶」の遺跡が保存されている。

里峪村の年降水量は800mm、年平均気温は12.9℃である。土地面積は366.7haで、そのうち、果樹園用地は100ha、耕地（野菜、小麦、トウモロコシなどを栽培する）は26.7ha、未開発林地240haである。聞き取り調査によると、山村である里峪村はすべての農地が山の斜面に位置するため、小麦や米といった作物は栽培しにくく、古くから果物の産地である。住居地の近くや面積の小さい農地では野菜、豆類などが栽培されている。現在、栗、クルミ、リンゴ、山査子、桃が栽培されており、これらの果実の販売が村民の主な収入である。また、標高654m以上の山には堂参、丹参、何首烏などの薬草が大量に栽培されている。



写真 5-1 里峪村の全貌

里峪村村民委員会による

2.2 里峪村における観光資源

2.2.1 豊かな自然

里峪村は泰山の支脈に位置し、自然を満喫するには絶好の場所である。村を囲んでいる山々の95%は森林に覆われ、周囲は見渡す限りの森の中で、夏でも涼しく、空が近く感じられる。近年、「環山路」（写真 5-2）という道が建設され、観光客は展望台から青々とした山並みを楽しむことができる。「緑化千佳村」に選ばれた里峪村は、水源が豊富で、村内には清潔で静かな小川があり、泉や小さい滝も点在している。また、村内にはいろいろな花が栽培され、一年中開花している。清浄な空気、鳥のさえずり、木や土の匂い、風が運ぶ花の香りに包まれて、ゆったりと歩くことも魅力的である。この村は年平均気温が12.9℃で、夏も涼しく、冬も山東省のなかでは暖かい。里峪村は、泰安市からの直線距離が15kmであるにもかかわらず、大気が汚染されていないため満天の星が眺められ、マイナスイオン（19万個/m³）が多く、健康に良いと言われている。この村を訪れる観光

客は「日常から離れ、心からくつろぐことができる」と話した。

2.2.2 悠久な歴史

悠久の歴史を感じる里峪村には歴史遺跡が多く、「国画崖」、「仰天神亀」、「泰山老嫻嫻」などの奇石がある。「国画崖」は断崖絶壁に自然に形成された多様な色合いを持ち、壮麗な「中国画」のような風景を持つ列石である。泰山での封禅をはじめとする山岳信仰は、現在もなお地元の多くの人々に見られ、多くの観光客がこの国画崖を見物に訪れる。村の周りには数十キロメートルの「斉長城」が巡らしてあり、「唐朝農民起義」の遺跡が多く残されている。村南部には、近代戦争に備えるため、石油を貯蓄した巨大な「油缶」が10個ある。これらの油缶の地上部分はモンゴルゲルのような形になっており、里峪村はこれを「冒険観光商品⁷」として開発する予定である。

2.2.3 多種多様な果実

里峪村は山菜である香椿と、栗、クルミ、リンゴ、山査子などの果実の産地である(写真 5-3、5-4)。有機肥料が使用され、農薬の散布が控えられているため、里峪村は国家農業部に「有機核桃种植基地(有機クルミ栽培基地)」に指定され、栗、クルミ、リンゴは「無公害農産品(健康に害がない農産品)」として国家農業部に登録されている。香椿は春芽とも言われ、中国原産の落葉広葉樹である香椿(日本語:チャンチン)樹の新芽・若葉である。春に出る新芽・若葉は透き通るような薄紅色であり、食材として漬物にしたり、卵や豆腐と一緒に炒める料理は有名である。里峪村産の香椿は貢品(古代、皇帝に献じる物)として知られており、現在「山東省緑色食品(安全、優良な品質、健康に良い食品)」に認定されている。また、村内には野生のクルミ、栗の木が多く現在でも100年以上の老木が100本以上あるため、「泰安市野生クルミ保護基地」と定められている。これらは食品として観光客を引き付けているだけでなく、毎年開花の季節には来訪客も多い。

2.2.4 伝統的な田舎料理

山東省の料理は「魯菜」と呼ばれ、中国の八大料理の一つである。その特徴は、多少塩辛いが、味、香りがよくて、歯ごたえは柔らかく彩が華やかである。さらに、魯菜は「済南市」、「山東半島」、「曲阜市」を中心に三つの体系が形成されてきた。泰安市は済南市、曲阜市の中間に位置し、魯菜の特徴を継承しながら、独自の味、調理方法を発展させてきた。「菜中之王(料理の王様)」と讃えられる泰安豆腐から数百種類の料理が作られる。例えば、干炸豆腐丸子(豆腐団子の唐揚げ)、一品豆腐(豆腐炒め)、什錦豆腐絲(細切り押豆腐炒め)、泰山人参豆腐(人参と豆腐で作られた団子)、四喜豆腐(ひき肉、野菜と豆腐の炒め)等が挙げられる。さらに、泰安豆腐は、白菜、水と合わせて「泰安三美(泰安の3つの美しいもの)」と呼ばれている。里峪村の村民はこの特徴を継承し、素材本来の味を一つひとつ大切にしており、炒鶏(鶏の炒めもの)、栗焼鶏(栗と鶏の煮込む)、涼拌山丁香(山丁香の和え物)、油炸藿香薄荷(カワミドリと薄荷の揚げ物)、涼拌鮮黄花菜(生ワスレグサの和え物)、香椿豆腐(香椿と豆腐の炒めもしくはスープ)、川魚料理、豆腐料理などの20種類以上の田舎料理を観光客に提供している(写真 5-5)。これらの料理に使用される食材は、すべ

て農民自身の畑からとれたての野菜や山の幸で、加工により付加価値が高くなり、村民の収入につながっている。

2.2.5 サービス

里峪村での観光は訪れる人々に対して、田舎の人々との心の通った交流から生まれる温かい人情、地元ならではの手作りの味、ほのぼのとした古き良き中国農村の原風景を詰め込んで届ける。現地調査した時、筆者は何度も無料で食事に招待され、村民から素朴で自然な手づくり料理の提供を受け、見ず知らずの家族と寝食を共にすることで家族の温もりを感じた。村では修学旅行も行われているため、毎年の長期休暇には学生が多く訪れる。田舎暮らしを体験した学生は、「地元の人々との触れ合いや農業について学べる貴重な機会であり、一生忘れることの出来ない素晴らしい思い出である」と述べた⁸。

2.2.6 その他

里峪村は山に囲まれているため、石で造られた民家が多く、現在でも築50年以上の古民家が多数残されている（写真 5-6）。これらの古民家における排水システム、穀物の貯蓄、室内の設計などは現在の民家と明らかに異なっている。一部の古民家ではベッド、炊事道具、室内装飾などが数十年前のまま、生活の場が再現されている。そして、村内には石に彫刻されている文化大革命時代の「毛沢東語録」をはじめ、多くの歴史的なものが保存されている（写真 5-7）。また、山道が多く、山から見る風景は位置、角度によって、違う景色が楽しめる。

より多くの観光客を誘致するため、里峪村村民委員会は村の全体の企画を観光企画会社に依頼し、観光開発を行っている。また、村内には観光案内所・観光客サービスセンターの建設、村を遊覧する電気自動車の導入、道路標識の設置などにも力を入れている。

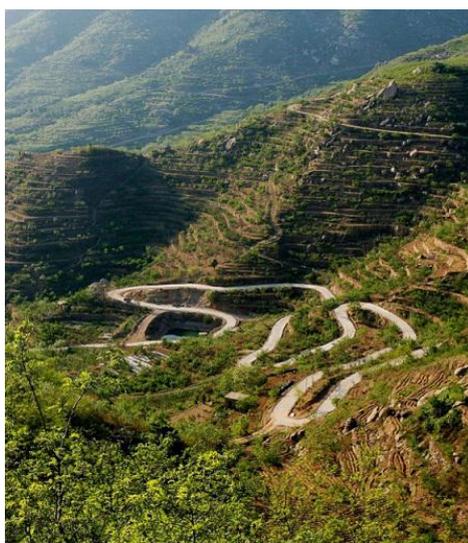


写真 5-2 里峪村の環山路
道朗鎮政府による



写真 5-3 里峪村の香椿
道朗鎮政府による



写真 5-4 里峪村の栗
道朗鎮政府による



写真 5-5 香椿を使用した料理
道朗鎮政府による

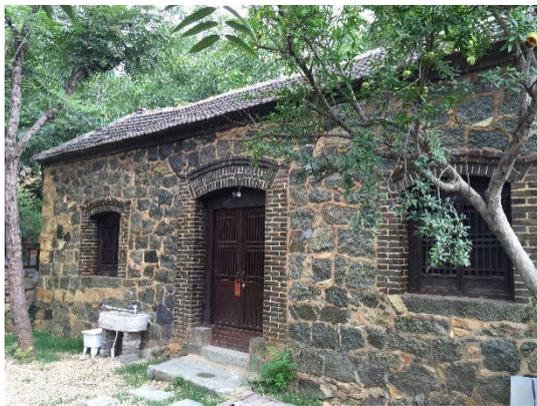


写真 5-6 里峪村の古民家
筆者撮影

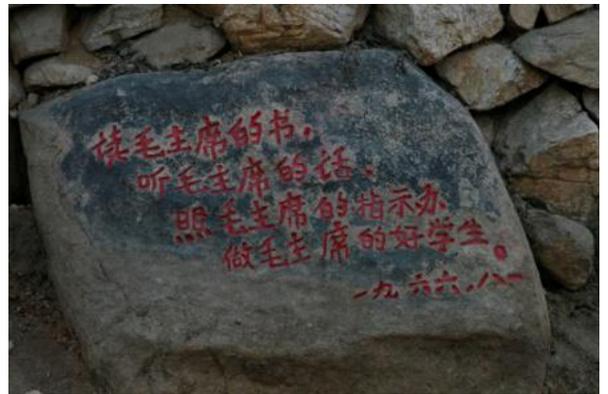


写真 5-7 文化大革命時代の石刻
筆者撮影

2.3 観光農園が中心となる農村観光の展開

2.3.1 里峪村における果樹栽培

里峪村は山に囲まれ、耕作用の農地が少なく、大型農業機械による大規模な農業耕作が不可能であるため、古くから山の斜面で果樹を栽培していた。聞き取り調査によると、当時、栗やクルミなどの果樹が多く、村には現在でも百年以上の栗やクルミの老木が残っている。1949年、中国が建国された後、「土地改革⁹」、「人民公社¹⁰」などの政策が実施されており、食糧生産を中心とした時代が続いた。当時、里峪村は小麦、トウモロコシ、大豆などを栽培していた。さらに1966～1976年の文化大革命には、村にある老木、遺跡が一部破壊され、「食糧生産を重視する」という方針が定められ、果樹の栽培はほとんど禁止されていた。その後、1978年に「改革開放」が実施され、農村では農産物の増産、農家の増収、農村の繁栄を実現させることが提唱された。一方、経済発展による都市住民の食料の多様化が進み、果物の需要が拡大しつつある。里峪村はこのような市場状況に合わせて、果樹の栽培面積を拡大してきた。また、一人当たりの耕地が少なく、より高収益の農産物が求められているため、現在、村の8割近くの土地には栗、クルミ、リンゴ、山査子、桃といった果物や山菜

が栽培されており、これらの果物、山菜の販売は村民の主な収入である（図 5-3）。また、住居地の近くや小面積の耕地では自家用の野菜、豆類、イモ類などが植えられている。図5-3は、里峪村の農家Aからの聞き取り調査の結果である。これによると、農家Aでは1970年以降、図5-3に示すような変化があった。1980年までは、果樹栽培の面積が少なかったが、1990年になると栽培面積が数倍拡大し、それとともに、果実販売による収入が多くなってきた。近年農村観光を始めたため、農村観光からの収入も得られるようになった。

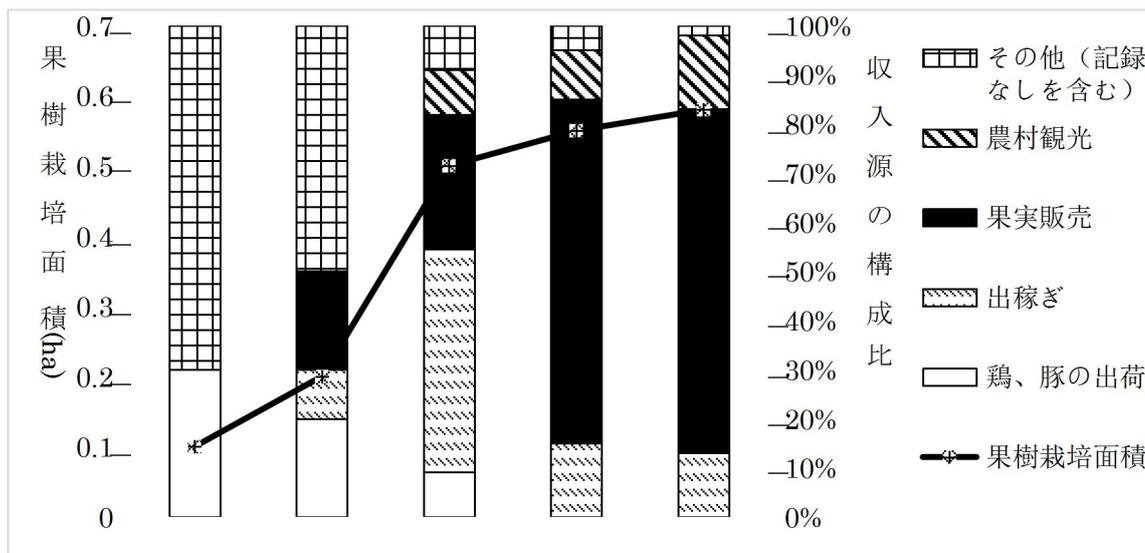


図5-3 農家Aにおける収入源の構成比と果樹栽培面積の変化（1970年～2015年7月）

農家Aへの聞き取り調査により、筆者作成

2.3.2 果実販売から観光農園への変遷

中国政府は、1978年12月に行われた「第11期三中全会」で「改革開放」を採用し、「計画経済」から「市場指向型の経済」に切り替え、人民公社を解体し農民に農作の決定権を与えるという「生産責任制」を採用する農業改革を実行した。その結果、1980年から、里峪村では、農民は自由に農業生産ができるようになり、収益性が高い果樹栽培の面積を拡大し、果実の収穫量は増加している。聞き取り調査によると、当時の村民たちは収穫した果実を人力車で泰安市内の市場に運び、販売活動を行ったということである。里峪村は森林が多く自然環境に恵まれており、泰山から湧き出す良質の地下水や、有機肥料で育てられた果実が都市住民から高く評価され、「里峪水果(里峪村の果実)」は泰安市民によく知られる地元ブランドになってきた。村民は果実販売から利益を得るにしがたがって、果実の栽培面積をさらに拡大し、1990年代には村の7割近くの土地に果樹が植えられるようになった。

1990年代から、中国東部各地の経済は急速に発展し、運輸業もそれとともに発展した。里峪村のある村民は村内の果実を買い取り、まとめて周辺の都市に出荷する「果実出荷組合」を成立した。この組合は村内外には大型冷蔵庫、包装機械、保管倉庫などの設備を設置し、里峪村をはじめ、周りの村の果実を買い取っている。そのため、村民は市内への販売活動を一時停止し、コスト削減が

できた。一方、経済発展により、各地で行われている都市建設には多くの労働力が必要になった。里峪村の男性は農繁期には村内で農業をし、農閑期には出稼ぎをしていた。当時、果実の値段は安かったため、出稼ぎによる収入の方が多かった(図 5-3)。

果実出荷組合は、里峪村で集めた果実を泰安市とその周辺の都市に出荷している(図 5-1)。この果実は「里峪水果」というブランド名が付けられて、高い値段でデパートや果物専門店などで販売されていたため、「里峪村産の果実はおいしい」との認識が広がっていった。一方、泰安市民に好まれている香椿の産地である里峪村は、積極的に香椿のブランド化を進めており、「里峪香椿」は「山東省绿色食品」と認定された。このように、里峪村は果実栽培面積を拡大するとともに、里峪村産の果実や山菜はブランド品として周りの都市市民に認知されるようになった。また、1990年代後半に入ると、中国では食品の安全性に関する問題が頻繁に発生し、より安全安心な食材を求める都市市民は直販売、農家直送に注目し始めた。そして、中国経済がさらに発展し、都市住民の収入が増加しつつあるため、消費行動が大きく変化している。自家用車の普及はこの行動をさらに促進し、泰安市の都市住民の多くが里峪村の果樹園を訪れるようになった。

泰山周辺に位置する里峪村は、泰山からの影響がみられる。1987年から毎年9月に行われる「泰山国際登山節¹¹」に参加する国内外の登山愛好者だけでなく、周辺都市の観光客も泰安市を訪れてくる。これは里峪村におけるリンゴの成熟時期と合致し、「里峪村の果物はおいしい」という評判から、済南市を中心とした周辺の都市住民は泰山、泰安市内観光の後、リンゴ狩りのため村を訪れる人が多くなった。その後、村民との交流を深めながら、村を頻繁に訪問し、季節ごとの香椿、栗、クルミなどの収穫体験を行うようになった。

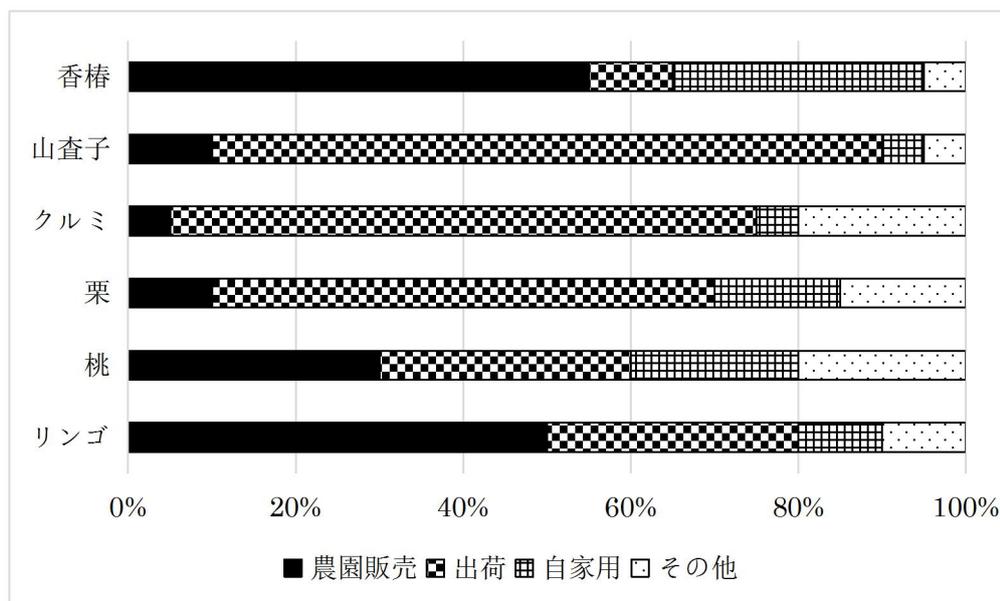


図 5-4 里峪村における果実・山菜の販売ルート

村民委員会への聞き取り調査により、筆者作成

このように、里峪村は果樹栽培面積を拡大し、良質の果実や山菜を栽培している。観光客の増加

とともに、口コミやSNSによる宣伝効果も加わり、里峪村では従来の果実販売から観光農園への展開がみられた。特に、傷付きやすく、鮮度を保ったままの輸送が難しい桃やリンゴが観光客に好まれており、果実狩りのような観光農園による現地販売が多く、農家も輸送の手間が省けるため、観光農園の発展に拍車をかけている(図 5-4)。このような観光農園の展開は農家のコスト削減だけでなく、より高値で販売することや、それに付加する食事の提供や、入園料などの収入が得られ、農村観光の展開につながっている。

2.4 観光農園から農村観光への展開

2.4.1 里峪村における農村観光の取り組み

中国における農村観光の展開は、政策上重要な役割を果たしている。中央政府は三農問題が深刻である農村の経済を発展させるため、重要な手段として、農村観光に力を入れている。たとえば、2015年に発表された「1号文件¹²⁾」には、「三農問題の解決を全党の重要な任務とし、最優先課題として力を注ぎ、法律によりこれを保障し、中国の特色ある農業近代化を推進する。農業の多面的機能を積極的に活用し、農村資源のレジャー利用、旅行、観光、文化教育の価値を発掘する。歴史、地域、民族的特徴がある景観の観光地化を支援し、多様で特色のある農村での観光や余暇を開発する¹³⁾」と記載している。山東省旅游局は、「2015年全省旅游工作要点¹⁴⁾ (2015年山東省における観光発展の要点)」を作成し、「農村観光の発展を資金、宣伝、人材の面で全力支持する」と宣言した。泰安市、岱岳区、道朗鎮、里峪村はそれぞれ農村観光を発展させるための政策を制定した(表5-1)。

表5-1 里峪村における農村観光の展開を促進する諸政策

年	政策	制定者
2006年	岱岳区旅游規劃 (2006~2020年)	岱岳区政府
2011年	泰安市鄉村旅游產業振興規劃 (2011~2015年)	泰安市政府
2013年	泰安市岱岳区鄉村旅游發展總體規劃	岱岳区政府
2014年	泰安里峪村鄉村旅游策劃及修建性詳細規劃	里峪村
2014年	泰安市岱岳区道朗鎮總體規劃 (2014~2030年)	道朗鎮

岱岳区政府および村民委員会への聞き取り調査により、筆者作成

里峪村における農村観光の展開には政策上の動きだけでなく、補助金制度も実施されている。一部には、農村観光の展開を促進する「双改政策」がある。「双改政策」は、「厨房とトイレを改造する」という意味で、2013年に山東省旅游局が制定した「山東省鄉村旅游經營業戶改厨改廁標準 (山東省農村観光經營のための厨房・トイレの改造基準)」を基準とし、農村観光経営者は厨房とトイレを改装するという制度である。泰安市旅游局は改造した農家の「厨房の衛生・設備・面積、食品の保存、消防施設」、「トイレの衛生、上下水道、便座の設置」などを検査し、点数化する。合格点を

得られる農家は観光客に食事サービスを提供できる。この改装に要した人件費、材料費などの諸費用はすべて補助されるため、農民は積極的に「双改」を実施している。これをきっかけにして、従来農村観光経営の課題となっていた衛生問題は一部解決でき、農民は清潔な食事の大切さを認識できるようになった。一方、観光客は農家の食事・宿泊といったサービスを安心して利用できるようになった。里峪村では、2013年および2014年に自由応募した26軒の農家が「双改」を行い、調査時点には合格点を取った12軒の農家が許可され、観光農園のみならず、観光客に食事を提供することになった。

一方、泰山は山東省のみならず、中国全土でも有名な観光地であり、山東省のゴールデンライン「一山一水一聖人」の中心部に位置している。多くの泰山の見どころは山頂にあり、ロープウェイによる登山が可能であるが、山頂のインフラが整えられていない。また、泰山の周辺には数多くの観光地があるにも関わらず、十分開発されていないことや、泰安市の観光関連施設が少ないため、多くの観光客は一日しか泰安市に滞在していない。このように、泰山は泰安市における唯一の観光名所と認識され、周囲の観光地との相乗効果はあまりないため、泰安市の観光収入は山東省東部の青島市や煙台市よりはるかに少ない（2014年山東省旅游局統計）。また、「2014年泰安市旅游業発展統計分析報告」によると、伝統的な山水観光に興味がある観光客は多いが、泰安市を訪れる観光客は、泰山をはじめとする山水観光への評価が低い。それに対して、農村観光、エコツーリズムといった新たな体験型の観光が好まれている（図 5-5）。

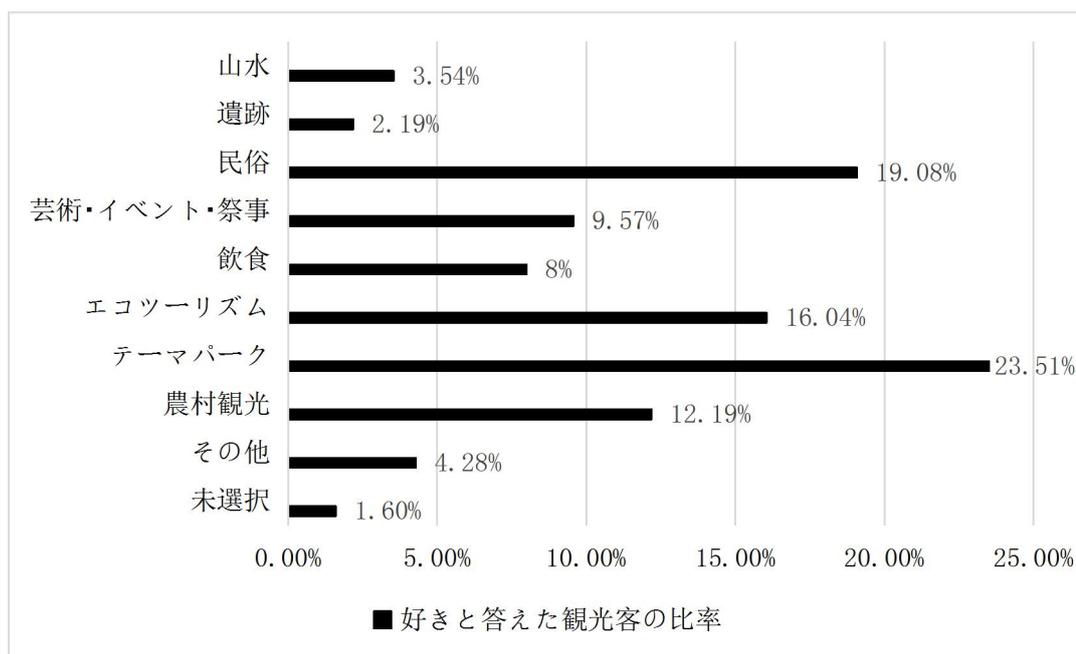


図5-5 観光客による泰安市観光資源の評価

2014年泰安市旅游業発展統計分析報告により、筆者作成

観光客がより長く泰安市に滞在するように、泰安市政府は「泰山だけに依存することなく、多くの

観光地を開発する」と定め、従来の「山水観光、朝聖(巡礼)、遺跡観光」を中心とする泰山観光から多面的な泰安市観光に変更している。そのため、泰山の延長線上にある観光資源が開発されつつある。2011年、泰安市は「關於實施蔬菜等十四大產業振興規劃的指導意見(野菜などの14の産業を振興する意見)」を制定し、「野菜、食糧、農村観光」などの14の産業を振興させ、一山(泰山)一城(泰安市)を中心に、一帯(泰安市を囲む農村地域)の農村観光を発展させると明記している。それに応じて、2011年、岱岳区政府は泰山の相乗効果を利用し、泰山の周辺地域に農村観光を発展させ、「泰山観光、岱岳休閒(泰山を観光する、岱岳区でレジャーをする)」というスローガンを打ち出した。そのため、岱岳区は「劉老根大舞台」、「太陽部落文化景区」、「泰山温泉城」などのレジャー施設を建設することや、農村地域で農村観光を発展させることに力を入れている。里峪村は自然が豊かで、果実が多く、人情味あふれる地域であるため、岱岳区政府はこれを「重点的に発展させる村」と指定し、「果実狩りだけではなく、多面的な農村観光を行い、さらに市外の観光客を誘致する」と宣言した。そのため、里峪村のインフラ整備の投資をはじめ、村民委員会が先進地域への視察、農村観光経営者の研修なども泰安市政府により実施されている。一方、里峪村の観光企画書では「泰山の一番近くにある泰山地区の民俗と農業体験できる村づくり」を目指している。

このように、里峪村における農村観光は従来の「泰山観光」に加え、「泰山を中心とする観光」の政策や農村観光を発展させる政策のもとで、展開している。

2.4.2 ブランド化された里峪村の農家楽

農村観光を発展させる政策の制定と実施が政府によるものであるのに対して、農村観光の担い手は農家楽経営者である。農家楽は、農村住民が都市住民を中心とする観光客に食事、体験、宿泊などのサービスを提供する一方、食事や宿泊等から収益が得られ、自分の生活・文化等を蓄積することができる経営方式である(周ほか 2010)。里峪村では、1990年代から果実狩りが開始され、その後、観光客の要望に応じて農家民宿、農家レストランといったサービスが提供されるようになった。現在、「双改」をした12軒の農家は農家楽を経営し「泰山人家」というブランド名が付けられている(表 5-2、図 5-6)。「泰山人家」は、泰安市で「双改」を行った農家楽を経営する農家を指し、泰安市の農村観光のブランドとして対外的に宣伝している。また、里峪村では緑化率が高く、一年中緑と花が見られるため、さらに「春天里峪」と定め、観光客には「百花繚乱の春には、泰山にある農家に遊びに行こう」という宣伝をしている。

表5-2は農家楽経営者の情報を表している。これによると、農家楽経営者は40、50代が多く、子供が学校に通ったり、他地域で働いたりしているため、農村観光に従事する時間が確保できる。また、聞き取り調査によると、この年齢層の人は出稼ぎをしたく、特別な技能がなければ採用されず、子供の扶養や孫、親の世話などをせざるを得ないため農村にいる者が多い。さらに、里峪村は、山地が多く、一人当たりの耕地が少ない。しかも、この村には「30年一分地¹⁵⁾」の規定があり、多くの村民は自分の名義の耕地を所有しておらず、家族を養うため、農村観光を始めたという農家もある。例えば、6番農家楽経営者は、雲南省から里峪村に嫁いだが、居住30年未満のため、本人、娘、孫の名義の耕地はなく、生活のため、農村観光を開始したとのことだった。

表5-2 里峪村における農家楽経営者（2015年）

番号	経営者	家族構成	事業内容	収容人数	事業の特徴
1	46歳 女性	夫婦、息子	食事、宿 泊、釣り	食事：80人 宿泊：10人	兄の家で経営、家の南には池があり、釣りに来る客に食事を提供
2	49歳 男性	夫婦、息子	食事、宿 泊、体験	食事：60人 宿泊：8人	共産党員、前村長、 観光客用の宿泊施設を新築
6	47歳 女性	夫婦、娘、 孫二人	食事 体験	食事：50人	経営者は雲南省の出身、 雲南料理・自家製の酒でもてなし
7	48歳 男性	夫婦、娘、 息子	食事、宿 泊、体験	食事：50人 宿泊：6人	現村長、共産党員、 里峪村農村観光のリーダー
10	43歳 女性	夫婦、娘二 人	食事、宿 泊、体験	食事：30人 宿泊：8人	Uターン者、村内ではリピーター客が最も 多く、評判が高い
11	48歳 男性	夫婦、海外 にいる息子	食事、宿 泊、体験	食事：100人 宿泊：20人	田園風景、インターネットで宣伝、 客室を新築、駐車場を整備、
15	52歳 女性	夫婦、息子	食事 体験	食事：60人	川魚料理が得意 10年前、個人出資で「双改」を完成
21	55歳 女性	夫婦、娘二 人	食事 体験	食事：30人	石で建築された家、 動物とのふれあい
22	41歳 男性	夫婦、息子、 娘	食事 体験	食事：30人	共産党員、山菜料理が得意 自然環境の大切さを強調
23	49歳 男性	夫婦、夫の 母、息子	食事 体験	食事：30人	共産党員、80代の女性（経営者の母親） が伝統的な田舎料理作りを担当
24	60代 男性	夫婦、海外 にいる息子	食事 体験	食事：50人	生きがいのため 泰山文化を展示・宣伝
25	44歳 女性	夫婦、息子 二人	食事 体験	食事：50人	10号農家の従姉 鶏の炒め物・山菜料理・麺類が得意

番号：「双改」した26軒の農家のうち、営業可の農家につけられた番号である。（図 5-6参照）。

家族構成：子供一人の場合、息子、娘のみを記入している。

収容人数：大まかな数字を記入しており、子供の添い寝などは確認していない。

体験：体験の内容はさまざまであり、季節ごとの野菜、果実の収穫体験以外には、豆腐作り、鶏の世話などもできる。

12軒の農家楽経営者への聞き取り調査により、筆者作成

各農家は条件が異なっているため、観光客に提供するサービスは一致していない。12軒の農家楽経営者は観光客に地元素材を活用した田舎料理を提供できるが、食事の内容はそれぞれ異なっている。里峪村は、鶏の炒め物、香椿を利用した山菜炒め、豆腐料理、煎餅（小麦粉や雑穀粉を水でといて薄く焼いた食べ物）などが伝統的な料理である。これらの料理に使用する食材は農家が飼育し

ている鶏や、自家生産の野菜であるため、観光客から良い評判を得ることができた。ほとんどの農家では近所にある果樹園や野菜畑で自ら食材を収穫する体験ができる。また、5軒の農家は自宅を改装したり、部屋を新築したりして観光客に宿泊サービスを行っている。7軒の農家は家が狭い、また従業員が少ないなどという理由から、食事と体験のみを行っている。

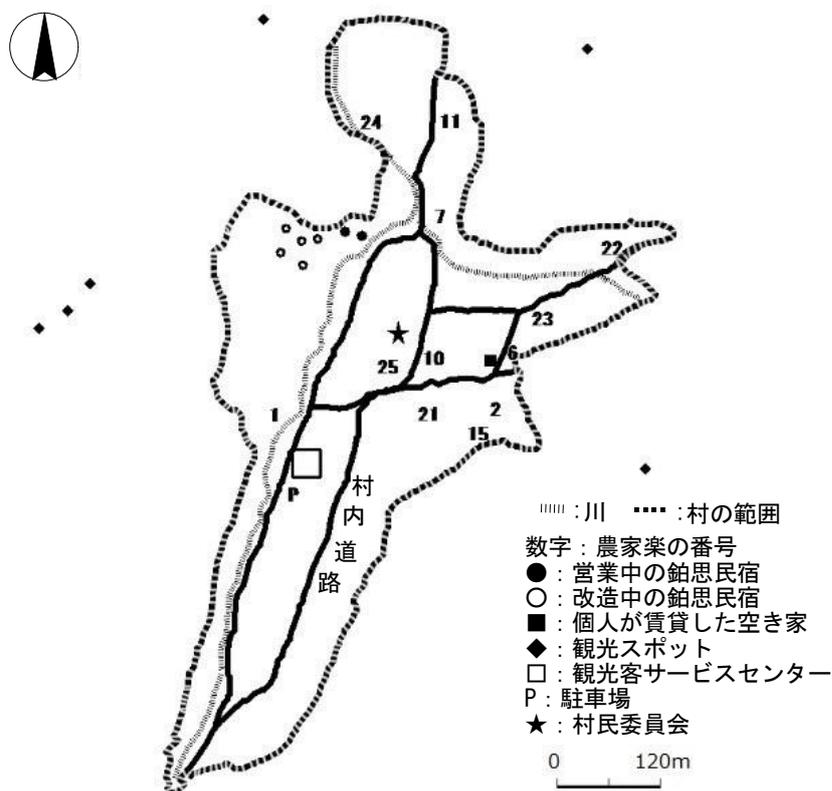


図5-6 里峪村における農家楽の分布（2015年）

現地調査により、筆者作成

観光客により良いサービスを提供するために、村民委員会、農家楽経営者などの関係者はさまざまな努力をしている。聞き取り調査によると、岱岳区政府はSNS・テレビ・新聞によって里峪村の農村観光を宣伝している。村民委員会は農家楽経営者の研修会の開催（表 5-3）、先進地域への視察、双改の実施・監督などに力を入れている。一方、村民は家の装飾、料理の研鑽などを行い、観光客がより快適に過ごせるように、Wi-Fiや有線テレビなどを設置している。

表5-3 里峪村における農家楽経営者の研修

テーマ	研修内容（例のみ）
料理	有名なホテルの料理人を招き農家楽経営者に旬の食材を使う料理方法を直伝
衛生	食中毒の予防方法、まな板の使い分け、二次汚染の予防など
緊急事項	緊急事項（火事・観光客がけがをする時など）が起こった時の対応方法

村民委員会への聞き取り調査により、筆者作成

このように、農村観光経営者は観光客に高質なサービスを提供しているため、多くのリピーターが里峪村を訪れている。特に、週末、五一（メーデー）、十一（国慶節）などの祝日や、果実が熟す時期には一日に村の人口の数倍の観光客が来訪するため、農家楽経営者は短期間雇用で人を雇い、地域の雇用に寄与している。農村観光からの収入は子供の教育や生活改善に使用されており、三農問題の解決にもつながっている。しかし、同時に多くの観光客が来訪し、農家楽のみの接待では限界があるため、農家楽を経営できない農家も食事や果実販売などのサービスを観光客に提供している。反面、平日の観光客が少ないことが村の重要な課題であり、解決を迫られている。

2.5 広域連携とする農村観光：「里峪風景区」の設置

里峪村は泰山からの影響を受けて、観光農園を皮切りとして独自に農村観光を展開している。また、この村は積極的に他地域と広域連携をしている。道朗鎮政府は鎮の北部を「北部生態旅游区」と定め、里峪村とその周辺の村の農村観光を発展させている（図 5-2）。そのため、里峪村は周囲の村の観光資源を活用し、「里峪風景区」の設置を提起し、広域の地域との連携を図っている（図 5-7）。



図 5-7 広域連携図

里峪村のパフレットにより、筆者作成

里峪村は村内に歩行者用の散策コース（図 5-7 左上の青い実線）を作成し、さらに道朗鎮の北部に位置する9つの村と連携し、自転車用の散策コース（図 5-7 右下の赤い実線）を企画し、「野外騎行」のイベントを周囲の村まで拡大してきた。周囲の村にある観光資源を利用し、広域観光を実施することで、より多くの観光客を誘致することができた。このように、単なる農家楽もしくは一つの村における農村観光に限らず、多様な観光が楽しめるようになったことで、農村地域で行われる広義の農村観光に変化している傾向がみられる。また、観光客は一つの村を観光するだけでなく、それぞれの好みに応じて周辺の村も観光できるようになった。

このような広域連携の観光の相乗効果を利用し、里峪村の収入は増加している。調査時点では周囲の村には宿泊や食事を提供する農家はなく、里峪風景区で観光した人々は里峪村で農家楽のサービスを利用するだけであった。里峪村を訪問する総観光客の1割は、他の村の観光資源に誘致され、里峪村の農家楽サービスを利用しにきたと推算した¹⁶。そして、後押しされた周囲の村も発展でき、地域全体が潤ってきた。しかし、このような広域連携は村落間に収入の差をもたらした。その結果、村民の不満や無駄な競争、また問題が起こった時の責任の所在などの課題が指摘されている。

2.6 新しい農村観光の展開

2.6.1 「里峪旅游開発有限公司」の設立

里峪村における農村観光の展開に重要な役割を果たしている村民委員会のメンバーは、それぞれ村民委員会の固有の仕事があり、かつ里峪村における農村観光が急速に展開しているため、村民委員会のみが人員不足になっている。そのため、2013年、村民大会の承認による「里峪旅游開発有限公司（以下、有限公司と略す）」が設立された。有限公司は村民委員会に所属し、村の農村観光の展開にかかわる諸事業を行っている（表 5-4）。

表 5-4 里峪旅游開発有限公司の事業内容

事業項目	事業内容
宣伝活動	イベントの企画・実施、マスコミとのやり取りなど
交流活動	外部からの研修者の受け入れ、他地域への研修を企画・実施など
人材育成	研修会・勉強会の開催、新しい農家楽経営者の育成など
観光開発	現有観光地の管理・保護、新観光地の開発など
その他	ガイドブックの作成、観光ツアーの企画、観光客の統計など

里峪旅游開発有限公司への聞き取り調査により、筆者作成

有限公司は農村観光の展開に専念し、従来村民委員会が行う仕事に加えて、新たな事業を開始し、農村観光の展開に寄与している。例えば、外部からの研修者を受け入れる事業を行い、2015年5月には初めて山東省荷澤市の団体を受け入れ、宿泊、食事の提供による収入を得ることができた。これは村の農村観光を宣伝する絶好の機会であった。このような収入はいったん村民委員会に納め、

年末に村民に分配したり、村のインフラ整備に充填したりしている。また、2013年10月にはガイドブック「泰安市岱岳区道朗鎮里峪村農家楽休閒游活動手冊（泰安市岱岳区道朗鎮里峪村農家楽觀光ガイドブック）」を完成させた。さらに、一部の觀光統計調査が開始され、数字に基づく觀光客の數・年齢層・職業・消費嗜好などの分析ができるようになった。

2.6.2 賃貸の出現

里峪村では、数十年前に建設された石造りの家が狭いため、子供の結婚などをきっかけに新築に引っ越す人が多かった。また、出稼ぎを機に都市に定住した人や、大学卒業後都市に就職した人もいる。そのため、空き家が増加しており、その活用は里峪村だけでなく、中国がこれから直面する農村社会問題であると指摘されている。

里峪村は村の空き家を活用するため、個人もしくは会社に賃貸している。その条件はいずれも「20年間の契約である、村の風景を破壊しない、空き家を大きく改造しない、周囲の村民との友好関係を維持する」などと決められている。現在、個人が借りた空き家は一軒のみである。借主は泰安市内に住んでおり、10年ほど前、果実狩りで里峪村を訪れた際、村の魅力を感じた。その後、里峪村を訪問する頻度が高くなり、仕事の都合で移住ができないが、週末や祝日に自由に泊ることができるように、空き家を借りた。彼は空き家の内部を装飾し、部屋の周辺に野菜、花、果樹などを植えている（図 5-6、写真 5-8）。週末になると庭の世話や村内の美景鑑賞などを満喫している一方、親友、同僚などを村へ招待し、村民との交流も図っている。



写真 5-8 個人が借りた空き家

筆者撮影

2013年、里峪村はより農村観光を展開するため、北京にある某観光コンサルティング株式会社（以下、A社と略す）に観光企画を依頼した。このA社は観光企画以外に北京の近郊農村に「鉅思民宿」というブランド名で民宿事業を展開している。聞き取り調査によると、里峪村の農村観光をSWOT

分析¹⁷したA社社長は、7軒の空き家を賃貸する契約を結び、改装してから農家民宿として経営することを決断した。A社は専門知識を生かし、空き家を大きく改造せず、繊細なところを工夫して、数十年前の生活環境をありのままに再現した。調査時点（2015年7月）には、2軒の民宿（図5-6、写真5-9、5-10）を営業しており、中国からの観光客のみならず、海外からの観光客にも絶賛されている（泰安新聞 2015年7月30日）。この民宿の利益の一部は村民委員会に納入することになっている。それ以外に、宿泊観光客による村内の散策、農家楽の食事サービスの利用が、村の農村観光の展開に寄与しているといえる。



写真 5-9 民宿に改造された空き家の外部様子
筆者撮影



写真 5-10 民宿に改造された空き家の内部様子
筆者撮影

このように、空き家の活用は、地域の潤いや都市と農村の交流に寄与している。また、里峪村の農家楽は家が狭く、宿泊できる農家が少ないため、これらの空き家利用は農家楽と競合することなく経営できる。一方、農家楽経営者は空き家賃貸から刺激を受け、「北京の会社に負けないように頑張る」と前向きに話した。しかし、潜在する競争¹⁸、賃貸されていない空き家周辺のインフラ整備などの問題があり、これらは里峪村が将来直面する課題ではないかと考えられる。

このような農村にある空き家賃貸は、現在都市化が進んでいる中国においては稀である。しかしこれから中国の農村も高齢社会に入り、農村過疎化などに直面するため、空き家賃貸は、農村文化の維持や古民家の再生などの観点から、活用していくべきではないかと考えられる。

3. 里峪村における農村観光の展開を促進する諸手段

3.1 里峪村における「基地¹⁹」の設置

里峪村は、周囲の村との広域連携を行う一方、学生の教育基地として学校との交流も盛んである（表5-5）。美しくのどかな農村風景が広がっている里峪村は、写生や撮影に適した場所として知られており、泰山学院の「美術学院」、山東農業大学の「水利土木工程学院」は学生の写生基地をこの村に設置している（写真5-11、5-12）。それらの学生は定期的に写生のため村を訪問する。泰安新

聞（2014年5月27日電子版）によると、里峪村は30万元を投資し、「展望台」、「学生写生基地」、を建設した。また、聞き取り調査によると、「農村書屋（村内にある図書館）」は学生にも開放されている。このような優れた自然環境やインフラ整備は学生の学習に役に立つ一方、学生は村での写生を終えた後、農業体験をしたり、農家楽のサービスを利用したりして、村民との交流を深めながら、農民の収入増加に寄与している。そして、里峪村で写生した作品は絵画展に出品されたり美術展で受賞したりすることなどもあり、村の宣伝につながっていると言える。

里峪村は泰山職業技術学院の実習基地として、毎年多くの学生を受け入れている。学生は観光客サービスセンター、各農家楽経営者の下で実習する。村民委員会は不定期にこの学院の先生（主に観光学系の先生）を招き、村民を対象に観光についての講座を開く。このように、互いに学びあうことができ、この学院と村民の双方から良い評判を得られている。また、里峪村では小学生を対象にした体のトレーニング、農業学習・体験の「拉練活動」も行っている。小学生は体を鍛えるとともに、農業や食の知識が学習できる。

表 5-5 里峪村における基地の設置

基地名	学校	実施内容
写生基地	泰山学院 山東農業大学	村内写生、農業体験、村内観光
実習基地	泰山職業技術学院	農家楽・観光客サービスセンターでの実習、農業体験
拉練基地	泰安市内の小学校	トレーニング、農業学習・体験

拉練：もともと軍隊用語である。子供を自立させるための能力を養ったり、短期間のトレーニングなどを行う際にも使う。

泰山学院、山東農業大学：両方とも泰安市内にある大学である。

村民委員会への聞き取り調査により、筆者作成

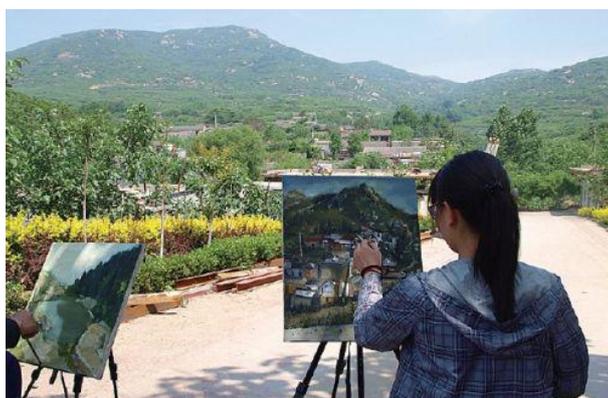


写真 5-11 写生の様子

村民委員会による



写真 5-12 写生基地にある山東農業大学水利土木工程学院の看板

筆者撮影

さらに、多種多様な果実が栽培されている地域であるため、「泰安山水聖生物科技有限公司（泰安

市内の会社)は「果実加工基地(果実を加工する基地)」を、山東農業大学は「水果研究基地(果実を研究する基地)」を、それぞれはこの村に設置している。

このように、里峪村は学校や研究機関の基地として、来訪者に食事や宿泊などのサービスを提供し、村民の収入につながっている。また、素朴な村民と元気な学生との相互交流は、双方に感動、刺激、生きがいなどを与える効果があり、元気な村づくりに寄与していると考えられる。そのため、これらの基地の設置は、里峪村における農村観光の展開に重要な役割を果たしていると言える。

観光客により良いサービスを提供するため、里峪村は周囲の村と広域連携をし、里峪風景区を設置した。後押しされた周囲の村も発展でき、地域が潤ってきた。また、都市農村交流を図るため、いくつかの基地が設置され、収入を得るだけでなく学生の教育にも寄与している。これらの広域連携は里峪村における農村観光の展開には重要な役割を果たしているといえる。

3.2 誘客するための多彩なイベント

ある目的を持つ人、団体、企業がその目的を達成するために特定の場所と機会、期間に、多くの人々を対象として適切な行事や催事を企画し、計画を採択して構築するのがイベントである(Holst 2010)。イベントの目標は需要の拡大、観光客の誘致などであり、投資、知名度アップ、住民の統合・プライド形成などの地域活性化効果が期待されているため、その開催が地域開発の手段として重視されている。根岸(2015)は、文化遺産を活用した観光客誘致は有形よりも無形の文化遺産が活用され、かつ短期間で終了するイベントに依存する傾向が強いと述べた。里峪村では観光客を誘致するため、イベントを活用している(表5-6)。

表5-6 里峪村におけるイベントの実施

イベント名	実施内容	実施時期	参加者
野外騎行	競技用自転車に乗り、村内の環山路とその両側の風景を楽しむ。その後、観光農園、宿泊、食事などを利用する人が多い。	10月1日 前後	野外騎行愛好者 撮影愛好者 申し込みが必要
篝火晚会	日中にテントを張り、夕方に火を焚く。観光客は野外で踊ったり、歌ったりして、納涼する。また、テントに泊まる人もいる。	夏	自由参加 申し込みが必要
賞花游	季節ごとの花を楽しみ、その後観光農園、宿泊、食事などを利用する人が多い。	2~6月	自由参加
采摘游	季節ごとの果実を収穫し、その後観光農園、宿泊、食事などを利用する人が多い。	4~9月	自由参加

野外騎行：里峪村に沿った山道をサイクリングするイベントである。

篝火晚会：キャンプファイヤー 采摘游：収穫体験 賞花游：花見

村民委員会への聞き取り調査により、筆者作成

これらのイベントについて、以下に説明する。まず、「野外騎行」については、参加者は泰安市

民だけでなく、市外からの参加者も多数である。このイベントをきっかけに、村内の道をさらに整備することができた。参加者は「騎行」を終えた後、村内にある農村観光の施設や村民が提供するサービスを利用したりすることにより、村民の収入増加に寄与している。都市住民は運動不足であり、このイベントは運動と観光を融合した活動であるため、新聞やインターネット記事などに大きく取り上げられている。例えば、2013年10月21日の中国旅游報には、「泰安市里峪村開展農家樂休閒游(泰安市里峪村における農家樂レジャー観光の発展)」というテーマでこのイベントを報じた。

次に、「篝火晚会」は里峪村の美しい星空を宣伝するために、夏の時期のみに実施されるイベントである。ロマンチックなイベントとして人気があり、夜遅くまで盛り上がる。参加者には若者が多く、SNSを使って里峪村を宣伝したことから、新規の若年層の観光客が村を訪れるようになった。彼らは活発に村民と交流し、村に活力をもたらしてきた。しかし、村は森林が多く火災になる恐れがあり、テントを張ることによる植物への害や、焚き火・騒音などによる野生動物の生存環境の破壊などを心配する声がある。調査時点でも賛否両論があった。

最後に、果実が多い里峪村は毎年の収穫時期になると多くの観光客が来訪する。これは「采摘游(果実狩り)」として人気がある一方、果樹の花や、他の花も観光資源になり、爛漫と咲き誇る花は観光客を引きつけている(表5-7)。観賞の時期になると、多くの家族連れの観光客が子供の教育を兼ねて訪れてくる。もっとも観光客に好まれるのは香椿の収穫であり、イベント期間中ほぼ全村民が受付、案内、警備、会計、包装などに従事するほど規模が大きいものとなっている。

表5-7 里峪村における賞花游、采摘游の時期(2015年)

賞花游(花見)		采摘游(果実狩り)	
花の種類	開花時期	果実・山菜の種類	収穫時期
二月蘭	2月中旬	香椿	4月上旬
サクラランボの花	3月下旬	サクラランボ	5月上旬
槐の花	5月上旬	リンゴ	7~9月
リンゴの花	5月中旬	クルミ	8月下旬
山査子の花	5月中旬	栗	9月上旬
クルミの花	5月下旬	山査子	9月下旬
栗の花	6月中旬		

里峪村パンフレットにより、筆者作成

上記のイベントは、里峪村の知名度を向上させたうえ、村民の収入増加にもつながっている。より円滑にイベントを実施するため、里峪村は泰安市をはじめ、岱岳区や道朗鎮からの補助金を利用し、村のインフラ整備をさらに整えた。また、都市と農村の住民は互いに交流ができ、それぞれの地域の魅力を分かち合い、「人、もの、情報」の行き来が活発化している。しかし、閑散期の誘客や環境保護の対策などが求められている。

3.3 「微信」を利用する宣伝活動

現在の社会は、「産業社会」から「情報社会」への文明史的な転換期である（山村 2015）。「情報」が重視され、海外向けに観光情報を翻訳し、情報配信した結果、海外からの観光客が増加し、村おこしに成功した事例もある（鈴木 2015）。里峪村では観光客を誘致するため、新聞、テレビなどのコンテンツ情報発信をしたり、泰安市が主催する観光博覧会に出展したりして、村を宣伝している。特に注目されているのは、SNS の「微信」（日本語：ウィーチャット、英語：WeChat）を利用する宣伝である。

近年ではインターネットやスマートフォンの普及により、SNS の利用人口は増加し続けている。SNS は新しい形のコミュニケーションの手段であり、趣味などを通じてつながったユーザー同士がコミュニケーションをとる場でもある（石野ほか 2014）。微信は中国大手 IT 企業「テンセント」（中国名：騰訊）が開発した無料アプリであり、2011 年 1 月に中国でサービスが始まり、同年 4 月には海外向けに「WeChat」として開始された。このアプリは、文字情報にない訴求力があり、リアリティな動画がみられ、コメントや画像といった形で、他のユーザーとコミュニケーションをとることができる。現在、200 以上の国・地域には 5.49 億人のユーザーがおり、中国のスマートフォン所有者の 90% は微信を使用している（騰訊 2015 年第一季業績報告）。同報告によると、微信ユーザーの平均年齢は 26 歳で、ユーザーの 55.2% が毎日 10 回以上微信を開く。また、微信ユーザーはインターネット上の「友達」になってから、相互にアップロードされたコメント、画像、動画を閲覧できる。築いた信頼関係を利用し、宣伝効果が一層高まると考えられる。コストをあまりかけずに、宣伝効果が期待できるため、微信を利用し発信する会社、団体などが多い。

以下、里峪村が微信を利用し農村観光を宣伝するため、整えた体制を説明する。村民委員会のメンバーである「計生委主任²⁰」唐氏は高校を卒業後、パソコン専門学校でパソコン、カメラの操作、ウェブサイトの作成などについて専攻した。唐氏はこの知識を活かし、四季おりおりの村の風景、イベントを行った時の盛況ぶり、村民の日常生活などを撮影し説明文をつけたうえで「支書²¹」康氏に報告する。康氏はこれをさらに編集し、コメントした後、「管区主任²²」李氏に「村の情報発信」を申し出る。李氏はこれらの編集されたデータを確認し、コメントして、「道朗鎮旅游発展と企画」の担当者である劉氏に連絡する。劉氏はデータを審査する委員会²³を迅速に開催し、「微信で発信するかどうか、いつ発信するか、発信する内容など」について議論する。委員会の同意を得たデータはまず道朗鎮の「公共微信（道朗鎮が管理している公式微信）」で発信された後、里峪村の「公共微信（里峪村が管理している公式微信）」はこれを共有したり、唐氏、劉氏などの関係者や道朗鎮に関心がある人々の個人の微信でこれを転送したりする。その後、里峪村を微信でフォローする人々や個人微信のインターネット上の友達はこれを閲覧し、コメント・点贊（「いいね」を押す）ができる（表 5-8、図 5-8）。厳選した微信発信は継続的に里峪村の宣伝をし、村のファンの増加に寄与している。ファンはさらに情報を転送することから、村の宣伝がより広範囲に行えると思われる（図 5-8）。

表 5-8 微信発信の担当者 (2015 年)

行政単位	担当者	作業内容
村	唐氏、康氏	撮影、編集などの情報収集
管区	李氏	情報の確認、連絡、編集など
道朗鎮	劉氏	情報の審査、発信

村民委員会への聞き取りにより、筆者作成

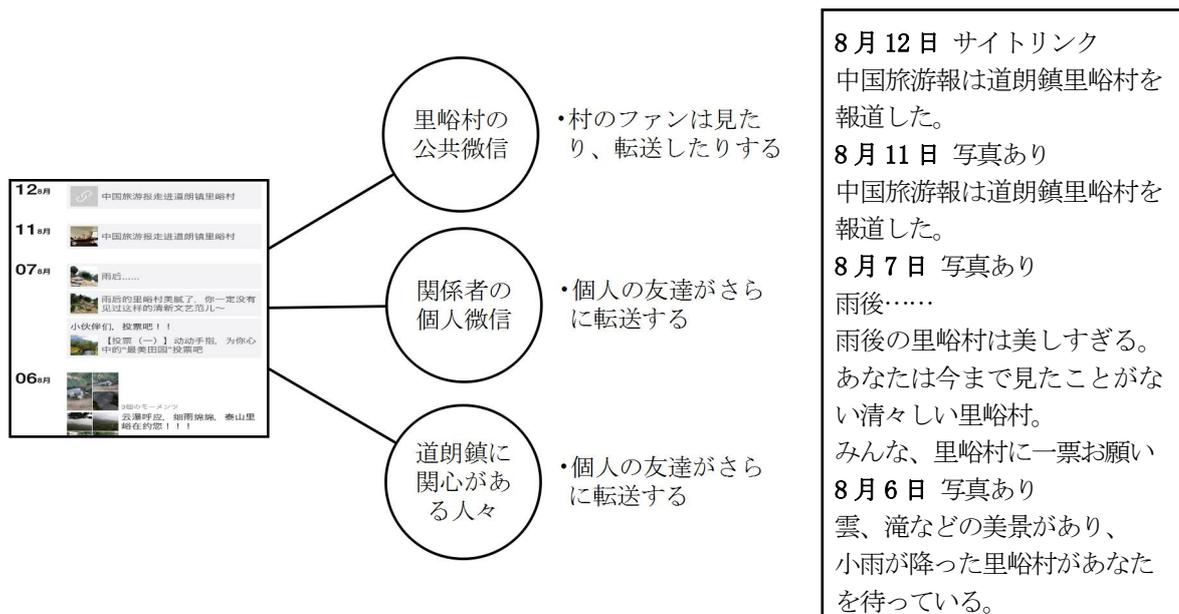


図 5-8 里峪村における微信発信のプロセス

(右は微信内容の日本語訳である) 村民委員会への聞き取り調査により、筆者作成

一方、以上の政府の動きに対して、農村観光を経営する農家は個人的に宣伝を行っている。たとえば、名刺やチラシの作成、果実が成熟する時期に常連客への連絡などがある。しかし、IT 技術および知識が不足しているため、農家はホームページの開設を検討する段階にとどまり、調査時点では開設に至った農家は一軒もなかった。

さらに、2015 年 5 月 15 日から 2 か月がかりで、有名な俳優たちが演じたドラマ「我和我的小姨子們（私と私の妻の妹たち）」が里峪村で撮影された。2016 年 1 月 1 日に中国中央テレビで上映される予定である。ドラマの撮影地となった里峪村は、一層知名度が向上し、農村観光の発展をさらに促進すると考えられる。

このように、里峪村は SNS アプリ 微信をはじめ、新聞、テレビでの宣伝を活用し、村の農村観光を展開している。

4. 農村観光の展開による地域への影響

この章においては、主に農村観光の展開により、地域にどのような影響を及ぼしてきたかについて

て考察したい。それを調査するため、2015年6月に当該地域における泰安市旅遊局に認定された12軒の「農家楽」経営者へのアンケート調査を行った。アンケートには農家楽経営者個人と家族の属性、農村観光を始めたきっかけ、公的な支援、農村観光の内容、収入、生業変化、アイデンティティの変化、地域の変化などについての質問を設けた。その中で農村観光による農家の生業変化を明らかにするため、改革開放以前、1990年代、2015年6月の三段階に分け、その時点における各農家の生業を調査した。また、農村観光の展開による地域住民のアイデンティティの変化と地域の変化について調査した。調査期間中、筆者は12軒の農家を訪問し、対面式のアンケート調査を行った。2015年6月に調査を終えてアンケートを集計する際、より詳細に分析するため2015年10月と12月に電話による補足調査を行った。また、アンケート調査以外には、村民委員会や観光客に聞き取り調査した。以下、これらの調査に基づき、分析した結果について述べる。

4.1 農村観光経営者の個人属性

家族形態については、12軒中「夫婦のみ」と「夫婦と子ども」の核家族は10軒であり、最も多い。「農村観光を始めたきっかけ」についての回答は図5-9のようになる。「利益のため」という理由が一番多い。続いて、「公的な支援」になる。この質問は複数回答を可としていたので、利益と公的な支援により、農村観光を開業したのが最も多いと言える。

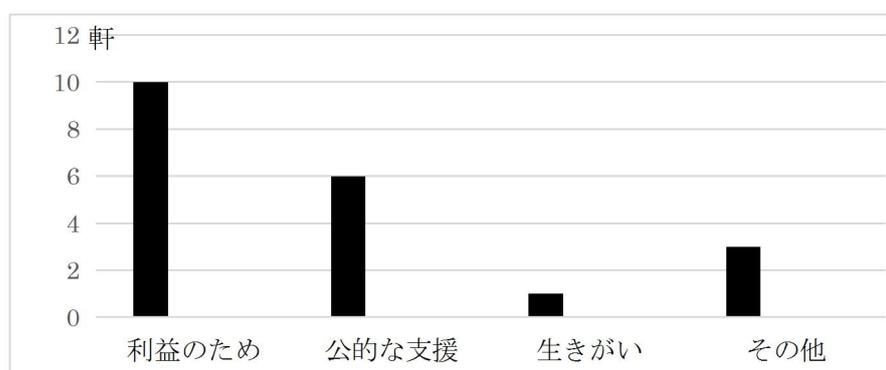


図5-9 農村観光を始めたきっかけ（複数回答）

農家楽経営者へのアンケート調査により、筆者作成

里峪村では、農村観光を始めた当時、観光農園のみを行っており、農家民宿、農家レストランといったサービスはなかったが、農民は利益のために、農家楽を開業したという。その後、「泰山観光」に加え、「泰山を中心とする観光」の政策や農村観光を発展させる政策の下で、農家楽による食事や宿泊のサービスが実施されるようになった。また、積極的に農村観光を展開する里峪村の村民委員会は、農家楽をブランド化し、多彩なイベントで観光客を誘致している。そして、里峪村における農村観光の展開にとどまらず、広域連携で周囲の村の観光資源を活用し、里峪風景区を設置し、学校、研究機関との交流を行っている。その結果、里峪村における農村観光は多様に展開している。なかでも従来と異なり新たに出現した空き家の賃貸はさらに農村観光の展開を促進している。

4.2 経済への影響

まず、里峪村の収入について考察したい。この村は1990年代から観光農園を始めたが、訪れる観光客は少なかったため、観光収入はわずかであった。2000年以降、村民委員会は多くの手段を用いて農村観光を展開し、多彩なイベントの実施、里峪旅游開発有限公司の設立、民宿用空き家の賃貸による収入が得られるようになった。特に、2010年以降、観光客の増加によって、村の収入は増えつつある(図 5-10)。この収入は村民に公平に分配する以外に、村民委員会がこれを村のインフラ整備、村民の福祉施設の建設、農村観光の宣伝に利用している。また、農村観光の担い手の育成や先進地域への視察もこの収入により、実施されている。さらに、村内外の観光地の整備や観光案内標示の費用を捻出し、観光客により良いサービスを提供できている。

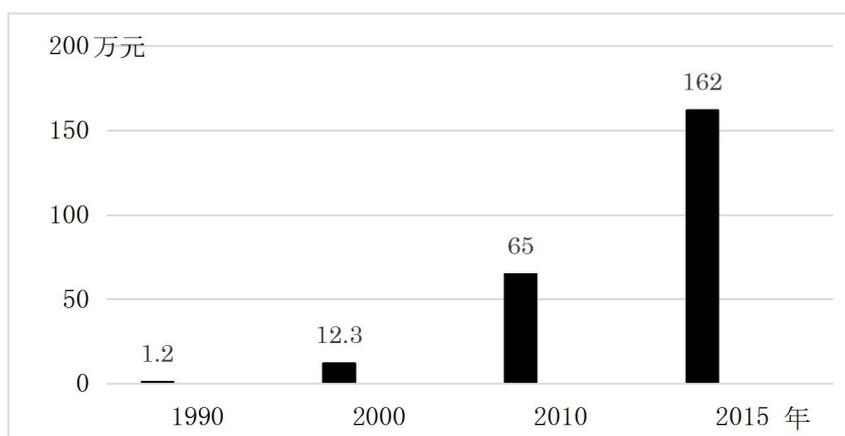


図 5-10 里峪村における観光収入の変化 (1990～2015 年)

村民委員会への聞き取り調査により、筆者作成

次に、アンケート調査によって、12軒の農家楽経営者の収入源の構成は変化していることがわかった。里峪村の村民は、1980年代から果実販売を行うことによって、生計を立てていたが、その後、出稼ぎによる収入が多くなった。1990年代から、観光農園の経営が始まるとともに、収入源が変化した。現在、観光農園や農家楽による収入が多いとのことである。12軒の農家楽経営者の年平均収入は約4万元²⁴であるのに対して、里峪村の村民の収入は一世帯約3万元であり、農村観光は農家楽経営者の収入に寄与していると言える。そのため、一般家庭は農家楽を経営できるよう努力しているようである。しかし、このような村内の「格差」は里峪村の将来の課題にもなり、解決すべき点であると考えられる。

最後に、生業変化についてである。農村観光の展開によって、里峪村では新たな産業、いわゆる第一次産業と第三次産業を融合した産業が生み出された。自宅を改装したり、観光客用の客室を新築したりして、自家生産の野菜や鶏肉などを利用した料理を提供するといったサービス業に従事する農家が多く存在している。こうしたサービス業に従事した結果、村民は単純な農業もしくは出稼ぎから解放され、出稼ぎを抑制する効果が見られたが、調査時点では、農村観光で生業を立てている農家は一部にすぎない(表 5-9)。

表 5-9 里峪村における農家楽経営者の生業変化

対象地	番号	生業変化の有無	生業の変化過程		
			改革開放以前	1990年代	2015年6月
里	1	有	☆	☆	□
	2	有	○	△	○
	6	有	○	△	□
	7	無	○	○	○
峪	10	有	○	△	□
	11	有	☆	△	□
	15	無	○	○	○
	21	無	○	○	○
村	22	有	◎	△	☆
	23	有	◇	○	○
	24	無	○	○	○
	25	有	◎	△	□

○:農業 △:出稼ぎ □:農村観光 ☆:企業 ◇:その他 ◎:不明

農家楽経営者へのアンケート調査により、筆者作成

アンケート調査の結果を見ると、農家の主な収入、つまり生業は改革開放以前の農業を中心としていたが、2015年6月現在、一部の農家が農村観光から収入を得ている。里峪村では農業だけでなく、ほかの産業からも収入を得られるようになったことが分かった。

そのため、岱岳区旅遊局や道朗鎮政府は農村観光の発展に力を入れている。たとえば、農家楽経営者への補助金の給付、農村観光に関するサービスの指導などの公的な支援、研修会の開催などを行っている。一方、村民は家の装飾、料理の研鑽などを行い、観光客がより快適に過ごせるように、Wi-Fiや有線テレビなどを設置している。

4.3 文化への影響

観光業の発展により、地域文化、特に少数民族文化への影響に関する研究が多く行われている。特に、観光化されてから目的地(ホスト側)に多くの観光客(ゲスト側)が入り込み、裕福なゲストは観光地の文化を体験し、ホストの文化を消滅させる恐れがある(李 2011)。一部の農村では、観光客の好みに合わせ、従来の農村文化を歪ませ、「つくられた」農村観光地が多くあった。都市住民は本来の農村文化を体験できず、次第にこのような農村観光地を離れていった。里峪村では、現地調査によると、農村文化は充分保護されていると言える。村民委員会は「村民公約」を作成し、村の観光資源や伝統文化を保護している。例えば、里峪村は村の空き家の賃貸を行っており、空き家の借主は、「里峪村の習慣、文化」を配慮すべきであると規定されている。一方、農家楽経営者も様々な工夫を凝らしている。例えば、11番の農家楽経営者である趙氏は自然環境や山村景観などの農村

にある固有資源を利用し、農村ならではの創意工夫をしている。この農家の入り口はアーチ型の枯れ木で作り、その頂点に赤ちょうちんを2個下げるなどして田舎の雰囲気を出している。また、食事用の客室に置かれた木製の椅子やテーブルは農村風の様式である。趙氏は、これらを周囲の農家から借りたり、買ったりして集め、中には「私の母の嫁入り道具」もあると話した。そして、季節ごとに提供される旬の料理や食事の場所が異なることも観光客にとっては魅力的である。たとえば、夏には、庭や駐車場に出て、満天の星空のもとで食事ができるなどの工夫をしている。そのため、ありのままの農村文化を観光客に展示し、良い評判を得ることができた。

次に、アイデンティティの再発見について述べる。

農村観光の展開によるアイデンティティの変化について、以下の3問を設けた。

農村観光を始める前のあなたについて、質問をします。

①農民であることがよかったですか。

A はい B いいえ C どちらとも言えない

その理由をお書き下さい _____

②里峪村に生まれて、よかったですか。

A はい B いいえ C どちらとも言えない

その理由をお書き下さい _____

農村観光を始めてから、あなたはアイデンティティ

(里峪村で生まれた農民として)の再認識ができましたか。

A はい B いいえ C どちらとも言えない

その理由をお書き下さい _____

中国では、都市と農村の格差が深刻であり、多くの農民は都市で出稼ぎをしている。しかし、中国人は「都市戸籍」と「農村戸籍」に分けられており、農民は都市建設に寄与しているものの、都市住民のように社会保障を受けていない。しかも、都市では3K(危険、汚い、きつい)の仕事に従事しているにもかかわらず尊敬されていなかった。そのため、「農民であることがよかったですか」という質問には、「いいえ」と答えた農家がほとんどであった。一方、里峪村の村民は、里峪村に対する認識が高く、すべての農家は「里峪村に生まれて、よかった」と答えた。その理由としては、地域の血縁関係や村民のつながりなどがあげられる。

「農村観光を始めてから」の質問において、すべての農家は「農村観光を始めてから、里峪村で生まれてよかった」と答え、農村観光の展開は里峪村の発展のきっかけになり里峪村の村民は、自己に対する認識度が高くなったことが分かった。その理由は以下のことが考えられる。まず、村民委員会は農村観光からの収入を用い、村の社会福祉や社会保障に補填している。そのため、村民はこれまでなかった社会保障を受けることができるようになった。また、農民は出稼ぎをせず収入を得られ、生活が安定するようになった。さらに、村内の空き家や老木などは村民にとって日常生活の一部であるが、観光開発によって、これらの資源は観光客を誘致できるようになり、村民は村の

文化とその潜在価値を再発見した。そのため、村民は積極的に農村観光を展開し、Uターン者も見られるようになった。このように、里峪村では、村民は農村観光による金銭を獲得するだけでなく、アイデンティティを再認識し、農村文化に自信を持つようになった。

4.4 地域の変化

上記以外に、農村観光の展開により、里峪村における物価、環境、近隣関係、社会治安、交通、生活習慣、家族構成の変化についてアンケート調査した結果を図5-11にまとめた。そのアンケート調査の内容は下記ようになる。

農村観光の展開による地域の変化は更に「物価、環境、近隣関係、社会治安、交通、生活習慣、家族構成に分け、変化の有無、変化した点」について、質問を設けた。

例：農村観光の展開により、里峪村における環境の変化がありましたか。

A はい B いいえ C どちらとも言えない D その他（お書き下さい）

Aと答えた人に質問します。どんな変化がありましたか。お書き下さい _____

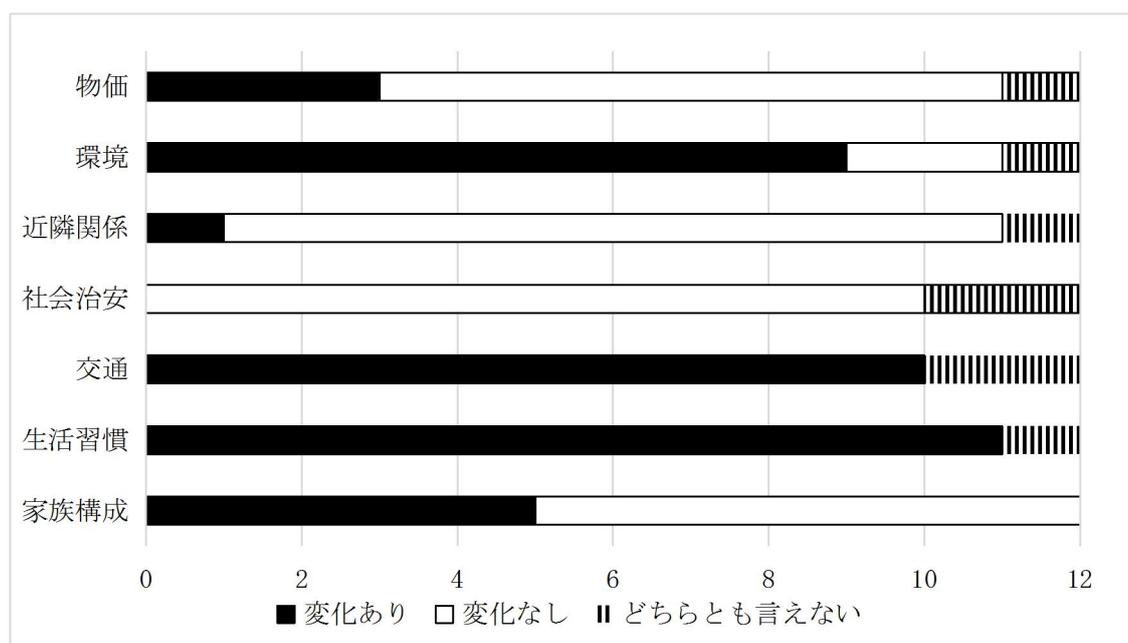


図5-11 里峪村における地域の変化

農家楽経営者へのアンケート調査により、筆者作成

図5-11をみると、里峪村では、農村観光の展開により、環境、交通、生活習慣は著しい変化がみられたのに対して、物価、近隣関係、社会治安はあまり変化がなかった。その原因と変化した内容(主に環境、交通、生活習慣)について聞き取り調査を行った結果、次のようなことが分かった。

まず、物価が変化したと答えた村民はいるが、聞き取り調査によると、村民はこれが経済発展の結果と認識し、農村観光と直接関係ないとの回答があった。また、人情味あふれる里峪村では、調

査時点では近隣関係、社会治安の変化があまり見られていない。しかし、農家兼経営者の平均収入ははるかに普通の農家より多いことが村内の「格差」をもたらしてきた。そのため、これは里峪村における農村観光の展開上の課題ではないかと考えられる。また、「家族構成が変化した」と答えた農家は5軒あり、大家族から核家族への変化が見られた。若い世帯が出稼ぎをしていた時には、多くの子ども達は実家に預けられ祖父母に養育されていたため、大家族を中心とする家族構成であった。農村観光の開業をきっかけとして、農民は里峪村に戻り、観光客により良いサービスを提供するために家を新築するなどして、4軒の農家が大家族から分離し、核家族となった。これは、第6章の「郎徳上寨」でも見られる原因である。しかし、この村では、農村観光の展開により、核家族から大家族への変化も現れた。23番の農家では、経営者の母が手伝いに来た際、作った料理が観光客からの好評を得たのをきっかけに、この家の料理を担当するようになった。その後、息子の家族と同居し、大家族になった。

次に、12軒の農家のうち、農村観光の展開により、「環境が変化した」と答えた農家は9軒あり、環境の変化が見られた。里峪村では緑化率が高く、一年中緑と花が見られるため、村民委員会はこれを「春天里峪」と定め、観光客には「百花繚乱の春には、泰山にある農家に遊びに行こう」という宣伝を行っており、積極的に地域ブランドを構築している。そのため、村の緑化がさらに進んでいる。また、里峪村には、小川や滝が多い。農村観光を展開するため、村民委員会はこれらを整備し、美しく良好な環境の保全と創造に取り組んでいるようである。最後に、里峪村では、生ごみを堆肥に利用し、その他のごみは分別されているため、従来農村観光の展開の課題になっていた衛生問題が一部解決でき、村の農村観光の展開を促進する一因となっている。

第三に、10軒の農家が「交通が便利になった」と答えている。その理由としては、まず、村内外の道路の整備が進められていることが挙げられる。山村である里峪村は、古くから交通の便が悪く、村民が石で道路建設を行ったが、車やバスの走行には適していない。そのため、補助金や村民委員会の出資でアスファルト道路が完成され、自動車の出入りが容易になった。また、かつては里峪村周囲の山の斜面に舗装された道がなかったため、山の斜面にある果樹園の管理が難しかった。現在、観光客用の「環山路」が建設され、果樹園の管理にも利用されている。そして、泰安市中心部と村を結ぶ路線バスが開通し、村民や観光客の移動は便利になってきた。

最後に、「生活習慣が変化した」と答えた農家は11軒あり、農村観光の展開による影響が大きいと言える。第一に、食生活の変化がみられる。この村は小麦を主食としており、アワや小麦粉に水を混ぜ、焼いた「煎餅」が多い。これは、村の主食であり、好評ではあったが、非常に硬いので、食文化が異なる他地域の観光客は硬さを控えた「煎餅」や米飯を求めるようになった。また、村民は地元の食材を利用し、新しい料理を試作している。この影響を受けて、村民の食生活が多様化してきた。第二に、前述したように、里峪村では、農家兼を経営するため、農家は積極的に「双改」を行っており、厨房や、トイレに加え、浴室の整備を行った。彼らは観光客と接するため、入浴や身だしなみにも注意を払っているようである。第三に、生活スタイルにも変化がみられた。以前出稼ぎや果実販売による生活を営んでいた農民は農村観光から収入を得て、農業、子どもの教育、家族団らん、村づくりなどの多彩な生活を送っている。また、聞き取り調査によると、一部の農家は、

リンゴ、栗、クルミなどを栽培し農業を中心とした生活を送っていたが、現在は手間がかかるリンゴの栽培をやめ、農村観光に関わる生活へ変遷しているとのことである。

4.5 その他

また、里峪村における農業の発展および観光客について、聞き取り調査を行った。観光客の増加により、多くの村は農村観光を優先的に発展させ、農業を廃業するケースが少なくない。里峪村では、調査時点において果樹栽培をはじめとする農業が続けられており、果実狩り用のナシやサクランボなどが導入される予定があった。そのため、農業を促進する効果があると言える。

観光客については、村民委員会も農家兼経営者も統計を取っていないが、隣接都市からの観光客が最も多く、地元の観光客に好まれていることが聞き取り調査でわかった。また、里峪旅游開発有限公司は、2013年および2014年の国慶節(10月1~7日)に里峪村を訪問した総観光客4,500人の一部に対し、年齢層・職業・消費嗜好に関する観光統計を行った。里峪旅游開発有限公司によると、学生や中年のサラリーマンの観光客が多く、果実狩りや農家楽を利用するため、この村を訪れたとのことである。そして、村民委員会への聞き取り調査によると、山東省からの観光客の指数を100とした場合、この村を訪問する観光客の指数は河南省(指数:10)、江蘇省(指数:5)、上海市(指数:5)となっている。その他の省、市からの観光客もいるが、現時点ではまだ少ない。これは里峪村における農村観光の展開上の課題でもあり、誘客する工夫が必要であると考えられる。

5. 小括

本章では、既成観光地泰山周辺に位置する里峪村における農村観光の展開とその影響を明らかにした。その結果は以下のようにまとめられる。

里峪村は古くから山の斜面で果樹を栽培していた。改革開放後、果実の需要の拡大にともない、果樹の栽培面積が拡大され、果実の生産は村の主な産業になった。森林が多く環境が優れている里峪村で育てられた果実が市場で良い評判を得ることができたことから、「里峪水果」という地元ブランドが生まれてきた。さらに、周辺の都市に出荷する「果実出荷組合」が設立され周辺の都市に果実を出荷した結果、里峪村の果実は一定の評価がなされるようになった。毎年9月に行われる「泰山国際登山節」は里峪村のリンゴの成熟期と合致し、高評価と更なるロコミの影響で、済南市をはじめとする周辺の都市住民が泰山観光の後、リンゴ狩りのため、村を訪れるようになった。その後、周辺都市の住民は村民との交流を深めながら、村を頻繁に訪問し、季節ごとの果実、山菜などを買い取り、農家の食事を利用するようになった。

一方、中央政府は三農問題が深刻である農村経済を発展させるため、重要な手段として農村観光を推進している。泰安市は、里峪村における農村観光の展開には政策上の動きだけでなく、補助金制度も実施しており、村のインフラ整備への投資を行っている。一部には、農村観光の展開を促進する「双改政策」がある。また、泰山観光から泰安市の広域観光への拡大は里峪村の農村観光の展開を促進している。

積極的に農村観光を展開する里峪村の村民委員会は、農家楽をブランド化し、多彩なイベントで観光客を誘致している。里峪村における農村観光の展開にとどまらず、広域連携で周囲の村の観光資源を活用し、里峪風景区を設置し、学校、研究機関との交流を行っている。さらに、従来のテレビ、新聞などのマスコミに加えて、中国で圧倒的な人気を誇る SNS アプリ「微信」を利用し、村の農村観光を宣伝し、農村観光の展開を促進している。このように、里峪村における農村観光は多様に展開している。なかでも従来と異なり新たに出現した空き家の賃貸はさらに農村観光の展開を促進すると考えられる。

里峪村における農村観光の展開は、農民の収入増加、生活の潤い、地域の雇用につながっている。農村観光から得られた収入は子供の教育、生活改善、村のインフラ整備に利用されている。また、村民は積極的に都市農村交流を図り、村は学生教育の場にもなっている。さらに、里峪村は周囲の村と広域連携を行い、里峪風景区を設置した。それに影響を受けた周囲の村も発展しつつあり、地域全体が潤ってきたため、三農問題の解決に寄与していると言える。

注：

- ¹ 中華人民共和国中央人民政府：世界自然与文化遺産—泰山
http://www.gov.cn/test/2006-03/31/content_241131.htm 2015年6月閲覧
- ² 中国古代に泰山で天子（皇帝）が行った祭祀である（大辞林 第三版）。
- ³ 泰安市人民政府：行政区劃
http://www.taian.gov.cn/zjta/tagk/200908/t20090828_484099.html 2015年6月閲覧
- ⁴ 日本の「名水百選」のような村の緑化状況を評価する制度である。
- ⁵ 2400年余の歴史がある齊長城は春秋戦国時代の齊国に軍事防御線として建設された。これは山東省の中部に618.9km延々と横たわっており、歴史上「千里の長城」と言われ、現在最も完全に保存されているのは泰安市下港段である。
- ⁶ 民衆による王朝への武力反抗である。
- ⁷ 冒険体験型観光に関する商品を指す。
- ⁸ 農家楽経営者の家に設置されている感想ノートによる。
- ⁹ 1949年の建国後、最初に発動された土地改革運動を指す。1950年6月30日に「中華人民共和国土地改革法」が公布され、土地改革の目的と任務は「地主階級による土地所有制を廃除する、農民による土地所有制を実施する、農村の生産力を解放する、農業生産を發展させる、新中国の工業化の道を開く」であり、「食糧生産、工業の發展」が強調された。
- ¹⁰ 人民公社は、かつて中華人民共和国において農村に存在した組織である。一郷一社の規模を基本単位とし、末端行政機関であると同時に集団所有制の下に、工業、農業、商業等の経済活動のみならず、教育、文化さらには軍事の機能を営んだ（河村 2011）。
- ¹¹ 1987年から毎年9月6日～10日に泰山を登る国際的な祭りである。
- ¹² 中国政府が毎年発布する最も重要な通達で、毎年の發展方針や重要課題が記載されている。

-
- ¹³ 国立研究開発法人科学技術振興機構：2015年中央一号文件
http://www.spc.jst.go.jp/policy/national_policy/2015center1/chapter05.html 2015年12月閲覧
- ¹⁴ 山東省旅游局：関与印発2015年全省旅游工作要点的通知
<http://www.sdta.gov.cn/lyzl/lyzl-zljs/newInfo/fb017e934a9ea2bb014ac72ee7e3012f.html>
2015年8月閲覧
- ¹⁵ 30年たつと、里峪村の耕地は村民に公平に分配する。その間に生まれた、もしくは婚姻により村に定住した者は土地所有が認められない。
- ¹⁶ 里峪村村民委員会への聞き取り調査による。
- ¹⁷ 「strengths(強み)、weaknesses(弱み)、opportunities(機会)、threats(脅威)」の頭文字語である。目標を達成するために意思決定を必要としている組織や個人のプロジェクトやベンチャービジネスなどにおいて、外部環境や内部環境を強み、弱み、機会、脅威の4つのカテゴリーで要因分析し、事業環境変化に対応した経営資源の最適活用を図る経営戦略策定方法の一つである(板倉 2010)。
- ¹⁸ 例えば、農家民宿を営む農家と「鉞思民宿」の競争。
- ¹⁹ 中国では、「基地」は軍隊用語であり、行動の拠点となる場所を指す。本章では、ある活動を実施するため、選定した場所を意味している。
- ²⁰ 正式名称は計画生育委员会主任である。女性担当者が多く、村の計画出産、女性の健康診断、晩婚の普及などにかかわっている人物である。
- ²¹ 正式名称は中国共産党支部書記であり、村の諸々を統括する人物である。
- ²² いくつかの村の経済発展を統括する人物であり、道朗鎮に所属する公務員である。
- ²³ 里峪村支書である康氏、道朗鎮副鎮長である李氏、岱岳区旅游局副局長である于氏が中心となり、政府関係者以外の専門家を招く時もある。
- ²⁴ 村民委員会への聞き取り調査によると、その内訳は農村観光による収入約2万元、果実や穀物などの販売による収入は約2万元である。

第6章 辺遠地域型農村観光の展開

—貴州省黔東南ミャオ族トン族自治州雷山県郎徳上寨を事例として—

1. はじめに

本章では、中国辺遠地域における農村観光の展開について議論する。中国における農村観光の代表的な研究として、郭ほか(2010)の研究があげられる。彼らは、中国の農村観光について総合的に論じた。中国の農村観光を地理的位置、観光資源、観光活動内容に基づき分類し、それぞれの事例を紹介した。この研究で地理的位置による分類を行い、「都市近郊型」、「既成観光地周辺型」、「辺遠地域型」と分類したが、これは特に辺遠地域型の農村観光の分析に焦点を当てたものではない。次に、Zhou et al. (2013)は中国の山間部の農村観光の発展について論述し事例研究を行った。山間部では農村観光の発展が重要であり、住民の収入につながっている現状を述べた上で、農村観光のあり方を展望した。

農村観光は農村経済を促進する効果があるという研究の他に、農村の持続可能な発展についても研究が行われている。例えば、徐(2014)は安順市での農村観光の発展条件を分析したのち、農村観光の持続可能な発展のための対策を提案した。農村観光の発展要因については、朱(2012)が農村リーダーの重要性を示した。その他に農村観光の定義、政策、問題及び対策についての研究が多くみられる。しかし、農村観光は農村発展の手段として注目されているため、経済的側面に焦点を当てた研究が全体の約6割を占めており、その他の側面に着目する研究が少ない(張 2013)。また、盧ほか(2014)は、外国と中国の20年間の農村観光についての研究をまとめ、中国の研究は「実際の調査、データ分析に基づいた分析」が少ないと指摘した。

また、中国の少数民族の多くは辺遠地域に分布しており、発展が遅れているため、中国政府は政策的に少数民族地域の発展を促しており、農村観光の導入はその一つである。そのため、中国の辺遠地域に位置する少数民族に関する研究が盛んに行われている。例えば、大西ほか(2012)は、中国の少数民族地域における民族問題、政治問題、宗教問題などの諸問題は経済問題につながっていると指摘している。したがって、少数民族地域では民族文化を保ちながら、経済発展を可能にする農村観光の活用が重要である。また、観光の発展により、少数民族の文化、社会変容が注目されている。李ほか(2013)は、中国の民族観光と少数民族文化の関係を考察した上で、持続可能な民族観光には民族文化を保護しながら、社会の進歩とともに進化させていくことが重要であると指摘した。また、少数民族社会システム¹⁾に関する研究も多くみられる。李(2008)は「郎徳上寨」を事例とし、ミャオ族社会システムはミャオ族の歴史、文化と関わりがあると論じた。李(2010)は中国の少数民族社会システムを総論した上で、ミャオ族の組織に注目し、実態分析を行った。高田ほか(2011)が地域ぐるみで農村観光を展開している「郎徳上寨」を事例として、少数民族地域でこれを開発している組織の構造と運営について論述した。その後、現地調査と分析による「郎徳上

寨」の地域経営型農村観光の組織構造と運営を明らかにし、地域への影響について言及した。しかし、いずれも少数民族の組織に注目し、それ以外については、詳細な分析がなされていない。

上記のように、農村観光に関する経済以外の側面に着目する研究は少なく、現地調査に基づき、中国の辺遠地域における取り組み、地域資源、村民の動きといった諸要素を活用した農村観光の展開についての研究は、あまりされていない。そこで本章では、現地調査により、中国辺遠地域における農村観光とかかわる諸要素を分析し、農村観光の展開とその影響を明らかにすることを目的とする。

研究対象地は、1985年から観光政策を導入し「全国農村観光モデル地」に指定された「貴州省黔东南ミャオ族トン族自治州雷山県郎徳上寨」とした(図6-1)。貴州省は多民族の里と言われており、黔东南ミャオ族トン族自治州は、山地が多くアクセスが不便で、発展が遅れているため、貧困問題が深刻な地域である。この地域では、ミャオ族とトン族が多数定住しており、1956年には、民族自治州として設置された。現在でも独特なミャオ族とトン族の文化を持ち、特にミャオ族文化は大切に保存されており、「ミャオ族の聖地」と言われている(呉2013)。

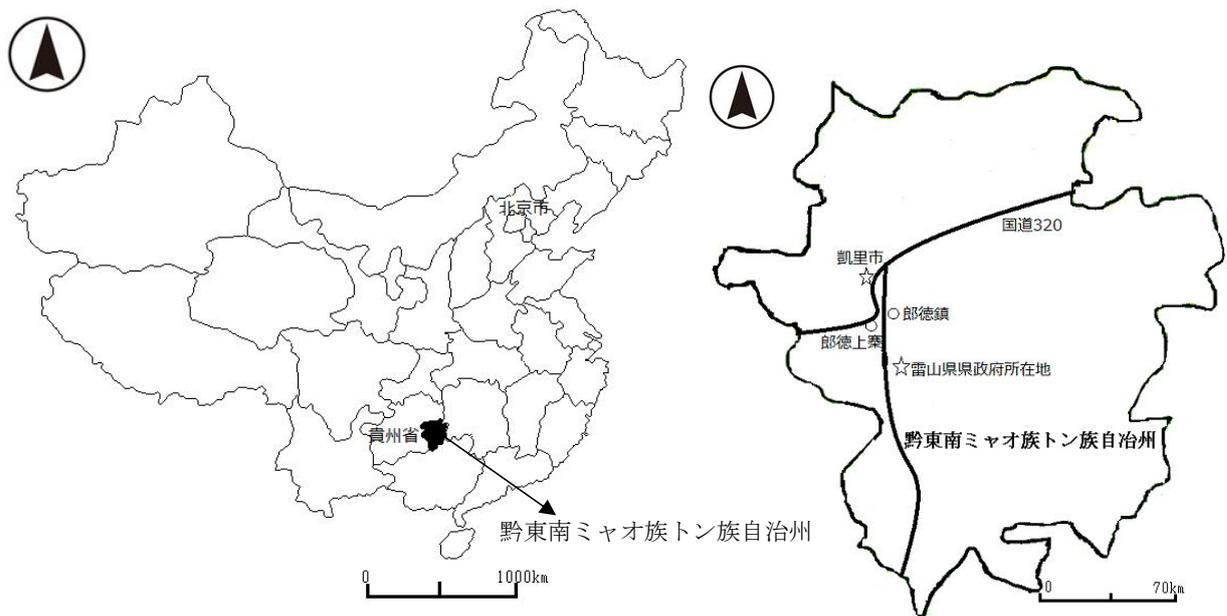


図6-1 郎徳上寨の位置

筆者作成

そこで、郎徳上寨における農村観光の展開を明らかにするため、2014年2月に現地調査を実施した。まず、郎徳上寨を管理する黔东南ミャオ族トン族自治州と雷山県の旅遊局を訪ね、聞き取り調査と資料収集を行い、郎徳上寨に関する観光政策を調査した。次に、郎徳上寨の観光資源、観光施設およびミャオ族社会システムを把握するため、現地調査・観

察、農村観光に関する案内物の収集及び村民委員会、村民への聞き取り調査を実施した。最後に、農村観光の展開による地域への影響を調査するため、当該地域における雷山県旅遊局に認定された12軒²の農家楽経営者へのアンケート調査³を行った。農村観光による農家の生業変化を明らかにするため、改革開放以前、1990年代、2014年2月の三段階に分け、その時点における各農家の生業を調査した。また、農村観光の展開による地域住民のアイデンティティの変化と地域の変化について調査した。農家楽経営者は高齢者と女性が多く、漢字が読めないため、調査期間中、筆者は12軒の農家を訪問し、対面式のアンケート調査による聞き取りを行った。2014年2月に調査を終えた後、アンケートを集計する際、より詳細に分析するため農家楽経営者に電話で補足調査を行った。

2. 郎徳上寨における農村観光の展開

2.1 郎徳上寨の概要

郎徳上寨は貴州省の南東部に位置し、黔东南ミャオ族トン族自治州雷山県郎徳鎮に属している(図 6-1)。自治州の州都である凱里市中心部から約27km、雷山県中心部から約17kmの場所に位置し、村前には「風雨橋⁴」がかかっている「望豊河」が流れている。ミャオ族の言葉では郎徳上寨を「能兌昂糾」という。「能兌」は「欧兌河」(中国語：望豊河)の下流の意味であり、村の名前の由来である。「昂糾」は上寨の意味であり、地図上では郎徳鎮の上に位置している。また、行政上では「包寨」という村は郎徳上寨に所属しているが、本論文では研究対象としない。郎徳上寨の村民委員会への聞き取り調査により、村の概要を表 6-1 にまとめた。

表 6-1 郎徳上寨の概要

面積	人口	世帯数	民族	年平均気温	耕地面積	森林面積
10.9km ²	560人	140	ミャオ族	15℃	21.28ha	352.4ha
食糧			畜産		林業	商品作物
稲、トウモロコシ、イモ類、豆類			豚、牛、山羊、鶏		杉、松	ナシ、菓草

郎徳上寨村民委員会への聞き取り調査により、筆者作成

郎徳上寨の村民はすべてミャオ族であり、「呉」、「陳」という苗字が主となる。郎徳上寨のミャオ族女性は長いスカートを身に着け、頭に専用のハンカチやスカーフを巻くことから「長裙苗」とも呼ばれている。村では、若い世帯を中心に標準語が通用しているが、村民の間ではミャオ族の言葉が共通語である。郎徳上寨は現在でも、ミャオ族の様々な伝統文化が保存されており、美しい景色が広がっている(写真 6-1)。山間部にある郎徳上寨は、交通が不便であるため、発展が遅れている。もともと稲、トウモロコシ、養豚などの第一次産業が中心であったが、近年農村観光の展開に伴い生業が変化する傾向が見られる。



写真 6-1 郎徳上寨の景観

天涯論壇 (<http://page.tianya.cn/tyk000002045/index>) による

2.2 郎徳上寨における観光振興の取り組み

1978年に中国では経済改革・対外開放を実施し、経済を発展させることが重要な任務と定められた。経済を発展させるための様々な手段のうち、国際観光は外貨獲得の有望な産業として注目されるようになった。その後、中国政府はさまざまな観光規制緩和や観光誘致政策を実施し、天安門事件が発生した1989年を除いて国際観光客数は着実に伸びてきている（曾 2001）。1980年代中頃になると、中国国民の生活水準が向上し、可処分所得が増加するにつれて国内観光も盛んになり、1990年代に入ると自家用車の普及やインフラ整備などの要因もあって、観光はさらに発展し、大都市住民にとって観光は重要な消費分野となってきた。

このような中国観光の大きな流れのなかで、曾（2001）は少数民族地域、特に辺境の少数民族地域における観光資源の開発が重要である理由を次のようにまとめた。一つは地域格差の縮小である。中国の最貧困層の8割が辺境の少数民族地域に暮らしている。インフラ整備の遅れにより大規模な工業開発の進展は見られなかった。少数民族の文化、生活に注目し、それを資源とする民族観光により、貧困救済と地域振興が期待されるようになった。もう一つは、国民形成の促進である。中国にとって領域統合と国民形成は最大の課題であり、今もそのプロセスの途上にある。1960年代から70年代にかけては漢民族への同化政策であったが、その反省に立って、「多民族であり、調和がとれた国家の発展」が提唱されている。そのため、中国の少数民族地域の観光開発は国家の主導のもとで始まった。その代表的な動きは国家旅遊局が1995年に発表した「旅遊テーマ—民族風情遊」である（表 2-5）。1992年以降、中国国家旅遊局は毎年、旅遊テーマを作成し、対象とする年度はこのテーマを中心とし、観光企画などを行っていた。1995年には「民族風情遊：中国の56の民族の理解と探訪」が定められ、民族観光と民族間の理解を奨励したため、少数民族地域観光地へ

の旅行者が多かった。もちろん、曾（2001）が論述した理由以外には、民族文化の保護、少数民族の経済発展の要求などの要因も考えられる。

中国の西南部に位置する貴州省は全人口の36.11%を少数民族が占めており、全国でも有数の少数民族地区であり、省内には54の民族がおり、主なものだけでも17民族にのぼる（全国第六次人口普查）。中国の内陸部に位置する貴州省（図 6-1）には「天無3日晴、地無3畝平、人無3両銀」ということわざがある。これは、貴州省の気候（1年中雲が低く垂れ込め、日照時間が短く、農業に適さない）、地形（省全体の73%がカルスト地形に覆われた山国であるため、交通が不便である）、住民状況（収入、教育レベルが低く、貧困問題が深刻である）を表している。また、貴州省は中国沿海地域の都市のように、港の建設によって海外とのつながりを持つことが難しく、その沿海地域とのパイプ役を果たす長江に沿う地域でもない。また、吉林省、雲南省などと異なり、国境に位置していないため対外的に開放されず、外資と技術を導入するのにも不利である。したがって、貴州省は中国の中でも貧困な地域である。宜居城市研究室の報告によると、一人当たりのGDPが22,981.6元であり、中国の中では最下位である⁵。鉱物資源が豊富にもかかわらず、山間地域であるため、交通の便が悪く発展が遅れている。改革開放以降、沿岸部の大都市への出稼ぎがブームになり、貴州省における「留守児童・老人」⁶、「伝統文化の維持」、「三農問題」などの問題が指摘されている。一方、貴州省は少数民族が多数定住しており、その発展が民族の団結につながっている。貴州省と少数民族の経済を発展させるため、中央政府と貴州省は様々な政策を実施した。民族自治州の設置、少数民族への経済支援、少数民族の宗教に対する尊重以外に、少数民族観光を中心とする観光政策が導入された。

具体的には、貴州省は観光開発のため、1982年に「貴州省旅遊局」を設立し、省都である貴陽市を中心に西部ルートと東部ルートに分け、同年に西部ルート（貴陽市と黄果樹瀑布所在地である鎮寧県）を開放した。1986年には、東部ルートの中心である黔東南ミャオ族トン族自治州の観光開発が始まった。黔東南ミャオ族トン族自治州は、人口の75%を少数民族が占める貴州省内でも有数の少数民族集住地帯であることから、自治州政府は民族慣習や民族行事が豊かな村や地域を観光スポットにして、民族観光の開発を展開していった（曾 2001）。このように、黔東南ミャオ族トン族自治州における観光事業の展開は貴州省政府により、開始されたと言えるだろう。

郎徳上寨は1985年に周辺地域の中では最も早く観光客に開放され、それ以後、この地域におけるミャオ族の民族舞踊や音楽、工芸品、伝統民家群などといった様々な有形・無形のもものが中央政府による保護の対象となっている（高田ほか 2011）。神秘的なミャオ寨を開放し民族観光から農村観光に変化しつつある傾向も見られる。こうした公的な政策の下で、農村観光が展開していくきっかけを与えられた（表 6-2）。村内に位置する博物館の入館者名簿によると、郎徳上寨を訪れる観光客は中国人のみならず、外国からの観光客も多数である。このように、観光客にはミャオ族の伝統文化、民家群、豊かな自然を展示し、多くの観光客を誘致することにつながった。

表 6-2 郎徳上寨における農村観光に関する出来事

年	出来事
1985年	黔東南民族風情観光地区として開放された。
1997年	文化部より「中国民間芸術の郷」の称号を受けた。
1998年	国家文物局より「全国百座露天博物館」に指定された。
2001年	全国文明保護地区になった。
2004年	国家旅遊局より「全国農村観光モデル地」に指定された。
2006年	鼓蔵節が国家無形文化財として、登録された。
2008年	北京オリンピックの聖火リレーで全国に有名になった。
2010年	全国歴史文化名村になった。

雷山県旅遊局への聞き取り調査により、筆者作成

以上のように、郎徳上寨を発展させるための政策が実施されている。また、村のインフラ整備、観光客を受け入れるための施設、景観の保護などには資金が調達されている。特に、観光開発に着手された当時、投資が多かったが、利益を優先とする企業からの投資ではなく、基本的に政府による資金調達であった（表 6-3）。

表 6-3 郎徳上寨における観光開発への投資

年	投資額(万元)	整備された公衆施設・景観
1985年	2	村内の道、鼓場、寨門
1987年	3	民俗陳列室、楊大六故居、接待室（観光案内室）
1990年	5.7	風雨橋
1992年	3	池、村内の上下水道などのパイプ
1995年	18	道路（郎徳鎮から報徳鎮、郎徳鎮から郎徳上寨）、バスの開通
1995年	6	郎徳小学校
1996年	2	衛星テレビの受信機の導入
1997年	6	電話配線などの工事
2003年	不明	民家の改造、消防施設、景観の保護、厨房・トイレの改造
2004年	162	風雨橋、村内の道、村外の道

村民委員会への聞き取り調査により、筆者作成

聞き取り調査によると、政府が投資し、郎徳上寨の村民が労働力を提供した結果、村内外の景観が修復され、交通などのインフラ整備が実現できた。

2.3 農家楽

郎徳上寨の農村観光の展開には政策が重要な役割を果たしているが、その担い手は郎徳上寨の農民である。観光客に宿泊・食事などのサービスを提供するために、「農家楽」と呼

ばれる施設が現れた。農家楽とは農村観光の末端形態で、農村民家を接待単位として観光客を受け入れる形態である。これは農村住民が都市住民を中心とする観光客に食事、体験、宿泊などのサービスを提供し、一方、食事や宿泊等から収益が得られ、自分の生活・文化等を蓄積することができる経営方式となっている（周ほか 2010）。農家楽には様々な形態があり、宿泊業を行う農家民宿型、観光客に農家料理を提供する農家レストラン型、伝統工芸品などの土産品販売を行う物産販売型、もしくは上記のすべてを行う複合型などがある。広義では、農家楽は「林家楽」、「漁家楽」、「牧家楽」等の形式も含まれていると指摘されている。郎徳上寨では「苗家楽」と言い、観光客に食事、宿泊、土産品販売を行っており、それ以外には、観光バスがくる度に、歌舞ショーを行ったりして、表演場など観光客が多く集まる場所で土産品を販売している農家が多数である。

本節で扱う農家楽は雷山县政府に認定された農家楽であり、家の入り口には「苗家楽」という看板がかけてある。図6-2で示したように、農家楽は村の道沿いに分布しアクセスが良い場所に立地しており、村内には観光スポット、観光施設なども点在している。

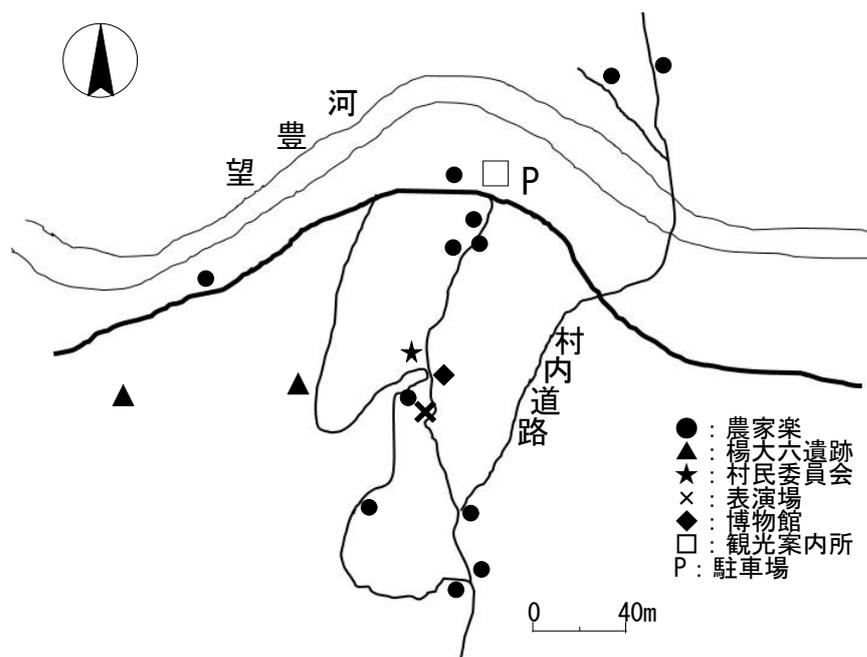


図 6-2 郎徳上寨における農家楽の分布（2014年）

現地調査により、筆者作成

農家楽は、開業する前に専門家によるきめ細かな指導を受け、「雷山県餐飲服務食品安全規章⁷⁾」に従い経営し、観光客専用の冷蔵庫、消毒・保管棚を設けている。これがきっかけで食の安全・安心の認識が農家の間で高まり、観光客も安心して食べられるので、良い評判を得られた。農家楽を開業した後でも、村民委員会を始め、郎徳鎮、雷山县政府は各農家

楽経営者を対象にし、農村観光の経営に関する研修会を行っている。聞き取り調査によると、研修会のテーマは工芸品加工（伝統工芸品である刺繍、銀飾りの製造、蠟染についての勉強会）、サービス（標準語の勉強、接客の仕方など）、料理（味、形、衛生管理）、防災（火事、緊急事項などの対応の仕方）などがある。一方、一部の農家楽経営者は、以前出稼ぎで生活を営んでおり、都市でホテル、レストランなどでサービス業に従事した経験があった。このような指導と、研修会が行われることや過去の経験をうまく利用し、観光客により一層良いサービスが提供できている。

認定された各農家楽の経営者は、主に個人の観光客に宿泊、食事といったサービスを提供している（表 6-4）。地元の素材を活用したエスニック料理を始めとする様々な食事を提供できるが、食事の内容はそれぞれ異なっている。観光客の要望に応じて、自家製の酒（米、トウモロコシで作られた酒）を提供できる。また、農家楽経営者は自宅を改装したり、観光客用の客室を新築したりして、観光客に宿泊事業を行っている。上記以外には、土産物の販売も行っている。聞き取り調査によると、宿泊する観光客一人当たりはこの村で約100元（宿泊：30元前後、食事：40元前後、土産物：40元前後）を消費している。村民はこの収入を、生活用品の購入や子供の教育などに使用しており、生活の改善につながっている。

このように、郎徳上寨ではエスニック料理の提供や、民族風の宿泊施設を利用し、リピーター客を中心とする都市住民向けの農家楽事業を展開している。

表6-4 郎徳上寨における農家楽経営者の基本情報（2014年）

農家楽名称	収容人員 単位：人	農家楽名称	収容人員 単位：人
美哈楽苗家楽	宿泊：20 食事：60	攬翠亭	宿泊：12 食事：90
阿花農家楽	宿泊：17 食事：60	田園農家	宿泊：20 食事：60
陳氏苗家寨	宿泊：9 食事：20	原態農家	宿泊：6 食事：60
陳氏農家	宿泊：9 食事：30	苗家楽客棧	宿泊：24 食事：100
刺繍紡織参観点	宿泊：9 食事：40	阿仰莎農家楽	宿泊：4 食事：30
憩心苗棧	宿泊：10 食事：20	阿妹新村農家楽	宿泊：10 食事：20
老支書農家楽	宿泊：20 食事：100		

「観光案内」には、各農家楽経営者の名前、連絡先などを記載しているが、個人情報であるため、表 6-4 ではそれを記していない。

郎徳上寨観光案内（2013年版）により、筆者作成

2.4 郎徳上寨における観光資源

2.4.1 伝統的なミャオ寨風景

1985年、神秘的な郎徳上寨が開放されて、ミャオ族の職人の独特な技と知恵を生かし建

築された「吊脚楼」を中心とする伝統民家群と、棚田などにより形成された美しい景観が観光客を引きつけている。吊脚楼は、ミャオ族の独創性が溢れる建築作品で、釘を使用せず全てはめ込み式の木組み構造であり、柱、梁、たる木、角材、板、桁などが全て木材のみでできている。その前半部分を支える柱は長く、山による後半部分を支える柱は短い。柱と柱の間に板を敷くと、一つの床ができあがる。宙に浮いているように見える吊脚楼は三階建てが多く、一階は、家畜の養殖に使用したり、農機具などの物置にしたりする。二階中央の最も広い部屋を応接間として、その両側の部屋を台所、寝室にするのが一般的である。三階は客間、倉庫にすることが多い。風通しがよく爽やかで、湿気を防ぎ、野獣の侵入が避けられるため、山地が多い貴州省には一番適切であるといわれている（写真 6-2）。

ミャオ族が定住する地域では、通行人の便宜を図り、善行を積むため、橋をかける伝統があり、河川の上に平らな桁橋やアーチ型の橋、風雨橋などが多く見られる。風雨橋はミャオ族、トン族が居住する地域にあり、橋には屋根つきの長い回廊があり、風雨をしのげるためこの名称がついた。この橋はミャオ族、トン族の建築技術の精髓を最も反映していると言われている。また、多くのミャオ族はすべてのものに靈魂や生命が宿ると信じ、樹、岩、山、川、泉などを崇拝する。そのため、村にある植物は保護され、特に、ミャオ族のシンボルである楓は大事にされている。郎徳上寨にも、巨大な楓の樹があり、観光客を引き付けている。村には、「寨門」と呼ばれる建物が三ヶ所があり、古代においては「敵を防ぐ」のためのものであったが、現在では、観光スポットになっている。

郎徳上寨は山紫水明の地で、どの建築物を見ても古風で素朴であり、村の最も古い建物は500年以上の歴史をもち、現在でも明、清時代の建物が多数保存されている。一方、普通のミャオ族の家でも、意匠を凝らして建てられた吊脚楼であるため、朗徳上寨をはじめとする周囲のミャオ族村にある古建築群は中国第五回重要文物保護地域と定められている。

村全体は山に囲まれ、すべての吊脚楼は山沿いに分布しており、緑樹の中に点在している。北側には風雨橋という橋がかかっており、綺麗な川が流れている。村の小径には、玉石や青石が敷かれており、素朴な石畳を踏みしめながら、村を散策するとエスニックな雰囲気満喫できる。筆者は2月に現地調査を行ったが、山頂からみると村の建物は、緑樹の中に隠れている。村の小径には、畑の仕事を終えた農民の姿が見え、村のあちこちに炊事の煙が揺らめいており、村全体の風景はまるで「中国水墨画」のようであった。

2.4.2 独特なミャオ族飲食

ミャオ族の多くは、米を主食とし、料理は酸味・辛味が効いたものが多い。唐辛子を用いた辛い料理が多く、酸味は酢などを使用せず、基本のスープを発酵させて作っており、「癖になる味」と言われている。その中に野菜、豆腐、肉類などを入れて煮込んだものが酸湯料理になる。その代表である名物料理「酸湯魚」は、酸湯ベースのスープの中に、川魚や野菜など地元の食材をふんだんに加え、辛味の効いた酸味とさまざまなミャオ族独特のスパイスや香草が魚の旨みを引き立てている。

それ以外には漢族の料理に似た炒め物や蒸し物、魚や肉、野菜などの揚げ物もある。行事、祭事、結婚式など祝いの日には、もち米で餅を作る習慣があり、草木の汁で色つけて食べる地域が多く見られる。また、ミャオ族には酒が日常で欠かせないものであり、酒で客人をもてなし、即興の歌を歌って接待する風習がある。中国では法律によって少数民族の文化が保護されており、そのなかで少数民族個人の酒造りも認められている。そのため、多くのミャオ族の人々はトウモロコシ、米などで酒を造っている。そのなかの黒いもち米で製造した酒はミャオ族の有名な酒と知られている。ミャオ族の人々は客に対して酔酩することを期待し、来客が酔酩することは客としてのマナーに叶ったことと見なされているようである。現在、観光を行っているミャオ族村は観光客、特に団体観光客に米酒を提供している。村の入口で男性はミャオ族楽器を演奏しており、艶やかな晴れ着を着飾った若い女性は水牛の角に米酒を注いで、観光客にふるまっていく。

ミャオ族の一般の家庭、特に冬には食卓の中央には温かい鍋（酸湯が入っている）が置かれている。鍋の真ん中には、五徳のような道具に唐辛子の粉が入っている小さな茶碗がのせられ、鍋の具の調味料として使用されている。採ってきたばかりの野菜、米で作った自家製の酒、放し飼いの家畜、これらは全て新鮮で手作りだからこそおいしい田舎料理（写真 6-3）である。郎徳上寨では、この酸湯料理に入れる材料はすべて農民自家製の蠟肉⁸と無農薬野菜であり、観光客の希望により、家近所の棚田で収穫体験も行っている。

観光客は「普段と異なった味、自分の手を加えた料理、ミャオ族の「暖炉⁹」を囲んで食事することが大変楽しかった」と述べた¹⁰。このように郎徳上寨の農民たちは地元の特産品と地域文化をうまく利用し、観光客に料理を提供している。

2.4.3 民族文化を代表とする歌舞¹¹

貴州省の少数民族は歌や踊りが得意ため、「歌舞之郷（歌舞の故郷）」という美名を貴州省にもたらした。この省では歌舞はただの娯楽の一つではなく、少数民族が心身の休みをとる、地域固有のライフスタイルだと言われている。その代表であるミャオ族には、「話せれば歌える、歩ければ踊れる」という言い伝えがある。ミャオ族文化や伝説、農産物の収穫、狩猟などを歌舞の形にし、代々受け継いでおり、中国の無形文化財にも登録されている。

ミャオ族の「神話伝説」、「山歌」、「情歌」、「物語」などは、内容が非常に豊富であり、すべて口頭伝承という形で保存されてきた。中でも、ミャオ族の若い男女が愛を語り、気持ちを伝え合うための情歌が多くある。彼らの情歌は四季の風景を借りて情感を表し、情景が溶け合っているとされている。また、ミャオ族の「飛歌」も有名である。これは歌詞も楽器演奏もなく、ミャオ族の伝統歌曲の一つで祝い事や歓送迎時でも歌われ、即興的に歌い上げる。また、ミャオ族の人々は歌ばかりではなく、踊りにも優れている。ミャオ族の舞踊の主要なものには「芦笙舞」、「銅鼓舞」、「闘牛舞」、「獅子舞」、「龍灯舞」などがあり、新年や慶事の際に踊る。その中で最も特色があるのが「芦笙舞」であり、毎年旧暦の1月15日、3月3日、9月9日などに踊っている。さらに「芦笙舞」だけを舞う「芦笙節」もあ

る。ミャオ族は古くから村の祭りや伝統行事、男女の集団見合などをする時には必ず民族歌舞を行う。シンプルな刺繍で作られた民族衣装を着る男性は力強くて逞しく、華やかな民族衣装を着た女性はしなやかで美しく、彼女たちの踊りに合わせ銀飾りがやさしい音を奏でる。集団で踊りながらミャオ族の歌を歌うので、他民族の観光客には魅力を感じさせる。

村を開放して以来、郎徳上寨はこれらの伝統行事を利用し、観光バスが到着する度に観光客にミャオ族歌舞を披露している。歌舞ショーの順番としては、まず、リズムの遅い「銅太鼓踏み」、次にリズムの早い「青年蘆笙舞」であり、最後は年長者による「伝統的なミャオ族歌」と若い女性による舞踊である。民族舞踊を披露しながら「道止めの酒歌¹²」を歌い、客に地元の酒を勧め、「道止め」という独特の風習で客を歓迎する。道止めは少なければ3回、多い時は12回も行われる。それが終わった後、客は自由に村を見学できる。また、個人の観光客が農家楽での食事や宿泊サービスを利用する際には、楽器演奏と民族歌舞を鑑賞することもできる。

また、郎徳上寨の正面には坂があり、坂の中腹には平地と長さ150mの競馬レース用のコースがある。毎年旧暦の3月になると、雷山県を中心とする周囲の県のミャオ族の青年がここに集まり、山歌や競馬の試合が開催される。来場者は多い時で1日1万人に上る。

このように、郎徳上寨の村民は従来の民族歌舞、民俗文化を観光資源として活用し観光客にサービスを提供している。

2.4.4 手作り伝統工芸品

ミャオ族の伝統工芸品は「蠟染¹³」、刺繍、銀飾りなどが有名である。世界でも服飾が最も多様な民族として知られるミャオ族は、それらの伝統工芸品を基にして組み合わせた服飾が多い。険しい山々に隔てられ、交通の便が悪いため、貴州省のミャオ族は130以上の系統に分けられ、その系統ごとに服飾にも独特な特徴を持つ。ミャオ族の男性の服装は簡素で、色の変化が少ない。普通は前ボタン式の上着や左上前襟の短い上着に、長ズボンを着ている。また、腰には帯を巻いて頭には青もしくは黒のターバンを巻いている男性が多くみられる。一方、女性の衣服の様式や色彩は変化に富んでおり、彼女たちの独特な美意識と系統の個性を伝える（写真 6-5）。例えば、スカートは長さや折り襷の有無などにより、「長裙苗」、「短裙苗」に分けられる。また、刺繍・縫い花・模様があるもの、蠟染のものなど様々であり、彼女たちの細かな調整と装飾で、自分の個性を演出している。そして、ミャオ族には「銀飾りも花もなければ、女の子とは言えない」ということわざがある。銀飾りはミャオ族、特に女性にとっての重要性がうかがえる。一般のミャオ家庭では娘が幼いころから彼女のために毎年銀飾りを作り、年毎に銀飾りを専用の箱に積み重ねて大切に保存する。伝統的なミャオ族の家庭では、男性が父親から家屋と土地などの不動産を相続し、女性は銀飾りの嫁入り道具を受け取る。その中の銀飾りは、財産としてだけでなく、母親から娘へと、代々伝わるものであり、両親の娘に対する愛情をも表していると考えら

れる。

郎徳上寨では、刺繍と銀飾りが多く販売されている。歴史人物、動物、植物、農作業、現代文明などをモチーフにし、絹糸を手で一本一本ほぐしてゆき刺繍する。そうして生み出される刺繍は艶やかで美しい光沢を放ち、ミャオ族の文化とミャオ族女性の心血と知恵が凝縮されている。これらの刺繍は、従来は服や布団などに自宅用として用いられていたが、現在では、郎徳上寨の女性は刺繍、蠟染で財布、傘、カバン、民族衣装などを製作し、観光客に販売している（写真 6-6）。

銀飾りはミャオ族が最も愛する伝統的な装飾品で、この村では牛を崇拝しており、銀角の頭飾りは牛の角の形をしている。また、漢族では多く見られる龍鳳の形が銀角に飾っており、明らかに二つの民族が互いに影響し合った結果であると考えられる。伝統の銀細工には様々な腕飾り、首輪、頭飾りなどがあり、精巧で美しい模様が彫刻されている。これらの銀飾りはもともと祭日、結婚式などの祝いの時に、女性を装飾するものであった。現在、村の歌舞ショーに参加する時、全身至るところに刺繍の盛装をまとい、きらきらと輝く銀飾りをつけている人もいる。これらの民族工芸品は、全体的に美しい装飾効果を生み出しており、民族の特色に富んでいる。さらに、この村の村民は銀飾りなどを製造したり、仕入れしたりして、観光客に販売している。このような伝統工芸品の販売は郎徳上寨の重要な収入であり、女性が中心的な役割を果たしている。

2.4.5 サービス

中国には「苗女多情¹⁴」ということわざがあるが、これはミャオ族の人々が客と接する時の情熱の表現でもある。観光客が来る度に、敬酒歌などを歌いながら観光客に自家製の酒を捧げてゆき、「ミャオ族寨へようこそ、大歓迎」と歓迎の言葉を述べる。このような歓迎を受けることは、観光客にとって他地域では得がたいサービスである。特に、農家楽の経営者は観光客に配慮しアレルギーや食事の好みなどを聞いた上で食事を提供し、客室の整備などにも努力している。北京の観光客は、「大変気を配ってくれて、感動する」と述べていた。筆者が現地調査をしていた時も、道で出会った村民から「昼には、うちにおいで、一緒にご飯を食べよう」、「今晚、泊りにきて」との誘いがあった。ある農家楽経営者に「他の農家楽経営者の家に行きたい」と依頼すると、競争相手であるにもかかわらず、直ちに案内してくれた。

観光客が毎年増加するとともに、郎徳上寨はより観光業を円滑に発展させていくために、観光案内所、駐車場、観光案内標示を整備している。観光案内所は村の入り口にあり、観光シーズンには毎日スタッフが駐在し、観光客の受付や案内、パンフレットの配布などを行っている。観光案内所の近くには駐車場があり、毎日専任のスタッフによる掃除が行われており、清潔を保つことを心がけている。また、村の入り口には、村を紹介する石碑、農家楽の分布・連絡方法を掲示した看板がある。村内に入ると、至るところに観光案内標示（写真 6-7）があり、村の道や主な観光スポットを案内している。また、村内には博物

館が建てられており、ミャオ族の衣装、刺繍、銀飾り、太鼓などが展示され、館内のスタッフによる案内や説明を受けることができる。

郎徳上寨は全体的にミャオ族の雰囲気漂う村でありながら、楊大六遺跡や表演場などの観光スポットもあり、観光客を引き付けている。このような観光資源は、郎徳上寨における農村観光の展開を促す重要な役割を果たしている。



写真 6-2 郎徳上寨の吊脚楼
筆者撮影



写真 6-3 郎徳上寨の農家料理
筆者撮影



写真 6-4 郎徳上寨の農家楽
筆者撮影



写真 6-5 郎徳上寨の伝統的な男女服装
筆者撮影



写真 6-6 郎徳上寨の刺繍作品

筆者撮影



写真 6-7 郎徳上寨の観光案内標示

筆者撮影

2.5 地域住民の農村観光への関わり

2.5.1 ミャオ族社会システムと村民委員会

山村(2004)によると、中国では、清代までは、正式な国家政権が組織されていたのは中央から県までのレベルであり、それより以下のレベルでは、家族・宗族などの組織や、官僚機構が地域住民を組織した地域的な機構である社会集団や組織が存在してきた。このことを背景に、中国の地域社会、特に県以下の地域では自治の伝統が強く残されている。例えば、松村(1993)は雲南省の事例を考察し、「土司制度」について説明した。ミャオ族社会では、地域住民が主体となり、血縁関係により自然に形成された相互扶助の関係や、村の管理、民族文化の伝承、催事の開催などを行う自治組織は、ミャオ族社会システムである。現在、郎徳上寨は、この制度のもとで農村観光を行っている。

明朝までは、漢民族を中心とする国家統轄政権だったため、漢民族の発展を優先的にさせており、少数民族に対しては全く異なっていた。古代中国の民族の分布は、文明の発祥地といわれる黄河、長江を中心に、漢民族が勢力の及ぶ範囲に居住していた。その他の広大な地域には少数民族の人々が点在し、遊牧などで生計を支えていた。ミャオ族は中国の歴史の中でも悠久の歴史を持つ民族の一つであり、雲貴高原¹⁵を中心とした山岳地帯に住む集団である。古くから中央政府に重視されておらず、「化外、南蛮」¹⁶と呼ばれた時代もあった。このように、ミャオ族が生活している地域は山地が多くアクセスが不便で、土地も痩せているので発展が遅れている。ゆえに、民族が生存していくためには、団結が重要であり、さらにミャオ族内部の冠婚葬祭、農地管理などは住民の協力が求められる。また、1954年に設定された「中華人民共和国憲法」では、少数民族経済・文化を発展させるために「自治区、自治州、自治県(自治旗)」を設置すると明記しており、少数民族の自治権利を最大限保証している。中国の少数民族政策は、文化大革命という紆余曲折の時代を経て、1978年以降回復された。少数民族を保護し、特権を与えるなどの政策の転換によって、その人口も

急増の一途をたどった（呉 2013）。具体的な少数民族優遇政策は、「①計画出産規制の緩和で第二子（農村では第三子）の出産を許可する、②上級学校への進学時に漢族より有利である（合格点数・学費・奨学金）、③政治的に優遇される」などがある。このような優遇政策により、少数民族の政治的・社会的・経済的地位も向上してきた。さらに、少数民族の経済を発展させるために、観光政策の導入や補助制度などもある。したがって、ミャオ族の伝統的な社会システムの発展には歴史と政治的背景があると考えられる。

現代においても、郎徳上寨はミャオ族文化や伝統が色濃く、独自の自治組織が残っている。村内の小さいトラブルから重大事項まで、村民自治により解決されているケースが多い。聞き取り調査によると、ミャオ族は、血縁関係により供養している先祖が異なっており、同じ先祖を持つ人々は一つの「酒族¹⁷」となる。郎徳上寨には五つの酒族があり、同じ酒族間では農作業、冠婚葬祭などの様々な場面における相互扶助を行う。各酒族間は郎徳上寨の重大な祭祀などを実施する時に協力し合う。各酒族には酒族内のトラブルの処理、伝統行事の開催などを担当する人徳が高い老人がおり、「寨老」と呼ばれる。また、村の祭祀、特にミャオ族にとって最も重要であり、12年おきに行われる「鼓蔵節」は、「鼓蔵頭¹⁸」を中心とする組織が祭祀の担当者になり祭祀の計画を立てている。鼓蔵頭は基本的に村民に選挙されている人である（写真 6-8）。そして、ミャオ族村には、ミャオ族のルールや、法律を熟知する「理老」、宗教と伝統ミャオ族医学を熟知する「鬼師」がいる。寨老、理老と鬼師は無報酬であり、世襲制ではなく、その社会において自然に形成されたリーダーである。ミャオ族村では、古くから村の重要事項が、鼓蔵頭、寨老、理老と鬼師の相談、議論により決定され、ミャオ族の村民はこの決定に従う。

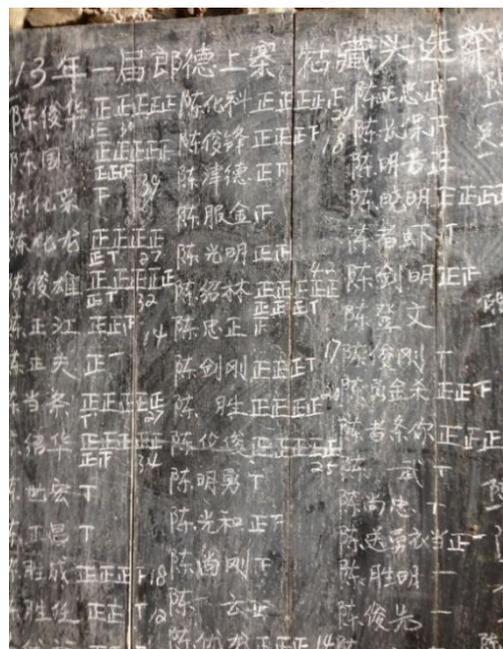


写真 6-8 鼓蔵頭選挙用の黒板

筆者撮影

このように、伝統的なミャオ族村は鼓蔵頭、寨老、理老と鬼師がそれぞれの役割を果たし、村を管理している¹⁹。例えば、後述の郎徳上寨における農村観光政策の導入や収入を分配する工分制制度はこの一例である。2008年には北京オリンピックの聖火リレーがこの村を通り、それによって全国に有名になった郎徳上寨は多くの観光客を集め、村民は多くの収入を得られた。その後、インフラ整備の遅れや周囲のミャオ族村の開発などによって、観光客は減少した。そこで、外部資本を導入し、村のインフラを整備するとの提案があった。しかし、外部資本を導入するためには、投資者の意志により、村の全貌が変えられたり、村外の人々が村で店舗経営を行ったりするなどが条件になった。これは、「従来の村の風景を破壊する」、「ただ利益のため、われわれの村を市場のようにすることは許さない」などの理由で寨老を中心とする組織に反対された。そのため、村は外資を導入せず、村の伝統文化と美しい景観を保護することができた。この自治制度は「国家国務院辦公室文件²⁰」でも高く評価され、ミャオ族社会に適切であると述べられている。

上記の自治組織に加えて、1950年代から中国の農村における基本組織である村民委員会が少数民族地域でも設置され、村を管理している。袁（2012）は、現在ミャオ族では「政治権力」を持つ村民委員会が村を管理する中心機関であり、従来の「文化権利、宗教関係」である自治組織はそれを補助していると述べた。「中華人民共和国村民委員会組織法」により、村民委員会は「上級組織²¹」の指示に従い、村の経済を発展させていく義務がある。したがって、村民委員会は郎徳上寨の発展、特に、郎徳上寨にとって重要な産業である農村観光の発展に力を入れている。また、郎徳上寨は「民族風情観光地区」として開放され、貴州省各行政関係部門は中央政府の政策に従い動き出した。例えば、村民委員会は村内博物館の建築、観光案内所の設置、村内道路の整備などに努力している。聞き取り調査によると、郎徳上寨の村民は当初「ミャオ寨開放」に反対し、観光事業が進められなかったと言う。その後、村民委員会が鼓蔵頭、寨老、理老と鬼師に「ミャオ寨開放」のメリットを説明し、納得させた上で村民の支持を得られ、観光事業が著しく展開した。また、村民委員会のメンバーは積極的にいち早く農家楽を開業し、観光客にサービスを提供するだけでなく、ほかの村民を牽引する役割を果たしていた。現在では、郎徳上寨の村民委員会は外部の旅行会社などとの連絡、民族文化の伝承、村民の福祉などに力を入れている。また、村民は農村観光から収入を得た結果、貧しい生活から脱却し、そのことによって、農村観光の発展を支持している。

郎徳上寨で展開してきた農村観光の成り立ちは、ミャオ族社会システムと村民委員会、村民の支持に深く関わっていると言える。

2.5.2 工分制

郎徳上寨における農村観光の収入はおおよそ三つのルートがある(表 6-5)。

表 6-5 郎徳上寨における農村観光の収入ルート

実施者	サービス内容	サービス対象	予約	費用の納入先
認定された 農家楽	宿泊・食事 伝統工芸品の販売	全観光客	可能	農家楽経営者
全村民	伝統工芸品の販売	全観光客	不要	各農家
全村民	歌舞ショー	団体観光客	必要	村民委員会

村民委員会への聞き取り調査により、筆者作成

表 6-5 は、認定された農家楽が提供する食事・宿泊などによる収入、全村民の伝統工芸品の販売による収入、全村民が参加できるミャオ族歌舞ショーによる収入が村の主な農村観光の収入であることを示している。食事・宿泊・伝統工芸品の販売は各農家が主体となり行っているのに対して、歌舞ショーは村民全員参加により実施している。収益の納入先である村民委員会はこの収益の 25%を村のインフラ整備や村の公共支出などのために差し引き、それ以外の収益は村民に公平に分配するため、「工分制」という制度を利用している。工分制は人民公社時代に用いられ、労働量に応じて賃金を支払う制度であり、1978 年から「家庭承包責任制²²」の実施にともない廃止された。当時の村民委員会の「支書²³」である陳正濤氏への聞き取り調査によると、1985 年から開放した郎徳上寨は観光発展政策と適切な観光収入の分配について、様々な方法を探っていた。そこで、鼓蔵頭、寨老、理老、鬼師と村民委員会が議論した結果、全ての村民が自由に参加でき、公平に収入を分配する仕組みで観光を発展させることとなった。ちょうどその当時、発展が遅れていた郎徳上寨では、労働量に応じて賃金を支払う工分制制度が残されていたため、この制度が用いられたという。

1985 年、郎徳上寨が正式に開放されて以来、約 30 年経た今も、工分制が用いられ、村民に収入を分配している。この工分制が郎徳上寨に必要なのは以下の理由も考えられる。まず、歌舞ショーは訪れる団体客に民族舞踊や演技を披露したり、民族楽器を演奏したりして、民族文化や祭祀を形にし再現する団体活動である。そのため多くの参加者が必要である。一方、農業生産の時期や各農家の都合により、指定される時間に参加できない村民もいる。自己意思により参加できる工分制は農作業の時間を確保しながら自由参加できる制度である。参加した村民は労働量と演技した内容に応じて工分を獲得する。次に、ミャオ族は古くからの「公平」、「共有」、「団結」を重視し、協力し合って、農作業、祭祀などを行っている。歌舞ショーは演技する人々に工分が与えられ、出演者以外の民族衣装を着用している老人や子供、病気を抱える村民なども、ショーの現場に居さえすれば、工分を受け取ることができる。こうした弱者への配慮をしつつ、特技を有し演技する村民にはより多くの工分を支給する工分制は農民の積極性を強めて、観光客に質の高い歌舞ショーを提供している(表 6-6)。各農家には、「工分」を記載するノートがあり、月末には現金化する。この歌舞ショーから現金を分配するまでの過程は村民の監督の下で実施され、「透明、公平」

に収益を分配している。このような「労働量に応じて、報酬を得る」という工分制は村民の支持が得られ、郎徳上寨の農村観光の展開を促進する効果があると言える。

表 6-6 歌舞ショー参加者の工分とそれに対する賃金

参加者	獲得する工分	単位:分/回	賃金	単位:元/回
男性(演技有り)		32		6.4
女性(演技有り)		25		5
高齢者(掃除、お茶出しなど)		10		2
エキストラ		15		3

村民委員会への聞き取り調査により、筆者作成

2.5.3 高齢者と女性の活躍

郎徳上寨における農村観光の展開は、高齢者と女性の活躍が重要である。ミャオ族の精神的リーダー(寨老、鬼師など)は基本的には、高齢者であることはいまでもなく、彼らは民族文化の伝承と農作業の方法を守りながら長い人生において、培ってきた能力や経験を発揮し、後継者育成にも力を入れている。1985年の郎徳上寨開放後、初代村長と高齢者たちは村の発展に力を尽くした。その後、郎徳上寨の観光業の発展にも様々な場面において寄与している。

一方、伝統的なミャオ族女性は家事、育児などを中心とする「狭い空間」で活動していた。改革開放以降、彼女たちは出稼ぎや大学進学などの社会進出をしている。郎徳上寨の女性も従来と異なる生活を送っており、農村観光の展開とかかわっている。まず、女性は積極的に村を管理するようになった。前述したミャオ族社会システムには鼓蔵頭、鬼師、寨老、理老がいるが、これは男性が中心となっており、女性は村の管理、重要事項の決定に発言権があまりなかった。村民委員会が設立された後、女性が担当する「婦女主任」の職が設けられ、女性の社会進出が奨励されるようになった(写真 6-9)。聞き取り調査によると、郎徳上寨の女性は当初、だれもそれを担当したがらず、「家事だけをしたい」と思う人が多かった。その後、農村観光が開始され、彼女たちは積極的に婦女主任に着任し村の発展や農村観光政策の作成などに努力している。



写真6-9 郎徳上寨村民委員会の職務一覧表

(下から4人目は婦女主任である)

筆者撮影

次に、郎徳上寨における伝統工芸品の製造・販売及び農家楽のサービスを提供する主な担い手は女性である。かつ、伝統工芸品である刺繍はミャオ族が代々受け継いでおり、女性が少女時代から習い始めた在宅作業であるため、育児中の女性でも作業ができる。伝統工芸品の加工は家族の収入に寄与するだけでなく、伝統文化の保護と継承にもつながっていると考えられる。

これを受けて、郎徳上寨における女性の生活スタイルの変化が見られた。郎徳上寨での聞き取り調査によると、従来のミャオ族女性はあまり教育を受けず、家事、農業を中心とした生活を送っていた(表 6-7A)。1960年代から、多くのミャオ族女性は就学できるようになり、識字率が高くなった。1978年の改革開放以降、一部のミャオ族女性は出稼ぎをし、工場のライン作業に従事していた(表 6-7B)。そのため、子どもは実家に預けられ、工場での仕事を中心となり、農作業もできなくなり、三農問題がますます深刻になってきた。また、彼女たちは、出稼ぎ労働者として都市建設に寄与しているが、中国固有の戸籍問題によって、社会保障、福祉などを受けられなかった。その後、農村観光の展開をきっかけに、ミャオ族女性は出稼ぎをせず、郎徳上寨で農村観光に従事するようになった。彼女たちは土産品製造・販売、家事などをしており、観光バスが来る度に、村の歌舞ショーに参加している(表 6-7C、D)。このように、農村観光を始めてから、農業もしくは仕事(出稼ぎ)中心だった時の生活は農村観光と関わる生活に変化している。一方、郎徳上寨は、静かな山村であり、早寝早起きの生活習慣があったが、観光客の来訪により、夜遅くまで観光客に民族舞踊、楽器演奏などのサービスを提供しているため、従来の農村生活の早寝早起きという習慣が失われていく可能性があると考えられる。これは、郎徳上寨の女性のみならず、村全体の変化でもある。

表6-7 郎徳上寨における女性の生活スタイルの変化

		6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	0	1	2	4	5時	
A	朝食	家事、農業、その他						昼食	家事、農業、その他						夕食	家事、その他						睡眠				
	朝食	仕事(通勤時間を含む)						昼食	仕事(通勤時間を含む)						夕食	家事、その他						睡眠				
C	朝食	歌舞ショーの準備、家事				歌舞ショー、土産品販売、観光客用食事の準備・片付け				家事、農業、その他				観光客用食事の準備・片付け				土産品製造、その他				睡眠				
	朝食	家事、農業、その他						昼食	土産品製造、その他						夕食	家事、その他						睡眠				

A、B、C、Dは異なる時期におけるミャオ族女性の生活スタイルを表す。

A：従来(1978年以前) B：出稼ぎしていた時期(1990年代) C：現在(団体観光客が訪れる時) D：現在(観光客が来ない時)

ミャオ族女性への聞き取り調査により、筆者作成

このように、郎徳上寨の高齢者と女性はそれぞれの役割を果たして、農村観光の展開を促進している。

3. 農村観光の展開による地域への影響

この節においては、主に農村観光の展開により、地域にどのような影響を及ぼしてきたかについて考察したい。それを調査するため、2014年2月に当該地域における雷山県旅遊局に認定された12軒の農家楽経営者へのアンケート調査を行った。アンケートは農家楽経営者個人・家族の属性、農村観光を始めたきっかけ、公的な支援、農村観光の内容、収入、生業変化、アイデンティティの変化、地域の変化などについての質問を設けた。その中で農村観光による農家の生業変化を明らかにするため、改革開放以前、1990年代、2014年2月の三段階に分け、その時点における各農家の生業を調査した。また、農村観光の展開による地域住民のアイデンティティの変化と地域の変化について調査した。農家楽経営者は高齢者と女性が多く、漢字が読めないため、調査期間中、筆者は12軒の農家を訪問し、対面式のアンケート調査を行った。2014年2月に調査を終えた後、アンケートを集計する際、より詳細に分析するため農家楽経営者に電話で補足調査を行った。また、アンケート調査以外には、歌舞ショーに参加する村民や土産品を販売する農家に聞き取り調査した。以下、これらの調査に基づき、分析した結果について述べる。

3.1 農村観光経営者の個人属性

家族形態については、「夫婦のみ」と「夫婦と子ども」の核家族は12軒中8軒であり、最も多い。「農村観光を始めたきっかけ」についての回答は図6-3のようになる。「利益のため」という理由が一番多い。続いて、「公的な支援」になる。この質問は複数回答を可としていたため、利益と公的な支援により、多くの農家が農村観光を開業したと言える。

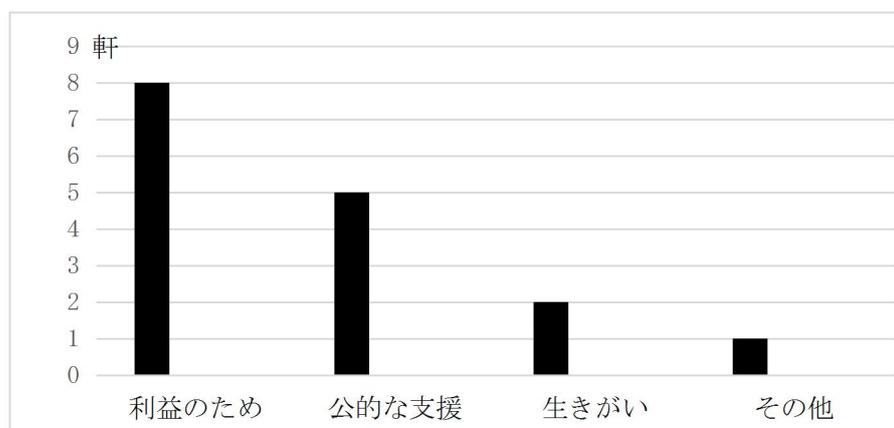


図6-3 農村観光を始めたきっかけ（複数回答）

農家楽経営者へのアンケート調査により、筆者作成

農村観光を始めた当時、民族舞踊、歌、楽器演奏を観光客に披露したが、農家民宿、農家レストランといったサービスはなかった。その後、農民は利益のために、農家楽を開業したという。現在、観光客に提供するサービスは多様である。認定された農家楽経営者は観光客に食事、宿泊、土産品の販売を提供できる。また、観光客の要望に応じて、村内外の観光案内や楽器演奏も行っている。他の村民への聞き取り調査によると、全村民が参加できる歌舞ショー、土産品の販売といったサービスもある。

3.2 経済への影響

まず、郎徳上寨の収入について考察したい。1985年に郎徳上寨を開放して以来、年々収入は増加している（図 6-4）。1986年の観光総収入は5,676元であったが、2014年には約211万元となる程大幅に増加した。この収入は村民に公平に分配する以外に、村民委員会がこれを村のインフラ整備、村民の福祉施設の建設、郎徳上寨の宣伝に利用している。村内の道路、上下水道が整備されたほか、楊大六遺跡の修復や村内外の観光案内標示も設置され、観光客により良いサービスを提供できている。

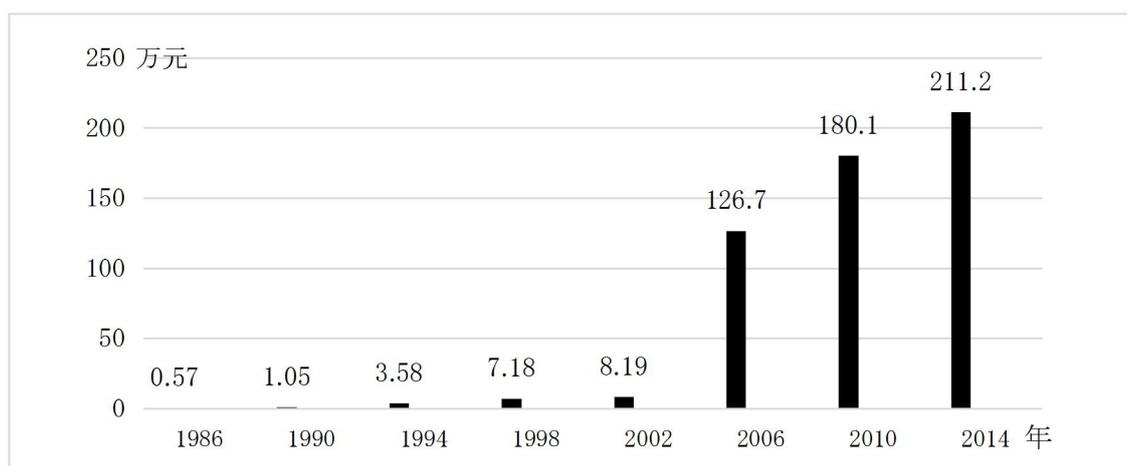


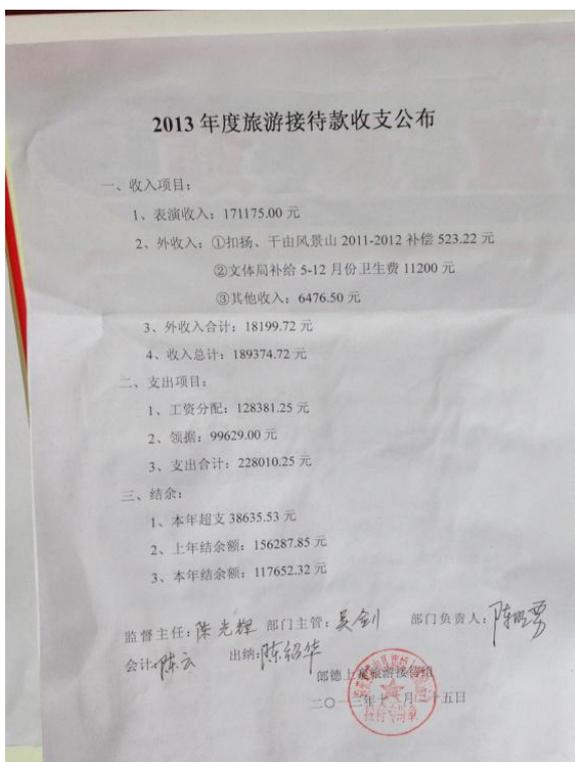
図 6-4 郎徳上寨における観光収入の変化（1986～2014年）

村民委員会への聞き取り調査により、筆者作成

次に、雷山県の幹部によると、農村観光の展開は一般家庭への影響が著しい。郎徳上寨はもともと伝統的な農法で農業を行っており、家畜の飼育などで生活していた。年に豚を2～3頭出荷することで得られる収入が住民たちの唯一の現金収入となる。1990年ごろから、この地域の住民は出稼ぎをしていた。近年は、農村観光から収入を得ていることが聞き取り調査からわかった。2013年には、農村観光による収入は約200万元であり、歌舞ショーのみの収入である171,175元（写真 6-10、右はその日本語訳である）は村全体の収入の1割にも満たず、収入の多くは個人農家の収入である。たとえば、農家楽のサービス、土産品の販売による収入である。2003年、郎徳上寨の一般家庭において、収入の31%である観光収入は2008年に50%前後にのぼった（李ほか2010）。さらに、2014年に聞き取り調査を

実施したところ、収入の80%は農村観光から得ている農家も少なくないことが分かった。そして、「2013年貴州省国民経済和社会発展統計会報」電子版データによると、郎徳上寨農民の平均年収8,500元は貧困地域である貴州省農民の平均年収5,343元を大幅に上回ったことがわかった。

農村観光の収入の内訳を考察してみると、農家楽経営者（アンケート調査した12軒の農家）は宿泊、食事、土産品の販売、その他、歌舞ショーの順で収入を得ているのに対して、一般家庭（聞き取り調査した8軒の農家）は土産品の販売、歌舞ショー、その他という順で収入を得られている。また、聞き取り調査によると、農家楽経営者の平均収入は一般家庭よりはるかに高いことがわかった。そのため、一般家庭は農家楽を経営できるよう努力していると思われる。このような村内の「格差」は郎徳上寨の将来の課題にもなり、解決すべき点である。



2013年度観光に関する収支

一. 収入項目

1. 歌舞ショー収入：171,175.00元
2. その他の収入：①扣楊、干由風景山2011—2012年度補助金523.22元
②文体局5—12月補助金（衛生費）11,200元
③その他の収入：6,476.50元
3. その他の収入の合計：18,199.72元
4. 収入合計：189,374.25元

二. 支出項目

1. 人件費：128,381.25元
2. その他の現金支出：99,629.00元
3. 支出合計：228,010.25元

三. 清算

1. 本年度赤字：38,635.53元
2. 前年度余額：156,287.85元
3. 本年度残額：117,652.32元

会計 監督主任 管理者 などの印鑑 公印

写真 6-10 郎徳上寨における観光に関する収支明細(2013年度)

(右は収支の日本語訳である) 筆者撮影

最後に、生業変化についてである。農村観光の展開によって、郎徳上寨では新たな産業、いわゆる第一次産業と第三次産業を融合した産業が生み出された。自宅の改装、観光客用の客室の新築などを行ったりして、自家生産の野菜や豚肉などを利用した料理を提供するといったサービス業に従事する農家が多数存在している。あいている時間には、歌舞ショーに参加したり、伝統工芸品の製造と販売をするケースも多く見られる。こうしたサービ

ス業に従事した結果、農民たちは単純な農業もしくは出稼ぎから解放され、出稼ぎを抑制する効果が見られた(表 6-8)。

表 6-8 郎徳上寨における農家楽経営者の生業変化

対象地	番号	生業変化の有無	生業の変化過程		
			改革開放以前	1990 年代	2014 年 2 月
郎	1	有	○	△	□
	2	有	○	△	□
	3	有	○	☆	□
徳	4	無	○	○	○
	5	有	○	△	□
	6	有	☆	○	□
上	7	有	○	△	□
	8	有	○	△	□
	9	無	☆	☆	☆
寨	10	無	◇	◇	◇
	11	有	◎	◎	□
	12	有	◇	○	□

○:農業 △:出稼ぎ □:農村観光 ☆:企業 ◇:その他 ◎:不明

農家楽経営者へのアンケート調査により、筆者作成

アンケート調査の結果を見ると、農家の主な収入、つまり生業は改革開放以前の農業を中心としていたが、2014 年現在、半数以上の農家が農村観光から収入を得ている。郎徳上寨では農業からサービス業に変化していることが分かった。

雷山県旅遊局や村民委員会は農村観光の発展に力を入れている。たとえば、農家楽経営者への補助金の給付、農村観光に関するサービスの指導などの公的な支援、研修会の開催などを行いながら、SNS の活用、旅行会社との連絡などの外部発信を実施している。そして、農村観光は農民の収入増加に寄与するだけでなく、農村開発及び農村文化の継承などにかかわる「三農問題」の解決にもつながっていると見える。

3.3 少数民族文化への影響

観光業の発展により、地域文化、特に少数民族文化への影響に関する研究が多く行われている。松村(2010)は中国のイ族文化が商業化・イベント化されたと述べた。李(2011)によると、観光化されてから目的地(ホスト側)に多くの観光客(ゲスト側)が入り込み、裕福なゲストは観光地の文化を賞味し、ホストの文化を消滅させる恐れがある。しかし、現地調査によると、郎徳上寨では最初の民族観光から現在の農村観光までの 30 年間、ミャオ族

文化は充分保護されていると言える。2001年1月には、全村民の討論により「上郎徳村規民約」が制定された。これには村の建築物をはじめ、楊大六遺跡、井戸、風雨橋などを保存すべきであり、村内には赤煉瓦の建物が建築できないと明記されている。その結果、郎徳上寨の周辺にあるミャオ族村では、赤煉瓦で建築された建物が多くなったのに対して、郎徳上寨では新築の建物はすべて木造で、ミャオ族風の吊脚楼である。また、郎徳上寨が開放された当時、全村には、銀飾りが18セットしかなかったが、現在、すべての家にはこれがあり、歌舞ショーに参加できるようになった。このように、村民はミャオ族の建物や文化を保護しており、前述した村貌を変化させるような外資を拒否した。村民は、「遠方からきた観光客はミャオ族の世界を見たがるだろう」、「子孫に残していく」、「これ（村内の建築を指す）を破壊したら、みんな来なくなるだろう」など²⁴と述べた。その結果、多くの観光客が正真正銘のミャオ族文化を鑑賞できるようになった。村民は農村観光から収入を得たことから、出稼ぎが抑制され、その結果、刺繍、吊脚楼の建設技術、酒造り、民族歌舞ショーなどの伝統文化を継承する後継者が多くなった。郎徳上寨の村民はこのような民族文化を活用し、さらに観光客を引き付けようと努力している。

次に、アイデンティティの再発見について述べる。

農村観光の展開によるアイデンティティの変化について、以下の3問を設けた。

農村観光を始める前のあなたについて、質問をします。

①ミャオ族であることがよかったですか。

A はい B いいえ C どちらとも言えない

その理由をお書き下さい_____

②郎徳上寨に生まれて、よかったですか。

A はい B いいえ C どちらとも言えない

その理由をお書き下さい_____

農村観光を始めてから、あなたはアイデンティティ

(郎徳上寨で生まれたミャオ族として)の再認識ができましたか。

A はい B いいえ C どちらとも言えない

その理由をお書き下さい_____

古くからミャオ族は「蚩尤²⁵」の子孫だと名乗り、素晴らしい文化と誇りを持つ民族であった。しかし、漢民族が中心となる政権、戦争及び貧困などのため、長江、黄河を中心とする「中原地域」から辺縁地域に追い出され、発展が遅れていた。1949年の中国建国以降の沿岸部や大都市を中心とする発展政策では、ミャオ族が定住する地域を含めた少数民族地域は発展できなかった。貧困な状況から脱出するため、ミャオ族は都市への出稼ぎをし、都市では3K(危険、汚い、きつい)の仕事に従事しているにもかかわらず尊敬されていなかった。そのため、最初の「農村観光を始める前の2問」には「どちらとも言えない」と

答えた農家が約7割であり、彼らはミャオ族と郎徳上寨に対する認識が薄いと言える。「農村観光を始めてから」の質問において、すべての農家は「農村観光を始めてから、郎徳上寨で生まれたミャオ族としてよかった」と答え、農村観光の展開は郎徳上寨の発展のきっかけになり郎徳上寨の村民は、ミャオ族、郎徳上寨、自己に対する認識度が高くなったことが分かった。村民は他民族の観光客にミャオ族の服飾、歌舞などを披露し金銭を獲得するだけでなく、「民俗文化に対する自信、誇り」も持つようになっており、アイデンティティを再発見できた。村民は「沢山の観光客にミャオ族村を見に来てもらいたい」、「私たちの村寨、私たちの歌舞、私たちの情熱を好きになって欲しい」²⁶と述べ、自信を持って観光客にサービスを提供している。一方、観光客は「踊りや歌で迎えてくれた。その美しさに感激したのはもちろんだが、何よりも心打たれたのは、自分たちの文化に対する情熱だった」と述べ、村民の民族文化に対する熱意を絶賛した。

3.4 地域の変化

上記以外に、農村観光の展開により、郎徳上寨における物価、環境、近隣関係、社会治安、交通、生活習慣、家族構成の変化についてアンケート調査した結果を図6-5にまとめた。そのアンケート調査の内容は下記のようになる。

農村観光の展開による地域の変化は更に「物価、環境、近隣関係、社会治安、交通、生活習慣、家族構成に分け、変化の有無、変化した点」について、質問を設けた。

例：農村観光の展開により、郎徳上寨における環境の変化がありましたか。

A はい B いいえ C どちらとも言えない D その他（お書き下さい）

Aと答えた人に質問します。どんな変化がありましたか。お書き下さい _____

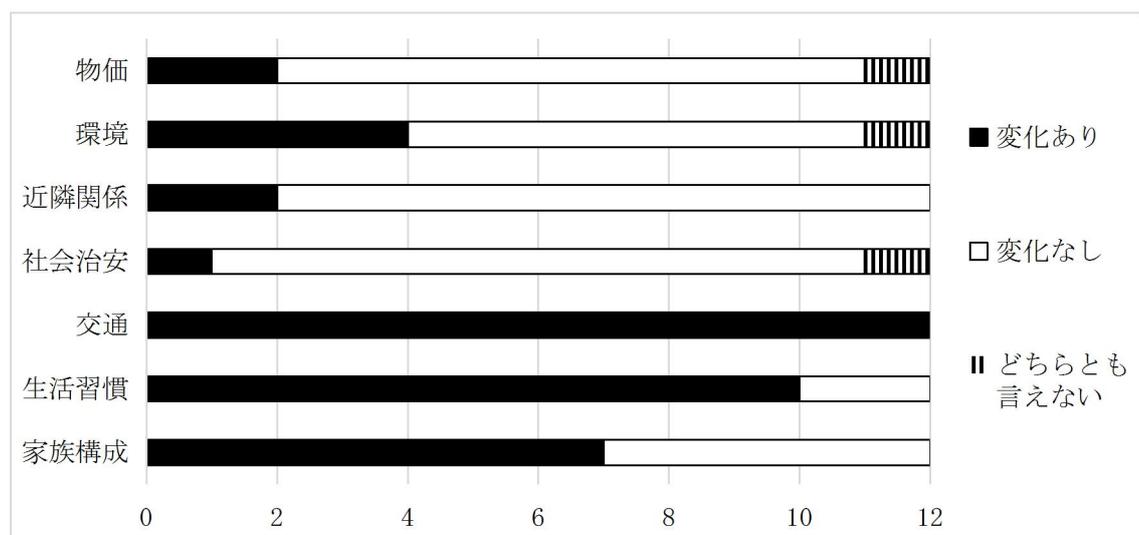


図 6-5 郎徳上寨における地域の変化

農家楽経営者へのアンケート調査により、筆者作成

図 6-5 をみると、郎徳上寨では、農村観光の展開により、交通、生活習慣、家族構成は著しい変化がみられたのに対して、物価、環境、近隣関係、社会治安はあまり変化がなかった。その原因と変化した内容(主に家族構成、生活習慣、交通)について聞き取り調査を行った結果、次のようなことが分かった。

まず、もともとミャオ族の伝統文化が色濃く残っている郎徳上寨では「公平」、「団結」、「共有」が重視されているため、近隣関係、社会治安にはあまり変化が見られない。郎徳上寨では村民が外出する時、「カギをかけない」という習慣があり、そのことから社会治安が良いことがうかがえる。郎徳上寨では、土産品を販売する農家は村の約 3 分の 2 であり、観光客が来る度に「競争販売」を行い、近隣関係が悪くなった時期があった。そこで、村民委員会と寨老、理老などは「郎徳上寨旅遊工芸品販売管理公約（郎徳上寨における工芸品販売の規定）」を作成し、工芸品販売の規定を定め、村民に周知した。その後、村民の近隣関係が良くなったという。農家楽を経営する農家は互いにライバルであるにもかかわらず、道を尋ねる時には、目的地の農家まで案内することが普通である。しかし、立地条件や接客サービスが異なっているため、観光客がよく訪れる農家楽とそうでない農家の収入の差は大きい。また、農家楽経営者と普通の農家は農村観光による収入の差が大きい。これらの「村内格差」の解決が重要であると考えられる。

物価は少し上昇したが、村民はそれが経済発展の結果と認識している。ごみ問題、観光バスによる騒音などの環境問題も存在しているが、調査した時点において、村民委員会のごみを分別するごみ箱の設置や、村から離れている場所に新しい駐車場の整備などの対策を立てていた。

次に、12 軒の農家のうち、農村観光の展開により、「家族構成が変化した」と答えた農家は 7 軒あり、大家族から核家族への変化がみられた。もともとミャオ族には年長者を尊敬し親孝行が奨励されるという伝統文化があり、親と同居する人々が多い。また、郎徳上寨の村民が出稼ぎをしていた時には、多くの子ども達は実家に預けられ祖父母に養育されていたため、大家族を中心とする家族構成であった。農村観光の開業をきっかけとして、農民は郎徳上寨に戻り、観光客により良いサービスを提供するために家を新築するなどして、半数以上の農家が大家族から分離し、核家族となった。出稼ぎに行かなくなった男性は観光客の送迎、村内外の案内、客室の清掃、楽器演奏、銀飾りの製造などをしながら、農業に従事している。一方、女性は刺繍、料理、育児などをし、土産品を販売している。そして、観光バスが来る度に、夫婦ともに村の歌舞ショーに参加している。このように、農家の収入源は夫婦もしくは男性の出稼ぎから農村観光に転換し、地元で働き収入を得ており、自ら子どもの扶養・世話ができるようになったため、大家族から核家族に変化したと考えられる。

第三に、10 軒の農家が「生活習慣が変化した」と答えており、農村観光の展開による影響が大きいと言える。第一に、食生活の変化がみられる。伝統的なミャオ族料理は辛味と酸味が効いたものが多く、米が主食である。食文化が異なる他地域の観光客の要望に応じ

て、小麦粉で作られた食べ物や、辛さを控えた料理を提供するようになった。これをきっかけに、麺類を朝食にする農家が増え、観光客に提供する食事は多様化した。また、観光客に提供する自家製の酒（米、トウモロコシで作られた酒）は良い評判を得られたが、それに合わない観光客にはビール、ワインも提供している。その影響で郎徳上寨の村民、特に若い世代がビールを飲むようになった。第二に、農家兼経営者は観光客を受け入れるために、浴室、トイレの整備を行った。観光客と接するため、彼らは入浴や身だしなみに注意を払っている。第三に、生活スタイルが変化している。以前出稼ぎで生活を営んでいた農民は郎徳上寨に戻り、農村観光から収入を得て、単純な工場ライン作業から解放され、農業、子どもの教育、家族団らん、村づくりなどの多彩な生活を送っている。しかし、夜遅くまで観光客に民族舞踊、楽器演奏などのサービスを提供しているため、従来の農村生活の「早寝早起き」という習慣が失われる可能性がある。

最後に、すべての農家は「交通が便利になった」と答えた。その理由としては、まず、村内外の道路の整備が進められていることが挙げられる。自治州の投資により、元々山地が多く交通が不便である郎徳上寨には雷山県、自治州州都への道が整備されてきた。村民委員会は歌舞ショー収入の25%²⁷や上級組織からの補助金²⁸などを用い、村内の隅々まで石で舗装し、ミャオ族の伝統模様を入れている。その結果、観光バスや観光に来る自家用車が村に入りやすくなった。また、この地域はアクセスが不便であるので、村民委員会は村外の道路整備、州都である凱里市、雷山県中心部と村を結ぶバスの増便をそれぞれの管理機関に要請した。調査した時点では自治州州都から郎徳上寨まで一日4回バスが往復運行され、基本的に地域住民の交通手段として利用されている。そのため、交通手段のない観光客向けの運行ダイヤが求められていた。さらに、快適な観光環境を作るため、村民委員会は駐車場、観光案内所、表演場、観光案内標示などのインフラ整備に力を入れている。

3.5 その他

郎徳上寨における農業の発展および観光客について、聞き取り調査を行った。郎徳上寨は山地が多く、交通が不便で、商業ビルの建築に伴う土地の売買はほとんど見られない。また、村民は農村観光を実施しているとともに、新たに棚田を開拓したりするなど農業に力を入れている。さらに、この地域は現在でも農業に関する祭事が多く行われており、従来の農耕文化を守っていると言える。

郎徳上寨は、ミャオ族の民族舞踊や音楽、工芸品、伝統民家群などといった様々な有形・無形の観光資源が豊富であり、特に近年、都市の観光客向けの農村観光の展開は都市の人々にとって魅力的である。そのため、多くの都市からの観光客が村を訪れている。周辺の同様の観光地は入場料が必要であるのに対して、郎徳上寨は無料であるため、多くの団体観光客が旅行会社を通して村を訪問している。また、多くの個人観光客も村を訪れている。村民は団体観光客に歌舞ショーを披露したり、宿泊、食事、土産品の販売といったサービスを提供したりしている。しかし、多くの農家兼経営者は観光客に関する情報をあまり記

録していない。そこで、村内の博物館に備えてある「貴州省雷山県郎徳上寨民族村寨博物館免費開放參觀人數登記冊」（以下、統計冊）に基づいて、分析する。

まず、観光客の出身地について述べる。貴州省内の観光客をはじめ、周辺の省、市からの観光客が最も多い。続いて、北京市、長江デルタ地域、広東省などの、いわゆる裕福な地域からの観光客が多く、東北、西北地域からの観光客は少ない（図 6-6）。これは交通に左右されると考えられるほか、観光客の収入にも関係があると思われる。上記以外には、毎年約 200 人の海外からの来訪者がいる。しかし、貴州省に隣接する雲南省や広西省における少数民族は多く、観光資源が重複しているため、来訪する観光客は少ない。

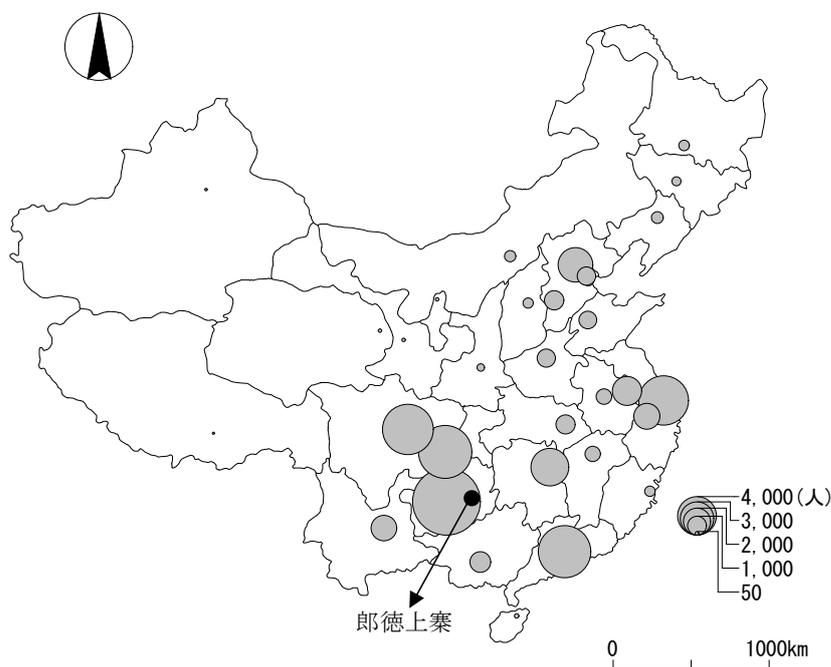


図 6-6 郎徳上寨を訪問する出身地別の観光客数（2013 年 2 月～2014 年 2 月）

統計冊により、筆者作成

次に、観光客の職業と来訪時期についてである。観光客の職業は様々であり、団体観光客の情報収集が不可能であるため、「統計冊（2013 年 2 月～2014 年 2 月）」に記載された内容に基づき、分析した。その中では学生が最も多く、28%を占めている。続いて、サラリーマン（教員を含む）、自営業、フリーター、その他（記載なしを含む）、無職（主婦を含む）の順である（図 6-7）。そのため、週末、夏休み、冬休み、五一（メーデー）、十一（国慶節）などの休日に来訪する個人の観光客が多いと考えられる。聞き取り調査によると、祭りが多く、気候が良い 3 月、6 月、7 月には団体観光客が最も多いということである。例えば、2015 年 4 月 1 日の「貴州都市報」によると、2015 年 3 月 21～31 日には、「春耕節」というミャオ族の伝統行事があったため、郎徳上寨は 38,700 名の観光客（団体観光客のみの統計）を受け入れている。

最後に、郎徳上寨を来訪する観光客の観光パターンは様々である。農家楽経営者への聞き取り調査によると、個人の観光客は、教育レベルが高ければ高いほど、滞在時間が長い傾向がある。たとえば、学校の教員や、研究機関に従事する人は数日間農家楽に泊まり、村を回りながら、村民に対してミャオ族の伝統文化に関する多くの質問をしていた。一方、団体観光客は歌舞ショーを鑑賞し、2時間ほど村内に滞在しただけで他の観光地へ移動する。

以上のように、郎徳上寨は中国全土の観光客を受け入れ、歌舞ショーや農家楽、土産品の販売といったサービスを提供し、収入を得られるようになった。村民はこの収入をうまく利用し、村づくりをしており、郎徳上寨、ミャオ族のアイデンティティに対する再認識ができたため、自信を持ったサービスを観光客に提供できるようになった。上記の一連のことから、この地域には交通、家族構成、生活習慣の変化が見られるようになった。

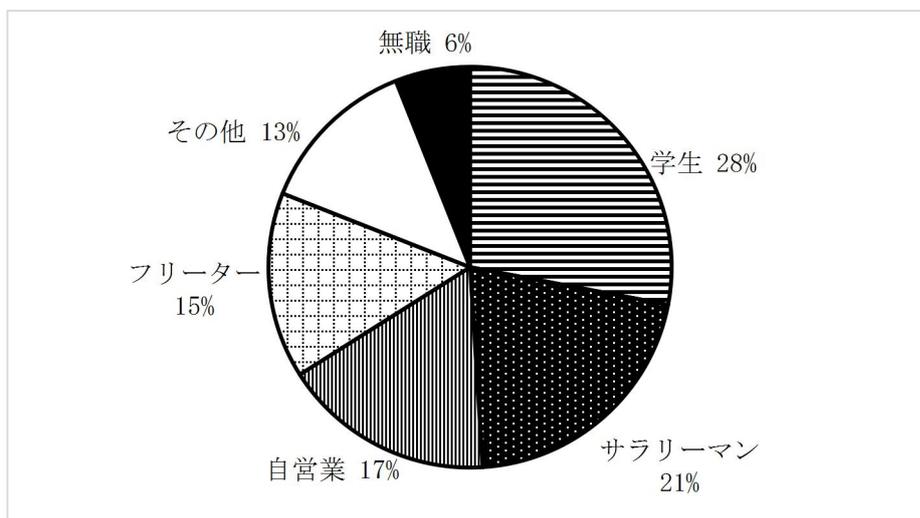


図 6-7 郎徳上寨を訪問する観光客の職業の構成 (2013年2月～2014年2月)

統計冊により、筆者作成

4. 小括

本章は先行研究を整理した上で郎徳上寨を事例に、少数民族ならではの農村観光資源とミャオ族社会システム、村民委員会、工分制、高齢者と女性の活躍について考察した。最後に、農村観光の展開による地域への影響について、経済、文化、地域の変化、その他に分け分析した。

その結果として、以下のことが明らかになった。まず、辺遠地域における農村観光の展開は観光政策、公的な支援にかかわっていることが明らかになった。また、少数民族の独特な資源を利用し、ミャオ族社会システムと村民委員会が中心となって、工分制を用いた展開プロセスを明らかにした。もちろん、村民の支持及び高齢者と女性の活躍が重要であ

る。そして、農村観光の展開は地域住民の収入に寄与し、単純な農作業から農業を基盤とするサービス業に変化する傾向がある。村民は出稼ぎをせず、ミャオ族の文化と伝統工芸を継承し、アイデンティティの再発見への促進効果もみられた。最後に、農村観光の収入により、村のインフラ整備などが行われ、郎徳上寨のような辺遠地域に位置する農村における「三農問題」の解決につながっていくことが期待される。

注：

- ¹ 中国には56の民族があるが、漢民族を中心とする国家統轄政権であったため、少数民族は古くから重視しておらず、辺遠地域を中心に居住しており、発展が遅れている。少数民族は生存していくため、相互扶助や団結が漢民族より重要であった。そのため、少数民族地域では、地縁、血縁関係により形成され、地域の諸々を処理する独特な制度や自治組織が多く存在している。この制度や自治組織は地域社会において自然に形成されてきたものであり、少数民族社会システムと呼ばれている。本章では、ミャオ族社会システムを「2.5.1 ミャオ族社会システムと村民委員会」にて、説明する。
- ² 現地調査をした時点では、郎徳上寨には13軒の雷山県旅遊局に認定された農家楽があった。それ以外に数軒の農家が農村観光を始めようとし、雷山県旅遊局に認定のための申請準備を進めていた。
- ³ アンケートは農家楽経営者個人・家族の属性、農村観光をはじめたきっかけ、公的な支援、農村観光の内容、収入、生業変化、アイデンティティの変化、地域の変化などについての質問を設けた。
- ⁴ 貴州省、広西省のミャオ族、トン族が定住する地域に多くみられ釘を使わない木造橋である。
- ⁵ 宜居城市研究室が2014年2月21日に発表した「2013年中国的GDP」による。
- ⁶ 両親が出稼ぎに出て、児童は家に留守居する。それに対して、子供が出稼ぎに出て、老人は家に留守居することを留守老人という。
- ⁷ 雷山県旅遊局が定めた飲食サービス業の基準である。
- ⁸ 塩漬け豚バラ肉である。
- ⁹ 郎徳上寨では冬でも暖房を使用せず、日本の囲炉裏のように薪を用いる。
- ¹⁰ 観光客に対する聞き取り調査による。
- ¹¹ ミャオ族の歌と舞踊を指す。以下同様。
- ¹² 客を歓迎するため、村の入り口で客に酒を勧める際、歌う歌である。
- ¹³ ミャオ族の伝統工芸である。蠟を用いて布に花柄を描きそれを染め、蠟を取り除いた後、花柄が残る。
- ¹⁴ ミャオ族の女性は情熱、率直である性格を表す言葉である。
- ¹⁵ 中国の南西部にある高原であり、多数の少数民族が定住している。
- ¹⁶ 「儒学」が普及しておらず、教育程度が低い地域を指す。

-
- ¹⁷ 房族とも呼ばれる。
- ¹⁸ 「牯藏頭」とも言う。ミャオ族にとっては、祭祀が重要であるため、12年おきに選ばれた鼓藏頭は村の管理にも協力している。
- ¹⁹ 後論の郎徳上寨における農村観光政策を導入すること、収入を分配する工分制制度はこの一例である。
- ²⁰ 「当代法学論壇」2006年第6期「雷山県三村苗族習慣法確認的政治組織制度」による。
- ²¹ 上級組織は村民委員会を管理する郷、民族郷、鎮を指す。「中華人民共和國村民委員会組織法」には、「村民委員会は郷、民族郷、鎮の人民政府が工作を展開するのを助ける」、「郷、民族郷、鎮の人民政府は村民委員会の工作に対して指導、支持、幫助を与える」、「各種の形式的共同経済とその他の経済を發展させなければならない」と明記している。
- ²² 農家が一定の農産物を国家に上納し、それ以外の農産物は自由に処分する制度である。
- ²³ 村民委員会のメンバーであり、共産党の利益を代表する者の呼称である。
- ²⁴ 村民への聞き取り調査による。
- ²⁵ 古代中国神話に登場する神であり、勇敢で忍耐強く武器の創始者とされている。
- ²⁶ 村民への聞き取り調査及び『郎徳苗寨博物館』（郎徳上寨村民委員会が編集した本）による。
- ²⁷ 団体観光客を対象に披露したミャオ族歌舞による収入である（表6-5）。村民委員会は歌舞ショーの収入の25%を村づくりに使用し、それ以外の75%は全村民に工分制で分配する。
- ²⁸ 雷山県をはじめ、黔東南ミャオ族トン族自治州、貴州省からの補助金である。

第7章 考察

1. 農村観光の展開にかかわる諸要因

従来型の農村に関しては、基本的には農業生産の場、あるいは農産物を提供してくれる地域として理解されてきた。そのため、農業生産を基にした視点や特徴づけをもって農村をとらえる観点が多かった。しかし、現在の農村は、それだけでなく、安心・安全な農産物の提供や癒し・余暇、交流・体験などの機能も重視されるようになった。このような農村の変化は、生産主義であった農村からポスト生産主義への移行とも呼ばれている（立川 2005）。農村観光は、農産物を利用した食事を主に都市の観光客に提供し、都市農村交流を積極的にはかり、農村の諸機能を融合した新たな観光形態である。農村観光の展開は、ポスト生産主義の農村の諸機能をさらに強化し、農村の発展につながっていると考えられる。

本研究の第4～6章では、都市近郊、既成観光地周辺地域、辺遠地域に位置する農村観光の展開は西麦窯社区、里峪村、郎徳上寨の事例を取り上げ、論述した。その結果、経済発展、都市住民の余暇時間の増加、政策、公的な支援、交通の発達などの「農村外部」の要因と、村民の自発的な動き、地域にある観光資源の活用、村民委員会の牽引などの「農村内部」の要因により、農村観光が展開していることがわかった。また、観光客の来訪や都市農村住民の相互交流によって、農村観光の展開がさらに拡大でき、農村の発展に寄与している。その結果、以上の様々な要因の働きかけが地域の変化をもたらし、農村の発展につながっていると言える。これは、図7-1で示すことができる。本章においては、農村観光の展開にかかわる上述の諸要因の相違点と共通点を分析しながら、この3つの村における農村観光の展開を考察する。

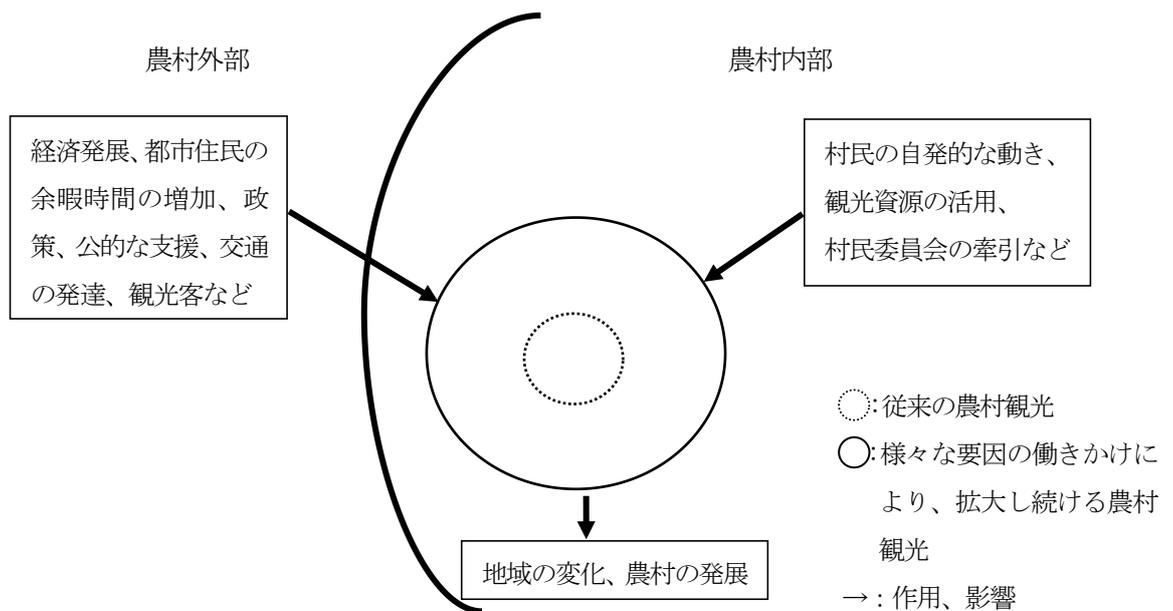


図7-1 農村観光の展開にかかわる諸要因

筆者作成

1.1 政策と公的な支援

中国では、1978年の改革開放以降、経済が発展し、国民の消費行動が大きく変化し、観光に対する支出が増加する傾向が見られる。また、国民の余暇時間の増加や経済発展によるインフラ整備と自家用車の普及などにより、観光の発展が促進されている。しかし、都市と農村の経済格差が拡大しつつあり、特に、中国の農村では、三農問題が深刻になっている。このような三農問題を解決するため、中国政府は、農村の資源を活用し都市住民に食事、宿泊、体験などのサービスを提供する農村観光を導入し、農村の発展を図ろうとしている。例えば、2015年に発表された「1号文件¹」では、「三農問題が中央政府における最重要課題であり、農村の資源を活用し農村観光事業を推進する」と明記している。そして、中国国家旅游局を中心とする公的な機関は、農村観光に関する諸政策を作成し、農村観光の発展を促進している。それに応じて、各地域も農村観光の発展を促進する政策の作成や公的な支援の実施に力を入れており、農村経済の発展につなげている。

各調査対象地における農村観光の展開には政策が重要な役割を果たしている。それぞれの地域には「農家民宿の管理方法」や「農村観光的規劃」、「農家樂的基準」などの農村観光に関する政策が実施されており、農村観光の展開を促進している。政策による農村観光の展開、あるいは、農村に農村観光を導入することによって、農村経済を発展させることは中国における農村観光の特徴の一つと言える。しかし、地理的位置により分類された3つの村は、農村観光に関する政策の内容、導入時期が異なっている。なかでも、経済発展が遅れている辺遠地域では、中国政府は政策的にこれらの地域発展を促すため、農村観光を導入している。辺遠地域に位置する郎徳上寨でも見られるように、1985年からいち早く観光発展の諸政策が制定され、農村観光が展開していくきっかけを与えられた。それに対して、ほかの地域に位置する2つの村は、2000年以降本格的に農村観光を導入し、それに対する政策が作成されたが、それらの政策は、郎徳上寨よりやや少ない傾向にある。

さらに、各地域の政府は政策上農村観光を発展させるだけに留まらず、農村観光の展開に必要な初期投資として補助金制度により補填を行ったり、税金などを免除したりしているため、村民の負担を軽減させている。調査対象地では、村のインフラ整備、農村観光の経営、農村観光の宣伝などの面に補助金と投資が見られた。このような補助金と投資は、農村観光を経営するためのインフラ整備や、農村観光の宣伝に使用され、農村観光の展開に寄与している。

しかし、表7-1で示したように、各村では補助される事業が異なっている。また、聞き取り調査によると、それぞれの地域への投資および補助金の金額は異なっている。都市近郊に位置する農村は、都市化の進展によるインフラの整備が、農村観光の展開を促進している。それに対して、既成観光地周辺地域や辺遠地域に位置する農村は、農村観光を実施するため、道路や水道などのインフラ整備を始めた。また、郎徳上寨は、民族舞踊や音楽、工芸品、伝統民家群などといった様々な有形・無形のを保護するため、それに対する補助金を供出した。そのため、3つの村における農村観光の展開には必要となる投資や補助金が異なっており、辺遠地域には支援政策が幅広く、補助金が多い傾向が見られた。また、郎徳上寨への投資や補助金は国や貴州省、雷山県政府による公的なもののみであるが、西麦窯社区、里峪村への投資は企業による投資も見られる。

表 7-1 各村における投資および補助金の状況

投資および補助金の項目	西麦窯社区	里峪村	郎徳上寨
道路整備	有	有	有
農家楽の経営	有	有	有
農村観光の宣伝	有	有	有
観光施設の建設	無	有	有
景観の保護	無	無	有

第 4～6 章により、筆者作成

1.2 観光資源

農村観光の展開には、公的な支援が重要であるが、観光資源は農村観光の展開には不可欠である。本論文で事例研究とする西麦窯社区、里峪村、郎徳上寨の各村は豊かな自然景観、郷土料理といった観光資源に恵まれていると言える（表 7-2）。また、各村は、観光資源の活用と保護を重視している。観光資源は活用しなければ価値がないが、持続可能な観光発展を図るため、それに対する保護が求められている。調査対象地は伝統的な農村風景を有し、観光客を引き付けている。村民はさらに地域固有の観光資源である海、山、森林、果実、ミャオ族歌舞・建築などを活用し、地域の個性を磨いている。一方、すべての調査対象地は農村観光からの一部の収入を利用し、観光資源を保護しながら活用している。このように、地域固有の資源は農村観光にとって不可欠であることから、農村観光資源の保全も重要である。

表7-2 各村における観光資源

項目	西麦窯社区	里峪村	郎徳上寨
自然	山、海、砂浜	山、川、森林、山菜、花	山、川、森林
農業生産	野菜畑	果樹園、野菜畑	棚田、野菜畑
農村集落	漁村風景	山村風景、遺跡、古民家、油缶 ²	山村風景、遺跡、吊脚楼、寨門、風雨橋など
農村文化		多くの行事	ミャオ族歌舞・楽器演奏、祭事
その他	雰囲気 海鮮料理	雰囲気、清澄な空気、豆腐料理、香椿料理	雰囲気、ミャオ族料理、刺繍、銀の飾りなどの土産品

表7-2は、表3-2（p45）と同じ分類を使用している。空欄：該当なし

表3-2および第4～6章により、筆者作成

一方、各村はそれぞれ特徴があり、互いに異なる農村雰囲気が味わえる。西麦窯社区には、遺跡や古い建築があまり見られないのに対して、里峪村と郎徳上寨には、遺跡、古民家、特色ある建物が多数見られる。西麦窯社区での聞き取り調査によると、都市化の進展により、村の一部の土地は売買され都市の建築用地に利用されたため、遺跡や古民家などが破壊されたとのことである。また、

郎徳上寨では、ミャオ族歌舞、祭事は観光客にとって魅力的であり、この村の農村観光の展開につながっている。

各村は、所有する観光資源を活用し観光客にサービスを提供している。西麦窯社区のような都市近郊に位置する農村は、主に近郊都市の観光客に食事や民宿などのサービスを提供しているのに対して、郎徳上寨のような辺遠地域に位置する農村は、民族文化を利用し、それにミャオ族の食事や雰囲気を加えて、誘客している。また、里峪村は泰山からの影響を利用し、まず観光農園、続いて農家レストラン、民宿のサービスを提供したうえで、地域の農村風景を観光商品として活用している。そのため、農村観光対象になった観光資源とその時期も異なっている。西麦窯社区は、最初に観光客に食事を提供し、その後、農家民宿、村内外風景という順になっている。里峪村は、観光農園、農家楽（農家民宿、農家レストラン）、村内外風景、農村文化の順である。それに対して、郎徳上寨は、少数民族村として開放され、民族歌舞や楽器演奏、村の建築などの民族文化、村の風景が商品化された後、観光客は村民による食事や民宿のサービスを利用するようになった（表 7-3）。これは、前二者と異なり、辺遠地域における農村観光の独特な展開とも言える。

表 7-3 各村、各時期における農村観光対象

村名	開始当時	2000年代	調査時点
西麦窯社区	農家レストラン	農家レストラン 農家民宿	農家レストラン・農家民宿 農村風景
里峪村	観光農園	観光農園 農家レストラン 農家民宿	観光農園 農家レストラン・農家民宿 農村風景・農村文化
郎徳上寨	農村文化	農村文化 農村風景	農村文化・農村風景 農家レストラン・農家民宿

調査時点：最終の調査時点を指す。2015年7月に西麦窯社区、2015年7月に里峪村、2014年2月に郎徳上寨における現地調査を実施した。

第 4～6 章により、筆者作成

各村において、展開している農村観光が異なっているため、農村観光による収入源の違いが見られる。西麦窯社区では食事や宿泊の提供、里峪村では観光農園や民宿・食事の提供による収入が多いのに対して、郎徳上寨では歌舞ショーや土産品の販売による収入が多い。また、異なった観光資源は観光客の行動パターンにも影響している。多様な農村文化を体験できるため、郎徳上寨を訪問する観光客は近隣の都市住民に限らず、長期間滞在する傾向があるのではないかと考えられる。

また、西麦窯社区、里峪村、郎徳上寨における観光資源は異なっているため、農村空間の商品化の状況も異なっている。田林（2013）は、農村空間の商品化に関する定義を従来の研究から詳細に整理・分析したうえで、農村空間の商品化の形態を4つに整理・分類した。この4つの形態は農水産物の供給、レクリエーション・観光、農村居住、農村の景観・環境の維持と社会・文化の評価を通し

た生活の質の向上となっている。西麦窯社区では、農水産物を利用した農家レストラン、レクリエーション・観光のための民宿・農村風景が主となる。里峪村では、農産物を利用した観光農園、農家楽、レクリエーション・観光のための農家楽・農村風景、農村居住のための空き家の賃貸、農村の教育効果を利用した「基地」の設立などがあり、多種多様な農村観光が展開している。郎徳上寨では、ミャオ族歌舞ショーやミャオ族祭事、ミャオ族の独特な建築物を見学する観光に加え、農家楽により提供される食事、宿泊などのサービスが利用されている。このように、農村空間の商品化の観点からみると、都市近郊の西麦窯社区では農水産物の利用、レクリエーション・観光という形で農村空間の商品化が進んでいる。既成観光地周辺の里峪村では多様な農村空間の商品化が見られる。辺遠地域に位置する郎徳上寨では社会・文化の評価を通じた生活の質の向上が顕著である。そのため、都市近郊、既成観光地周辺、辺遠地域における農村観光の展開は地域差が生じていると言える。

農村観光は農村の資源を活用し、都市住民に食事、宿泊およびほかの非物質的なサービスを提供することによって、農村空間を商品化しつつある。しかし、農村の過疎化や耕地の放棄などは農村空間の持続的発展を阻害している（張 2014）。西麦窯社区は、都市化の進展により、農業用地が減少する傾向が見られるため、今後この村における農村空間の商品化を見守る必要があると考えられる。一方、里峪村と郎徳上寨では、農村観光から得られた収入によって、村民が出稼ぎをせずに地域の伝統文化を継承しているため、それが地域の発展につながり、さらに農村空間の商品化を促進する効果があると言える。

1.3 農村観光の担い手

農村観光を展開するため、担い手としての各村の村民が重要な役割を果たしている。特に、注目されているのは、各村の村民委員会である。村民委員会は中国の農村では地域社会と深く結びつき、地域発展を目指す統率力を有する組織であり、農村観光の展開に力を入れている。例えば、農村観光の展開に関する研修会、勉強会の開催、農村観光の宣伝を実施している。また、各村の村民は農村観光を積極的に展開しており、観光客に宿泊・食事などのサービスを提供するための農家楽を経営している。ただし、各地の自然条件や社会・経済・歴史的条件も異なるため、各地域の農家楽経営者の数は異なっている（表 7-4）。

表 7-4 各村における人口と農家楽の軒数

村名	位置	人口	農家楽
西麦窯社区	都市近郊	546 人	102 軒
里峪村	既成観光地周辺	646 人	12 軒
郎徳上寨	辺遠地域	560 人	13 軒

第 4～6 章により、筆者作成

表 7-4 をみると、西麦窯社区における農家楽経営者は最も多いことがわかる。これは、農村空間

の商品化の主な傾向であり、沿海地域から内陸部へと徐々に移動していると言える（張 2014）。また、都市の影響が大きいいため、農村空間の商品化は大都市周辺から始まり、徐々に中小都市郊外やその他の地域でも見られるようになった。そして、第6章で論じたように、中国では昔の漢民族を中心とする政策や東部を優先的に発展することなどにより、漢民族地域は少数民族地域より農村商品化が早かったという特徴がある。しかし、既成観光地周辺地域や辺遠地域の農村はそれぞれ独特な観光資源と展開手段の活用によって、農村観光を展開している。また、経済発展によるインフラ整備や可処分所得の増加は都市住民の観光行動を変化させ、都市近郊以外の地域でも農村空間の商品化が拡大していくと思われる。そして、郎徳上寨のような村では、歌舞ショーや土産品販売は村民全員により実施されているため、村全体が商品化されている傾向が見られる。

各村の農村観光の展開は、高齢者と女性の活躍が重要である。特に、郎徳上寨の高齢者は民族文化の伝承と農作業の方法を守りながら、長い人生において培ってきた能力や経験を発揮し、後継者育成にも力を入れている。また、郎徳上寨における伝統工芸品の製造・販売及び農家楽のサービスを提供する主な担い手は女性である。伝統的なミャオ族の女性は家事、育児などを中心とする狭い空間で活動していた。現在、彼女たちは農村観光の展開とかわかっているため、生活空間や生活スタイルに変化が生じ、従来と異なる生活を送っている。西麦寨社区、里峪村においては、女性と高齢者の活躍が見られるが、郎徳上寨より顕著ではない。また、里峪村では、女性のUターン者が経営する農家楽が存在している。

1.4 農村観光の経営

各村の村民は自分が居住している村の観光資源を加工し、多様な農村観光を展開し、農村ならではの創意工夫を凝らしている。観光客は「農村性」を求めて農村を訪れているため、都市や都市化された農村ではできない観光を工夫する必要がある。そのため、地域伝統工芸や地域文化を再評価し、地域の魅力を再発見できたことから、村民たちは自分の村、民族に対するアイデンティティについても再認識できた。特に、郎徳上寨のような少数民族村では村民は自分の村、民族に対する熱意が見られた。そのため、観光開発に際しては、地域の特性を把握したうえで、創意工夫が重要であると考えられる。また、各村では、発信手段の多様化は農村観光の展開を促進している。調査対象地はインターネットやスマートフォンの普及につれて、従来の媒体にない訴求力で農村観光を宣伝したり、他地域との広域連携や近隣観光地との相乗効果などを利用し、誘客したりしている。そのため、農村観光の展開には、これらの手段を積極的に利用すべきであると考えられる。

しかし、各村の状況により、展開している農村観光の内容が異なっている（表 7-5）。西麦寨社区では、食事、宿泊のようなサービスの提供を主として行っているのに対して、里峪村と郎徳上寨では、多様な農村観光を展開していることがわかった。その理由としては、都市近郊地域に立地している西麦寨社区は、都市からの観光客が継続して訪れてくるため、食事と宿泊から得る収入が多い。また、都市住民にとって、農家レストランや農家民宿は都市近郊で農産物、農村景観などの「農村を消費する」直接的な機会であり、時間と経費を抑え容易に利用できる。しかし、方ほか（2015）が指摘したように、都市部を離れ周辺に観光地がない、集客の難しい農山村地域では、農家楽の発

展が難しい。そのため、里峪村と郎徳上寨は、多様な農村観光を展開している。例えば、里峪村は、泰山からの影響を活用しているとともに、村全体が教育の場として利用されている。郎徳上寨は、少数民族文化に触れる場所として宣伝している。さらに、両村は、「農村」そのものに主眼を置き、「農村らしさ」を再認識し、農村文化を中心とする農村観光を展開している。その結果、誘客できただけでなく、地域住民には、農村らしさの再構築や農村文化の再認識にもつながっている。

表 7-5 各村における農村観光の内容

村名	農業体験	販売	食事	宿泊	農村風景	農村文化	学生の教育
西麦窯社区	△	×	○	○	○	×	×
里峪村	○	○	○	○	○	△	○
郎徳上寨	△	○	○	○	○	○	△

○：積極的に実施している △：積極的に実施していない ×：ほとんど実施していない

第4～6章により、筆者作成

また、3つの村における農村観光の経営形態は異なっている。西麦窯社区における農家楽経営者は村民委員会などの地域の行政機関や関係団体との結びつきが弱く、農村観光と地元の農林漁業との産業連関が強化されていない。各農家楽経営者の連携があまり見られず、それぞれの農家が個別に農村観光を展開するという「独立型」の農村観光と言えよう。一方、里峪村と郎徳上寨は、地域の行政機関、農家楽経営者、一般の地域住民、村民委員会などにより、農村資源を活用した農村観光を展開しており、多様なネットワークの構築や村民のアイデンティティの形成にもつながっている。これは、個人の農家（農家楽）だけでは出しにくい新たな地域の魅力をつくり、観光客の選択肢を増やし、地域全体の発展をはかる「ネットワーク型」の農村観光と言えよう。しかし、農家楽の数を見ると、西麦窯社区における約半分の農家は農村観光を経営し地域の主な産業にもなっている。ほかの2村では、農家楽経営者は1割の農家にすぎない。そのため、景観上、多くの農家楽が存在する西麦窯社区では「面型」で農村観光を展開しており、村民の多くは農村観光から収入を得ている。一方、里峪村、郎徳上寨は現在でも農家楽の経営者が少なく、村に点在しているため、「点型」で農村観光を展開していると言える。

これから「点」と「面」の結合、つまり村民を中心としながら、農村観光とそれに関連がある団体や産業の強化などによって、農村の発展を図っていくことが重要であろう。

1.5 観光客

各村における農村観光の展開の結果、来訪する観光客は増加しつつある。3村とも隣接の都市からの観光客が最も多く、地元の観光客に好まれていることが聞き取り調査でわかった。これは、都市化の進展や交通の便などにかかわっていると考えられる。

一方、各地域を来訪する観光客の出身地は異なっている（図 7-2、7-3、7-4）。まず、西麦窯社区および里峪村の村民委員会への聞き取り調査により、両村を訪問する観光客の出身地は図7-2と図

7-3のようになっていることがわかった。しかし、両村は観光客に関する正式な統計がなく、山東省からの観光客を100とした場合の指数で得られている。西麦窯社区を訪問する観光客は、山東省をはじめ、周囲の河南省（指数：10）や安徽省（指数：5）、江蘇省（指数：5）と続き、北京市（指数：5）や上海市（指数：5）からの観光客も少なくない。それに対して、里峪村を訪問する山東省以外の観光客の指数は河南省（指数：10）、江蘇省（指数：5）、上海市（指数：5）となっている。また、西麦窯社区を訪問する観光客はほぼ全国に分布しているのに対して、里峪村を訪れる観光客は山東省の周辺地域に止まっている。そのため、西麦窯社区は里峪村より知名度が高いことがうかがえる。

図7-4は郎徳上寨を訪問する観光客の出身地を表しており、村の博物館に備えてある「貴州省雷山県郎徳上寨民族村寨博物館免費開放參觀人数登記冊」により作成した。これによると、貴州省内の観光客をはじめ、周囲の省・市からの観光客が最も多く、続いて、北京市、長江デルタ地域、広東省などの、いわゆる裕福な地域からの観光客が多い。これは、交通に左右されられると考えられるほか、観光客の収入にも関係があると思われる。しかし、貴州省に隣接する雲南省や広西省における少数民族は多く、観光資源が重複しているため、来訪する観光客は少ない。また、東北や西北などの地域からの観光客は少なく、交通の便とかかわっていると考えられる。上記以外には、毎年約200人の海外の来訪者がいる。

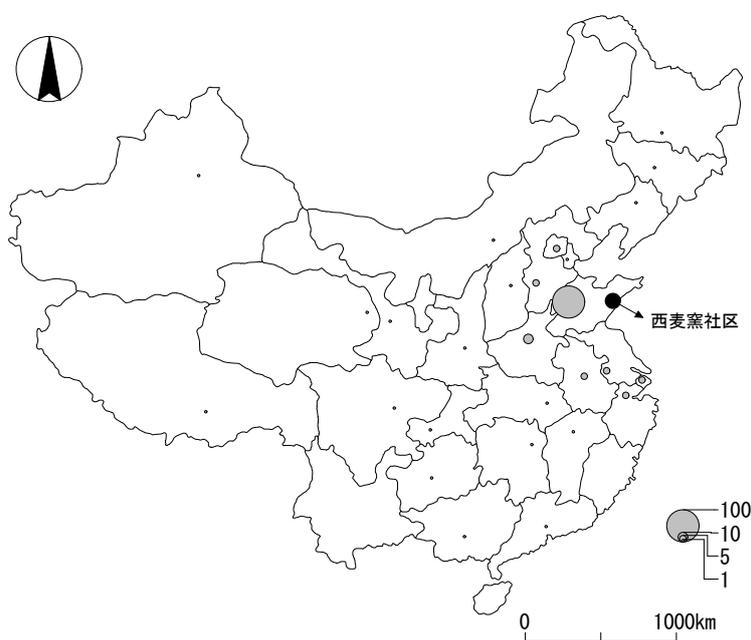


図7-2 西麦窯社区を訪問する出身地別の観光客数（2015年、山東省を100とした指数）

西麦窯社区村民委員会への聞き取り調査により、筆者作成

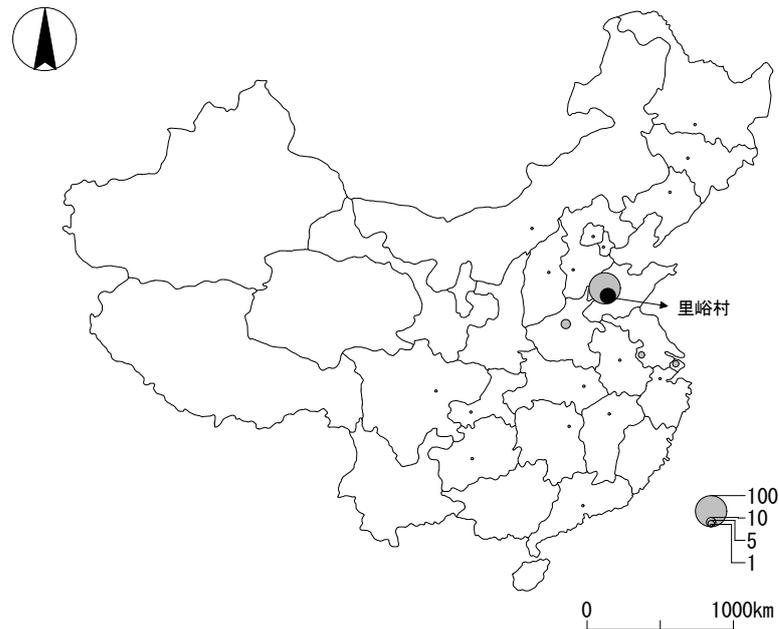


図 7-3 里峪村を訪問する出身地別の観光客数（2015 年、山東省を 100 とした指数）

里峪村村民委員会への聞き取り調査により、筆者作成

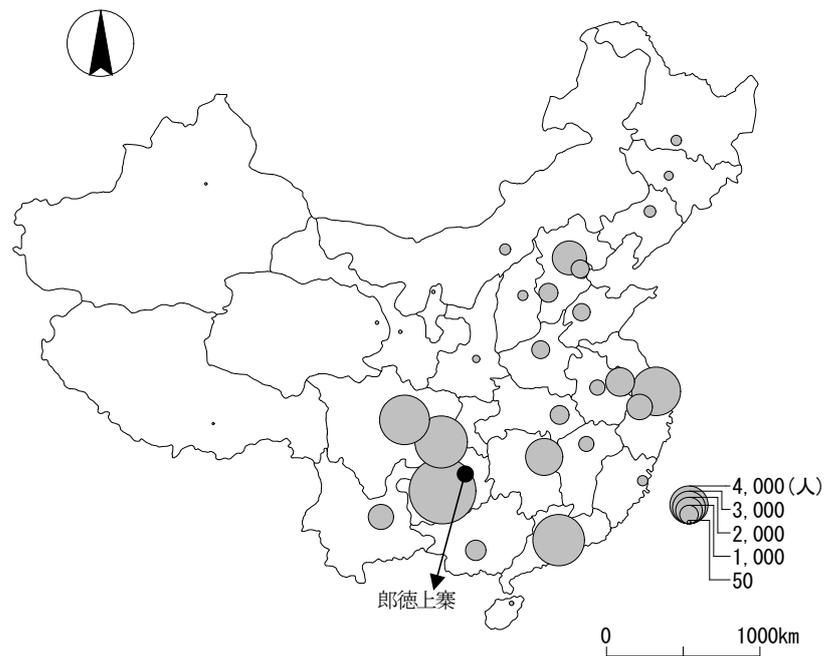


図 7-4 郎徳上寨を訪問する出身地別の観光客数（2013 年 2 月～2014 年 2 月）

貴州省雷山県郎徳上寨民族村寨博物館免費開放參觀人數登記冊により、筆者作成

図 7-2、図 7-3、図 7-4 を互いに比較してみると、西麦窯社区と里峪村への観光客は、山東省およびその周辺の省、市に集中しているのに対して、郎徳上寨を訪問する観光客は全国的に分布している。これは、前述した各村における商品化された観光資源とそのプロセスにかかわっていると考

えられる。西麦窯社区と里峪村は、地域の食材や農村風景などを利用し、近隣都市の住民を中心とする観光客にサービスを提供している。一方、郎徳上寨は少数民族の文化を活用し、貴州省をはじめとする中国の観光客だけでなく、外国の観光客まで引き付けている。また、西麦窯社区と里峪村を訪問する観光客は、季節性が鮮明であり、夏や秋に最も多い。郎徳上寨では、祭事が行われる時期に訪れる観光客が多いが、一年中絶えることがなく、伝統文化を利用した農村観光は、季節性がないと言えるであろう。これらのことから、これからの農村観光の展開は農村文化の利用が重要であることが示唆されると考えられる。

2. 各村における農村観光の展開

2.1 各村における農村観光の時間的展開

まず、時間的観点から、各村における農村観光の展開を考察する。西麦窯社区は山地が多く、また海岸部に位置することから、古くから採石、漁業が盛んであったが、1980年以降、嶗山風景区を保存するため、採石が禁止され、地元の企業に従事する村民が多くなってきた。1990年から、西麦窯社区の村民は青島市の都市住民や、嶗山を訪れた観光客を対象に、自発的に農家レストランを開いた。2000年から、青島市の都市住民や他地域の観光客向けの農家民宿が村民により実施されたことは、西麦窯社区における農家民宿の展開のきっかけとなった。その後、村民委員会は、村の経済を発展させるため、農家民宿の計画に踏み出し、農家民宿に関する政策の実施や補助金の導入などに力を入れている。さらに、2002年、西麦窯社区の西部約3km（直線距離）に位置する「大河東」駐車場の廃止により、嶗山観光用のシャトルバスの運行もなくなったため、自家用車で嶗山を訪問する観光客は、途中の西麦窯社区へも立ち寄るようになり、村の農村観光の展開を促している。2004年に、西麦窯社区の村民委員会をはじめ、嶗山風景区管理委員会、村民などが共同出資で「青島山海人家旅游株式会社」を設立し、会社組織により村の農家民宿を管理するようになり、農家レストラン、農家民宿に加え、村とその周辺の風景を観光客にアピールしている。一方、観光客の増加は、村民の収入につながっており、農村観光の更なる展開に寄与していると考えられる（表 7-6）。

表 7-6 西麦窯社区における農村観光の時間的展開

時期	農村観光の内容	農村観光の展開にかかわる主な要因
1990年	農家レストラン	都市化の影響、インフラ整備、村民の自発的な動き
2000年代	農家民宿	村民の自発的な動き、村民委員会の牽引、農村観光に関する政策、駐車場の移転、観光客の増加、補助金など
2004年以降	農村風景を楽しむ	観光客の増加、村民の自発的な動き、村民委員会の牽引、「青島山海人家旅游株式会社」の設立

農村観光の内容：各時期における新規のみの農村観光の内容である。

第4章により、筆者作成

里峪村は山地が多く、古くから山の斜面で果樹を栽培していた。1978年の改革開放後、農村では農産物の増産、農家の増収、農村の繁栄を実現させることが提唱された。また、果実の需要の拡大にともない、果樹の栽培面積が拡大され、果実の生産は村の主な産業になった。村民は、収穫した果実を泰安市内の市場に運び、販売活動を行ったことから、「里峪水果（里峪村の果実）」は泰安市民によく知られる地元ブランドとなってきた。その後、1990年代に「果実出荷組合」の成立や泰山からの影響、都市住民のニーズの変化などによって、里峪村には、リンゴ狩りをはじめとする観光農園が見られるようになった。2000年代から、農村観光を発展させる政策、補助金の導入、村民委員会による牽引、多種多様な農村観光を展開する手段などにより、里峪村における農家楽と農村風景を楽しむ観光活動が始まった。また、来訪する観光客の増加、「双改政策」の実施、外部資本の導入も、農家楽の発展を促進している。さらに、2010年以降、里峪村は積極的に周囲の村の観光資源を活用し、「里峪風景区」の設置に力を入れており、周辺地域における農村観光の展開に寄与している（表 7-7）。

表 7-7 里峪村における農村観光の時間的展開

時期	農村観光の内容	農村観光の展開にかかわる主な要因
1990年代	観光農園	村民の自発的な動き、泰山からの影響など
2000年代	農家楽 農村風景を楽しむ	村民委員会の牽引、農村観光に関する政策・双改政策の実施、補助金制度の導入、観光客の増加、外部資本の導入など
2010年代	周辺地域への拡大	里峪風景区の設定、農村観光に関する政策、観光客の増加

農村観光の内容：各時期における新規のみの農村観光の内容である。

第5章により、筆者作成

以上の2つの村に対して、郎徳上寨は辺遠地域に位置し、交通の便が悪い。村民は古くから農業による生計を立てていたが、改革開放後、出稼ぎによる収入を得るようになった。1985年に、郎徳上寨は政策により「少数民族風景区」として開放され、ミャオ文化を中心とする農村観光を都市住民に提供し始めた。そのため、郎徳上寨とその周辺のインフラ整備や景観の修復などは公的な補助金により実施された。その後、1998年に、郎徳上寨は「全国露天博物館」に指定され、村とその周辺の農村風景が観光化されるきっかけを与えられた。さらに、2004年に、国家旅游局が郎徳上寨を「国家農村観光モデル地」に指定したことによって、村への訪問者が大幅に増加した。そのため、訪問者に食事や宿泊を提供する農家楽が出現し、観光客向けの歌舞ショー、土産品の販売が盛んに行われるようになった。また、農村観光を発展させる政策、公的な支援に加え、ミャオ族の独特な社会制度（ミャオ族社会システム）、工分制による収入の分配、村民委員会の牽引、女性と高齢者の活躍などが農村観光の展開を促進している（表 7-8）。

表 7-8 郎徳上寨における農村観光の時間的展開

時期	農村観光の内容	農村観光の展開にかかわる主な要因
1985 年	農村文化	農村観光に関する政策・補助金
2000 年代	農村風景を楽しむ	農村観光に関する政策・補助金
2004 年以降	農家楽	農村観光に関する政策・補助金、ミャオ族の独特な社会制度、工分制、村民委員会の牽引、女性と高齢者の活躍など

農村観光の内容：各時期における新規のみの農村観光の内容である。

第 6 章により、筆者作成

以上のように、時間的観点からみると、各村における農村観光の展開とそれにかかわる主な諸要因が異なっていることがわかる。西麦窯社区は、農村観光に関する政策が少なく、公的な支援も少ない。一方、里峪村や郎徳上寨は、農村観光に関する政策や公的な支援が多い。特に、郎徳上寨では、民族舞踊や音楽、工芸品、伝統民家群などといった様々な有形・無形のを保護するため、それに対する補助金もあった。西麦窯社区では、農家レストランから始まり、農家民宿や農村風景を楽しむ観光活動が行われるようになった。里峪村では、観光農園から農家楽、農村風景の楽しみ、周辺地域への拡大、郎徳上寨では、民族文化、農村風景の楽しみ、農家楽の展開が見られた。

2.2 各村における農村観光の空間的展開

次に、空間的観点から、各村における農村観光の展開を考察する。各村は、従来、農産物を提供する場所であったが、農村観光の展開により、安心・安全な農産物の提供、癒し・余暇、交流・体験などの機能も重視されるようになった。これにともない、農村も変化しつつある。事例として取り上げた 3 つの村では、農村観光の空間的展開、特に農村観光としての利用空間の変化が著しく見られた。

都市近郊に位置する西麦窯社区は、1980 年以前、採石や漁業などにより生計を立てていた。1990 年から、青島市の都市住民向けの、村民による農家レストランの開業が始まり、その後、村民による農家民宿の開業、村民委員会の牽引、観光客の増加などにより、村における農村観光が展開しつつある。一部の農家は、自宅を改装したり、部屋を新築したりして観光客に食事、サービスを行い始めた。そのため、西麦窯社区における農村観光としての利用空間の変化が見られた。図 7-5 は、1999 年における西麦窯社区のモデル図である。1999 年に、西麦窯社区には農家レストランがあるが、これ以外の農村観光に関する施設があまりなかった。図 7-6 は、2015 年における西麦窯社区のモデル図である。これによると、西麦窯社区では、農家レストランの分布はあまり変化が見られないうが、農家民宿がたくさん出現した。駐車場や、観光客サービスセンターなどの農村観光に関する施設が建設され、村の西部は別荘地として利用されている。このように、西麦窯社区における農村観光の空間的展開が見られた。

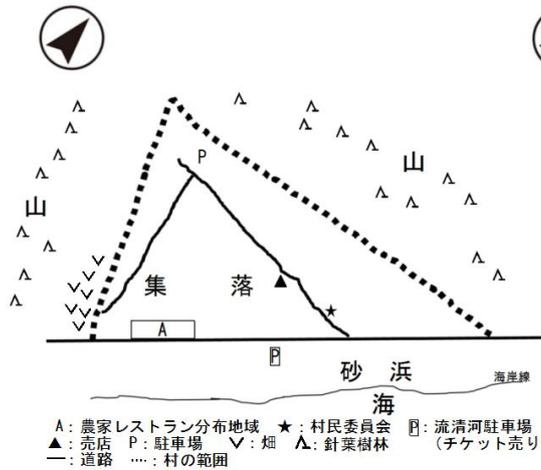


図7-5 西麦窯社區の農村観光モデル図 (1999年)
 現地調査により、筆者作成

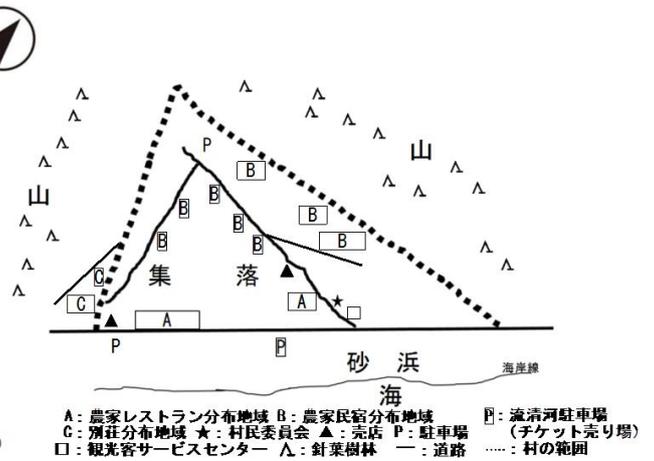


図7-6 西麦窯社區の農村観光モデル図 (2015年)
 現地調査により、筆者作成

里峪村は古くから果樹栽培を中心とする農業生産を行っているが、1990年代から、観光客のニーズに応じるため、観光農園を始めた(図7-7)。その後、観光農園の拡大とともに、来訪客向けの農家楽が村民により実施されるようになってきた。また、泰安市、岱岳区、道朗鎮による農村観光に関する政策の作成・実施、村民の自発的な動き、補助金などにより、里峪村における農村観光に関する施設が多く建設され、農家楽の出現が見られ、農村観光が拡大してきた。そして、外来資本(鉑金民宿、都市住民による空き家の賃貸)、観光客の増大は村の農村観光の展開を促進している。そのため、里峪村における農村観光の空間的展開は図7-8のように見られた。

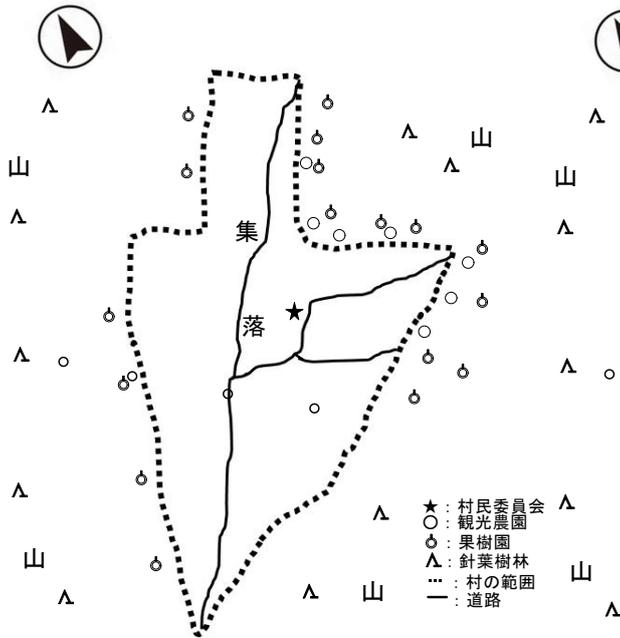


図7-7 里峪村の農村観光モデル図 (1990年代)
 現地調査により、筆者作成

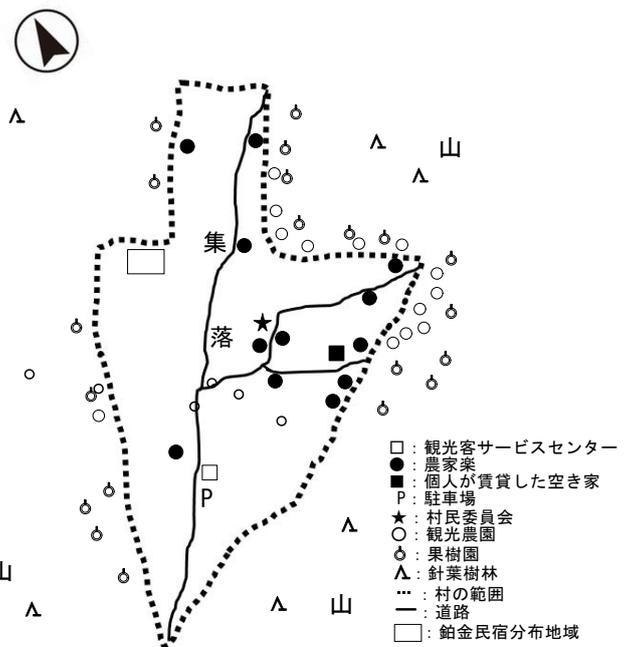


図7-8 里峪村の農村観光モデル図 (2015年)
 現地調査により、筆者作成

郎徳上寨は、古くから農業生産や家畜の飼育により生計を立てていたが、1978年の改革開放以降、村民の多くは沿岸部への出稼ぎをするようになった。この村は政策により、1985年に民族風景区として開放され、村の再建をはじめ、少数民族文化を活用した都市住民向けの観光開発を行った（図7-9）。その後、政策や補助金などにより、農家楽や歌舞ショーが行われるようになり、ミャオ族の独特な社会制度（ミャオ族社会システム）、工分制、村民委員会などが、これらの展開をさらに促進している。そのため、村には、農村観光に関する施設が多く建設され、村における農村観光の空間的展開が見られた（図7-10）。

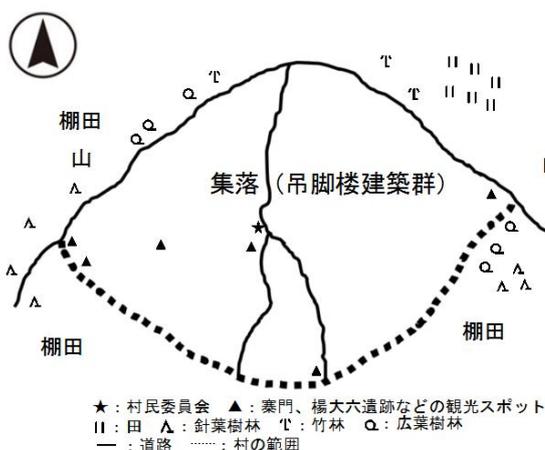


図7-9 郎徳上寨の農村観光モデル図（1985年）
現地調査により、筆者作成

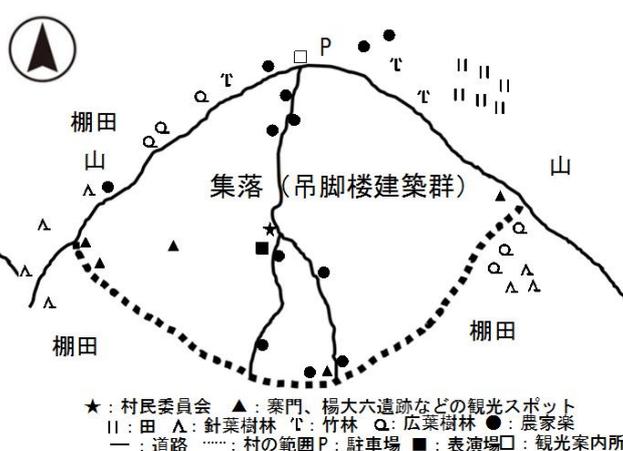


図7-10 郎徳上寨の農村観光モデル図（2014年）
現地調査により、筆者作成

このように、空間的観点からみると、各村における農村観光の展開は異なっている。西麦寨社区は農家レストランから始まり、農家民宿への展開が見られた。里峪村は観光農園から農家楽、空き家の賃貸による都市住民の居住などがあつた。郎徳上寨は1985年に農村観光に関する施設がほとんどなかったが、2014年には農家楽や農村観光に関する施設が多く見られるようになった。しかし、各村における農村観光の展開にかかわる諸要因は異なっているため、農村観光の展開は一様ではなかった。

以上の3つの地域における農村観光の時間的、空間的展開を見ると、西麦寨社区、里峪村では村民の自発的な動きにより、都市住民向けに地元の新鮮な農水産物を提供する農家レストランや観光農園から始まり、その後、農村観光は次第に拡大している。郎徳上寨では、観光政策や公的な支援により、少数民族文化を利用した観光を始め、農家楽への展開が明らかになった。これは、地理的位置により分類された農村観光の特徴とも言える。都市近郊や既成観光地周辺の農村は、新鮮な農水産物を近隣都市からの観光客に提供することによって、農村観光を始め、その後、さらに誘客するため、農村文化や農村風景を活用したりして、農村観光を拡大している。辺遠地域の農村は、交通の便が悪く、郷土料理のみを求めて訪問する観光客は少ないと考えられる。そのため、観光政策や補助金制度により、農村文化に主眼を置いた農村観光を展開し、観光客を獲得している。また、

農村観光の展開にともない、来訪者に食事や宿泊を提供する農家楽の需要が増え、展開してきた。一方、観光客は、「農村性」を求めているにもかかわらず、時間とコストの関係で、居住地から近い村を訪問する傾向があると考えられる。そのため、都市近郊の農村観光が最も盛んに展開していると考えられる。

また、各村の自然条件や社会・経済・歴史的条件も異なるため、農村観光の展開特徴に違いがある。例えば、農村空間の商品化の観点から考察すると、都市近郊の西麦窯社区では農水産物の利用、レクリエーション・観光という形で農村空間の商品化が進んでいる。既成観光地周辺の里峪村では農家楽、農村居住、農村風景の楽しみなどの多様な農村空間の商品化が見られる。辺遠地域に位置する郎徳上寨では社会・文化の評価を通じた観光客の生活の質の向上が主である。このように、各村において、農村観光の展開は異なっていると言える。

そして、地理的位置により分類された農村観光は、時間的、空間的展開が異なっているため、農村観光経営者の差も見られた。西麦窯社区には農家レストランや農家民宿を運営する農家が多い。里峪村では果樹栽培から観光農園への展開が見られ、その後、農家楽（農家レストラン・農家民宿）が出現し、観光客が農村風景を楽しむようになったが、農村観光経営者は少ない。郎徳上寨では農村文化の活用にとどまらず、観光客に食事と宿泊を提供する農家楽が農村観光の展開に重要な役割を果たしているが、いまだ農家楽の経営者は少ない。

各地域における農村観光の経営形態はそれぞれであり、西麦窯社区で見られる個別農家による農家レストラン・農家民宿が多いのに対して、里峪村と郎徳上寨は地域の連携、村民間の協力による農村観光を実施している。また、各地域には、多種多様な観光資源があり、村民はこれらの資源を活用し、農村観光を展開している。しかし、各村は所有する観光資源が異なっているため、展開している農村観光の内容はそれぞれである。例えば、郎徳上寨では、ミャオ族歌舞ショーは観光客を引き付ける重要な要素となっている。

以上のように、各村の村民は、様々な異なる観光資源を、多種多様な手段で活用し、農村観光の展開を促進している。その結果、各地域では農村観光の展開により、観光客サービスセンターなどの農村観光に関する施設がたくさん見られた。また、これらの村を訪れる観光客が多くなり、地域発展に寄与している。しかし、各村を訪問する観光客の出身地は異なっている。西麦窯社区と里峪村を訪問する観光客の多くは近隣都市の住民であるのに対して、郎徳上寨への訪問者の多くは農村文化を求め、全国から訪れる。

3. 農村観光の展開による地域発展

3つの村における農村観光の展開は村民の収入増加、生活の向上、地域の雇用につながっており、地域発展に寄与している。農村観光から得られた収入は子供の教育、生活改善、村のインフラ整備などに利用されており、三農問題の解決に寄与していると考えられる。

しかし、各村は、地理的条件や社会・経済・歴史的条件が異なっているため、地域発展に格差が見られた。まず、農家楽経営者の収入からみると、西麦窯社区は都市近郊の好立地により、数多く

の観光客が来訪し、村民の収入増加に寄与している。里峪村では、農村観光経営者はいまだに少なく、「双改政策」により、農村観光からの恩恵を受けているが、調査時点において農家楽は12軒しかなかった。一方、郎徳上寨は農家楽の経営や「歌舞ショー」、土産品の販売による収入が多く、農家の収入増加に大きく寄与している。2015年現在、各村の農家楽の平均収入は西麦窯社区、郎徳上寨、里峪村の順である。次に、農村観光から得た収入や補助金などにより、3つの村におけるインフラ整備が推進されていることが見られた。西麦窯社区は従来の好条件に加え、農村観光からの収入を用い、村のインフラ整備や農村観光のさらなる発展に使用されている。里峪村と郎徳上寨はこれからもインフラ整備に力を入れるべきであると考えられる。最後に、農村観光の展開は都市農村交流を促進した結果、村民は収入を得るだけでなく、農村らしさの再発見、農村暮らしの価値の向上などにもつながっている。そのため、村民のアイデンティティの再発見に寄与している。特に、郎徳上寨のような少数民族地域の農村では、農村観光の展開は郎徳上寨の発展のきっかけとなり、村民はミャオ族、郎徳上寨、自己に対する認識度が高くなってきた。

農村問題を解決するため、行政は雇用創出と村民収入の増加という視点で農村観光の効果を期待し、農業より農村観光に力を入れている。特に、都市近郊に位置する西麦窯社区における農村観光の展開はサービス業の発展を促している。しかし、この村における農業はあまり発展していない。都市化の進展による耕地利用の変化と共に、この村の多くの耕地は売買され、1人当たりの耕地が極わずかであるため、観光客用の農業体験や野菜栽培以外、農業生産はあまり進んでいない。一方、里峪村は、大都市あるいは中核都市の周辺に位置しておらず、都市化の進展による土地の売買がない。従って、村民は、農村観光から収入を得るため、果樹栽培をはじめとする農業を続け、果実狩り用のナシやサクランボなどを導入する予定である。郎徳上寨は山地が多く、交通が不便で村民は新たに棚田を開拓したりするなどして、従来の農耕文化を守っていると言える。

4. 農村観光の展開上の課題

各村における農村観光は盛んに展開しているが、異なった展開上の課題が多くある。西麦窯社区は都市化の影響を受け発展してきた。これからの都市化の進展により、村もしくは村の一部はさらに都市化する傾向にあり、農村固有の特徴が失われつつあるため、持続可能な農村観光の展開のためには政府の都市計画や農村風景の保護が重要になってくると思われる。里峪村は泰山からの影響だけでなく、独自に農村観光を展開しているが、観光客は特定の季節に過当に集中する傾向がある。そのため、閑散期における誘客政策の作成と実施、また集客施設の建設が期待されている。郎徳上寨ではミャオ族の伝統文化による従来の社会システムにおいて、所得格差があまりなかったが、現在農村観光経営者と一般農家との間に収入の格差が生まれ、伝統的な社会システムで維持してきた地域社会が破壊される可能性がある。また、少数民族地域の経済を発展させるため、不適切な観光政策は実施されており、持続可能な地域発展には不利であると考えられる。そして、里峪村、郎徳上寨における農村観光の展開にインフラ整備を促進していく必要があると考えられる。

この3つの村はともに農村観光から収入を得られ、村民は地元で非農業部門に従事するようにな

り、収入の増加や地域発展などにより従来の三農問題の解決につながっている。しかし、農村観光の展開による村民間の収入の格差や従来の社会組織の破壊などの新たな課題が出現したと考えられるため、今後の経緯を見守る必要がある。また、調査対象地では、従来の農業にサービス業を加えることによって、融合した産業へ転換する傾向が見られた。しかし、農村観光は農業より収入が多く、離農する農家が見られた。持続可能な農村観光を展開していくためには、農業を維持する必要があると考えられる。

5.3 つの村における農村観光の展開の相違点と共通点

以上で議論したように、地理的位置により分類された各村における農村観光の展開にかかわる諸要因・展開特徴および農村観光の展開上の課題などは表 7-9 にまとめられる。下記は、3 つの村における農村観光の展開の相違点と共通点を考察する。

5.1 相違点

各村は、立地条件によって、農村観光に関するこれらの諸要因が異なっていることが明らかとなった。(表 7-10)。

表 7-10 各村における農村観光の展開にかかわる諸要因の比較

要因	西麦窯社区	里峪村	郎徳上寨
政策、公的な支援	有、少ない	有、多い	有、最も多い
企業からの投資	有	有	無
主な観光資源	自然、食	自然、食、遺跡	民族文化
農家楽経営者	多い	少ない	少ない
村民委員会の牽引力	小	大	小
農村観光の内容	少ない	最も多い	多い
全国からの観光客	有、少ない	有、最も少ない	多い

本章 1.1～1.5 により、筆者作成

西麦窯社区は農村観光に関する政策や公的な支援が少ないのに対して、里峪村、郎徳上寨は農村観光に関する政策も公的な支援も多い。特に、郎徳上寨では、1985 年から導入され続ける観光政策は農村観光の展開に大きく反映していると考えられる。各村にはそれぞれの観光資源があり、村民はこれらの観光資源を活用した田舎料理・農家民宿、農村文化などを観光客に提供している。しかし、各村では展開している農村観光の内容と農村観光の担い手が異なっている。西麦窯社区では農家レストラン、農家民宿を営む農家が多く、農水産物の利用、レクリエーション・観光の特性が強く、村民間の連携が少ない。里峪村では、農家楽の経営者が少ないが、多種多様な農村観光が展開しており、村民委員会の求心力により村民間の連携が強い。一方、郎徳上寨は農村文化を都市

表 7-9 地理的位置により分類された各村における農村観光の展開の比較

村名	農村観光の展開にかかわる諸要因							展開特徴			農村観光の展開による地域への影響	展開上の課題
	立地	政策	主な公的な支援	主な観光資源	担い手	主な内容	観光客	農村空間の商品化の状況	農村観光の経営形態	観光対象の変化		
西麦窯社区	都市近郊	農家民宿に関する政策が主となる。ほかの農村観光に関する政策が少ない。	農家レストラン・農家民宿経営者への支援、インフラ整備、研修会の開催	山、海、漁村風景、雰囲気、海鮮料理	農家民宿と農家レストラン経営者 102軒、村民委員会	食事、宿泊、農村風景巡り	近隣都市からの観光客が最も多く、周辺の省、市からの観光客もいる。	農水産物の利用、レクリエーション・観光	農村観光経営者が多い「面型」 村民間の連携や行政機関などとの連携が少ない「独立型」	農家レストラン⇒農家レストラン・農家民宿⇒農家レストラン・農家民宿・農村風景型	農村観光による収入が最も多い。インフラ整備が進み、村の発展が見られた。しかし、農業の発展は見られない。	都市化の進展により、農村固有の特徴が失われつつある。
里峪村	既成観光地周辺	観光資源の保護、農村観光の開発、農家楽の管理などに関する政策がある。	農家楽経営者への支援、インフラ整備、観光施設の建設、研修会の開催	山、川、森林、果実、遺跡、古民家、山村風景、多くの行事、雰囲気、豆腐料理	農家楽経営者12軒、村民委員会（会社の設立、多くのイベントの実施など）、全村民の参加	農業体験、販売、食事、宿泊、学生教育、農村風景巡り、	近隣都市からの観光客が最も多く、周辺の省、市からの観光客が少ない。	農産物の利用、レクリエーション・観光、農村居住、社会・文化の評価を通じた生活の質の向上	農村観光経営者が少ない「点型」 行政との連携や村民間の結びつきが強い「ネットワーク型」	観光農園⇒観光農園・農家レストラン・農家民宿⇒観光農園・農家レストラン・農家民宿・農村風景・農村文化	一部の村民は農村観光から収入を得られているが、現時点まだ少ない。また、農村らしさの再発見、農村暮らしの価値の向上などにもつながっている。農業の発展が見られる。	閑散期の誘客政策の作成と実施が必要、集客施設が少ない、インフラ整備の不十分
郎徳上寨	辺遠地域	観光資源の保護、農村観光の開発、農家楽の管理・経営などに関する政策が多く制定されている。	農家楽経営者への支援、研修会の開催、インフラ整備、観光施設の建設、景観の保護	山、川、風雨橋、吊脚楼、ミャオ族料理、ミャオ族歌舞、雰囲気、銀の飾り、刺繍	農家楽経営者13軒、ミャオ族社会システムによる全村民の参加、高齢者や女性の活躍	販売、食事、宿泊、農村風景巡り、農村文化体験	近隣都市からの観光客が最も多く、広東省、長江デルタ地域、北京市からの観光客も多い。	社会・文化の評価を通じた生活の質の向上	農村観光経営者が少ない「点型」 独特な社会システムや工分制により実施される「ネットワーク型」	農村文化⇒農村文化・農村風景⇒農村文化・農村文化・農家レストラン・農家民宿	多くの村民は農村観光から収入を得られ、村の発展に寄与している。地域の伝統文化が継承され、ミャオ族のアイデンティティの再発見に寄与している。農業の発展が見られる。	村内格差の出現、不適切な政策の指導、インフラ整備の不十分

住民に展示し、独特なミャオ族社会制度により農村観光を展開し、村民間の連携が見られるが、農家楽の経営者がいまだ少ない。また、各村を訪問する観光客の出身地は村ごとに異なっている。西麦窯社区と里峪村を訪問する多くの観光客は近隣都市の住民であるのに対して、郎徳上寨への訪問者の多くは農村文化を求め、全国各地から訪れる。

また、この3つの地域における農村観光の時間的、空間的展開を見ると、西麦窯社区、里峪村では村民の自発的な動きにより、都市住民向けの農村の新鮮な農水産物を提供する農家レストランや観光農園から始まり、その後、農村観光は次第に拡大したこと、郎徳上寨では、観光政策や公的な補助金により、少数民族文化を利用した観光が始まり、農家楽への展開が見られた。

農村観光による収入を考察すると、農家楽の平均収入は西麦窯社区、郎徳上寨、里峪村の順になっている。この収入は地域のインフラ整備や村民の生活改善に使用され、三農問題の解決につながっている。また、各村における農村観光の展開が異なっているため、展開上の課題にも差があることが明らかになった。

5.2 共通点

まず、各調査対象地における農村観光の展開には政策が重要な役割を果たしている。本章の「1.1 政策と公的な支援」で議論したように、中国政府は農村経済を発展させるため、農村観光を導入した。各地の政府は農村観光に関する政策の作成、実施に力を入れており、農村の発展を図っている。また、農村観光の展開に必要な初期投資は補助金制度により補填されたりしているため、村民の負担は軽減されている。このような政策や公的な支援の実施は、農家楽の発展、農村のインフラ整備の進み、農村観光の担い手である村民の養成などに寄与しており、農村観光の展開につながっていると考えられる。

第二に、各村は豊富な観光資源を所有し、農村観光の展開に重要な役割を果たしている。観光資源を活用し、西麦窯社区では農家レストラン、里峪村では観光農園、郎徳上寨では民族文化の活用から観光活動が始まり、その後、村民は地域固有の観光資源である海、山、森林、果実、ミャオ族歌舞・建築などを活用し、地域の「農村性」を磨き、農村観光を展開している。一方、すべての調査対象地は農村観光からの一部の収入を利用し、観光資源の保護に活用している。このように、地域固有の資源は農村観光にとって不可欠であることが言える。

第三に、各村では村民委員会という中国の行政単位の末端組織が、積極的に農村観光を推進しており、村民を牽引する役割を果たしている。一方、村民は、豊かさを求め、自発的に農村観光を行っている。特に、都市近郊に位置する西麦窯社区と既成観光地周辺に位置する里峪村では、農村観光に関する政策が導入される前に、村民が実施する農家レストラン、観光農園が農村観光の展開のきっかけとなった。その後、政策や、村民委員会の牽引により、農村観光のさらなる展開が見られた。

第四に、観光客は「農村性」を追及するため、農村を訪問し、農家楽を利用したり、農

村風景を楽しんだりしているため、都市農村交流や農村地域の経済発展にも寄与している。なかでも、近隣都市からの観光客が最も多いことが聞き取り調査により明らかになった。

第五に、各村における農村観光の展開は、特定の農村観光から始まり、その後、農村観光の展開を促進する前述の諸要因（本章第1節で述べた「農村観光の展開にかかわる諸要因」）により、農村観光は時間的、空間的に展開してきた。時間的展開については、地域によって異なった経過をたどりながらも、内容的に深化の方向に向かっており、農村観光の内容の増加も見られた。また、空間的にみても、集落内部空間における観光の利用の深化、つまり村内における農村観光としての利用空間の変化が見られた。また、各村における農家楽（農家レストラン、農家民宿）を経営する農家、観光施設は主に道沿いや、村民委員会の周辺に集中している傾向が見られる。

6. 中国における農村観光の展開

6.1 3つの村における農村観光の展開からみた中国における農村観光の展開

本研究で取り上げた各村は地理的位置が異なっているため、農村観光の展開特徴に違いがあると考えられる。西麦窯社区のような都市近郊の農村は、村民の自発的な動きが顕著である。彼らは新鮮な農水産物を利用し、近隣都市の住民を中心とする観光客に食事、宿泊サービスを提供している。また、村民委員会による農村観光に関する政策の実施や外部資本の導入などは、さらに村の農村観光の展開を促進できる。その結果、西麦窯社区では、農家レストランから農家民宿、村内外の自然を楽しむ農村観光への展開が見られ、地域発展につながっている。

既存観光地周辺地域に位置する里峪村では、村民の自発的な動きにより、観光客のニーズを満たすための観光農園が出現した。その後、来訪者の増加、農村観光に関する政策、公的な支援の実施などにより、田舎料理や宿泊サービスを提供する農家楽が出現した。また、外来資本での空き家の賃貸、村民委員会の提案による「里峪風景区」の建設は農村観光の展開に寄与していると考えられる。

辺遠地域に位置する郎徳上寨は観光政策により開放され、ミャオ族の独特な文化を中心とする観光が始まった。来訪者の増加にともない、政策と公的な支援の下で、農家楽が発展してきた。また、村民は、少数民族ならではの資源を利用し、ミャオ族独特の社会制度（ミャオ族社会システム）のもとで村民委員会が中心となって、工分制を用いた農村観光を展開していった。その結果、農村観光の展開は、村民の収入増加につながっており、地域発展に寄与していると考えられる。

以上述べたように、この3つの村における農村観光の展開のしかたはそれぞれ異なっている。これら3つの村における事例をもとに、中国における農村観光の展開を考察すると、下記のようなになる。

中国では、政策、公的な支援は農村観光を促進し、農村観光を展開する重要な役割を果

たしている。国家旅游局を中心とする中央政府、各地の政府は、農村観光に関する政策の制定や公的な支援の実施を行っている。その一部として、農家楽に関する政策や、農家楽経営者への補助金は農家楽の設立を促進し、農村観光の展開に大きく反映していると考えられる。次に、各村は農村観光の展開に必要な観光資源を多く所有し、これらの観光資源は農村固有のものであり、組み合わせによって表象されている「農村性」を都市住民に提供し、農村観光の展開を促進している。農村観光の担い手である各村の村民は、村の観光資源を活用・加工し、都市住民を中心とする観光客向けの観光商品を作り出し、観光客から収入を得るだけでなく、積極的に都市農村交流を深め、農村観光の展開を促進している。また、各村の村民委員会は積極的に農村観光を行い、農村観光に関する政策の作成・実施、研修会・勉強会の開催によって、村民を牽引する役割を果たし、農村観光の展開を促している。一方、観光客は「農村性」を迫及するため、農村を訪問し、農家楽を利用したり、農村風景を楽しんだりしているため、都市農村交流や農村地域の経済発展に寄与している。その結果、農村観光は、時間的、空間的に展開していることが見られた。時間的展開については、地域によって異なった経過をたどりながらも、内容的に深化の方向に向かっており、空間的にみても、各村における農村観光としての利用空間が拡大していることが見られた。また、各村では、農家楽（農家レストラン、農家民宿）や、観光施設などが主に村民委員会の周辺や村内の道路沿いに展開している特徴が見られる。

このように、政策、公的な支援や村民、村民委員会などの諸要因により、農村観光は次第に展開していることが明らかになった（図 7-11）。また、この一連の動きは、地域に様々な影響をもたらしてきており、地域発展にもつながっている。

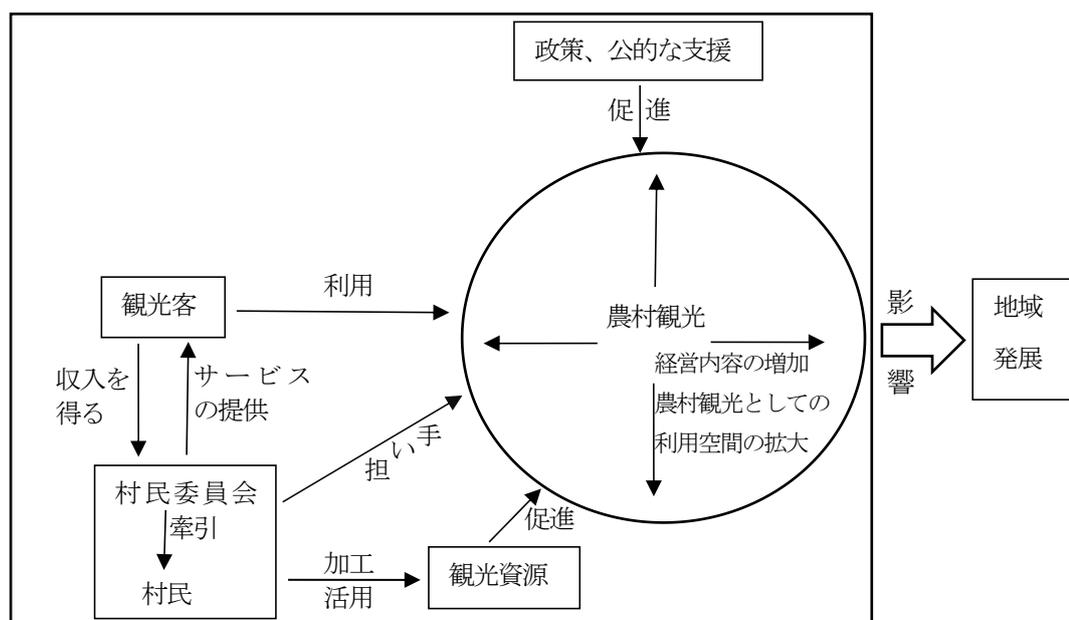


図 7-11 中国における農村観光の展開

筆者作成

6.2 中国における農村観光の展開とその地理的位置による特徴

図7-11で示したように、中国の農村観光は政策、公的な支援、観光資源、村民・村民委員会、観光客にかかわって、展開してきた。なかでも、政策、公的な支援が中国における農村観光の展開に重要な役割を果たしている。事例として取り上げた3つの村は、国家旅游局により「中国農村観光モデル地」に指定されたことがあり、政策的に観光開発が行われたと言える。また、各地域の政府は、これらの農村に対し、農村観光政策を導入したり、公的な支援を実施したりすることによって、村の農村観光の展開を促している。そして、3つの村では、政策的に農家楽の発展に力を入れていることが見られる。農家楽に関する政策や、農家楽経営者への補助金が農家楽の設立、発展を促進し、農村観光の展開に大きく反映されていると考えられる。このように、これらの政策、公的な支援は、農村観光の展開にきっかけを与えるだけでなく、農村観光経営者への支援や村の観光開発を促進する効果なども見られる。これは、中国の農村観光の展開における大きな特徴とも言える。

しかし、各村は地理的位置によって、農村観光に関する政策、公的な支援が異なっており、そのことが各地域における農村観光の展開に大きく影響している。都市近郊に位置する西麦窯社区には農村観光に関する政策、公的な支援が少なく、農家楽の経営の側面に集中している。また、既成観光地周辺に位置する里峪村では、村の観光開発、観光資源の保護、農家楽に関する政策、公的な支援が多く見られる。辺遠地域に位置する郎徳上寨は農村観光に関する政策が最も多く、手厚い公的な支援が多く見られる。そして、地理的位置により分類された3つの村は、農村観光に関する政策の導入時期が異なっている。なかでも、辺遠地域に位置する郎徳上寨で見られるように、1985年からいち早く観光発展の諸政策が制定され、農村観光が展開していくきっかけを与えられた。それに対して、ほかの地域に位置する2つの村は、2000年以降本格的に農村観光を導入し始めた。西麦窯社区は村民の自発的な動きによる農家レストラン、農家民宿が多いのに対して、ほかの2村は、政策による農村観光の実施、公的な支援と補助金などによる農家楽の展開、村民委員会の牽引による観光イベントの開催など多彩な農村観光を展開している。

また、中国における農村観光の展開は、観光資源、村民、村民委員会にかかわっている。農村観光の担い手である村民、村民委員会は観光資源を活用し、田舎料理と農家民宿を都市住民に提供し、積極的に都市農村交流を深めることによって、農村観光を展開している。村民委員会は、積極的な農村観光の発信、農村観光に関する勉強会、研修会の開催などによって、農村観光の展開を牽引している。観光客は農村観光を行い、村民の収入増加や地域発展に寄与している。その結果、各村における農村観光の経営内容の増加、農村観光としての利用空間の拡大を始めとする農村観光の時間的、空間的展開が見られた。

地理的位置により分類された各村はそれぞれ観光資源があるが、地域の特性を表象している「農村性」を都市住民に提供していると言える。その担い手の村民は豊かさを求め、積極的に農村観光を展開している。特に、都市近郊、既成観光地周辺に位置する村の村民は自発的に農家レストラン、観光農園を始めた。また、各村の村民委員会は、村民を牽引

しており、多種多様な手段で農村観光を展開している。なかでも、里峪村の村民委員会はイベントの開催、「微信」での発信などの手段により農村観光を展開していることが注目されている。そして、各村への観光客は近隣都市の住民が最も多いが、郎徳上寨へは全国各地からの観光客が数多く訪問している。

6.3 研究の成果

中国の農村観光についての先行研究は、農村観光による農村経済の発展、農村開発の側面に集中した単発的な研究が多く、特性の異なる複数の地域について実証的な研究を行ったものはほとんど見られない。また、中国沿岸部の事例を取り上げた研究が少ないと指摘されている。本研究は、これらの先行研究とは一線を画し、沿岸部の事例も取り上げ、地理的位置により分類された3つの地域における農村観光の展開を実証的に考察したことが有意義であると考えられる。

地理的位置により分類された都市近郊型、既成観光地周辺型、辺遠地域型の農村観光は立地条件や社会・経済・歴史的条件が異なっているため、展開している農村観光がそれぞれ異なっている。本研究は、実証的な調査により、農村観光とのかかわる諸要因を分析し、異なる性格を持つ農村観光の展開を明らかにした。すなわち、都市近郊では好立地を生かした個人の農家が中心となる農家レストランや農家民宿が多く、周辺の都市住民、他地域の観光客向けの農村観光が展開している。既成観光地周辺地域では、地域資源の活用、農村観光に関する政策や補助金制度に加え、村民委員会が農村観光の展開に重要な役割を果たしている。他方、辺遠地域では、政策、公的な支援による農村観光を展開しているという特徴があり、少数民族制度（ミャオ族社会システム）が農村観光の展開に大きな役割を果たしていることが明らかになった。また、農村観光の展開は地域の発展につながっているが、都市近郊では就業構造の変化がみられる一方、ほかの2つの地域では農村文化の継承やアイデンティティの再発見につながっていることが明らかになった。

また、本研究は、この3つの地域における農村観光の展開要因、具体的な展開過程などを系統的に分析し、その相違点を考察した。そして、その共通点を洗い出し、中国における農村観光の展開を論述した。すなわち、中国における農村観光は、国、各地域の政策によって展開してきており、公的な支援も農村観光の展開に重要な役割を果たしている。地域資源の活用を担う村民、村民委員会と、農村観光の利用者である都市住民とが互いに交流しあうことは、農村観光の展開に寄与している。その結果、農村観光の経営内容の増加、農村観光としての利用空間の拡大を始めとする農村観光の時間的、空間的展開が見られた。

以上から、本研究は地理的位置により分類された農村観光を実証的に考察し、先行研究では解明されていなかった中国における農村観光の展開過程、展開要因および農村観光の展開による地域への影響を明らかにしたものとして、有意義であると言える。また、本研究のように、地域条件の異なる事例を系統的に分析し、まとめたものが現時点ではほとんど見られないため、今後の研究の基礎を打ち立てたものであると考えられる。

7. 小括

本章は、地理的位置により分類された農村観光の展開要因を政策、公的な支援、観光資源、農村観光の担い手、農村観光の経営、観光客に分け、検討した。各地域における農村観光の展開に関する諸要因は異なっているが、共通点もあることを明らかにした。また、各地域における農村観光の時間的、空間的展開を論じ、その展開過程を説明した。農村観光の展開により、地域への影響がみられ、地域発展に寄与しているが、展開上の課題も存在している。また、それぞれの地域における農村観光の展開には地理的特徴があることが明らかになった。すなわち、都市近郊では好立地を生かした個人の農家が中心となる農家レストランや農家民宿が多く、周辺の都市住民、他地域の観光客向けの農村観光が展開していること、既成観光地周辺地域では地域資源の活用、政策や補助金制度に加え、村民委員会が農村観光の展開に重要な役割を果たしていること、辺遠地域では、政策、公的な支援による農村観光を展開している特徴があり、少数民族社会制度（ミャオ族社会システム）が農村観光の展開に大きな役割を果たしていることが明らかになった。

以上をまとめ、中国における農村観光の展開を議論し、一般化した。すなわち、中国における農村観光は、政策、公的な支援にかかわっており、村民、村民委員会による地域資源の活用により展開してきた。また、観光客は農村観光を利用し、地域発展に資金を提供するだけでなく、都市農村交流や農村観光の展開に寄与している。その結果、農村観光の時間的、空間的展開が見られ、地域発展に大いに影響している。

注：

¹ 第1章注3参照

² 第5章「2.2.2」参照

第8章 おわりに

本研究は、中国における農村観光の展開と、その地理的位置による特徴を明らかにするため、地理的位置により分類された農村観光に着目し、事例として取り上げた3つの地域における農村観光の展開を実証的に分析した。先行研究によると、地理的位置により分類された農村観光は、「都市近郊型」、「既成観光地周辺型」、「辺遠地域型」とされている。また、農村観光とは、農村地域での、地域住民が主体となって、農村地域にある様々な資源を加工・活用し、主に都市部の観光客にサービスを提供する観光形態である。事例としては農家レストラン、農家民宿、観光農園などがあげられる。

中国の農村観光に関する先行研究によると、経済的側面、農村開発に焦点を当てた研究が多く、沿岸部を研究対象とした研究が少ないという点が指摘されている。また、複数の調査地域をもとに行った実証的な研究がほとんど見られない。そして、中国では、農村観光の展開には、国家の政策が重要な役割を果たしており、その分析が必須であると考えられる。そこで、本研究においては、地理的位置により分類された3つの地域の農村観光を対象に、農村観光の展開を考察した。中国で農村観光が盛んに展開している地域である山東省青島市嶗山区西麦窯社区を都市近郊型の事例、山東省泰安市岱岳区里峪村を既成観光地周辺型の事例とし、また、発展が遅れており、かつ少数民族地域である貴州省黔東南ミャオ族トン族自治州雷山県郎徳上寨を辺遠地域型の事例とした。

筆者は、これらの3つの地域を訪問し、聞き取り調査、アンケート調査及び現地観察などにより得られたデータに基づき、地図化などをし、各地域における農村観光の展開を明らかにした。また、農村観光の展開に重要な役割を果たしている政策、公的な支援、村民の動きなどの農村観光の展開要因と、農村観光の時間的、空間的展開に注目し、研究を進めてきた。そして、3つの地域における農村観光の展開の共通点を洗い出し、中国における農村観光の展開を論述した。

青島市の都市近郊では、都市化の影響により、農村観光の展開が見られた。また、橋や海底トンネルの建設により、「経済開発区」への来訪者が増加した結果、この地域に新たに農村観光地ができた。青島市近郊に位置する西麦窯社区では、好立地を生かした個人の農家による農家レストラン、農家民宿の経営が多く見られる。また、村民委員会による農家への支援、農村観光に関する政策の作成・実施などはこの村の農村観光の展開を促進している。農村観光からの収入は村のインフラ整備などに利用され、地域の発展につながっている。

一方、既成観光地周辺に位置する里峪村では、世界遺産である泰山風景区からの影響により、従来からの果樹栽培を観光農園につなげたことが、村における農村観光の展開のきっかけとなった。その後、農村観光に関する政策や補助金のもとで、村民が経営する農家楽の出現に加え、村民委員会が積極的にイベントの開催をはじめとする多種多様な手段で村の農村観光を行っている。また、従来と異なった外部資本による空き家の賃貸や、周辺の村への農村観光の拡大は里峪村における農村観光の展開を促進していると考えられる。その結果、農村観光から得られた収入は子供の教育、生活改善、村のインフラ整備に利用されており、三農問題の解決に寄与している。

この2つの地域に対し、辺遠地域に位置する郎徳上寨は、国の政策により、1985年に「少数民族風景区」として開放され、ミャオ族文化を中心とする観光が行われていた。その後、農村観光に関する政策、補助金のもとで、村民による農家楽が見られた。また、郎徳上寨では、少数民族の独特な資源を利用し、ミャオ族の独特な社会制度（ミャオ族社会システム）と村民委員会が中心となって、工分制を用いた農村観光の展開が明らかになった。その結果、村民は農村観光から収入を得られ、出稼ぎをせず、ミャオ族の文化と伝統工芸を継承し、アイデンティティの再発見への促進効果が見られた。

以上のように、特性が異なる3つの地域における農村観光の展開が明らかになった。各地域は、農村観光に関する政策、公的な支援、村民の動き、村民委員会の役割などが異なっている。これらは、各地域における農村観光の展開に大きく反映しており、地理的位置により分類された農村観光展開の特徴とも言える。すなわち、都市近郊では好立地を生かした個人の農家が中心となる農家レストランや農家民宿が多く、周辺の都市住民、他地域の観光客向けの農村観光が展開している。既成観光地周辺地域では、地域資源の活用、農村観光に関する政策や補助金に加え、村民委員会が農村観光の展開に重要な役割を果たしている。他方、辺遠地域では、政策、公的な支援による農村観光を展開しているという特徴があり、少数民族制度（ミャオ族社会システム）が農村観光の展開に大きな役割を果たしていることが明らかになった。農村観光の展開は地域の発展につながっているが、都市近郊では就業構造の変化がみられる一方、ほかの2つの地域では農村文化の継承やアイデンティティの再発見につながっていることが明らかになった。

また、この3つの地域における農村観光の展開要因、具体的な展開過程などを系統的に分析し、その共通点を洗い出し、中国における農村観光の展開を明らかにした。すなわち、地理的位置により分類された農村観光の展開は国、各地の政策、公的な支援に深くかかわっていること、地域資源の活用を担う村民、村民委員会と、農村観光の利用者である都市住民とが互いに交流しあうにつれ、農村観光の経営内容の増加、農村観光としての利用空間の拡大をはじめとする農村観光の時間的、空間的展開が見られた。

上述したように、本研究の研究成果が整理できるが、下記のような課題も残っている。

1987年、成都市近郊の農民である徐紀元氏が自宅や庭などを活用し買付客に宿泊や食事といったサービスを提供したことが農村観光の起源とされている。この約30年間、中国の農村観光は急速に発展してきた。本研究は、地理的位置により分類された都市近郊、既成観光地周辺、辺遠地域に位置する農村観光の展開を考察したが、多くの課題が残されている。

まず、その分類の基準は明確にされていない。本論文の第3章では、農村観光の分類を行ったが、実際、農村観光は多要素にかかわり展開しているため、どの分類も厳密ではないと述べた。そのため、数学モデルと影響因子などの分析方法を取り入れる分類方法が求められる。また、本論文は他の分類方法により分類された農村観光に触れていない。

次に、農村観光は三農問題の解決方法といわれ、農村観光の展開が地域にさまざまな影響を及ぼしてきており、地域の変化はその一つである。これから農村観光の影響により、地域住民の変化、農村観光に関する政策の変化などによる地域がどのように変化していくかが今後の研究課題となる。

最後に、日本で行われているグリーンツーリズムは農家民宿、農家レストラン、修学旅行の受け入れなどのほか、農山漁村における定住・半定住等も含む広い概念であり、都市と農山漁村を双方向で行き交うという新しいライフスタイルを実現しようとするものである。これらは多種多様な形で展開し、農山漁村の過疎化の対策としても取り上げられている。中国はこれから高齢社会に直面するため、日本におけるグリーンツーリズムの長・短所を考察し、独自の農村観光の展開の分析に資することも有効である。また、両国の農村観光（グリーンツーリズム）に関する比較研究が重要な研究課題となる。

参考文献

中国語文献（アルファベット順）

- 陳伝康 1994. 中国飲食文化的区域分化和發展趨勢. 地理学報 49 : 226-235.
- 郭煥成・韓非 2010. 中国鄉村旅游發展綜述. 地理科学進展 29 : 1597-1605.
- 郭煥成・任国柱・陳田・劉盛和 2006. 大陸新農村建設与鄉村旅游發展. 第四屆觀光休閒農業与休閒產業發展學術研討會論文集 : 14-30.
- 郭娜 2009. 旅游村特色化建設及空間競合關係研究. 東北財濟大学碩士（修士）論文.
- 何景明 2003. 国外鄉村旅游研究述評. 旅游學刊 2003 年第 1 期 : 76-80.
- 何景明 2004. 国内鄉村旅游研究 : 蓬勃發展而有待深入. 旅游學刊 2004 年第 1 期 : 92-96.
- 胡文海 2008. 基於利益相關者的鄉村旅游開發研究—以安徽省池州市為例. 農業經濟問題 2008 年第 7 期 : 82-86.
- 黃元春 2007. 淺論我国鄉村旅游. 商場現代化 2007 年第 5 期 : 233-235.
- 柯炳生 2008. 我国的三農問題. 廣西農學報 23(3) : 1-9.
- 李冠英・湯全明・張建新・劉培學・王小丹 2011. 景区依託型的鄉村旅游開發模式探討—以溧陽鄉村旅游為例. 江西農業學報 23 : 185-187.
- 李麗 2008. 郎德運用“工分制”經營鄉村旅游对和諧鄉村建設的啓示. 貴州師範大学學報（社会科学版）2008 年第 2 期 : 55-60.
- 李林・肖洪根 2013. 民族旅游与族群文化變遷—以四川原武白馬藏族為例. 旅游論壇 2013 年第 7 期 : 93-99.
- 李天翼 2010. 民族旅游社区参与的“工分制”. 貴州民族学院學報（哲学社会科学版）2010 年第 2 期 : 189-193.
- 李欣華・吳建国 2010. 旅游城鎮化背景下的民族村寨文化保護与傳承—貴州郎德模式的成功实践. 廣西民族研究 2010 年第 4 期 : 193-199.
- 李耀鋒 2011. 旅游地文化生產的支持性社会結構研究. 上海大学博士論文.
- 林南枝 2009. 『旅游經濟学』（第 3 版）南開大学出版社.
- 劉彩玲 2011. 景区依託型鄉村旅游開發重点与思路—以河南省南召县大石寨村為例. 鄭州航空工業管理学院學報 2011 年第 4 期 : 134-137.
- 龍茂興・羅進 2008. 景区辺緣型鄉村旅游發展理論探究. 商業研究 2008 年第 7 期 : 198-200.
- 盧小麗・成宇行・王立偉 2014. 国内外鄉村旅游研究熱點—近 20 年文獻回顧. 資源科学 2014 年第 1 期 : 200-205.
- 盧雲亭・劉軍萍 1995. 『觀光農業』中国農業科技出版社.
- 呂曉敏・丁驍・代養勇 2009. 中国八大菜系的形成歷程和背景. 中国食物和榮養 2009 年第 10 期 : 62-64.
- 馬波 2008. 『旅游文化学』青島出版社.
- 馬繼剛 2007. 論鄉村旅游資源的分類及其評價方法. 第五屆觀光休閒農業与鄉村休閒產業發展學術研討會論文集 : 129-135.
- 邱棣 2010. 民族村寨社区参与旅游模式探析—以貴州郎德上寨為例. 四川烹飪高等專科学校學報

- 2010年第4期：44-47.
- 申葆嘉 1999.『旅游学原理』学林出版社.
- 史軍超 2004.中国湿地經典—紅河哈尼梯田.雲南民族大学学报(哲学社会科学版) 21(5):77-81.
- 唐召英·陽寧光 2007.論城郊鄉村旅游發展的動力機制及可持續發展对策.農業環境与發展 2007年第6期：36-38.
- 王兵 1999.从中外鄉村旅游的現狀对比看我国鄉村旅游的未来.旅游学刊 1999年第2期：38-42.
- 王洪濱 2004.『旅游学概論』中国旅游出版社.
- 王敏·陳国忠·孫文秀 2015.鄉村旅游資源分類与評价体系探討—以山東臨清市鄉村旅游規劃為例.齊魯師範学院学报 30(4):91-96.
- 王瓊英·馮学鋼 2006.鄉村旅游研究綜述.北京第二外国語学院学报 2006年第1期：115-120.
- 王素潔·劉海英 2007.国外鄉村旅游研究綜述.旅游科学 2007年第2期：61-68.
- 文軍·唐代劍 2007.鄉村旅游開發研究.農業經濟 2007年第2期：30-34.
- 吳靜文 2013.民族旅游背景下少数民族特色村寨建設研究—以黔東南郎德上寨為例.中南民族大学碩士(修士)論文.
- 肖佑興 2001.論鄉村旅游的概念和類型.旅游科学 2001年第3期：8-10.
- 謝彦君 1999.『基礎旅游学』中国旅游出版社.
- 徐剛 2014.貴州鄉村旅游可持續發展的困境及破解—以安順天龍屯堡為例.貴州社会科学 2014年第8期：116-118.
- 徐勤飛 2003.青島市鄉村旅游開發研究.曲阜師範大学学报(自然科学版)2003年第2期：102-105.
- 楊蜜蜜·龍茂興·劉建平 2009.景区边缘型鄉村旅游發展探討.產業觀察 2009年第1期：142-144.
- 楊効忠·葉舒娟·馮立新 2011.景区依托型旅游村与核心景区耦合發展研究.雲南地理環境研究 23(2):1-8.
- 姚素英 1997.淺談鄉村旅游.北京第二外国語学院学报 1997年第3期：42-46.
- 袁潔 2012.社会繼承制度變遷中的苗族女性研究—以貴州黔東南雷山郎德上寨為例.中央民族大学博士論文.
- 張楠楠 2010.中国旅游史研究綜述.天中学刊 4:105-107.
- 張雲·楊曉霞 2013.最近10年国内地理類·旅游類學術期刊所載鄉村旅游文献綜述.西南農業大学学报(社会科学版) 11(9):1-7.
- 鄭風萍·杜偉玲 2008.黑龍江鄉村旅游發展問題研究.農業問題研究 2008年第1期：75-78.
- 鄭楊·周志斌·朱莎 2012.近5年中国国内鄉村旅游研究熱点問題綜述.北京第二外国語学院学报 2012年第5期：19-26.
- 周聆靈·周法法 2012.游客对鄉村旅游形象的重視因素分析—以寧德地区鄉村旅游為例.福建農林大学学报(哲学社会科学版) 2012年第2期：73-77.
- 朱璋 2008.青島北宅社区居民对鄉村旅游影響感知的實証研究.青島大学碩士(修士)論文.
- 朱璇 2012.新鄉村經濟精英在鄉村旅游中的形成和作用機制研究—以虎跳峡徒步路綫為例.旅游学刊 2012年第6期：73-78.
- 鄒統鈺 2005.中国鄉村旅游發展模式研究—成都農家樂与北京民俗村的比較与对策分析.旅游学刊 2005年第3期：20-26.

日本語文献（五十音順）

- 青木辰司 2004. 『グリーン・ツーリズム実践の社会学』 丸善.
- 青鹿四郎 1935. 『農業経済地理』 叢文閣.
- 石野淳一・中田洋平・日吉久礎 2014. SNS 上の画像群からのユーザー嗜好の抽出と観光広告への応用. 第 76 回全国大会講演論文集 : 587-588.
- 板倉宏昭 2010. 『経営学講義』 勁草書房.
- 井上萬壽藏 1967. 『観光と観光事業』 国際観光年記念行事協力会.
- 王橋 2010. グリーン・ツーリズムによる地域経済の振興と高齢者福祉の充実—中国苗族村・日本赤村の農村調査事例から—. 産業経済研究 51 : 403-423.
- 王文亮 2001. 『中国観光業詳説』 日本僑報社.
- 王文亮 2008. 中国における「三農観光」の現状と課題. 中国21 29 : 77-94.
- 大友和代子 2013. 農漁家レストランの経営目的とその実現手段に関する一考察—宮城県の事例分析—. 農業経済研究報告 44 : 1-10.
- 大西宏・吾買爾江・艾山 2012. 民族間の所得格差—民族地区県データから. 大西宏編著『中国の少数民族問題と経済格差』 京都大学学術出版会 : 5-19.
- 大橋昭一 2014. 観光とは何か. 大橋昭一・橋本和也・遠藤秀樹・神田孝治編著『観光学ガイドブック—新しい知的領野への旅立ち』 ナカニシヤ出版 : 2-7.
- 岡本伸之 2001. 観光と観光学. 岡本伸之編著『観光学入門—ポスト・マス・ツーリズムの観光学』 有斐閣アルマ : 1-28.
- 緒方宏海 2009. 中国における「郷村観光」の実態に関する社会人類学的研究. 旅の文化研究所研究報告 17 : 1-14.
- 小沢健市 1994. 観光の影響・効果 I. 塩田正志・長谷政弘編著『観光学』 同文館 : 193-204.
- 河原典史 1996. 京都府における観光レクリエーション型農業—八幡市の観光農園を中心に—. 京都地域研究 11 : 64-75.
- 河村有教 2011. 人民公社. 國谷知史・奥田進一・長友昭編集『確認中国法用語250WORDS』 : 52.
- 韓魯安 2008. 中国観光産業の課題と持続可能な観光への若干の展望. 人間社会環境研究 15 : 165-188.
- 菊地俊夫 2008. 地理学におけるルーラルツーリズム研究の展開と可能性—フードツーリズムのフレームワークを援用するために—. 地理空間 1 : 32-52.
- 菊地俊夫・王鵬飛 2015. 北京大都市圏の農村変容からみた観光地化の潜在的可能性. 観光科学研究 8 : 107-114.
- 菊地俊夫・山本充 2011. ドイツ・バイエルン州におけるルーラルツーリズムの発展と農村空間の商品化. 観光科学研究 4 : 15-27.
- 北川宗忠 2008. 北川宗忠編著『観光・旅行用語辞典』 ミネルヴァ書房 : 47.
- 国松博・鈴木勝 2006. 『観光大国中国の未来』 同友館.
- 栗林賢・全志英・磯野巧・呉羽正昭 2011. 須坂市における果樹生産を活かしたアグリ・ツーリズム

- ムの展開. 地域研究年報 33 : 29-43.
- 小池晶子 2002. 茨城県千代田町における観光行動からみた観光農園の展開. 茨城地理 3 : 1-17.
- 佐々木博 1998. 『観光と地域』二宮書店.
- 塩田正志 1994. 観光学の研究対象と研究方法. 塩田正志・長谷政弘編著『観光学』同文館 : 3-15.
- 四方康行 2002. 中山間地域資源の活用と“やまなみ”グリーン・ツーリズムの展開. 持田紀治編著『グリーン・ツーリズムとむらまち交流の新展開』家の光協会 : 173-186.
- 周晟・池田孝之 2010. 中国・湖南省における農家楽宿泊機能の実態と利用者評価—株洲市市域を事例として—. 日本建築学会計画系論文集 75 : 1491-1498.
- 常芳芳 2011. 中国大都市郊外地域における農村観光の展開—北京市における「民俗村」を事例として—. 広島大学修士論文.
- 鈴木直美・細川康輝・村井礼・林敏浩 2013. 地域密着型情報発信教育の実践報告. エンターテインメントコンピューティングシンポジウム論文集 : 142-145.
- 全志英 2013. 飯田市龍江地区における観光農園の展開と経営特性. 地域研究年報 35 : 147-161.
- 曾宇良 2010. 安心院町におけるグリーンツーリズムの展開とその地域の意義に関する研究. 観光研究 22(1) : 25-30.
- 曾士才 2001. 中国における民族観光の創出—貴州省の事例から—. 民族学研究 66(1) : 87-105.
- 多方一成 2000. 日本におけるグリーン・ツーリズムの展開—農林水産省の動向など. 多方一成・田淵幸親・成沢広幸著『グリーン・ツーリズムの潮流』東海大学出版会 : 73-90.
- 高田晋史 2014. 中国における村ぐるみ郷村観光経営体の構造と役割に関する研究. 京都府立大学博士論文.
- 高田晋史・宮崎猛・王橋 2011. 地域経営型郷村観光の組織構造と運営に関する研究—中国貴州省雷山県郎徳上寨を事例にして—. 農林業問題研究 47(3) : 21-30.
- 立川雅司 2005. ポスト生産主義への移行と農村に対する「まなざし」の変容. 日本村落研究学会編『年報村落社会研究第41集 消費される農村—ポスト生産主義下の「新たな農村問題」』農山漁村文化協会 : 7-40.
- 田辺一彦 1988. 観光農園についての若干の考察—兵庫県氷上郡春日町春日を事例として—. 人文地理 40 : 355-367.
- 田林明 2013. 農村空間の商品化からみた日本の地域差. 田林明編著『商品化する日本の農村空間』農林統計出版 : 83-90.
- 張紀濤・夏占友・張虹 2011. 北京市観光農業の発展現状と問題点—北京市昌平区の事例を中心に—. 城西大学経営紀要 7 : 95-117.
- 張貴民 2014. 中国における農村空間の商品化とその課題—改革開放以来を中心に—. 愛媛大学教育学部紀要 61 : 203-211.
- 張広帥 2010. 郷村観光の定義とその重要性に関する一考察. 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集 6 : 83-90.
- 張広帥 2013. 「郷村観光」の多面的効果を活用した持続的な農村振興の可能性—大連市甘井子区紅旗鎮岔鞍村を事例として—. 観光研究 25(1) : 3-12.
- 張広帥・森重昌之 2010. 中国の新農村建設における郷村観光の重要性に関する研究—大連市を

- 事例として一. 日本計画行政学会第 33 回全国大会研究報告要旨集 : 133-136.
- 奈良繁雄 1994. 観光対象と観光商品. 塩田正志・長谷政弘編著『観光学』同文館 : 55-71.
- 西島和彦 2005. 上海近郊農村における人口管理—社会主義市場経済体制下の戸籍制度—. 石田浩編著『中国農村の構造変動と「三農問題」—上海近郊農村実態調査分析』晃洋書房 : 253-279.
- 任大欣 2014. 中国の都市近郊における農村観光の展開—青島市を事例として—. 久留米大学大学院比較文化研究論集 33 : 1-43.
- 任大欣 2015. 中国少数民族地域における農村観光の展開—貴州省郎徳上寨を事例として—. 比較文化研究 118 : 165-179.
- 沼尾波子 2009. 中国の三農政策と政府間財政関係. 日本大学中国・アジア研究センター Working Paper Series No.10 : 1-28.
- 根岸洋 2015. 秋田県内におけるヘリテージ・ツーリズムの可能性. 国際教養大学アジア地域研究連携機構研究紀要 1 : 51-61.
- 朴賢淑・高橋英子 2009. グリーン・ツーリズムの推進と学びの可能性—福島県 3 地域の農家民宿を事例として—. 東北大学大学院教育学研究科研究年報 58(1) : 307-331.
- 橋本卓爾 1995. 『都市農業の理論と政策—農業のあるまちづくり序説』法律文化社.
- 林琢也 2007. 青森県南部町名川地域における観光農業の発展要因—地域リーダーの役割に注目して—. 地理学評論 80 : 635-659.
- 林琢也 2010. 入園料からみた観光農園経営の地域的特性—集客圏および所得との関わりから—. 観光科学研究 3 : 143-154.
- 林琢也 2013. 山梨県南アルプス市西野地区におけるアグリ・ツーリズムの変化と観光農園経営者の適応戦略. 地学雑誌 122 : 418-437.
- 林琢也・呉羽正昭 2010. 長野盆地におけるアグリ・ツーリズムの変容—アップルライン(国道 18 号)を事例に一. 地理空間 3 : 113-138.
- 原直行 2005. 日本におけるグリーン・ツーリズムの現状. 研究年報 45 : 93-132.
- 藤目節夫・楊洋 2004. 北京市における観光農園の展開と成立条件. 愛媛の地理 17 : 50-63.
- 方琳・山本信次・山本清龍・藤崎浩幸 2015. 中国における三農問題解決のための農家楽の可能性と課題—浙江省杭州市桐廬県を事例とする質的調査から—. 日本森林学会誌 97 : 115-122.
- 前田勇・橋本俊哉 2015. 「観光」の概念. 前田勇編著. 『新現代観光総論』学文社 : 5-15.
- 松村嘉久 1993. 中国における少数民族政策の展開—雲南省を事例として—. 人文地理 45 : 491-514.
- 松村嘉久 2009. 観光大国への道のり. 辻美代・金澤孝彰・許海珠編著、佐々木信彰監修『中国の改革開放 30 年の明暗—とける国境、ゆらぐ国内—』世界思想社 : 30-43.
- 松村嘉久 2010. 観光開発の現状と課題. 石原潤編著『変わり行く四川』ナカニシヤ出版 : 175-203.
- 松村嘉久・辻本雄紀 1999. 中国におけるツーリズムの発展と政策. 東アジア研究 26 : 15-38.
- 丸岡泰・大森信治郎 2010. 石巻市来訪者の食嗜好調査—観光の経済効果向上をめざして. 石巻専修大学経営学研究 21 : 219-230.
- 溝尾良隆 1994. 『観光を読む—地域振興への提言』古今書院.
- 南裕子 2015. 中国におけるグリーン・ツーリズムの展開と村落自治組織—村民自治制度、農村土

- 地所有制度との関連から. 人文・自然研究 9 : 165-189.
- 宮崎猛 1997. グリーンツーリズムのすすめ. 宮崎猛編著『グリーンツーリズムと日本の農村—環境保全による村づくり』農林統計協会 : 11-25.
- 宮崎猛 2002. 新しいグリーン・ツーリズムの展開. 宮崎猛編著『これからのグリーン・ツーリズム : ヨーロッパ型から東アジア型へ』家の光協会 : 2-26.
- 宮下聖史 2006. 日本型グリーン・ツーリズムの特質と地域的展開—長野県四賀村を事例として—. 立命館産業社会論集 42(3) : 109-131.
- 安田亘宏 2013. 『フードツーリズム論—食を活かした観光まちづくり』古今書院.
- 山崎光博 2005. 『ドイツのグリーンツーリズム』農林統計協会.
- 山崎光博・小山善彦・大島順子 1993. 『グリーン・ツーリズム』家の光協会.
- 山村順次 1995. 『新観光地理学』大明堂.
- 山村順次 2010. 観光地域と観光地理学. 山村順次編著『観光地理学—観光地域の形成と課題』同文館出版 : 2-19.
- 山村順次・浦達雄 1982. 都市化地域における観光農園の動向—川崎市多摩川沿岸を例として. 新地理 30(2) : 1-18.
- 山村高淑 2004. 中国農村部における集落観光の開発方式と住民参与—雲南省麗江納西族自治県黃山郷白華行政村の事例. 国立民族学博物館調査報告 51 : 13-51.
- 山村高淑 2015. 交流の仕組みとしてのコンテンツツーリズム—21世紀型の観光まちづくりを考える—. 観光とまちづくり : tourism 518 : 36-38.
- 劉蘭芳 2013. 中国における農村資源を活用した観光開発による地域活性化に関する研究—遼寧省における都市近郊農村及び中山間地域農村の意識調査を通じて—. 東洋大学博士論文.
- 若林憲子 2013. グリーンツーリズムの教育旅行による農家民宿・農家民泊受入と農業・農村の展開可能性. 地域政策研究 15(3) : 159-179.
- Holst, Sven 2010. 祭りからイベント観光へ. 文藝と思想 74 : 61-84.

英語文献 (アルファベット順)

- Choi, H. C. and Sirakaya, E. 2006. Sustainability indicators for managing community tourism. *Tourism Management*, 27:1274-1289.
- Clawson, M. 1960. Land for recreation. In *Land for the future*, ed. M. Clawson. and C. H. Stoddard, The Johns Hopkins Press:124-193.
- Kontogeorgopoulos, N. 2005. Community-based ecotourism in Phuket and Ao Phangnga Thailand: Partial victories and bittersweet remedies. *Journal of Sustainable Tourism*, 13(1):4-23.
- Leeuwis, C. 2000. Re-conceptualizing participation for sustainable rural development : Towards a negotiation approach. *Development and Change*, 31:931-959.
- Li, W. J. 2006. Community decision-making participation in development. *Annals of Tourism Research*, 33(1):132-143.

- Park, D. B., Lee, K. W. and Choi, H. S. et al. 2012. Factors influencing social capital in rural tourism communities in South Korea. *Tourism Management*, 33:1511-1520.
- UNWTO. 1994. Recommendations on tourism statistics. United Nations and World Tourism Organization:5-7.
- Zhou, Y. and Jiang, Y. 2013. A model of mountain region rural tourism development : The case of Suichang. In *Tourism in China*, ed. C. Ryan and S. Huang, London:Channel View Publications:22-37.

統計資料・報告・白書等

中国語（アルファベット順）

- 成都市鄉村旅游發展報告（2013年）
- 概念、類型、誤区、問題和对策（2006年）
- 閩興加大改革創新力度加快農業現代化建設的若干意見（2015年）
- 貴州省國民經濟和社会發展統計會報（2013年）
- 貴州省雷山縣郎德上寨民族村寨博物館免費開放參觀人數登記冊（2013年2月～2014年2月）
- 湖南省旅游局統計（2014年）
- 江蘇省旅游局鄉村旅游發展情況調查報告（2015年）
- 嶗山区統計局統計資料（2010年）
- 綠維創景企畫設計院報告書（2009年）
- 青島市嶗山区旅游發展十一五企畫
- 青島市嶗山区政府白皮書（2000～2012年）
- 青島市統計局統計資料（2010年）
- 青島市政府報告（2000～2012年）
- 全國旅行社統計公報（2014年）
- 全國旅游教育培訓統計（2014年）
- 全國星級飯店統計公報（2014年）
- 山東省旅游局統計（2014年）
- 泰安市旅游業發展統計分析報告（2014年）
- 騰訊2015年第一季度業績報告
- 1号文件（2010年、2014年、2015年）
- 宜居城市研究室報告（2013年）
- 中国科学院地理研究所中国觀光資源調查分類表（1990年）
- 中国統計年鑑（2008年、2013年、2014年、2015年）

日本語（五十音順）

通商白書（2006年）

日本観光政策審議会資料（今後の観光政策の基本的な方向について 答申第39号）

Web ページ

中国語（アルファベット順）

百度地図

国務院：国務院辦公庁関与推進農村一二三産業融合發展的指導意見（2016年1月8日）

http://www.gov.cn/zhengce/content/2016-01/04/content_10549.htm 2016年2月閲覧

国務院：中華人民共和国国務院令（2006年9月19日）

http://www.gov.cn/gongbao/content/2006/content_443258.htm 2015年10月閲覧

国務院：中華人民共和国国務院令（2008年4月22日）

http://www.gov.cn/flfg/2008-04/29/content_957342.htm 2015年10月閲覧

青島政務網：青島概況（2014年12月）

<http://www.qingdao.gov.cn/n172/n25664338/n26675614/131021110012675027.html>

2015年6月閲覧

全国人民代表大会常務委員会：中華人民共和国文物保護法（2013年6月29日）

http://www.npc.gov.cn/wxzl/gongbao/2013-10/22/content_1811009.htm 2015年10月閲覧

山東省旅游局：関与印發 2015 年全省旅游工作要点的通知（2015年1月8日）

<http://www.sdta.gov.cn/lyzl/lyzl-zljs/newInfo/fb017e934a9ea2bb014ac72ee7e3012f.html>

2015年8月閲覧

泰安市人民政府：行政区劃（2011年2月）

http://www.taian.gov.cn/zjta/tagk/200908/t20090828_484099.html 2015年6月閲覧

中国国家旅游局：打造“一帶一路”精品旅游帶 推進医療旅游健康發展（2016年3月6日）

http://www.cnta.gov.cn/xxfb/hydt/201603/t20160306_762347.shtml 2016年3月閲覧

中国国家旅游局：“2008 中国奧運旅游年”在北京啓動（2008年1月1日）

http://www.cnta.gov.cn/xxfb/jdxwnew2/201506/t20150625_457858.shtml 2016年2月閲覧

中国国家旅游局：2006 鄭州鄉村游啓動（2006年3月22日）

http://www.cnta.gov.cn/xxfb/hydt/201506/t20150624_321895.shtml 2015年10月閲覧

中国国家旅游局：2007 年旅游宣傳主題為“中国和諧城鄉遊”（2006年12月15日）

http://www.cnta.gov.cn/xxfb/jdxwnew2/201506/t20150625_457231.shtml 2016年2月閲覧

中国国家旅游局：2003 年旅游主題確定為“中国烹飪王国遊”（2002年12月24日）

http://www.cnta.gov.cn/xxfb/hydt/201506/t20150624_327099.shtml 2013年10月閲覧

中国国家旅游局：2012 年“中国旅游日”活動主題確定為健康生活歡樂旅游（2012年2月16日）

http://www.cnta.gov.cn/xxfb/jdxwnew2201506t20150625_461001.shtml 2015年10月閲覧

中国国家旅游局：2011 中華文化游主題旅游年在山東啓動（2011 年 1 月 3 日）
<http://www.cnta.gov.cn/xxfb/jdxwnew2/201506t20150625460295.shtml> 2015 年 10 月閱覽

中国国家旅游局：“2010 走進世博—旅游大篷車”凱旋（2010 年 4 月 3 日）
http://www.cnta.gov.cn/xxfb/jdxwnew2/201506/t20150625_459516.shtml 2015 年 3 月閱覽

中国国家旅游局：概念、類型、誤區、問題和對策（2006 年 6 月 2 日）
<http://www.cnta.gov.cn/html/2008-6/2008-6-2-21-16-49-29.html> 2015 年 6 月閱覽

中国国家旅游局：國家旅游局發布《旅游資源保護暫行辦法》（2007 年 9 月 7 日）
http://www.gov.cn/fwxx/ly/2007-09/07/content_740870.htm 2015 年 10 月閱覽

中国国家旅游局：國家旅游局確定 2009 年為“中國生態旅游年”（2008 年 11 月 7 日）
http://www.cnta.gov.cn/xxfb/jdxwnew2/201506/t20150625_458322.shtml 2015 年 2 月閱覽

中国国家旅游局：江西多彩活動迎接“中國旅游日”推 80 條惠民政策（2014 年 5 月 19 日）
http://www.cnta.gov.cn/xxfb/xxfb_dfxw201506/t20150627704946.shtml 2015 年 3 月閱覽

中国国家旅游局：《旅游規劃通則》（GB/T18971—2003）（2006 年 7 月 13 日）
http://www.cnta.gov.cn/zwgk/hybz/201506/t20150625_428119.shtml 2015 年 10 月閱覽

中国国家旅游局：我國世界遺產已達 48 項目總數居世界第二（2015 年 10 月 23 日）
http://www.cnta.gov.cn/xxfb/hydt/201510/t20151022_749863.shtml 2015 年 12 月閱覽

中国国家旅游局：鎮江：丹陽“5·19 中國旅游日”實惠多多（2013 年 5 月 16 日）
http://www.cnta.gov.cn/xxfb/xxfb_dfxw201506t20150626_681063.shtml 2015 年 3 月閱覽

中國青年報：農業部長評說農村真苦、農民真窮、農業真危（2003 年 3 月 11 日）
<http://news.sina.com.cn/c/2003-03-11/0607941447.shtml> 2015 年 2 月閱覽

中華人民共和國農業部：2013 年全國休閑農業與鄉村旅游示範縣、示範點認定名單公示（2013 年 12 月 16 日）
http://www.moa.gov.cn/zwl1m/zxfb/201312/t20131216_3715576.html 2015 年 10 月閱覽

中華人民共和國中央人民政府：世界自然與文化遺產—泰山（2006 年 3 月 31 日）
http://www.gov.cn/test/2006-03/31/content_241131.html 2015 年 6 月閱覽

中華人民共和國中央人民政府：中華人民共和國環境保護法（主席令第九號）（2014 年 4 月 25 日）
http://www.gov.cn/zhengce/2014-04/25/content_2666434.html 2015 年 10 月閱覽

中華人民共和國中央人民政府：中華人民共和國海洋環境保護法（2012 年 11 月 13 日）
http://www.gov.cn/fwxx/content_2265086.html 2015 年 10 月閱覽

日本語（五十音順）

国立研究開発法人科学技術振興機構：2015 年中央一号文件
http://www.spc.jst.go.jp/policy/national_policy/2015center1/chapter05.html
 2015 年 12 月閱覽

人民網：觀光業、貧困地區 1 割の貧困脱却に寄与（2009 年 8 月）
<http://j.people.com.cn/94476/6726071.html> 2015 年 3 月閱覽

青島市國際投資合作促進局：住み易い都市（2013 年 1 月）
http://jp.qingdao-invest.gov.cn/product/q_ml/z_y_ds/index.html 2015 年 6 月閱覽

農林水産省：「グリーン・ツーリズム」とは

http://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/kyose_tairyu/k_gt/ 2015年9月閲覧

農林水産省：農業・農村の多面的機能

http://www.maff.go.jp/j/nousin/noukan/nougyo_kinou/ 2016年2月閲覧

その他（アルファベット順）

Google マップ

OECD：TOURISM STRATEGIES AND RURAL DEVELOPMENT（1994年）

<http://www.oecd.org/cfe/tourism/2755218.pdf#search='TOURISM+STRATEGIES+AND+RURAL+DEVELOPMENT'> 2015年10月閲覧

辞典（五十音順）

世界大百科事典 第2版

大辞林 第三版

謝 辞

本研究を進めるにあたり、多くの方々のご指導とご支援を賜りまして、心より感謝申し上げます。

まず、本研究の構成から細部まで、終始ご指導いただきました久留米大学大学院比較文化研究科地理科学文化コースの浅見良露教授、堂前亮平教授、畠中昌教准教授に厚くお礼申し上げます。

同コースのゼミにご出席され、本研究に多くの示唆と助言を賜りました葉山アツコ准教授、北村修二教授に感謝しております。

また、本研究の日本語の訂正から、文章の書き方まで教えていただきました久留米大学国際交流センター別科の権藤早千葉先生、池田富見子先生、平川彩子先生、小川剛先生、私の友人であります久保久美さんに感謝の意を表します。

さらに、毎週火曜日、地理科学文化コースの合同ゼミで議論を通じて多くの知識やアドバイスをくださいました皆様に感謝します。

現地調査においては、快く調査に応じてくださった山東省青島市嶗山区沙子口街道西麦窯社区、山東省泰安市岱岳区道朗鎮里峪村、貴州省黔東南ミャオ族トン族自治州雷山県郎徳上寨の皆様我心から感謝しております。

最後に、私の学業を支えてくれた家族、友人に感謝いたします。

付録1：アンケート（西麦窯社区用 中国語）

问卷调查

我叫任大欣，现在在日本的久留米大学留学。这次，就毕业论文要实施关于「中国乡村旅游的展开及其影响」的调查。本次调查以无记名式的形式进行，所以您可以自由的写下您的答案；此外本次调查的数据除了学术研究之外，不会进行其他方面的运用，而且不会公布任何个人信息。在您百忙之中，请协助完成本次调查。对您的大力配合，致以万分感谢。

在此调查问卷中，只有后面写有「可以复数回答」的问题才可以选择多个答案。如果您选择了「其他」的话，请把您的答案写在后面的线上。

回答者的年龄：_____性别：_____

1. 您家现在有几口人？（请只计入在家里久住的人口，如果不在家里居住而只是有户口在家里的人，请不要计算在内）_____人

2. 请在以下选项中选出您的家庭组成形式。

①小家族（有孩子） ②大家族 ③夫妇（有孩子，但是不住在一起） ④其他_____

3. 促使您开始民宿、农家饭店、采摘果园等等乡村旅游的原因是什么？（可以复数回答）

①政策的支持 ②受亲戚朋友的影响 ③受周围人的影响、也想试试看 ④经济利益

⑤房子空着太可惜了（孩子去外地上大学或者就业等等）⑥为了让生活变得更加愉快、而且特别喜欢和人交流 ⑦其他_____

4. 您家里具体开展的是那种乡村旅游？（可以复数回答）

①采摘果园 ②民宿 ③农家饭店 ④针对城市居民的租借地 ⑤农业体验 ⑥其他_____

您家里开展的乡村旅游有季节性吗？

①有 ②没有

如果您的答案是 ①有 的话，请问那个季节的客人最多？_____

5. 您现在开展的乡村旅游和您刚刚开始从事乡村旅游时的具体内容一样吗？

①是 ②不是

如果您的答案是 ②不是 的话请把当初您从事的乡村旅游和现在您从事的乡村旅游写下来。即从_____变成了_____

今后，您想开展什么样的乡村旅游？

①保持现在的状态 ②随着时代改变 ③不太确定 ④其他_____

6. 如果您已经开展乡村旅游超过了三年，请把您一直从事此行业的理由写下来。

7. 您所开展的乡村旅游，最受好评的是什么？

①田园风景 ②健康天然的绿色食品 ③传统农村生活（例如：民宿）

④温馨的农村人情 ⑤其他_____

这是专门为客人准备的还是您平时就一直这样做? _____

8. 关于政策支援

I. 省、市、区、村等等有没有对乡村旅游进行支援?

①有 ②没有

如果您的答案是 ①有 的话, 请问是那个方面的支援?

①补助金 ②免税 ③举行各种各样的学习会 ④免费宣传

⑤家周围的基础设施建设(例: 道路、垃圾处理、停车场等)

⑥营业执照的申请等 ⑦其他_____

II. 为了更好的吸引客人、政府做了什么样的基础设施建设(硬件方面)?

①修路(村内、村外) ②自来水 ③停车场 ④垃圾处理场的建设 ⑤设置看板或者
修建游客服务中心等 ⑥其他_____

III. 为了更好的吸引客人、政府做了什么样的工作(软件方面)?

①吸引客人的措施 ②统一口号的制定 ③和各种媒体的合作 ④举办学习会等

⑤其他_____

9. 对您的家庭来说, 乡村旅游是副业吗?

①是 ②不是 ③说不好 ④不知道

回答 ②不是 的话, 请您回答以下问题。

I. 在开展乡村旅游之前, 您家的主要工作是什么(或者说您家的主要收入来源是什么)?

①蔬菜种植 ②水果种植 ③粮食作物种植 ④在当地的企业工作

⑤外出打工 ⑥其他_____

II. 现在, 您家的主要工作是什么(或者说您家的主要收入来源是什么)?

①蔬菜种植 ②水果种植 ③粮食作物种植 ④在当地的企业工作 ⑤外出打工

⑥乡村旅游 ⑦其他_____

10. 开展乡村旅游以来, 您身边变化最大的地方是什么(硬件方面)?

①垃圾的处理 ②厕所和浴室的修整 ③饮食的清洁 ④日常扫除 ⑤房屋的修整和装饰

⑥家周围的整理和清扫 ⑦自来水管道的设施的修整 ⑧其他_____

11. 开展乡村旅游以来, 为了接待客人您的身边变化最大的地方是什么(软件方面)?

①开始使用普通话 ②服务态度 ③和客人的交流 ④注重平时的服饰和礼仪 ⑤其他_____

12. 开展乡村旅游以来, 您或者您的家人最大的变化是什么?

①收入的增加 ②生活方式的变化 ③和客人的交流和交往 ④没怎么变化 ⑤不知道

⑥其他_____

13. 请写下以下年份您家的主要收入来源。(电话调查)

1995年: _____ 2000年: _____ 2005年: _____ 2010年: _____ 2012年2月: _____

关于意识方面：

14. 通过开展乡村旅游，和之前相比您的经营意识有变化吗？

- ①有很大变化 ②稍微有变化 ③没怎么有变化
④没有一点变化 ⑤不清楚（不知道） ⑥其他_____

如果您回答的是 ① 的话请写下您认为变化的地方。

15. 通过开展乡村旅游，和之前相比您对教育的态度有变化吗？

- ①有很大变化 ②稍微有变化 ③没怎么有变化
④没有一点变化 ⑤不清楚（不知道） ⑥其他_____

如果您回答的是 ① 的话请写下您认为变化的地方。

16. 通过开展乡村旅游，和之前相比您的视野（理念）有变化吗？

- ①有很大变化 ②稍微有变化 ③没怎么有变化
④没有一点变化 ⑤不清楚（不知道） ⑥其他_____

如果您回答的是 ① 的话请写下您认为变化的地方。

17. 通过开展乡村旅游，和之前相比您的自豪感和自我认同感有变化吗？

- ①有很大变化 ②稍微有变化 ③没怎么有变化
④没有一点变化 ⑤不清楚（不知道） ⑥其他_____

如果您回答的是 ① 的话请写下您认为变化的地方。

关于生活方面：

18. 通过开展乡村旅游，和之前相比当地的生活习惯有变化吗？

- ①有很大变化 ②稍微有变化 ③没怎么有变化
④没有一点变化 ⑤不清楚（不知道） ⑥其他_____

如果您回答的是 ① 的话请写下您认为变化的地方。

19. 通过开展乡村旅游，和之前相比当地的家庭结构有变化吗？

- ①有很大变化 ②稍微有变化 ③没怎么有变化
④没有一点变化 ⑤不清楚（不知道） ⑥其他_____

如果您回答的是 ① 的话请写下您认为变化的地方。

20. 通过开展乡村旅游，和之前相比当地的物价有变化吗？

- ①有很大变化 ②稍微有变化 ③没怎么有变化
④没有一点变化 ⑤不清楚（不知道） ⑥其他_____

如果您回答的是 ① 的话请写下您认为变化的地方。

关于居住环境方面：

21. 通过开展乡村旅游，和之前相比当地的环境有了什么变化？

- ①有了改善 ②比之前差 ③没什么变化
④没有一点变化 ⑤不清楚（不知道） ⑥其他_____

如果您回答的是 ① 的话，请把您认为改善的地方写下来。

如果您回答的是 ② 的话，请把您认为变差的地方写下来。

22. 通过开展乡村旅游，和之前相比当地的邻居关系有了什么变化？

- ①有了改善 ②比之前差 ③没什么变化
④没有一点变化 ⑤不清楚（不知道） ⑥其他_____

如果您回答的是 ① 的话，请把您认为改善的地方写下来。

如果您回答的是 ② 的话，请把您认为变差的地方写下来。

23. 通过开展乡村旅游，和之前相比当地的社会治安有了什么变化？

- ①有了改善 ②比之前差 ③没什么变化
④没有一点变化 ⑤不清楚（不知道） ⑥其他_____

如果您回答的是 ① 的话，请把您认为改善的地方写下来。

如果您回答的是 ② 的话，请把您认为变差的地方写下来。

24. 通过开展乡村旅游，和之前相比当地的交通有了什么变化？

- ①有了改善 ②比之前差 ③没什么变化
④没有一点变化 ⑤不清楚（不知道） ⑥其他_____

如果您回答的是 ① 的话，请把您认为改善的地方写下来。

如果您回答的是 ② 的话，请把您认为变差的地方写下来。

关于收入方面：

25. 您家的年收入里面，乡村旅游的收入和除此之外的收入的比例关系请从下面选择。

- ①1: 9 ②2: 8 ③3: 7 ④4: 6 ⑤5: 5 ⑥6: 4 ⑦7: 3 ⑧8: 2 ⑨9: 1

⑩不清楚（不知道） ⑪其他_____

去年您家的乡村旅游收入是多少：_____

26. 和周围没有开展乡村旅游的农户相比，您家的收入状态请从以下选项中选择。

①应该比他们多 ②应该比他们少 ③没什么变化 ④不清楚（不知道） ⑤其他_____

27. 乡村旅游对当地经济发展起着积极作用吗？

①是 ②不是 ③不清楚（不知道） ④其他

28. 开展乡村旅游过程中当地劳动力经常被雇佣吗？

①是 ②不是 ③不清楚（不知道） ④其他

29. 通过开展乡村旅游，外来投资（比如外来者在您的村庄里面开展乡村旅游）变多了吗？

①是 ②不是 ③不清楚（不知道） ④其他_____

30. 只有少数人才享受到乡村旅游带来的好处吗？

①是 ②不是 ③不清楚（不知道） ④其他_____

31. 您在的区域有开展乡村旅游的领导者吗？

①有 ②没有

如果您回答 ①有 的话，请问领导者是谁？_____

32. 您有开展乡村旅游的继承者吗？

①有 请问是谁？_____

②没有

谢谢您的配合。

付録1：アンケート（西麦窯社区用 日本語訳）

アンケート

私は任大欣と申します。現在、日本の久留米大学に在学しております。今回、論文の関係で、「中国における農村観光の展開とその影響」について、アンケート調査をさせていただきたいと思っています。本調査は無記名で、ご自由に回答していただければと思います。学術研究以外、このアンケートから得られた情報は一切使用致しません。また、個人情報に関しては公表することはございません。ご多忙のところまことに恐縮ですが、ご協力くださいますよう、宜しくお願い致します。

選択肢は複数ありますが、「複数回答可」の質問のみ、複数回答していただけます。「その他」の選択肢を選んだ方はご自分の回答を後ろの下線にお書きください。

回答者の年齢：_____性別：_____

- ご家族は何人ですか（現在、常に定住している方のみ、戸籍があっても、常に定住していない方は数えないでください）。_____人
- ご家族の構成を次からお選びください。
①核家族（子供がいる） ②大家族 ③夫婦のみ（子供の別居も含む） ④その他_____
- 農家民宿、農家レストラン、果実狩りなどのいわゆる農村観光を始めたきっかけは何ですか。（複数回答可）
①公的な支援 ②知人などに誘われた ③周りの人が農村観光を行っているため
④利益のため ⑤空き部屋がある（子供の進学や就職などのため）
⑥生きがい、人との交流が好きだから ⑦その他_____
- 具体的に、あなたはどのような農村観光を行っていますか。（複数回答可）
①果実狩り ②農家民宿 ③農家レストラン ④オーナー制 ⑤農業体験 ⑥その他_____
あなたが行っている農村観光は季節性がありますか。
①はい ②いいえ
①はい と答えた方に質問します。どの季節に訪れる観光客が一番多いですか。_____
- 現在、行っている農村観光は、農村観光を始めた当時と同じこと（農村観光の内容：問4参照）を行っていますか。
①はい ②いいえ
②いいえ と答えた方に質問します。_____⇒_____に変化しました
これから、どのような農村観光を行う予定ですか。
①今まで通り ②時代とともに、変化していく ③わからない ④その他_____
- 農村観光を3年以上続けた方は、続けた理由をお書きください。

7. あなたが行っている農村観光において、最も評判が高いのは何ですか。

- ①田園風景 ②無添加、健康的な食事 ③伝統的な農村生活スタイル（民宿）
④暖かい人間関係 ⑤その他_____

それは特に観光客のために用意したものでしょうか、それとも普段からあるものでしょうか。_____

8. 政府からの支援について（農村観光に対して）

I. 省、市、区、村などからの公的な支援がありますか。

- ①はい ②いいえ

①はい と答えた方に質問します。それはどのような支援ですか。

- ①補助金 ②税の免除 ③研修会や勉強会などの開催 ④無料で宣伝してもらう
⑤家の周りのインフラ整備（例：道路、ごみ処理、駐車場など）
⑥営業証明書の発行 ⑦その他_____

II. 観光客に、より気持ちよく、お越しいただくために、公的な機関はどのような整備を行いましたか（ハード面）。

- ①道路（村内、村外）②上下水道 ③駐車場 ④ごみ処理場 ⑤看板と案内所の設置（一時案内所や問い合わせ場所を含む） ⑥その他_____

III. 観光客に、より気持ちよく、お越しいただくために、公的な機関はどのような工夫を行いましたか（ソフト面）。

- ①誘客の取り組み ②統一のスローガンの作成 ③農村観光を宣伝するため、マスメディアとのやり取りなど ④勉強会、研修会の開催 ⑤その他_____

9. あなたの世帯にとって、農村観光は副業ですか。

- ①はい ②いいえ ③どちらともいえない ④わからない
②いいえ と答えた方は次の質問をお答えください。

I. 農村観光を始める前、あなたの世帯の主な仕事は何でしたか（あるいは、主な収入源は何でしたか）。

- ①野菜づくり ②果実づくり ③小麦、トウモロコシなどの穀物づくり ④地元の企業で働く ⑤出稼ぎ ⑥その他_____

II. 現在、主な仕事は何ですか（あるいは、主な収入源は何ですか）。

- ①野菜づくり ②果実づくり ③小麦、トウモロコシなどの穀物づくり ④地元の企業で働く ⑤出稼ぎ ⑥農村観光 ⑦その他_____

10. 農村観光を始めてから今まで、あなたの身の回りで、最も変化した点は何ですか（ハード面）。

- ①ごみの処理 ②トイレ・風呂場の整備 ③食事の衛生管理 ④日常の清掃 ⑤部屋の修繕と装飾 ⑥家の周りの整理整頓 ⑦上下水道の整備 ⑧その他_____

11. 農村観光を始めてから今まで、接客のために、最も変化した点は何ですか。（ソフト面）。

- ①標準語の使用 ②接客とサービス精神 ③客との交流 ④身だしなみの注意
⑤その他_____

12. 農村観光を始めてから今まで、あなた（ご家族）にとって、最も変化したのは何ですか。

- ①収入の増加 ②生活スタイルの変化 ③観光客との交流、お互いの関係づくり
④あまり変わらない ⑤わからない ⑥その他_____

13. 以下の年における生業をお書きください。（電話調査）

1995年：_____2000年：_____2005年：_____2010年：_____2012年2月：_____

意識関係：

14. 農村観光の展開によって、あなたの経営意識は以前と比較し変化しましたか。

- ①大きく変化した ②少し変化した ③あまり変化していない
④まったく変化していない ⑤わからない ⑥その他_____

①と答えた方はよろしければ、具体的に変化した点をお書きください。

15. 農村観光の展開によって、あなたの教育に対する態度は以前と比較し変化しましたか。

- ①大きく変化した ②少し変化した ③あまり変化していない
④まったく変化していない ⑤わからない ⑥その他_____

①と答えた方はよろしければ、具体的に変化した点をお書きください。

16. 農村観光の展開によって、あなたの視野（理念）は以前と比較し変化しましたか。

- ①大きく変化した ②少し変化した ③あまり変化していない
④まったく変化していない ⑤わからない ⑥その他_____

①と答えた方はよろしければ、具体的に変化した点をお書きください。

17. 農村観光の展開によって、あなたのプライドとアイデンティティ・自分自身の認識度は以前と比較し変化しましたか。

- ①大きく変化した ②少し変化した ③あまり変化していない
④まったく変化していない ⑤わからない ⑥その他_____

①と答えた方はよろしければ、具体的に変化した点をお書きください。

生活関係：

18. 農村観光の展開によって、村の生活習慣は以前と比較し変化しましたか。

- ①大きく変化した ②少し変化した ③あまり変化していない
④まったく変化していない ⑤わからない ⑥その他_____

①と答えた方はよろしければ、具体的に変化した点をお書きください。

19. 農村観光の展開によって、村の家族構成は以前と比較し変化しましたか。

- ①大きく変化した ②少し変化した ③あまり変化していない
④まったく変化していない ⑤わからない ⑥その他_____

①と答えた方はよろしければ、具体的に変化した点をお書きください。

20. 農村観光の展開によって、村の物価は以前と比較し変化しましたか。

- ①大きく変化した ②少し変化した ③あまり変化していない
④まったく変化していない ⑤わからない ⑥その他_____

①と答えた方はよろしければ、具体的に変化した点をお書きください。

居住環境関係：

21. 農村観光の展開によって、村の環境は変化しましたか。

- ①以前より改善された ②以前より悪化した ③あまり変わらない
④まったく変化していない ⑤わからない ⑥その他_____

①と答えた方はよろしければ、具体的に改善された点をお書きください。

②と答えた方はよろしければ、具体的に悪化した点をお書きください。

22. 農村観光の展開によって、村内の近隣関係は変化しましたか。

- ①以前より改善された ②以前より悪化した ③あまり変わらない
④まったく変化していない ⑤わからない ⑥その他_____

①と答えた方はよろしければ、具体的に改善された点をお書きください。

②と答えた方はよろしければ、具体的に悪化した点をお書きください。

23. 農村観光の展開によって、村の社会治安は変化しましたか。

- ①以前より改善された ②以前より悪化した ③あまり変わらない
④まったく変化していない ⑤わからない ⑥その他_____

①と答えた方はよろしければ、具体的に改善された点をお書きください。

②と答えた方はよろしければ、具体的に悪化した点をお書きください。

24. 農村観光の展開によって、村の交通は変化しましたか。

- ①以前より改善された ②以前より悪化した ③あまり変わらない
④まったく変化していない ⑤わからない ⑥その他_____

①と答えた方はよろしければ、具体的に改善された点をお書きください。

②と答えた方はよろしければ、具体的に悪化した点をお書きください。

収入関係：

25. 一年を通して、あなたの世帯において、農村観光の収入とそれ以外の収入の割合を下からお選びください。

① 1 : 9 ② 2 : 8 ③ 3 : 7 ④ 4 : 6 ⑤ 5 : 5 ⑥ 6 : 4 ⑦ 7 : 3

⑧ 8 : 2 ⑨ 9 : 1 ⑩ わからない ⑪ その他 _____

差支えなければ、昨年度の農村観光による収入をお書きください _____

26. 周囲の農村観光を経営していない農家と比較した場合、あなたの世帯の収入はどのようになっていますか。

① どちらかというとい多い ② どちらかというとい少ない ③ あまり変わらない ④ わからない ⑤ その他 _____

27. 農村観光の展開は地元経済の発展に役に立ちますか。

① はい ② いいえ ③ わからない ④ その他

28. 農村観光の展開は地元の人々の雇用に寄与していますか。

① はい ② いいえ ③ わからない ④ その他

29. 農村観光の展開によって、以前より、村外からの農村観光経営者や農村観光に対する投資が多くなりましたか。

① はい ② いいえ ③ わからない ④ その他 _____

30. 一部の人のみが農村観光の利益を受けていると思いますか。

① そう思う ② そう思わない ③ わからない ④ その他 _____

31. 当地域においては農村観光を展開するリーダーがいますか。

① はい ② いいえ

① はい と答えた方に質問します。そのリーダーはどなたですか。 _____

32. あなたには後継者がいますか。

① はい どなたですか。 _____

② いいえ

ご協力ありがとうございました。

付録2：アンケート（里峪村・郎徳上寨用 中国語）

问卷调查

我叫任大欣，现在在日本的久留米大学留学。这次，就毕业论文要实施关于「中国乡村旅游的展开及其影响」的调查。本次调查以无记名式的形式进行，所以您可以自由的写下您的答案；此外本次调查的数据除了学术研究之外，不会进行其他方面的运用，而且不会公布任何个人信息。在您百忙之中，请协助完成本次调查。对您的大力配合，致以万分感谢。

在此调查问卷中，只有后面写有「可以复数回答」的问题才可以选择多个答案。如果您选择了「其他」的话，请把您的答案写在后面的线上。

回答者的年龄：_____ 性别：_____

1. 您家现在有几口人？（请只计入在家里久住的人口，如果不在家里居住而只是有户口在家里的人，请不要计算在内）_____人

2. 请在以下选项中选出您的家庭组成形式。

①小家族（有孩子） ②大家族 ③夫妇（有孩子，但是不住在一起） ④其他_____

3. 促使您开始民宿、农家饭店、采摘果园等等乡村旅游的原因是什么？（可以复数回答）

①政策的支持 ②受亲戚朋友的影响 ③受周围人的影响、也想试试看 ④经济利益

⑤房子空着太可惜了（孩子去外地上大学或者就业等等）⑥为了让生活变得更加愉快、而且特别喜欢和人交流 ⑦其他_____

4. 您家里具体开展的是那种乡村旅游？（可以复数回答）

①采摘果园 ②民宿 ③农家饭店 ④针对城市居民的租借地 ⑤农业体验 ⑥其他_____

您家里开展的乡村旅游有季节性吗？

①有 ②没有

如果您的答案是 ①有 的话，请问那个季节的客人最多？_____

5. 您现在开展的乡村旅游和您刚刚开始从事乡村旅游时的具体内容一样吗？

①是 ②不是

如果您的答案是 ②不是 的话请把当初您从事的乡村旅游和现在您从事的乡村旅游写下来。即从_____变成了_____

今后，您想开展什么样的乡村旅游？

①保持现在的状态 ②随着时代改变 ③不太确定 ④其他_____

6. 如果您已经开展乡村旅游超过了三年，请把您一直从事此行业的理由写下来。

7. 您所开展的乡村旅游，最受好评的是什么？

①田园风景 ②健康天然的绿色食品 ③传统农村生活（例如：民宿）

④温馨的农村人情 ⑤其他_____

这是专门为客人准备的还是您平时就一直这样做? _____

8. 关于政策支援

I. 省、市、区、村等等有没有对乡村旅游进行支援?

①有 ②没有

如果您的答案是 ①有 的话, 请问是那个方面的支援?

①补助金 ②免税 ③举行各种各样的学习会 ④免费宣传

⑤家周围的基础设施建设(例: 道路、垃圾处理、停车场等)

⑥营业执照的申请等 ⑦其他_____

II. 为了更好的吸引客人, 政府做了什么样的基础设施建设(硬件方面)?

①修路(村内、村外) ②自来水 ③停车场 ④垃圾处理场的建设 ⑤设置看板或者修建游客服务中心等 ⑥其他_____

III. 为了更好的吸引客人, 政府做了什么样的工作(软件方面)?

①吸引客人的措施 ②统一口号的制定 ③和各种媒体的合作 ④举办学习会等

⑤其他_____

9. 对您的家庭来说, 乡村旅游是副业吗?

①是 ②不是 ③说不好 ④不知道

回答 ②不是 的话, 请您回答以下问题。

I. 在开展乡村旅游之前, 您家的主要工作是什么(或者说您家的主要收入来源是什么)?

①蔬菜种植 ②水果种植 ③粮食作物种植 ④在企业工作 ⑤外出打工

⑥其他_____

II. 现在您家的主要工作是什么(或者说您家的主要收入来源是什么)?

①蔬菜种植 ②水果种植 ③粮食作物种植 ④在企业工作 ⑤外出打工 ⑥乡村旅游

⑦其他_____

10. 开展乡村旅游以来, 您的身边变化最大的地方是什么(硬件方面)?

①垃圾的处理 ②厕所和浴室的修整 ③饮食的清洁 ④日常扫除 ⑤房屋的修整和装饰

⑥家周围的整理和清扫 ⑦自来水管道的设施的修整 ⑧其他_____

11. 开展乡村旅游以来, 为了接待客人您的身边变化最大的地方是什么(软件方面)?

①开始使用普通话 ②服务态度 ③和客人的交流 ④注重平时的服饰和礼仪 ⑤其他 _____

12. 开展乡村旅游以来, 您或者您的家人最大的变化是什么?

①收入的增加 ②生活方式的变化 ③和客人的交流和交往 ④没怎么变化 ⑤不知道

⑥其他_____

13. 请写下以下时期您家的主要收入来源。

改革开放以前: _____ 1990年代: _____ 2015年6月: _____

去年您家的乡村旅游收入是多少: _____

自我认同(认可)的变化:

14. 在开展乡村旅游之前

①里峪村: 您认为农民这个职业很好吗?

A 是 B 不是 C 说不好

请写下您选择以上选项的理由_____

郎德上寨: 您认为生为苗族是一件自豪的事情吗?

A 是 B 不是 C 说不好

请写下您选择以上选项的理由_____

②出生在里峪村/郎德上寨, 是很幸运(很好)的事情吗?

A 是 B 不是 C 说不好

请写下您选择以上选项的理由_____

开展乡村旅游之后, 您的自我认同(认可)

(出生在里峪村的农民/出生在郎德上寨的苗族农民) 有了变化吗?

A 有 B 没有 C 说不好

请写下您选择以上选项的理由_____

地域的变化:

15. 通过开展乡村旅游, 里峪村/郎德上寨的环境有所变化吗?

A 有 B 没有 C 说不好 D 其他_____

如果您回答了 A 的话, 请写下来具体的变化的地方_____

16. 通过开展乡村旅游, 里峪村/郎德上寨的邻居关系有所变化吗?

A 有 B 没有 C 说不好 D 其他_____

如果您回答了 A 的话, 请写下来具体的变化的地方_____

17. 通过开展乡村旅游, 里峪村/郎德上寨的社会治安有所变化吗?

A 有 B 没有 C 说不好 D 其他_____

如果您回答了 A 的话, 请写下来具体的变化的地方_____

18. 通过开展乡村旅游, 里峪村/郎德上寨的生活习惯有所变化吗?

A 有 B 没有 C 说不好 D 其他_____

如果您回答了 A 的话, 请写下来具体的变化的地方_____

19. 通过开展乡村旅游, 里峪村/郎德上寨的家庭结构有所变化吗?

A 有 B 没有 C 说不好 D 其他_____

如果您回答了 A 的话, 请写下来具体的变化的地方_____

20. 通过开展乡村旅游, 里峪村/郎德上寨的物价有所变化吗?

A 有 B 没有 C 说不好 D 其他_____

如果您回答了 A 的话, 请写下来具体的变化的地方_____

21. 通过开展乡村旅游，里峪村/郎德上寨的交通有所变化吗？

A 有 B 没有 C 说不好 D 其他_____

如果您回答了 A 的话，请写下来具体的变化的地方_____

感谢您的配合。

付録2：アンケート（里峪村・郎徳上寮用 日本語訳）

アンケート

私は任大欣と申します。現在、日本の久留米大学に在学しております。今回、論文の関係で、「中国における農村観光の展開とその影響」について、アンケート調査をさせていただきたいと思っています。本調査は無記名で、ご自由に回答していただければと思います。学術研究以外、このアンケートから得られた情報は一切使用致しません。また、個人情報に関しては公表することはございません。ご多忙のところまことに恐縮ですが、ご協力くださいますよう、宜しくお願い致します。

選択肢は複数ありますが、「複数回答可」の質問のみ、複数回答していただけます。「その他」の選択肢を選んだ方はご自分の回答を後ろの下線にお書きください。

回答者の年齢：_____性別：_____

- ご家族は何人ですか（現在、常に定住している方のみ、戸籍があっても、常に定住していない方は数えないでください）。_____人
- ご家族の構成を次からお選びください。
①核家族（子供がいる） ②大家族 ③夫婦のみ（子供の別居も含む） ④その他_____
- 農家民宿、農家レストラン、果実狩りなどのいわゆる農村観光を始めたきっかけは何ですか。（複数回答可）
①公的な支援 ②知人などに誘われた ③周りの人が農村観光を行っているため
④利益のため ⑤空き部屋がある（子供の進学や就職などのため）
⑥生きがい、人との交流が好きだから ⑦その他_____
- 具体的に、あなたはどのような農村観光を行っていますか。（複数回答可）
①果実狩り ②農家民宿 ③農家レストラン ④オーナー制 ⑤農業体験 ⑥その他_____
あなたが行っている農村観光は季節性がありますか。
①はい ②いいえ
①はい と答えた方に質問します。どの季節に訪れる観光客が一番多いですか。_____
- 現在、行っている農村観光は、農村観光を始めた当時と同じこと（農村観光の内容：問4参照）を行っていますか。
①はい ②いいえ
②いいえ と答えた方に質問します。_____⇒_____に変化しました
これから、どのような農村観光を行う予定ですか。
①今まで通り ②時代とともに、変化していく ③わからない ④その他_____
- 農村観光を3年以上続けた方は、続けた理由をお書きください。

7. あなたが行っている農村観光において、最も評判が高いのは何ですか。

- ① 田園風景 ② 無添加、健康的な食事 ③ 伝統的な農村生活スタイル（民宿）
④ 暖かい人間関係 ⑤ その他_____

それは特に観光客のために用意したものでしょうか、それとも普段からあるものでしょうか。_____

8. 政府からの支援について（農村観光に対して）

I. 省、市、区、村などからの公的な支援がありますか。

- ① はい ② いいえ
① はい と答えた方に質問します。それはどのような支援ですか。
① 補助金 ② 税の免除 ③ 研修会や勉強会などの開催 ④ 無料で宣伝してもらう
⑤ 家の周りのインフラ整備（例：道路、ごみ処理、駐車場など）
⑥ 営業証明書の発行 ⑦ その他_____

II. 観光客に、より気持ちよく、お越しいただくために、公的な機関はどのような整備を行いましたか（ハード面）。

- ① 道路（村内、村外） ② 上下水道 ③ 駐車場 ④ ごみ処理場 ⑤ 看板と案内所の設置（一時案内所や問い合わせ場所を含む） ⑥ その他_____

III. 観光客に、より気持ちよく、お越しいただくために、公的な機関はどのような工夫を行いましたか（ソフト面）。

- ① 誘客の取り組み ② 統一のスローガンの作成 ③ 農村観光を宣伝するため、マスメディアとのやり取りなど ④ 勉強会、研修会の開催 ⑤ その他_____

9. あなたの世帯にとって、農村観光は副業ですか。

- ① はい ② いいえ ③ どちらともいえない ④ わからない
② いいえ と答えた方は次の質問をお答えください。

I. 農村観光を始める前、あなたの世帯の主な仕事は何でしたか（あるいは、主な収入源は何でしたか）。

- ① 野菜づくり ② 果実づくり ③ 小麦、トウモロコシなどの穀物づくり ④ 企業で働く
⑤ 出稼ぎ ⑥ その他_____

II. 現在、主な仕事は何ですか（あるいは、主な収入源は何ですか）。

- ① 野菜づくり ② 果実づくり ③ 小麦、トウモロコシなどの穀物づくり ④ 企業で働く
⑤ 出稼ぎ ⑥ 農村観光 ⑦ その他

10. 農村観光を始めてから今まで、あなたの身の回りで、最も変化した点は何ですか（ハード面）。

- ① ごみの処理 ② トイレ・風呂場の整備 ③ 食事の衛生管理 ④ 日常の清掃 ⑤ 部屋の修繕と装飾 ⑥ 家の周りの整理整頓 ⑦ 上下水道の整備 ⑧ その他_____

11. 農村観光を始めてから今まで、接客のために、最も変化した点は何ですか（ソフト面）。

- ① 標準語の使用 ② 接客とサービス精神 ③ 客との交流 ④ 身だしなみの注意
⑤ その他_____

12. 農村観光を始めてから今まで、あなた（ご家族）にとって、最も変化したのは何ですか。

- ①収入の増加 ②生活スタイルの変化 ③観光客との交流、お互いの関係づくり
④あまり変わらない ⑤わからない ⑥その他_____

13. 以下の年における生業をお書きください。

改革開放以前：_____1990年代：_____2015年6月：_____

差支えなければ、昨年度の農村観光による収入をお書きください _____

アイデンティティの変化：

14. 農村観光を始める前のあなたについて、質問をします。

①里峪村の場合：農民であることがよかったですか。

A はい B いいえ C どちらとも言えない

その理由をお書き下さい _____

郎徳上寨の場合：ミャオ族であることがよかったですか。

A はい B いいえ C どちらとも言えない

その理由をお書き下さい _____

②里峪村/郎徳上寨に生まれて、よかったですか。

A はい B いいえ C どちらとも言えない

その理由をお書き下さい _____

農村観光を始めてから、あなたはアイデンティティ（里峪村で生まれた農民として
/郎徳上寨で生まれたミャオ族として）の再認識ができましたか。

A はい B いいえ C どちらとも言えない

その理由をお書き下さい _____

地域の変化：

15. 農村観光の展開により、里峪村/郎徳上寨における環境の変化がありましたか。

A はい B いいえ C どちらとも言えない D その他 _____

A と答えた人に質問します。どのような変化がありましたか。お書き下さい _____

16. 農村観光の展開により、里峪村/郎徳上寨における近隣関係の変化がありましたか。

A はい B いいえ C どちらとも言えない D その他 _____

A と答えた人に質問します。どのような変化がありましたか。お書き下さい _____

17. 農村観光の展開により、里峪村/郎徳上寨における社会治安の変化がありましたか。

A はい B いいえ C どちらとも言えない D その他 _____

A と答えた人に質問します。どのような変化がありましたか。お書き下さい _____

18. 農村観光の展開により、里峪村/郎徳上寨における生活習慣の変化がありましたか。

A はい B いいえ C どちらとも言えない D その他 _____

Aと答えた人に質問します。どのような変化がありましたか。お書き下さい _____

19. 農村観光の展開により、里峪村/郎徳上寨における家族構成の変化がありましたか。

A はい B いいえ C どちらとも言えない D その他 _____

Aと答えた人に質問します。どのような変化がありましたか。お書き下さい _____

20. 農村観光の展開により、里峪村/郎徳上寨における物価の変化がありましたか。

A はい B いいえ C どちらとも言えない D その他 _____

Aと答えた人に質問します。どのような変化がありましたか。お書き下さい _____

21. 農村観光の展開により、里峪村/郎徳上寨における交通の変化がありましたか。

A はい B いいえ C どちらとも言えない D その他 _____

Aと答えた人に質問します。どのような変化がありましたか。お書き下さい _____

ご協力ありがとうございました。

初出一覧

第3章 中国における三農問題と農村観光

任大欣 2015. 中国における農村観光の展開と課題—三つの村に対する聞き取り調査を通して—. 第二十回社会経済国際シンポジウム—減速成長期における社会・経済・文化—
発表論文予稿集 : 71-77.

第4章 都市近郊型農村観光の展開—山東省青島市嶗山区西麦窯社区を事例として—

任大欣 2014. 中国の都市近郊における農村観光の展開—青島市を事例として—. 久留米大
学大学院比較文化研究論集 33 : 1-43.

第5章 既成観光地周辺型農村観光の展開—山東省泰安市岱岳区里峪村を事例として—

任大欣 2016. 中国既成観光地周辺地域における農村観光の展開—泰安市岱岳区里峪村を
事例として—. 比較文化研究 121 : 111-124.

第6章 辺遠地域型農村観光の展開—貴州省黔東南ミャオ族トン族自治州雷山県郎徳上寨を 事例として—

任大欣 2015. 中国少数民族地域における農村観光の展開—貴州省郎徳上寨を事例として
—. 比較文化研究 118 : 165-179.